鹿児島大学埋蔵文化財調査センター調査報告書　第 15 集

鹿児島大学構内遺跡
（郡元団地Ｈ・Ｉ－８区）

理学部2号館増築工事（釘田遺跡第8地点）

【縄文時代・弥生時代・中世・近世・近代遺物，石器編】

2019 年 3 月

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

1　縄文土器

2　弥生土器

3　石器

4　G'/F'-47 ～ 49 区土層

序

鹿児島大学キャンパス（鹿大構内遺跡・脇田亀ヶ原遺跡・唐湊遺跡・入来牧場・指宿植物実験場）には，後期旧石器時代から近代までの貴重な遺跡が包蔵されていることが，鹿児島大学埋蔵文化財調査センターの発掘調査によって明らかにされています。その成果は，これまでに『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Vol.1 ～ 26，『鹿児島大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書』第 1 ～ 7 集，平成 24（2012）年にセンターに改称されてからは，『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報』Vol.27 ～ 32，『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書』第 8 ～ 15 集として，逐次報告されてきました。

本書は，本学に埋蔵文化財調査センター（室）が設置される以前の昭和 51（1976）年に鹿児島県教育委員会によって発掘調査がなされた釘田遺跡第 8 地点の報告書です。この調査は，鹿大構内遺跡（郡元団地）理学部 2 号館増築工事に伴って実施されたもので，弥生時代の終わりごろから古墳時代の河川跡が検出され，そこから膨大な量の遺物（コンテナ 787 箱）が出土しました。これらを一度に報告書にまとめるのは時間的にも予算的にも困難であることから，木製品については平成 28（2016）年に『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター調査報告書』第 12 集として刊行し，今回は，縄文時代，弥生時代，中世，近世，近代と石器についてまとめた調査報告書として『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書』第 15 集を刊行することになりました。遺物からみる主要な時代は古墳時代ですが，縄文時代，弥生時代，中世，近世，近代と石器などの遺物も決して少なくないことが分かるかと思います。

現在もキャンパス内では，多くの施設整備事業が進められており，それに先立って必要な埋蔵文化財調査が行われています。文化財保護法を尊守しながら，学内施設整備が適切に進むよう，埋蔵文化財調査センターでは努力していく所存です。今後ともセンターの活動に際し，学内外の皆さまのご理解，ご支援をお願い申し上げます。

平成 31（2019）年 3 月

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター長
鹿児島大学埋蔵文化財調査委員長

中村　直子

例　言

1　本書は，鹿児島県教育庁文化課によって昭和 51（1976）年 5 月 17 日から 12 月 3 日まで実施された鹿児島大学構内遺跡（釘田第 8 地点：理学部 2 号館増築工事）の縄文時代，弥生時代，中世，近世，近代，そして石器に関する発掘調査報告書である。

2　調査当時の図面･写真等は，発掘調査担当者である鹿児島県教育庁文化課の平田信芳･池畑耕一･新東晃一･吉永正史･牛ノ濱修・西田茂・池崎譲二による。

3　本書の作成にあたっては，埋蔵文化財調査センターが行なった。担当者は以下の通りである。執筆・編集は石器を寒川朋枝が，その他は新里貴之による。
作図・製図・作表・写真（篠原美智子・相良暁子・吉村ゆう子・新里・寒川）　執筆（新里・寒川）
編集（新里・寒川・中村直子）

4　本報告の縄文土器については，志布志市教育委員会相美伊久雄氏より，近世・近代遺物については，鹿児島大学法文学部渡辺芳郎氏よりご指導・ご教示を賜った。その他にも本田道輝氏（鹿児島県考古学会会長），堂込秀人氏・川口雅之氏･真邉彩氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター），　藤尾慎一郎氏（国立歴史民俗博物館）のご教示を賜った。

5　発掘調査による遺物の保管は，埋蔵文化財調査センターの管理のもと，各学部，部局が収蔵している。また，図面･写真などの資料は埋蔵文化財調査センターに保管している。

凡　例

1　昭和 60 年 6 月 1 日の埋蔵文化財調査室の設置を機として，鹿児島大学構内におけるこれからの埋蔵文化財調査に便であるように，鹿児島大学構内座標を鹿大構内遺跡（郡元団地）と脇田亀ヶ原遺跡（桜ヶ丘団地：旧宇宿団地）とに設定した。各遺跡中の位置については，そのグリッド名称で記される。設置基準は，以下の通りである。

(1) 郡元団地では，国土座標第 2 座標系 (X=-158.200，Y=-42.400) を基点として一辺 50m の方形地区割りを行なった (Fig.3 参照)。
(2) 桜ヶ丘団地では，国土座標第 2 座標系 (X=-161.600，Y=-44.400) を基点として一辺 50 mの方形地区割りを行なった。

2　本文中の遺物番号は，挿図，図版，遺物観察表と一致している。

3　挿図・表・写真は通し番号を付す。

4　遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修）を使用した。

5　遺物観察表内の記号（｜）（―）（／）（＼）は器面調整や文様の方向を示す。

目　次

巻頭カラー・・・i
序・・iii
例言・凡例・・iv
抄録

Ⅰ　鹿大構内遺跡（郡元団地）の沿革・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ　76-1 郡元団地 H・I-8 区：理学部２号館増築工事（釘田第８地点）に伴う発掘調査 / 縄文時代・弥生時代・中世・近世・近代遺物，石器編

１　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

２　調査体制と調査期間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

３　調査経過と調査地点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

４　基本層序・・8

５　遺構・・11

５－１　Ⅲ層上面検出溝跡（SD1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

５－２　Ⅲ層中検出溝跡（SD2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

５－３　Ⅴ・Ⅵ層中木杭列（護岸）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

６　遺物・・21

６－１　縄文土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

６－２　弥生土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53

６－３　陶磁器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104

６－４　石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111

７　総括・・・133

巻頭カラー写真目次

1　縄文土器　　2　弥生土器　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・i
3　石器　　　　4　F'/G'-47 〜 49 区土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ii

図目次

Fig.1　鹿児島市の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
Fig.2　鹿大構内遺跡（郡元団地），脇田亀ヶ原遺跡（桜ケ丘団地），唐湊遺跡（唐湊学生寮）・・・・・・・・・・・3
Fig,3　鹿大構内遺跡（郡元団地）と弥生時代〜古墳時代の遺跡分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
Fig,4　郡元Ｈ・I-8 区理学部２号館（釘田第８地点）調査区割・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
Fig.5　基本層序（南北壁面）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
Fig.6　F'/G'-47 〜 49 区河川埋土（Ⅴ・Ⅵ層）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
Fig.7　Ⅲ層上面検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
Fig.8　Ⅲ層上面検出溝跡（SD1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
Fig.9　Ⅲ層中検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
Fig.10　Ⅲ層中検出溝跡（SD2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
Fig.11　Ⅴ・Ⅵ層中検出河川跡・木杭列（護岸跡）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
Fig.12　縄文土器地点別出土数（Ⅳ〜Ⅶ層）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
Fig.13　縄文土器（１）・・・・・・・・・・・・・・28
Fig.14　縄文土器（２）・・・・・・・・・・・・・・30
Fig.15　縄文土器（３）・・・・・・・・・・・・・・32
Fig.16　縄文土器（４）・・・・・・・・・・・・・・34
Fig.17　縄文土器（５）・・・・・・・・・・・・・・36
Fig.18　縄文土器（６）・・・・・・・・・・・・・・38
Fig.19　縄文土器（７）・・・・・・・・・・・・・・40
Fig.20　縄文土器（８）・・・・・・・・・・・・・・42
Fig.21　縄文土器（９）・・・・・・・・・・・・・・44
Fig.22　弥生土器地点別出土数（Ⅳ〜Ⅶ層）・・・59
Fig.23　弥生土器（１）・・・・・・・・・・・・・・60
Fig.24　弥生土器（２）・・・・・・・・・・・・・・62
Fig.25　弥生土器（３）・・・・・・・・・・・・・・64
Fig.26　弥生土器（４）・・・・・・・・・・・・・・66
Fig.27　弥生土器（５）・・・・・・・・・・・・・・68
Fig.28　弥生土器（６）・・・・・・・・・・・・・・70
Fig.29　弥生土器（７）・・・・・・・・・・・・・・72
Fig.30　弥生土器（８）・・・・・・・・・・・・・・74
Fig.31　弥生土器（９）・・・・・・・・・・・・・・76
Fig.32　弥生土器（10）・・・・・・・・・・・・・・78
Fig.33　弥生土器（11）・・・・・・・・・・・・・・80
Fig.34　弥生土器（12）・・・・・・・・・・・・・・82
Fig.35　弥 生 土 器（13）・・・・・・・・・・・・・84
Fig.36　弥 生 土 器（14）・・・・・・・・・・・・・86
Fig.37　弥 生 土 器（15）・・・・・・・・・・・・・88
Fig.38　弥 生 土 器（16）・・・・・・・・・・・・・90
Fig.39　弥 生 土 器（17）・・・・・・・・・・・・・92
Fig.40　陶磁器（１）・・・・・・・・・・・・・・・106
Fig.41　陶磁器（２）・・・・・・・・・・・・・・・108
Fig.42　石器（１）・・・・・・・・・・・・・・・・112
Fig.43　石器（２）・・・・・・・・・・・・・・・・114
Fig.44　石器（３）・・・・・・・・・・・・・・・・116
Fig.45　石器（４）・・・・・・・・・・・・・・・・118
Fig.46　石器（５）・・・・・・・・・・・・・・・・120
Fig.47　石器（６）・・・・・・・・・・・・・・・・122
Fig.48　石器（７）・・・・・・・・・・・・・・・・124
Fig.49　石器（８）・・・・・・・・・・・・・・・・126
Fig.50　石器（９）・・・・・・・・・・・・・・・・128
Fig.51　石器（10）・・・・・・・・・・・・・・・・130
Fig.52　石器地点別出土数・・・・・・・・・・・132
Fig.53　鹿大構内遺跡縄文・弥生時代主要分布遺 跡 と 関 連 地 点・・・・・・・・・・・134

表目次

Tab.1　縄文土器層位別出土数・・・・・・・・・・26
Tab.2　縄文土器観察・・・・・・・・・・・46 ～ 52
Tab.3　弥生土器層位別出土数・・・・・・・・・・58
Tab.4　弥生土器観察・・・・・・・・・・94 ～ 103
Tab.5　中世・近世・近代・現代遺物層位別出土数
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
Tab.6　陶磁器観察・・・・・・・・・・・・・・・110
Tab.7　石器層位別出土数・・・・・・・・・・・・111
Tab.8　石器観察・・・・・・・・・・・・・・・・132

写真目次

PL.1　Ⅲ層上面検出溝跡（SD1）・・・・・・・・・17
PL.2　Ⅴ・Ⅵ層河川跡内遺物出土状況・・・・・・18
PL.3　Ⅴ・Ⅵ層河川跡内弥生土器出土状況・・・・19
PL.4　Ⅴ・Ⅵ層河川跡内石器出土状況・・・・・・20
PL.5　縄文土器（1）・・・・・・・・・・・・・・29
PL.6　縄文土器（2）・・・・・・・・・・・・・・31
PL.7　縄文土器（3）・・・・・・・・・・・・・・33
PL.8　縄文土器（4）・・・・・・・・・・・・・・35
PL.9　縄文土器（5）・・・・・・・・・・・・・・37
PL.10　縄文土器（6）・・・・・・・・・・・・・・39
PL.11　縄文土器（7）・・・・・・・・・・・・・・41
PL.12　縄文土器（8）・・・・・・・・・・・・・・43
PL.13　縄文土器（9）・・・・・・・・・・・・・・45
PL.14　弥生土器（1）・・・・・・・・・・・・・・61
PL.15　弥生土器（2）・・・・・・・・・・・・・・63
PL.16　弥生土器（3）・・・・・・・・・・・・・・65
PL.17　弥生土器（4）・・・・・・・・・・・・・・67
PL.18　弥生土器（5）・・・・・・・・・・・・・・69
PL.19　弥生土器（6）・・・・・・・・・・・・・・71
PL.20　弥生土器（7）・・・・・・・・・・・・・・73
PL.21　弥生土器（8）・・・・・・・・・・・・・・75
PL.22　弥生土器（9）・・・・・・・・・・・・・・77
PL.23　弥生土器（10）・・・・・・・・・・・・・・79
PL.24　弥生土器（11）・・・・・・・・・・・・・・81
PL.25　弥生土器（12）・・・・・・・・・・・・・・83
PL.26　弥生土器（13）・・・・・・・・・・・・・・85
PL.27　弥生土器（14）・・・・・・・・・・・・・・87
PL.28　弥生土器（15）・・・・・・・・・・・・・・89
PL.29　弥生土器（16）・・・・・・・・・・・・・・91
PL.30　弥生土器（17）・・・・・・・・・・・・・・93
PL.31　陶磁器（1）・・・・・・・・・・・・・・107
PL.32　陶磁器（2）・・・・・・・・・・・・・・109
PL.33　石器（1）・・・・・・・・・・・・・・113
PL.34　石器（2）・・・・・・・・・・・・・・115
PL.35　石器（3）・・・・・・・・・・・・・・117
PL.36　石器（4）・・・・・・・・・・・・・・119
PL.37　石器（5）・・・・・・・・・・・・・・121
PL.38　石器（6）・・・・・・・・・・・・・・123
PL.39　石器（7）・・・・・・・・・・・・・・125
PL.40　石器（8）・・・・・・・・・・・・・・127
PL.41　石器（9）・・・・・・・・・・・・・・129

抄　録

書　　名	鹿児島大学　埋蔵文化財調査センター調査報告書　第15集 鹿児島大学構内遺跡（郡元団地Ｈ・Ｉ-８区） 理学部２号館増築工事（釘田遺跡第８地点） ［縄文時代・弥生時代・中世・近世・近代遺物，石器編］			
編集者名	新里貴之・寒川朋枝・中村直子・平田信芳・新東晃一・池畑耕一			
編集機関	鹿児島大学　埋蔵文化財調査センター			
所 在 地	〒890-8580　鹿児島市郡元1-21-24　TEL 099-285-7270　FAX 099-285-7271			
発行年月日	平成31（2019）年３月31日			
所収遺跡名	所在地	調査期間	発掘面積	調査コード
鹿児島大学構内遺跡 郡元Ｈ・Ｉ-８区：理学部２号館増築工事 （釘田第８地点）	鹿児島市郡元1-20-15 （北緯31°34′14.65″ 東経130°32′38.43″）	分布調査：1975.6.20 確認調査：1975.9.17～24 発掘調査：1976.5.17～12.3	1000㎡	76-1
主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
弥生時代後期 ～古墳時代	河川跡（木杭列） 竪穴住居跡（２基）	縄文土器，弥生土器 成川式土器，須恵器 石器，木杭，木製品	河川内の木杭列（護岸） 木製品，多量の成川式土器	

Ⅰ　鹿大構内遺跡（郡元団地）の沿革

鹿大構内遺跡が所在する鹿児島市は，薩摩半島の東中央部に位置する（Fig.1）。その東側には鹿児島湾（錦江湾）が広がり，眼前に桜島を望むことができる。他の三方は姶良カルデラに由来するシラス台地（吉野・武岡・紫原・五位野台地）に囲まれ，これを侵食する稲荷川，甲突川，田上川，脇田川，永田川が鹿児島湾へ東流したデルタ地帯が鹿児島市の中心となっている[1)]。

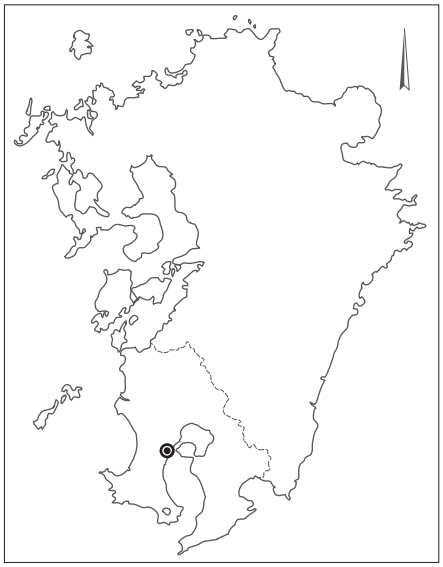


Fig.1　鹿児島市の位置

主要な遺跡のある鹿児島大学キャンパスは，郡元団地と桜ヶ丘団地があり，それぞれを鹿児島大学構内遺跡（郡元団地），脇田亀ヶ原遺跡（桜ヶ丘団地）と呼んでいる（Fig.2）。このほか，平成27（2015）年７月28日，埋蔵文化財包蔵地となった唐湊遺跡（唐湊学生寮）[2)]，薩摩川内市の八重山（標高約516m）に入来牧場[3)]，そして指宿市の弥次ヶ湯遺跡などがある。

鹿大構内遺跡（郡元団地）は沖積平野の南端部付近に位置し，標高約7mにある。周知の遺跡として知られており，古くから遺跡の存在することが認識されていた。昭和59（1984）年までは字名が遺跡の名称として採用されており，本書で報告する釘田遺跡第８地点もこの呼称に従っている。ほかにも，現在，教育学部敷地内に所在する県立医大遺跡[4)]，附属中学校敷地内遺跡[5)]，水町遺跡などがある。キャンパス周辺地域には，弥生時代中期後半の住居跡が検出された一ノ宮遺跡[6)]などがある。

鹿大構内遺跡における弥生時代～古墳時代にかけての住居跡やピット，遺物廃棄溝などを手がかりにすると現在５つの居住域群が把握できる（Fig.3）。古い時代の遺跡もこれらの地点と概ね合致しており，同キャンパスで最も古い縄文時代前期～中期の遺跡は，工学部と教育学部で確認されているが，遺構は検出されていない。教育学部では縄文時代前期の曽畑式土器が確認されており（居住域Ⅴ）[7)]，工学部では同中期の深浦式～春日式が出土しているが，なかでも珪線石製玦状耳飾りの再生した装飾品の出土は特筆される（水田跡３）[8)]。

同キャンパスからは弥生時代の遺物の出土も少なくない。弥生時代前期～終末期の土器が散見されるが，弥生時代の遺構は，弥生時代中期前半の竪穴住居跡が居住域（Ⅰ）に，同環濠が（Ⅱ）の西側に，同後半期のピット群が（Ⅲ）に，弥生時代後期の竪穴住居跡が（Ⅱ）の西側にそれぞれ検出されている。しかし，そのほとんどが古墳時代の遺構に破壊され，集落等の詳細はよく分かっていない[9)]。

古墳時代は，遺物，遺構ともにかなりの数が確認されており，同前期～後期まで出土しているが，特に後期の竪穴住居跡は切り合いながら多数検出されることから，古墳時代後半代における拠点的な集落跡であると想定されている[10)]。集落跡は，発掘調査による土層の観察からみて，いずれも周辺よりはやや標高の高い水はけのよい微高地上に形成されていることが分かる。北半部の居住域（Ⅰ・Ⅱ）に挟まれた部分には，工学部付近で二又に分かれる河川跡が確認されている（河川跡西側）[11)]。本書で掲載されているように，工学部や理学部で確認された河川跡の中からは，弥生時代から古墳時代にかけての木製品や木杭列なども出土している。弥生時代の水田跡は工学部で確認されており水田跡（３），近年では，古墳時代の水田跡も検出された（水田跡２；2012年度学習交流プラザ調査地点）。

古代は平安時代の遺物が確認されており，教育学部水町遺跡では，牛足跡のある水田跡が確認されており（水田跡４）[12)]，附属中学校敷地内では，土坑群が検出されている（居住域Ⅴ）[13)]。

中世の遺跡については，鎌倉時代～室町時代にかけての遺物が出土するが，その量は多くない。発掘調査で畝間が検出されることもあり，キャンパス敷地内は畑地化している可能性があるものの，近世以降の大規

模な造成事業により削平され，遺構もほとんど検出されることがなく，詳細が分かっていない。しかし，前述の弥生時代～古墳時代の河川跡はこの時期にはほどんど埋没して小河川となっており，キャンパス北側の農学部付近に大きく流路を変えて近世にいたっていることが把握されている。

近世においては，キャンパスを含む一帯が，城下町最大の水田地帯となっており，牛足跡・人足跡などが残された水田跡が確認されている。液体を溜めたと考えられる粘土貼りつけ土坑や，水田の畦をまたぐように柱穴が配置しており，耕地測量・区画のための櫓跡ではないかと想定されている[14)]。また，新川増水害後に水田を回復した痕跡や粘土採掘坑なども検出されている[15)]。

近代にも水田であったと考えられるが，西南戦争当時の四斤野砲弾やスナイドル銃の弾丸なども確認されている。明治 42（1909）年に鹿児島大学の前身である鹿児島高等農林学校が設立され，農業専門学校として南方開発の要としての役割を果たす。太平洋戦争末期の昭和 20（1945）年には３度の空襲を受けており，２回目の空襲では大半の建物が焼夷弾により焼失している[16)]。表土層中に焼けた遺物や炭層が確認されることがある。

昭和 24（1949）年には新制国立大学鹿児島大学となり，平成 16（2004）年に国立大学法人化し，現在にいたる。

注

1）松永幸男　1986「鹿児島大学構内遺跡の位置と環境」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Ⅰ

2）松永幸男・有馬孝一　1992「平成２年度（平成３年２～３月）立会調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Ⅶ

3）上村俊雄・中園聡　1987「入来牧場（鹿児島大学農学部附属農場）分布調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Ⅱ

4）河口貞徳　1969「弥生持代」『鹿児島市史』Ⅰ　鹿児島市史編さん委員会

5）河口貞徳　1987「教育学部附属中学校敷地内遺跡」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Ⅱ

6）河口貞徳　1951「一ノ宮遺跡」『考古学雑誌』第 37 巻第４号　日本考古学会

7）中村直子　2001「郡元団地 M ～ T-7 ～ 10 区（運動場）発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』15

新里貴之・寒川朋枝・中村直子　2014『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター調査報告書』第９集

8）中村直子・寒川朋枝・新里貴之　2015『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター調査報告書』第 11 集

9）新里貴之　2002「鹿児島大学構内遺跡Ⅰ・J-7・８地点（理学部改修地）の調査成果」平成 14 年度九州考古学会総会研究発表資料

新里貴之　2003「鹿児島大学構内遺跡Ⅰ・J-7・８区（理学部改修地）の調査」第 49 回鹿大史学会大会資料

中村直子　2003「郡元団地 M・N-4・５区（サークル棟建設地）における発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』17

10）松永幸男　1986「郡元団地Ⅰ・J-9・10 区（理学部１号館増築地）の発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Ⅰ

中村直子・新里貴之　2003「鹿児島大学構内遺跡郡元団地における古墳時代の様相」『第６回九州前方後円墳研究会　前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』

新里貴之　2004「郡元団地 L-6 区（中央図書館増築地 A・B 地点）における発掘調査」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』18

中村直子　2005「郡元団地 K・L-5・６区（中央図書館 C・D・E 地点）における発掘調査報告：遺構と遺構出土遺物の報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』19

寒川朋枝　2011『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター調査報告書』第６集

11）松永幸男・中村直子・黒木綾子・有馬孝一　1992「鹿児島大学郡元団地 H-11・12 区（工学部情報工学科校舎建設予定地）における発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Ⅶ

12）坪根伸也　1987『水町遺跡』鹿児島大学教育学部・法文学部考古学研究室

13）７）に同じ

14）新里貴之・中村直子・寒川朋枝　2010『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター調査報告書』第５集

15）松永幸男・砂田光紀　1990「鹿児島大学郡元団地 F-3・4 区（大学院連合農学研究科校舎建設予定地）における発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Ⅴ

16）新里貴之　2011『農学部開学 100 周年事業　地中からみた農学部のあゆみ』埋蔵文化財調査室

Fig.2　鹿大構内遺跡（郡元団地），脇田亀ヶ原遺跡（桜ケ丘団地），唐湊遺跡（唐湊学生寮）

国土地理院鹿児島南部 1：25000（平成 16 年発行）を改編

Fig.3　鹿大構内遺跡（郡元団地）と弥生時代～古墳時代の遺跡分布

Ⅱ　76-1 郡元団地 H・I- ８区：理学部２号館増築工事（釘田遺跡第８地点）に伴う発掘調査 / 縄文時代・弥生時代・中世・近世・近代遺物，石器編

１　調査にいたる経過

鹿児島大学では，理学部２号館増築工事を予定していたが，昭和 50（1975）年には大学構内の分布調査および確認調査の結果，釘田遺跡の存在が明らかとなっていた。講義棟増築工事予定地も釘田遺跡の範囲内のうち，第８地点と呼称された地点であるため，鹿児島大学は鹿児島県教育委員会と協議の上，事前調査を鹿児島県教育委員会に委嘱し，郡元団地の理学部敷地内において発掘調査を実施した（Fig.3）。

２　調査体制と調査期間

所　在　地　鹿児島市郡元１-20-15
調 査 起 因　講義棟増築工事
調査主体者　鹿児島大学
調査責任者　鹿児島県教育庁文化課長　嶋元牧雄
調査担当者　鹿児島県教育庁文化課主任文化財研究員　平田信芳
鹿児島県教育庁文化課主事　池畑耕一（８月 20 日以前）
鹿児島県教育庁文化課主事　新東晃一（８月 20 日以降）
鹿児島県教育庁文化課主事　吉永正史（木杭列実測）
鹿児島県教育庁文化課主事　牛ノ濱修（木杭列実測）
鹿児島県教育庁文化課文化財調査員　西田　茂（木杭列実測）
鹿児島県教育庁文化課文化財調査員　池崎譲二（８月５日～ 17 日）
分析担当者　岡山理科大学　三好教夫教授（花粉分析）
鹿児島大学　露木利貞教授（地質学）
鹿児島大学　米谷静二教授（地理学）
鹿児島大学　品川昭夫教授（土壌学）
鹿児島大学　有隅健一教授（植生分析）
鹿児島大学　迫　静男講師（植生分析）
発 掘 期 間　昭和 51 年５月 17 日～ 12 月３日
調 査 面 積　1000㎡
遺跡の現状　講義棟隣接地

３　調査経過と調査地点

昭和 50（1975）年６月 20 日，鹿児島県庁文化財課が鹿児島大学郡元団地内の分布調査を行ない，同年９月 17 日～ 24 日に主要地点の確認調査を実施，キャンパスの北半部では，最初に確認された遺跡の所在地小字名である釘田をとって釘田遺跡とされた。大学敷地内には多くの小字名を有しているが，隣接した同性格をもつ遺跡に一連の遺跡に別の小字名を付すのはかえって混乱を招くという判断から，釘田遺跡という名称を踏襲，９箇所の地点が確認され，第１～９地点とされた。本書報告地点は，その「第８地点」に相当する。

発掘調査は，昭和 51（1976）年５月 17 日より発掘調査器材の搬入，グリッド杭打ちから開始された。グリッドは釘田第一地点調査時に設定された 5m 単位のグリッドを延長拡大し，南北方向を B' ～ J'，東西方向を 43 ～ 49 グリッドとした（Fig.4）。

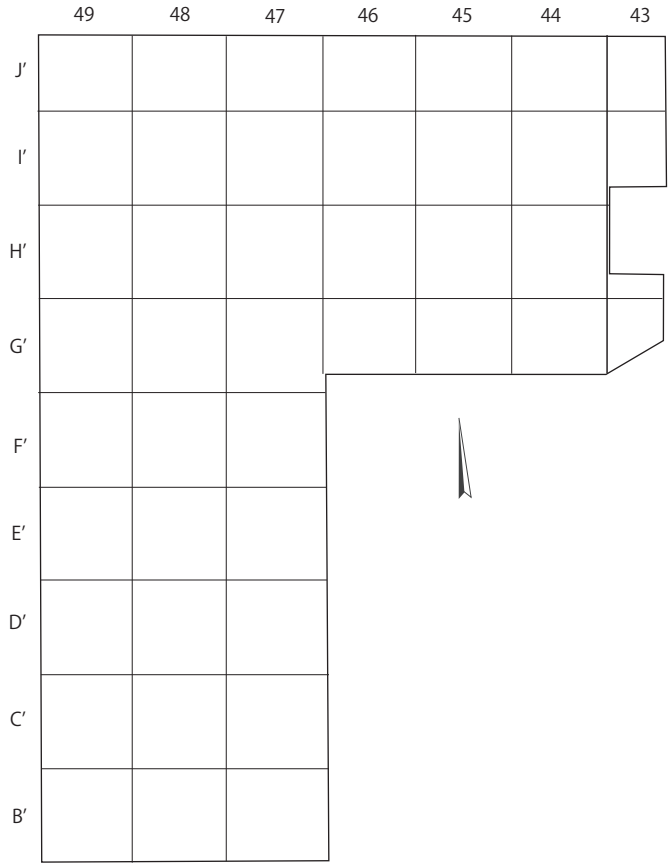


Fig.4　郡元 H・I-8 区理学部２号館（釘田第８地点）調査区割

○第１週（５月 17 日～ 22 日）
　杭打ち作業。重機による表土除去作業。盛土部分はコンクリート塊が数多く混入されており，ユンボの除去能力は 150㎡で当初より予定が遅れる。
○第２週（５月 24 日～ 28 日）
　第Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ。ベルトコンベア搬入。近世以降の水田の用水路を確認。この地割は現在の建物の方位と一致することを確認。結果的にグリッドの方位は旧地割と一致することになる。
○第３週～第４週（５月 31 日～６月 11 日）
　第Ⅲ層掘り下げ。
○第５週（６月 14 日～ 18 日）
　第Ⅲ層掘り下げ。B'・C' 区において溝もしくは川状の落ち込みを確認。鉢・甕・丹塗り高坏の完形品出土。
○第６週（６月 21 日～ 25 日）
　川状の落ち込みのなかに，完形品及びそれに近い状態で多数出土。
○第７週（６月 28 日～７月３日）
　排土除去に重機導入。
○第８週（７月５日～９日）
　最北端部を幅 1m トレンチで掘削。三本の河道跡を確認。このトレンチ内で状態の良い土器３点出土。第Ⅳ層の掘り下げ。第Ⅴ層上部の調整。
○第９週（７月 12 日～ 16 日）
　鹿児島大学考古学研究会学生の応援で実測開始。
○第 10 週（７月 19 日～ 24 日）
　台風 14 号のため作業進捗せず。作業員の実働は２日。
○第 11 週（７月 26 日～ 31 日）
　各区画ごとに 1/10 実測。実測終了後，遺物の取上げにかかる。
○第 12 週（８月２日～７日）
　1/10 実測図継続。実測を終えた区画から第Ⅴ層の掘り下げ開始。H'-44，I'-45，J'-46 区に堰とみられる杭列の頭部検出。この遺構検出により，当初計画を見直し，鹿児島大学側に報告。重機による２回目の排土除去。
○第 13 週（８月９日～ 12 日）
　B'-47 ～ 49 区（道路部分）の掘り下げ開始。表土道路面より -30cm で遺物包含層を検出したが，その南半部は給排水管・高圧線・汚水管敷設によって撹乱されており，技術上の困難と危険性を考慮して，この部分の調査を断念する。
○第 14 週（８月 17 日～ 20 日）
　B'-47・48 区において住居跡２基検出。I'-49 区で櫂出土。G'-48 区で矢板出土。
○第 15 週（８月 23 日～ 27 日）

49 区西壁に幅 1m のトレンチ設定。50cm 程度掘下げるうちに大型土器片が続出。掘下げを断念してその面で拡張作業に入る。

○第 16 週（８月 30 日～９月４日）

F'-49 区で川岸とみられる傾斜面を確認。その傾斜面に大型土器片がぎっしりと堆積している。I'-43，I'-45，G'-44，J'-47 区にそれぞれ幅 1.5m の川幅・川底確認のトレンチを入れ，ようやく対岸を捉える。

○第 17 週（９月６日～９月 11 日）

F'-47・48・49 区の河床掘り下げ。大型土器片続出。全面的に出土したため，実測中掘下げを進める箇所がなくなり，作業員を全員遺物洗浄に移行せざるを得なくなる。週の後半，台風 17 号の影響で遺物洗浄に終始する。

○第 18 週（９月 13 日～ 18 日）

台風 17 号の風雨により壁面３箇所が崩壊。D'・E'・F'-47・48・49 区の河床掘下げ。鹿児島大学と今後の調査計画についての協議。

○第 19 週（９月 20 日～ 25 日）

D'・E'・F' 区の掘り下げを継続。

○第 20 週（９月 27 日～ 10 月１日）

I'・J'-47・48・49 区の河床掘り下げ。

○第 21 週（10 月４日～９日）

G'・H'・I'・J'-43・44・45・46 区の河床掘り下げ。木杭列の中央部を幅 1m で検出。暗褐色粘質土に杭が打ち込まれており，成川式期のものであることを確認。基底部幅が３m あることも確認。

○第 22 週（10 月 12 日～ 16 日）

G'・H'-43 区を拡張，掘り下げ。木杭列の延長を確認。

○第 23 週（10 月 18 日～ 22 日）

H'-43 区木杭列の掘り下げ。①水による杭の洗い出し，②写真，③実測，④取り上げ，を繰り返し，第２列目まで取上げる。杭列の間には茅もしくは藁状の植物が詰められている。鹿児島大学と調査予算修正について協議。

○第 24 週（10 月 25 日～ 10 月 30 日）

H'-43 区，木杭列掘り下げ。第３列，第４列までで，それ以上は理学部２号館講義棟の下に入り込むため，掘り下げ不能。20cm 幅のコンタライン測量開始。木杭列実測用のやり方の杭打ち。岡山理科大三好教夫教授，花粉分析および放射性炭素年代測定用サンプル採取。科学分析プロジェクト・チーム初会合。

○第 25 週（11 月１日～６日）

木杭列保護のため，鋼管による足場ならびに天幕設営。杭列保護のビニールおよび砂を除去し，杭列の洗い出しにかかる。風倒木の樹種判別用のサンプル採取。

○第 26 週（11 月８日～ 13 日）

調査員を５名に増加して，杭列の掘り下げ，実測を行う。

○第 27 週（11 月 15 日～ 19 日）

杭列の実測完了。鋼管，やり方取り外し。I'-49 区の掘り下げ。新たに河道を検出。木杭列下部の掘り下げ。

○第 28 週（11 月 22 日～ 27 日）

河床断面実測用の土手の掘り下げ。B'・C'-48・49 区の掘り下げ。黄色砂とシルト層の不整合部分は急激な落ち込みになっており，もうひとつ古い時期の流路があることが判明。大型土器片の出土。

○第 29 週（11 月 29 日～ 12 月３日）

C'・D'・E'・F'-48・49 区の河床掘り下げで発掘を完了。器材撤収。遺物を仮倉庫へ移動。

○第 30 週（12 月６日～ 14 日）

埋め戻し。その管理については鹿児島大学に依頼。

4　基本層序

基本土層として，大別して７枚の層が確認された（Fig.5・6，巻頭カラー 4）。

Ⅰ層の撹乱層，Ⅱ層の水田層，Ⅲ層の水田層，Ⅳ層の古墳時代包含層，Ⅴ～Ⅵ層の河川埋没砂土，Ⅶ層の砂層基盤である。Ⅰ～Ⅳ層は郡元団地内の弥生時代～古墳時代の集落跡が確認される地点の基本土層と同様のものであるが，本調査区では南端の B' 区の一部に住居跡が２基残されているのみで，その他の地点は全て河川跡になる。河川埋土の検討からすれば，5m 前後の川幅で何度も流路を変化させながら埋没していく過程があるものと考えられた。

本調査地区の基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：灰褐色砂質土層;鹿児島高等農林学校～鹿児島大学時代の造成土層。コンクリートブロックや鉄筋，ガラス瓶，瓦などが含まれる。

Ⅱ層：黄褐色砂質土層；水田層。近世～近代。

Ⅲ層：茶褐色土層；水田層。古代の遺物包含層。上面に中世の畝跡などの遺構が確認されることもある。

Ⅳ層：黒褐色粘質土；古墳時代の遺物包含層。B' 区に若干残るのみであり（Fig.5-b 南壁），調査区のほとんどが河川堆積物であるが，Ⅳ層に対応するのは酸化鉄やマンガンの沈着で変色した河川氾濫層細砂と考えられる。

Ⅴ層：砂礫層（河川埋土１）。黒色，暗茶褐色，茶褐色，明褐色，灰褐色，褐色，黄褐色，明黄褐色，暗灰色，灰色，灰白色などの軽石，砂礫，粗砂，細砂，粘土などの互層で構成されており，非水平堆積で，斜位に入り込む層が多い。上部は細砂で構成される傾向にあり，河川埋没の最終過程にあったことを示している。遺物は古墳時代が主体であり，まれに水磨を受けた縄文時代～弥生時代の遺物も含まれている。

Ⅵ層：砂礫層（河川埋土２）。黒色，暗茶褐色，茶褐色，明褐色，灰褐色，褐色，黄褐色，明黄褐色，暗灰色，灰色，灰白色などの軽石，砂礫，粗砂，細砂，粘土などの互層で，非水平堆積層で，斜位に入りこむ層が多い。明らかに急激な土石流や緩やかな流れなどが相前後して起きていることを示している。完形に近い弥生時代～古墳時代の遺物が多量に含まれ，まれに水磨を受けた縄文時代遺物も確認される。護岸と考えられる木杭列はこの層内で検出された。本書の木質遺物のほとんどはこの木杭列内のものである。

Ⅶ層：灰白色砂礫層；基盤層か。基本的に全面調査は行われていない。河川跡の一部で検出された。

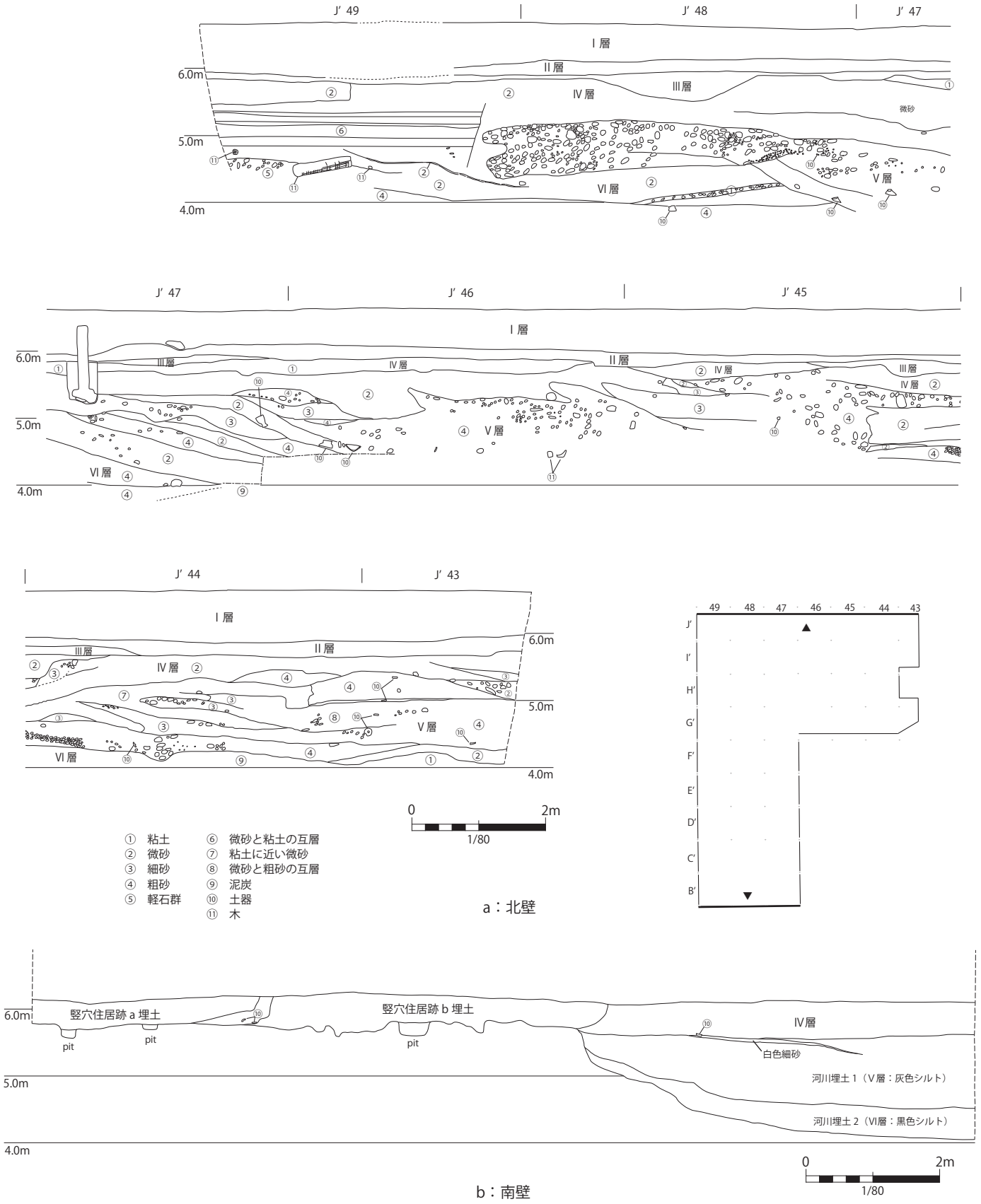
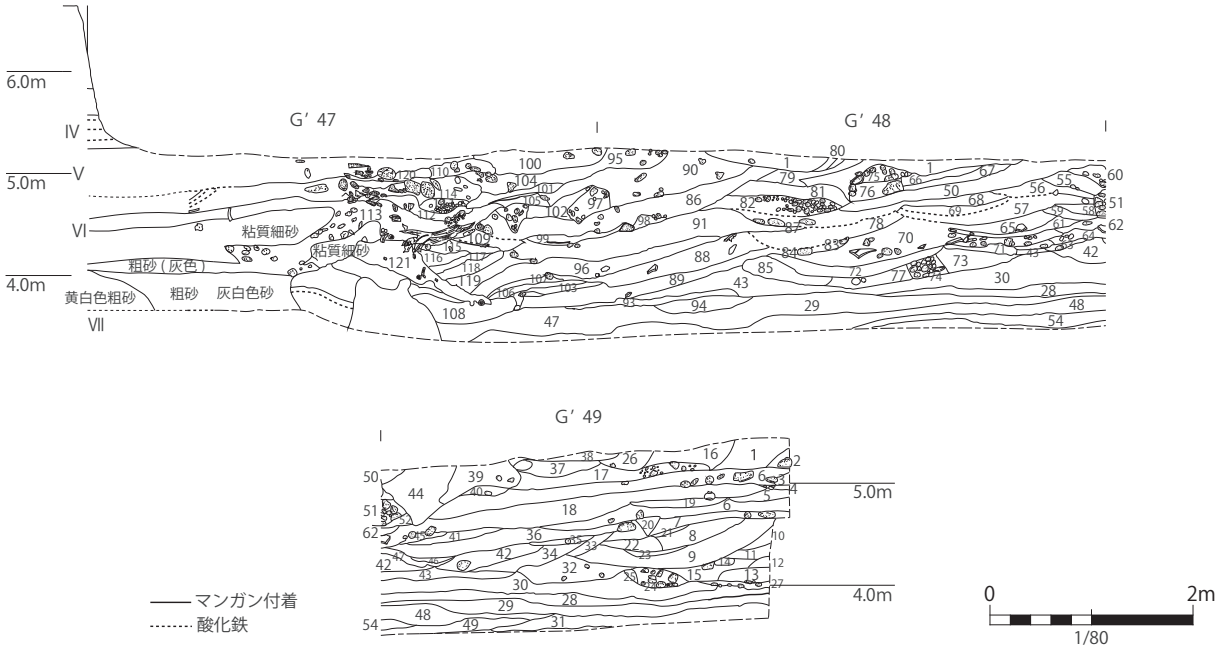


Fig.5　基本層序（南北壁面）



1　茶褐色微砂
2　黄褐色粗砂
3　暗茶褐色粗砂
4　灰白色砂層 (軽石混入)
5　灰白色砂層 (4 よりやや密)
6　灰色砂層 (5 よりやや密)
7　明褐色砂礫層
8　灰褐色粗砂
9　赤褐色砂礫層
10　赤褐色混礫砂層
11　灰褐色砂層
12　黄灰褐色砂層
13　黄褐色砂層
14　黒色粘質土 (ブロック)
15　明灰褐色砂層
16　茶褐色粗砂
17　砂礫層 (軽石混入)
18　暗茶褐色砂礫層
19　灰白色砂層 (4 よりやや密)
20　暗茶褐色粘質土 (ブロック)
21　暗茶褐色砂層
22　暗灰色砂層
23　明灰色粗砂
24　軽石層
25　茶褐色粘質土 (ブロック)
26　明茶褐色砂層
27　砂礫層 (軽石混入)
28　明黄褐色粗砂
29　暗黄褐色粗砂
30　29 とほぼ同じ
31　明灰褐色粗砂
32　黒褐色砂質層 (軽石混入)
33　黒褐色砂礫層
34　赤褐色砂礫層
35　砂礫層
36　35 とほぼ同じ
37　茶褐色粗砂
38　明茶褐色砂層
39　暗茶褐色砂礫層 (軽石混入)
40　赤褐色砂礫層
41　暗灰褐色粗砂
42　明灰褐色粗砂
43　暗黄褐色粗砂
44　暗茶褐色砂礫層 (軽石混入)
45　明茶褐色粘質土
46　45 とほぼ同じ
47　黒褐色粘質土 (ブロック)
48　暗褐色粗砂
49　明黄褐色粗砂
50　明茶褐色微砂
51　軽石層
52　灰褐色粗砂
53　明灰褐色砂層
54　明灰褐色砂層
55　赤褐色砂礫層
56　赤褐色砂礫層
57　暗灰褐色砂質土
58　灰白色粗砂
59　砂礫層
60　軽石層
61　砂礫層 (59 より礫少ない)
62　灰白色粗砂
63　黒褐色粘質土 (ブロック)
64　明茶褐色粘質土
65　暗灰褐色砂質土
66　明茶褐色微砂
67　66 とほぼ同じ
68　暗赤褐色砂礫層
69　赤褐色砂礫層
70　砂礫層 (成川式包含)
71　茶褐色微砂
72　明茶褐色微砂
73　砂礫層
74　軽石層
75　軽石層
76　暗茶褐色砂礫層
77　暗茶褐色砂礫層 (軽石混入)
78　暗灰褐色粗砂
79　灰褐色粗砂
80　灰褐色砂質土

81　灰褐色粗砂
82　軽石層
83　黒褐色粘質土 (ブロック)
84　黒色粘土塊
85　黒褐色粘質土 (ブロック)
86　灰褐色粗砂
87　赤褐色砂礫層
88　黄褐色砂礫層 (土器包含)
89　明黄褐色粗砂
90　灰褐色粗砂 (軽石混入)
91　褐色砂礫層
92　褐色砂礫層
93　明黄褐色砂質土
94　暗黄褐色砂質土
95　茶褐色砂質土 (軽石混入)
96　黄褐色砂礫層
97　軽石層
98　軽石を含む砂礫層
99　灰褐色砂質土
100　茶褐色砂質土 (軽石混入)
101　灰褐色粗砂
102　灰褐色砂質土 (軽石含)
103　明灰色粗砂
104　茶褐色粘質土 (左側に軽石を含む)
105　赤褐色砂礫層 (軽石含)
106　軽石層
107　黒色粗砂
108　明茶褐色微砂
109　茶褐色砂礫層
110　砂礫層 (軽石混入)
111　軽石層
112　灰白色粗砂
113　(茶) 褐色砂礫層 (軽石含)
114　暗灰色砂質土 (礫含む)
115　灰褐色砂礫層 (軽石含)
116　明褐色微砂 (粘土質)
117　暗茶褐色粗砂
118　暗灰色砂礫層
119　明褐色砂礫層
120　暗灰色粗砂

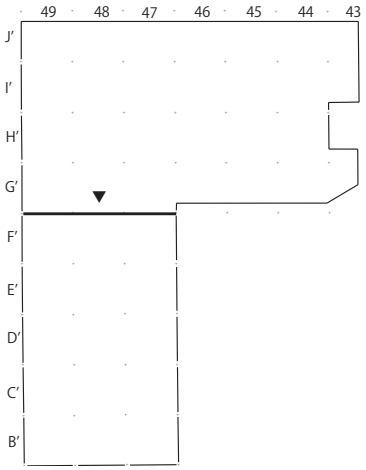


Fig.6　F'/G'-47 ～ 49 区河川埋土（Ⅴ・Ⅵ層）

５　遺構

今回の遺物報告編で取り扱う遺構は，Ⅲ層上面およびⅢ層中において検出された近世以降の溝跡と，Ⅴ・Ⅵ層において確認される河川跡である。ただし，河川跡に伴う木杭列（護岸）については，主要な時代が弥生時代後期～古墳時代であり，既刊報告書において取り扱ったので，ここでは詳細には触れない。

５－１　Ⅲ層上面検出溝跡（SD1）

Ⅲ層上面では，調査区全面に現代の撹乱層（施設のコンクリート・ゴミ穴など）および正式調査にいたった試掘調査坑，それらと埋土の状況の異なる比較的幅の広い溝や，格子状に縦横に掘り込まれた幅の狭い溝などが検出されている。格子状の幅の狭い溝は測量記録はなく，調査当時の写真において，D'・E'-49 区付近で確認できる。これまでの調査事例からすれば，鋤跡である可能性が高い。

比較的幅の広い溝は調査当時，「釘田第８地点溝」とのみ記載されている。ここでは SD1 と呼称しておく（Fig.7・8，PL.1）。I'・J'-44 ～ 49 区に検出されており，明治時代末以降に建築された校舎方位などと地割りの整合性のある溝であるため，近世には遡らないと考えられている。調査区北側に沿って長さ約 29m ほどが検出されているが，ほぼ東西方向に延びており，調査区外にも延長するものと理解できる。検出幅は 0.95 ～ 1.75m，深さは 10 ～ 30cm 程度である。底面の断面形状は，擂鉢状や逆台形状である。J'-44 区では底面に突き刺さる鉄パイプが検出されている。埋土は耕作土で，中央奥凹部に白灰が堆積している。

遺物は，明代の青磁，備前擂鉢，薩摩焼，瓦，レンガ，植木鉢，土管などが出土しているため，近代以降の溝と捉えられる。

５－２　Ⅲ層中検出溝跡（SD2）

C'-48・49 区で検出された段掘りの溝である。図面のみで記載や近景写真記録がないため，前後の調査区全面の検出状況写真からⅢ層中検出遺構と判断したものである（Ⅲ層上面では検出されておらず，Ⅳ層における全面軽石検出時にはなくなっているため）。調査当時の図面には「C' -47・48 区溝状遺構」と記載されている。ここでは SD2 と呼称しておく（Fig.9・10）。断面逆台形状の段掘りの溝が東西方向に延びており，東側は撹乱で破壊され，西側は記録がないため不明である。長さ約 6m ほどが検出され，全体幅は 3.15 ～ 4m 近い溝である。南側の浅い上段は幅約 1.3 ～ 1.7m 程度である。この溝跡もまた SD1 と同様に校舎方位と合致することから，近代以降と捉えたほうが妥当かもしれない。埋土は耕作土とされているが，下部が細砂との互層であるということなので，水の流れがあったものとみなせる。

成川式土器，須恵器なども出土しているが，中世～近世遺物としては，中国明代の青磁，中世の備前擂鉢，近世の薩摩焼，肥前磁器，近代のガラス瓶など比較的豊富である。

５－３　Ⅴ・Ⅵ層中木杭列（護岸）

G' ～ J'-43 ～ 46 区のⅥ層中において，北西－南東方向に並列して検出された。調査区北・東壁面にもその続きが確認されることから，調査区外に延びる大規模なものであったと考えられる。木杭列の詳細については今回省略する（Fig.11；詳細については，『埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書』第 12 集参照）[1)]。

遺物は河川跡内に多量に含まれており，弥生時代後期～古墳時代遺物が主体である（PL.2）。そのなかに縄文時代～弥生時代中期の土器類，石器類が含まれる状況である（PL.3・4）。

注

1）新里貴之ほか編　2016『鹿児島大学構内遺跡（郡元Ｈ・I-8 区）理学部２号館増築工事（釘田第８地点）弥生時代～古墳時代河川跡：木製品編』鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

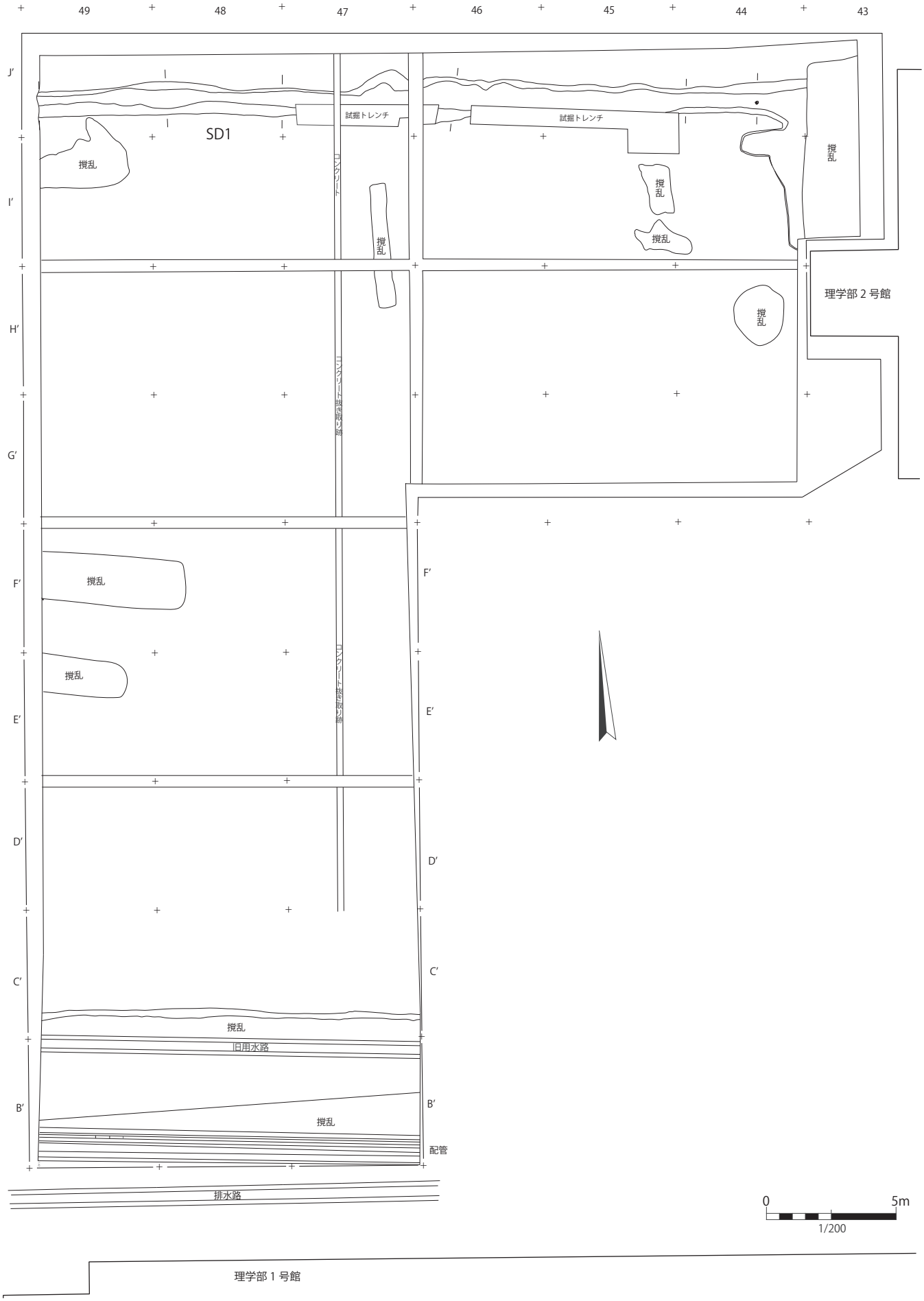


Fig.7　Ⅲ層上面検出遺構

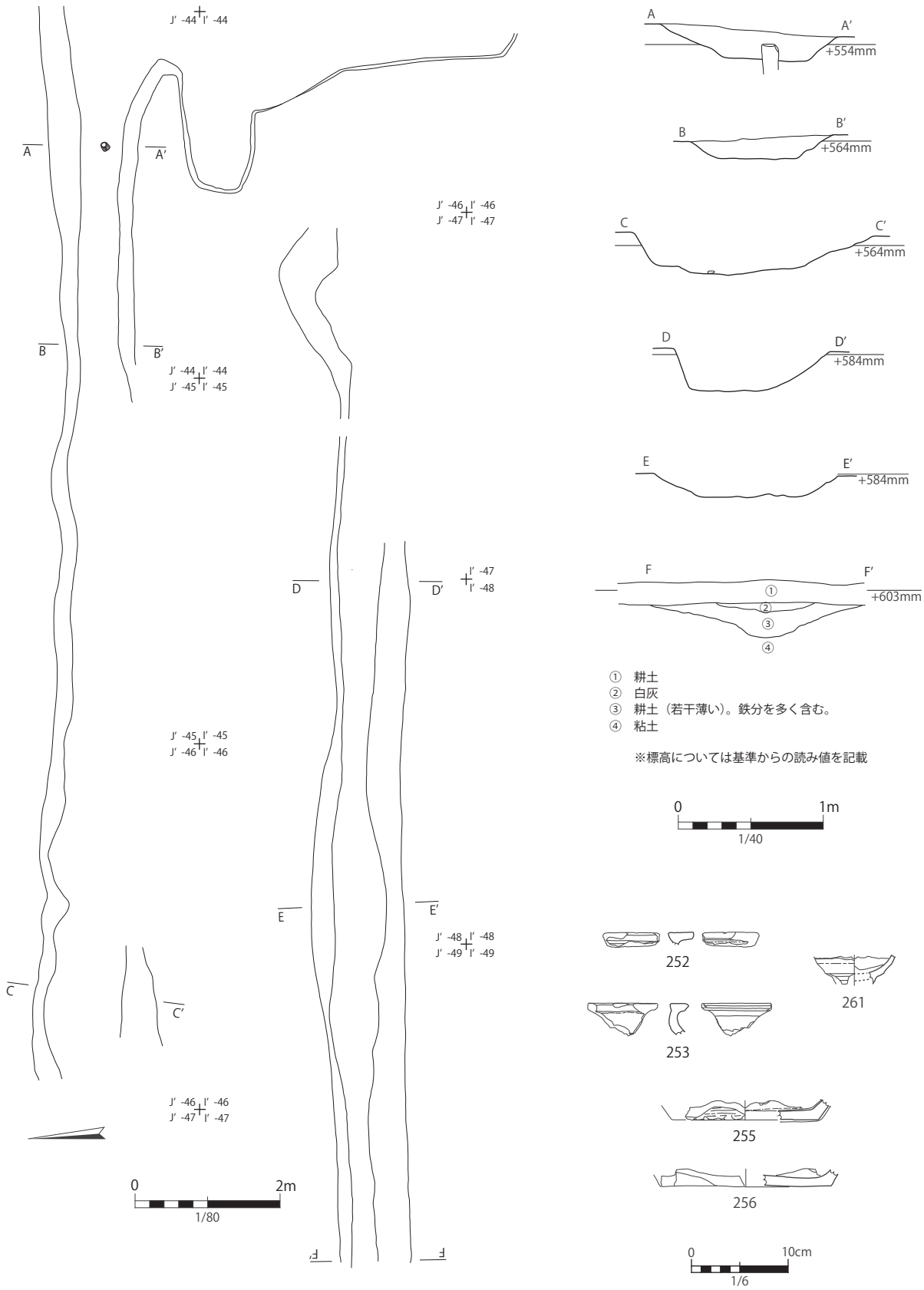


Fig.8　Ⅲ層上面検出溝跡（SD1）

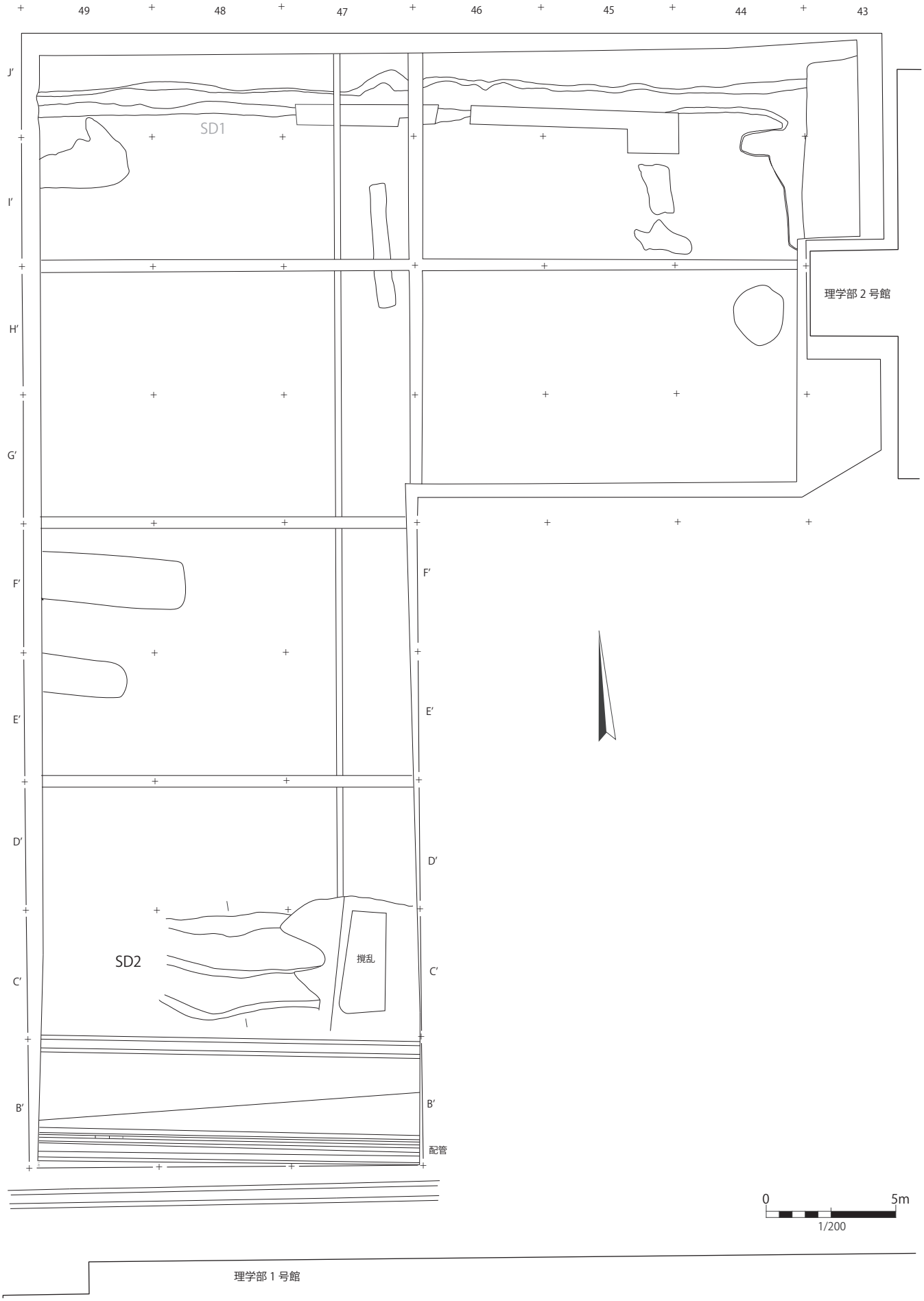


Fig.9　Ⅲ層中検出遺構

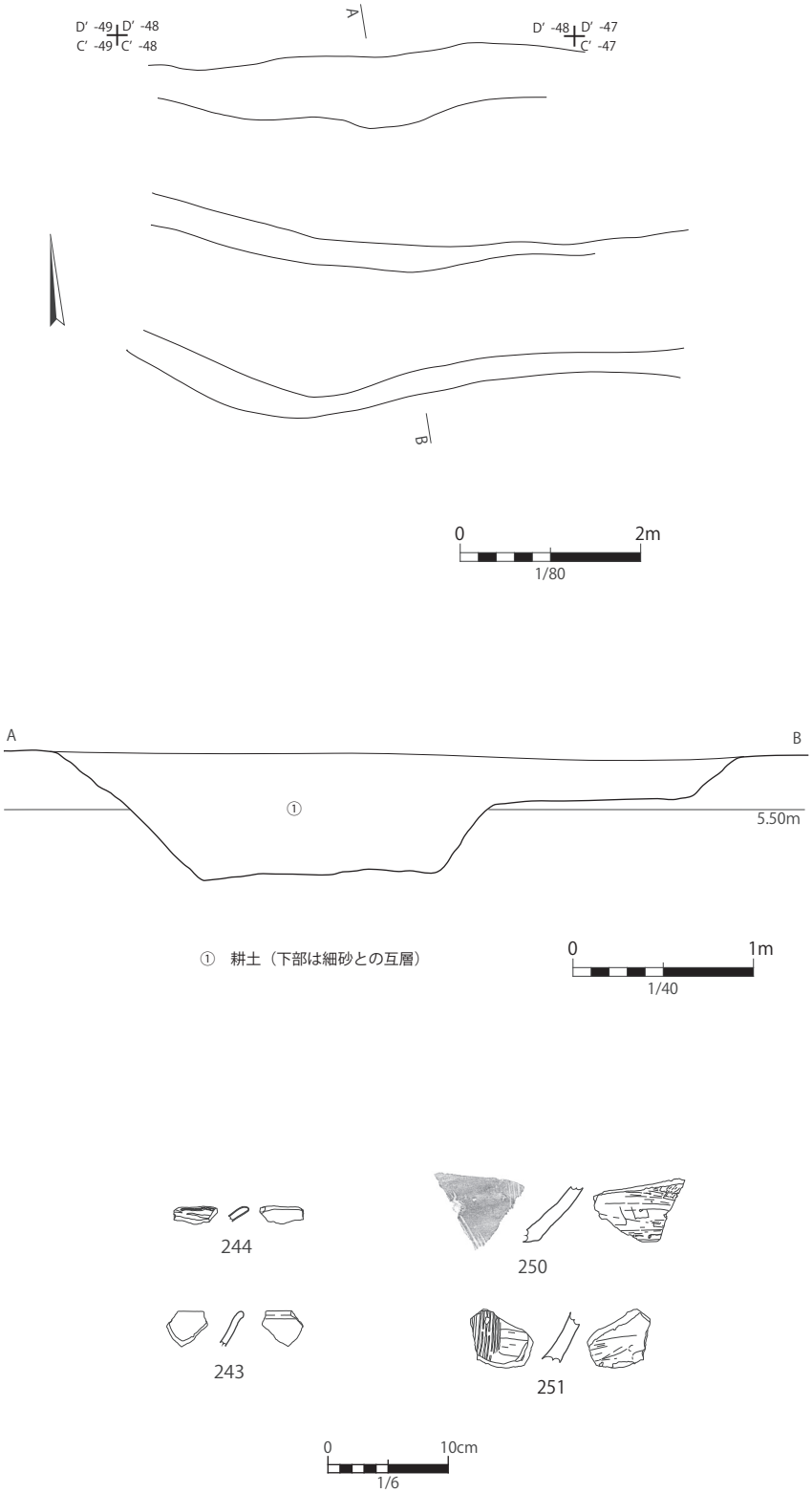


Fig.10　Ⅲ層中検出溝跡（SD2）

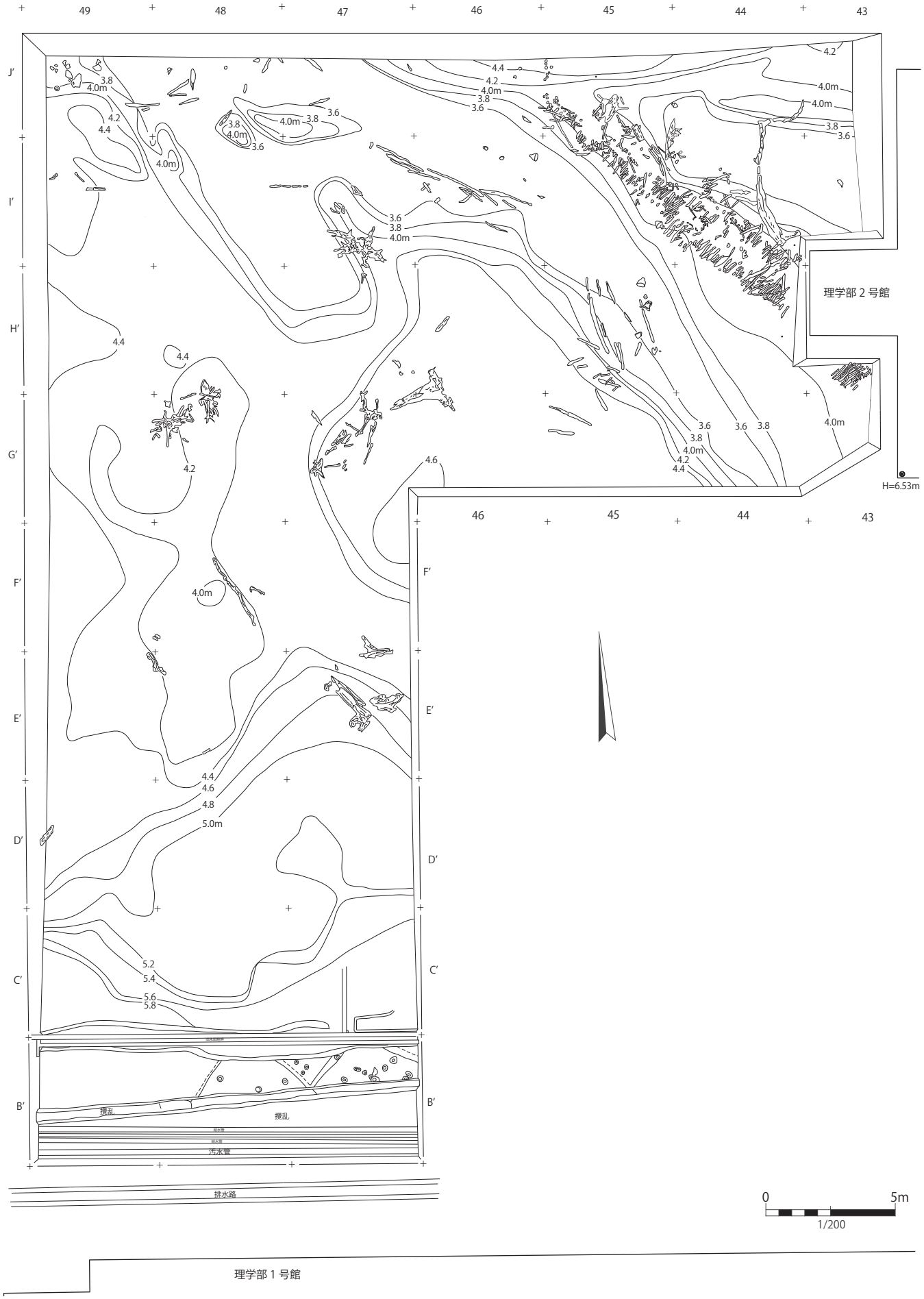
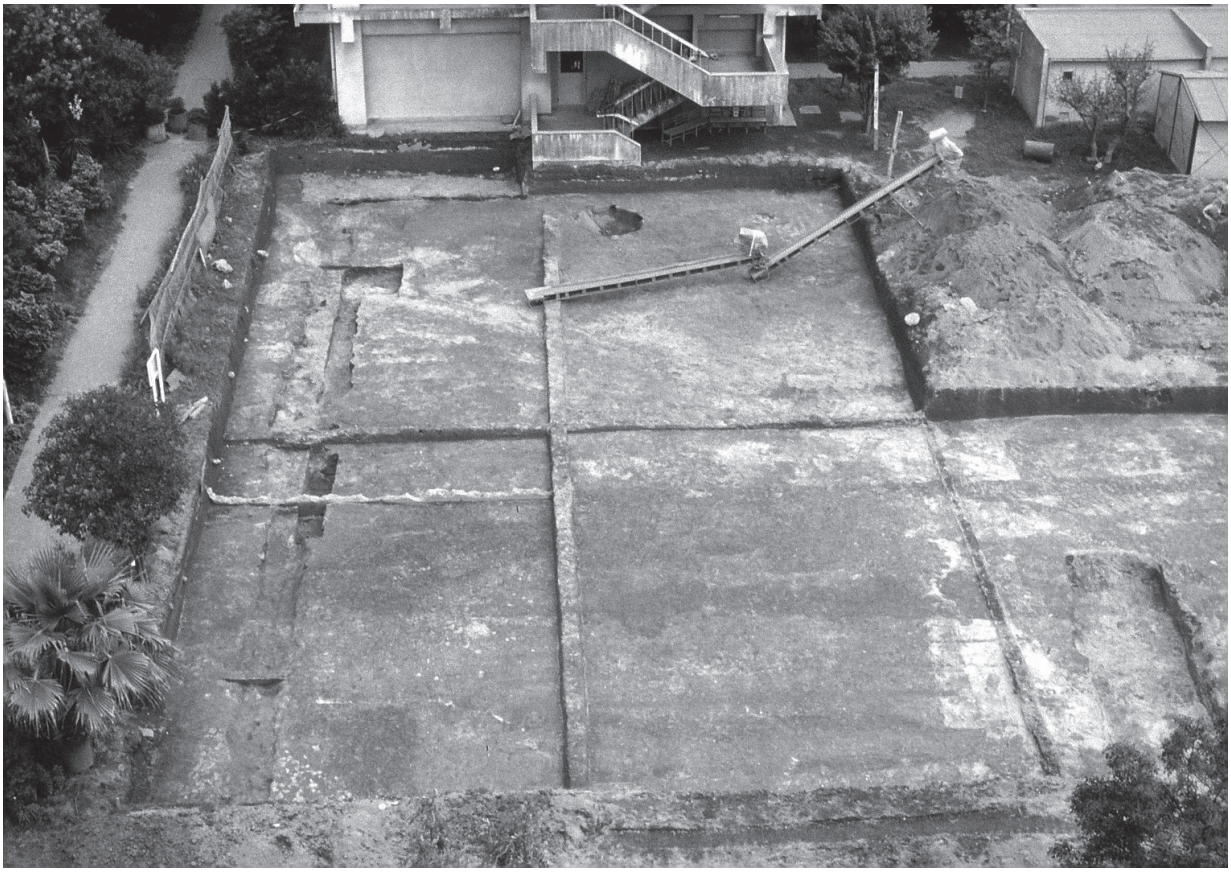


Fig.11　Ⅴ・Ⅵ層中検出河川跡・木杭列（護岸跡）

溝跡（SD1）東半部 (東より)

溝跡（SD1）西半部 (東より)



溝跡（SD1）完掘 (西より)

PL.1　Ⅲ層上面検出溝跡（SD1）

E'-47 区Ⅴ層　遺物

成川式期の河底　D'-49 区Ⅵ層から F'-47 区Ⅵ層を望む

PL.2　Ⅴ・Ⅵ層河川跡内遺物出土状況

G'-48 区Ⅴ層　入来Ⅱ式土器甕

J'-48 区Ⅵ層　成川式土器壷・高橋式土器甕（114）

PL.3　Ⅴ・Ⅵ層河川跡内弥生土器出土状況

D'-48 区Ⅴ層　磨製石斧（275）

磨製石斧

H' 区Ⅵ層　打製石斧（274）

打製石斧

D'-47 区Ⅴ層　磨石敲石（305・306）

C'-49 区Ⅴ層　軽石加工品

D'-49 区Ⅵ層　軽石加工品（314）

C'-48 区Ⅴ層　軽石加工品

PL.4　Ⅴ・Ⅵ層河川跡内石器出土状況

６　遺物

ここで掲載する遺物は，そのほとんどが埋没した河川のⅤ・Ⅵ層から得られた遺物である。Ⅴ・Ⅵ層は，軽石・砂礫・粗砂・細砂・粘土などの互層であり，非水平堆積のものがほとんどである。この河川跡は，調査当時に５回の洗掘と埋没を繰り返していると判断されている。これを示すように，縄文土器や弥生土器は水磨を著しく受けて小破片化し，破断面の角が丸みを帯び，器面調整なども消えかかっている。それらのうち，比較的残存状況の良い遺物をここでは紹介する。

６－１　縄文土器（Fig.13 ～ 21，PL.5 ～ 13）

縄文土器ならびにそれに属すると思われる土器は 359 点得られている（Tab.2）。縄文土器早期から晩期まで確認できるが，より尺度を細かくすると連綿と継続して土器型式が出土するわけではなく，断続的である。型式の判明する縄文土器で最も出土量が多いのは，縄文時代前期末～中期前葉の深浦式土器であり，続いて縄文時代後期中葉の市来式土器，そして縄文時代晩期の黒川式土器の順となる。そのほとんどが小破片であり，水磨を受けて摩滅している。縄文土器に伴う遺構は検出されていない。個々の遺物についての詳細は観察表を作成した（Tab.2）

縄文時代早期前葉[1)]

早期南九州貝殻文系土器と呼称される，円筒形・角筒形土器で特徴づけられた土器群である。主文様は貝殻刺突文や箆状施文具を用いて口縁端部に文様を集約する前平式土器（古２段階）と，口唇部を平坦にし，細かい刻目を施し，口縁部上端に貝殻刺突文線，胴部に楔形凸帯文などを貼付する特徴を持ち，角筒形が最も発達する知覧式土器（中１段階）が得られている。

（１）前平式土器

前平式土器に分類される土器群はⅤ・Ⅵ層に４点出土しているが，そのうち１点を図化した。

横位の粗い貝殻条痕を施した後，口唇部に貝殻刺突文を巡らせる前平式の典型例である（１）。

（２）知覧式土器（加栗山式土器）

知覧式土器として分類されたのはⅥ層より出土した１点である。１点を図化した。

平坦な胴部片で角筒形の可能性がある。貝殻刺突文線が三条集合して施されている。縦長の菱形文のモチーフになるものと考えられる（２）。

縄文時代前期

縄文時代前期土器は曽畑式土器が主体的に得られた。九州の代表的な前期土器であり，外器面全体に施文された幅広の短沈線文が特徴となる。現在，Ⅰ～Ⅵ期に区分されているが[2)]，今回得られた資料は小破片のため，時期を明瞭にし得なかった。

（１）西唐津式土器

西唐津式土器は曽畑式土器直前の土器として認識されているが，曽畑式とともにここで扱っておく。分類されるのはⅥ層の１点のみである（３）。整調な連続刺突文を数条巡らせるもので，口縁部に近い破片であろう。

（２）曽畑式土器

曽畑式土器として分類されるのは，Ⅴ・Ⅵ層を中心とした 28 点である。そのうち９点を図化した。

舌状の口唇部形態に口縁部外面のみ刺突文を三条巡らせるもの（４），平坦な口唇部に整調な斜位の刻みを施し，口縁部外面全体と内面の一部に横位の沈線文を巡らせるもの（５），波状口縁をなしつつ丸みを帯びた口唇部に斜位の刻目と口縁部外面に幾何学的な幅広沈線文を施すもの（６），胴部に幅広短沈線を横位に配列するもの（７），山形文を描くもの（８・９），同心円状に描くものなどがある（10・12）。珍しいタイプの文様としては，連続爪形刺突文を中心から四方に展開させてＸ字状に配するもので，その側部の一方が貝殻刺突線文で縁取られるものである（11）。

（3）尾田式土器

尾田式土器は西北九州～中九州に分布し，曽畑式の最終段階に位置づけられる。同型式と分類できたのはⅥ層の２点である。１点を図化した。

口唇部は舌状を呈し，やや内弯する口縁部外面には，横位の貝殻条線文を二列縦位に施し，その右側面に右下がりの刺突文を縦位に並走させる。また，口唇直下に浅い刺突文を巡らす。口縁部内面は貝殻条線文を横位に三段巡らしているのが確認できる（13）。

縄文時代前期末葉～中期前葉

南九州に分布する貝殻連点文と突帯文を特徴とする深浦式土器[3)] が主体的に得られた。現在，主文様構成の変化から，日木山段階，石峰段階，鞍谷段階に区分されている。日木山段階は，貝殻連点文を用いて直線的なモチーフを描くもの，石峰段階は突帯文を主文様として直線的なモチーフを描くもの，鞍谷段階はやや太目の突帯文を主文様として曲線的モチーフを描くものとされる。

（1）深浦式土器

本調査区から得られた縄文土器のなかで最も出土数が多いのは深浦式土器であり，Ⅴ・Ⅵ層を中心とした165 点である。日木山段階（130 点），石峰段階（20 点），鞍谷段階（１点）がそれぞれ認められるが，古い段階の前二者の出土数が多い。そのうち可能性のある胴部を含め 34 点を図化した。

日木山段階の口縁部形状は，平口縁に連続した刺突をもつもの（14），角をもつ山形口縁に刻みを施すもの（15），緩やかな山形突起を持つもの（16），角のある山形口縁に間隔を空けた瘤状の突起を持つもの（17），中央に凹部を形成する丸みを帯びた山形突起と刻みを持つものなどがある（27）。胴部内面文様として貝殻連点文をもつものがある（14・16・20・26・28）。

胴部は主文様として貝殻連点文のみのもの（18・19），刻みを持つ突帯やミミズ腫れ突帯を貼付するもの（21・25・27・28・29），突帯と瘤状の貼付文の組み合わせ（30）などがあるが，相交弧文や貝殻刺突文は見られない。従文様としては沈線文を組み合わせるものなどがある（20・22・23・24・26・28・30）。底部付近は貝殻連点文（32）のほか，押引文を巡らすものが認められる（31・33）。小破片が多く，日木山段階の新旧関係は判断できなかった。

石峰式段階は新古に分けることが可能であった。主文様である貝殻連点文の上にさらに突帯の区画文を貼り付けるものである。古段階の口縁部形状は，山形口縁部の口唇部に刺突文を施し，縦位の区画文様としてミミズ腫れ突帯をＵ字状に配し，従文様にも同様の突帯と貝殻連点文を施し，口縁内面にも貝殻連点文を配するもの（34），平口縁で刻みをもつ突帯やミミズ腫れ突帯を巡らすもの（35・42）とがある。同段階の胴部片は刻みを持つミミズ腫れ突帯と貝殻連点文を組み合わせるものがある（36・37）。

新段階の口縁部形状は口唇部に刻目を施し，口縁部外面にミミズ腫れ突帯を口唇部直下に一条巡らし，縦位区画文として二条の同突帯を垂下させるものがある（38）。同段階の胴部は，刻みを持つミミズ腫れ突帯のみのもの（39）と，同突帯と沈線文を直線状に配すものであり（40・41・43），口縁部に近い 41・43 は内面に貝殻連点文を施している。

鞍谷段階は最も少なかったもので１点のみ出土した。刻みを持つ太めの突帯文を弧状に配すものである（44）。

表裏面に文様のない地文の貝殻条痕文のみ施した胴部片もある（45・46・47）。日木山段階に多い無文土器であるとされている。そのなかで 46 は口唇部に貝殻刺突文を施している。

（2）鷹島式土器～船元Ⅱ式土器

鷹島式土器は，瀬戸内地方を中心として分布する中期初葉の土器型式である。Ⅴ層に胴部片１点のみ確認できた（48）。縦長の縄文が見られるが，節も水磨によってほとんど摩滅しているため船元Ⅱ式までと時期幅を広くとっておく。

縄文時代中期中葉～後葉

（１）春日式土器

この時期の資料はかなり少ない。Ⅵ層で胴部３点，Ⅶ層で底部１点が出土し，２点を図化した。

整調な貝殻条痕文を施す薄手の胴部（49）と底面の薄いやや上げ底気味の平底がある（50）。

縄文時代中期末～後期初頭

（２）阿高式土器

この時期の資料もかなり少なく，Ⅵ層に１点のみ認められた。焼成は良好で堅緻である。幅広の凹線文を縦横に施す（51）。

縄文時代後期前葉

（１）指宿式系土器

この時期の資料は少なく，Ⅴ・Ⅵ層において９点得られている。口縁部資料３点を図化した。典型的な指宿式土器ではないがそれに類するものである。

52 は口唇部が丸みを帯び厚みのあるもので，口縁部外面に浅くやや太目の凹線が横位に施される。口唇部は斜位に太目の工具で二条の刻みを施している。53 はやや厚くなる口縁部で外部に舌状に尖った口縁部形状で，口縁部外面に浅くやや太目の凹線が横位に施される。54 は口唇部が厚みをもつ丸みを帯びたもので，外面に間隔を空けて二条の横位の沈線文，口縁部上面にも同様の沈線文が施される。

縄文時代後期中葉

南九州の代表的土器である市来式土器様式[4]は，深鉢形の口縁部断面形状の基本的変化として，口縁端部を厚手の肥厚および三角形状とする松山式土器，口縁部を大きく拡張した断面三角形状肥厚の市来式土器，口縁部の厚みがなくなってゆく丸尾式土器の３区分される。台付皿形土器は市来式段階に発達する。

（１）松山式土器

松山式土器も少量の出土であり，Ⅴ・Ⅵ層より２点確認され，そのうちの２点を図化した。

55 は山形口縁を呈する三角形状肥厚口縁で，６条の集合沈線文を配している。56 は台付皿形土器の脚部になる資料と考えられ，端部に向かって丸みを帯び三角形状に肥厚する。平坦面には刺突文を配している。

（２）市来式土器

市来式土器は比較的多く出土する。Ⅴ・Ⅵ層を中心に 29 点が出土しており，そのうちの８点を図化した。

やや厚めの肥厚口縁を形成し，口縁拡張部上面に刺突文と凹線文を描くものと（57），凹線を互い違いに二条配するものがある（58）。61 ～ 65 は粗造の市来式土器であり，あまり厚みのない幅広・幅狭の肥厚口縁を形成する。その肥厚部外面に間隔を空けた沈線文を数条描くもの（64），斜位の連続短沈線を巡らすもの（62），口唇部に斜位の凹線を二条施して山形状突起とするもの（61），無文のもの（63・65）などが見られる。

また，台付皿形土器の突起部分が確認できるが，突起やその側面に沈線文を施すものである（59）。60 も縄文時代後期の土器である可能性が高いが，型式は不明である。台付皿形土器のような口縁部形状を呈するので，ここで挙げておく。口縁部は内側にくの字に内傾するもので，山形口縁であると思われる。その突起部分を側面から穿孔し，縦横位に刻目突帯を貼り付けている。

（３）丸尾式土器

この段階の資料は少なく，Ⅴ層で口縁部１点が出土している。

口唇端部はやや丸みを帯び，口縁部まで厚さはほとんど変わらない。口縁部外面に斜位の短沈線文を巡らせる（66）。短沈線文を水平に並走させると，山形口縁になる可能性もある。

縄文時代後期後葉～末葉

（1）西平式土器（太郎迫式土器）

この段階の資料は少なく，Ⅵ層で３点確認できた。口縁部が内傾し，口唇部を拡張にした三角形状の山形口縁を呈す。拡張部には３本の沈線文を巡らせるが，１本はかなり浅い（67）。そのほか三万田式土器と考えられる胴部片が１点得られているが小破片のため，図化していない。

（2）上加世田式土器

上加世田式土器は資料として認識できたものはかなり少ない。Ⅵ層で出土した２点のうち，１点を図化した。深鉢形の肩部であり，屈曲部外面に凹線を施す資料である（71）。

縄文時代後期底部

ここには縄文時代後期の深鉢形の底部とみられる資料を挙げた。Ⅴ・Ⅵ層を主体として 13 点出土しているが，比較的残りの良い３点を図化した。

いずれも器厚が胴部と底部でほぼ同じくし，やや中央部が上げ底気味になる平底である（68 ～ 70）。

縄文時代晩期[5)]

現在，南九州縄文時代晩期の土器は，入佐式土器と黒川式土器に代表されている。ケズリやミガキを多用する黒色磨研土器であり，大きくは深鉢形，浅鉢形の器種があるが，それぞれが形態的特徴や精粗から判断して数種存在しており，一部は機能的にも分化したものとみなされている。入佐式は古・新の２段階，黒川式は古・中・新の３段階に区分され，黒川式（新）段階は無刻目突帯文土器段階に相当するが，本調査区では判然としない。

（1）入佐式土器

入佐式土器は深鉢形と浅鉢形が確認されたが，各層にまばらに出土し，数も多くはない（８点）。そのうち６点を図化した。

深鉢形は 77・75 であり，口縁部と底部である。口縁部は舌状の口唇部を呈する（77）。底部は立ち上がり部のくびれの弱い平底である（75）。この底面には 2.5 ～ 8 mm の大きさの半球状の圧痕が６箇所に確認できる。圧痕は格子目状の凹凸を形成しているが，何の圧痕であるか明確にし得なかった。布・貝・種実などの可能性がある（鹿児島県立埋蔵文化財センター真邉彩氏ご教示）。

精製浅鉢形は口縁端部をくの字に内弯させるもので，口縁部外面側を浅く押さえて凹面が巡る。形態は 72・74 が小さな逆くの字屈曲を呈し，73・76 は若干玉縁状を呈す。浅鉢形の口縁端部の形状からは，入佐式の新段階の資料と考えられる。

（2）黒川式土器

黒川式土器はⅤ・Ⅵ層を主体に 13 点出土している。深鉢形，浅鉢形，組織痕土器などが得られており，そのうちの８点を図化した。

深鉢形は底部のみ確認され，立ち上がり部が極端にくびれる形状である（84）。

浅鉢形は大きく２種あり，逆くの字状に屈曲するもの（78 ～ 81），口縁が短いくの字に屈曲し，口唇部が玉縁状を呈すもの（82・83）がある。78・79 はケズリが著しい粗製品，ミガキが施される 80 ～ 93 は精製品であろう。また，中華鍋形を呈するいわゆる組織痕土器の底部付近があり，11mm 間隔の網目の圧痕が残される。内面はミガキである（85）。

精製浅鉢形の口縁部形状や繊維圧痕土器の存在からは，黒川式土器の中段階資料が多いとみられる。

その他晩期土器

ここでは，縄文時代後期後葉～晩期末葉までに入ると思われるが，小破片であることから形態が不明なもの，典型例から外れるものなどをここで扱う。

深鉢形は，リボン状突起をもつもの（87），丸みを帯びた口唇部を呈するもの（88），口唇部を平坦にし，口縁部に二条の沈線文を巡らせるもの（89），精製浅鉢形は肩部が丸みを帯びるもの（91），屈曲してそろ

ばん玉状を呈するもの（90），頸部と肩部に沈線文を巡らせるもの（92）などがある。86 は丸みを帯びた口唇部形状で胴部に刻目突帯を巡らすもので小型の鉢形土器であろう（86）。

時期系統不明の縄文土器

ここでは残存部からもおおよその時期などが判断できず，土器の質感などから縄文土器の可能性のあるものを挙げておき，今後の分析に資したい。

93 は口唇部を平坦に押さえた直状口縁であり，口唇に連続した刺突文を施す。補修孔をもつが，表の下方の孔は器肉途中までの穿孔で貫通していない。

94 は壷状の傾きとなる口縁部であるが，口唇部に小さな刺突文を持ち，また，外面の一部にも同様の刺突文を施す。

95 も口径の小さな壷形土器の形状を呈するが，薄手であり手づくねのまま粗雑な造りとなっており，外面にドーナツ状の円形浮文を貼り付けている。

縄文土器の地点別出土状況

以上の縄文土器のうち，型式の判明する土器を用いて，河川跡が埋没し安定する以前の層（Ⅳ～Ⅶ層）における地区別出土状況を提示する（Fig.12）。各時代ではなく，おおまかに①縄文時代早期～前期，②前期末葉～後期初葉，③後期前葉～後葉，④晩期と区分し，出土量の多寡を確認するため，相対的に多い場所を網掛けで示した。

縄文土器全体を見ると（Fig.12 最下），調査区全域で縄文土器は出土しているが，これらはほとんどが弥生時代後期～古墳時代の木杭列（護岸跡）南側に位置する，最も深く洗掘された溝状の部分に集中的に出土していることが分かる。これは縄文土器の大半が，河川上流側から自然に運ばれてきたことを示すと考えられる。①・②・④の時期も概ねこのなかに位置するが，③のみ集中箇所がやや南寄りとなる。この位置は，成川式期の河底とされる流路と概ね合致しており（PL.2 下），かつ③の土器はかなり小破片で摩滅が著しいことから，その段階に上流の遺跡から流れてきた可能性があるのかもしれない。

注

1）新東晃一　2008「早期南九州貝殻文系土器」小林達雄（編）『総覧縄文土器』

2）堂込秀人　2008「曽畑式土器」小林達雄（編）『総覧縄文土器』アムポロモーション

3）相美伊久雄　2000「深浦式系土器の再検討」『人類史研究』第 12 号

　相美伊久雄　2008「深浦式土器」小林達雄（編）『総覧縄文土器』アムポロモーション

4）前迫亮一　2008「市来式土器」小林達雄（編）『総覧縄文土器』アムポロモーション

5）堂込秀人　1997「南九州縄文晩期土器の再検討『入佐式と黒川式の細分』」『鹿児島考古』第 31 号

　宮路聡一郎　2008「黒色磨研土器」小林達雄（編）『総覧縄文土器』アムポロモーション

Tab.1　縄文土器層位別出土数

時期	型式等	部位	Ⅰ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	Ⅵ層 河床・杭列	Ⅶ層	地区 層位不明	計
早期前葉	前平式	口縁部				2					2
		胴部					2				2
	知覧式(加栗山式)	胴部					1				1
前期	西唐津式	胴部					1				1
	曽畑式	口縁部			1	1	4				6
		胴部	1			3	16	2			22
	尾田式	口縁部					1				1
		胴部					1				1
前期末葉〜中期前葉	深浦式(日木山)	口縁部		1		3	9				13
		胴部	4	3	1	14	85	3		4	114
		底部				1	2				3
	深浦式(石峰-古)	口縁部					3				3
		胴部					4				4
	深浦式(石峰-新)	口縁部					1				1
		胴部					7				7
	深浦式(石峰)	口縁部				1					1
		胴部				4					4
	深浦式(鞍谷)	胴部					1				1
	深浦式(無文)	口縁部	1				5				6
		胴部					8				8
前期末葉〜中期初葉	鷹島式〜船元Ⅱ式	胴部				1					1
中期中葉〜後葉	春日式	胴部					3				3
		底部							1		1
中期末葉〜後期初葉	阿高式	胴部					1				1
後期前葉	指宿式系	口縁部				4	3	1			8
		胴部				1					1
後期中葉	松山式(深鉢)	口縁部					1				1
	松山式(台付皿)	脚部				1					1
	市来式(深鉢)	口縁部	1			18	9				28
	市来式(台付皿)	口縁部				1					1
	丸尾式	口縁部				1					1
後期後葉	上加世田式	口縁部					1				1
		胴部					1				1
	西平式(太郎迫式)	口縁部					3				3
	三万田式？	胴部					1				1
後期？	台付皿？	口縁部	1								1
	深鉢(刺突)	口縁部								1	1
	深鉢	底部			1	4	8				13
晩期	入佐式(深鉢)	口縁部					1				1
		底部				1					1
	入佐式(浅鉢)	口縁部	2		1		3				6
	黒川式(深鉢)	底部				1	1				2
	黒川式(浅鉢)	口縁部			1	4	4				9
		胴部					1				1
	黒川式(組織痕)	胴部					1				1
	晩期末・鉢	口縁部					2				2
	晩期末・浅鉢	口縁部			1						1
	段階不明・深鉢	口縁部				1	12				13
	段階不明・浅鉢	口縁部								1	1
		胴部				2	4				6
不明	深鉢	口縁部					1				1
	壺？	口縁部					2				2
	不明	口縁部				6	10				16
		胴部				11	15		1		27
		計	10	4	6	86	239	6	2	6	359

①早期～前期

	49	48	47	46	45	44	43
J’	1		2	1			
I’	1	2	2	4		2	
H’		2		1	4	2	
G’		1				2	1
F’							
E’	2		2				
D’							
C’							
B’	1						
地区不明							

合計　33

②前期末葉～中期前葉
中期中葉～後葉
中期末葉～後期初葉

	49	48	47	46	45	44	43
J’		3	5	6		3	
I’	7	3	7	28	10	5	2
H’	4	4	3	8	4	5	
G’	4	5	2	7	3	6	2
F’	6	1	3				
E’	4	1					
D’	4	1	2				
C’	1						
B’	1						
地区不明							

合計　160

③後期前葉
後期中葉
後期後葉

	49	48	47	46	45	44	43
J’	1	2				1	
I’	1	2	2	4	2		
H’				1	4	1	
G’	3	2	1		1	2	
F’		2	5				
E’		7	1				
D’		1					
C’							
B’							
地区不明							

合計　46

④晩期

	49	48	47	46	45	44	43
J’			5	1		1	
I’		1	1	8	1	1	
H’	1				2	3	
G’	2	2			1	2	
F’	2	1	1				
E’	1		1				
D’	1		1				
C’	1						
B’							
地区不明							

合計　41

縄文土器①～④　　※「後期？」を含む．1～3層，地区層位不明除く．

	49	48	47	46	45	44	43
J’	6	6	14	10	1	6	
I’	10	8	13	47	14	8	4
H’	5	9	4	12	17	13	1
G’	10	12	4	9	5	15	3
F’	12	7	9				
E’	13	9	4				
D’	7	2	4				
C’	2						
B’	2						
地区不明	1						

総計　338

Fig.12　縄文土器地点別出土数（Ⅳ～Ⅶ層）

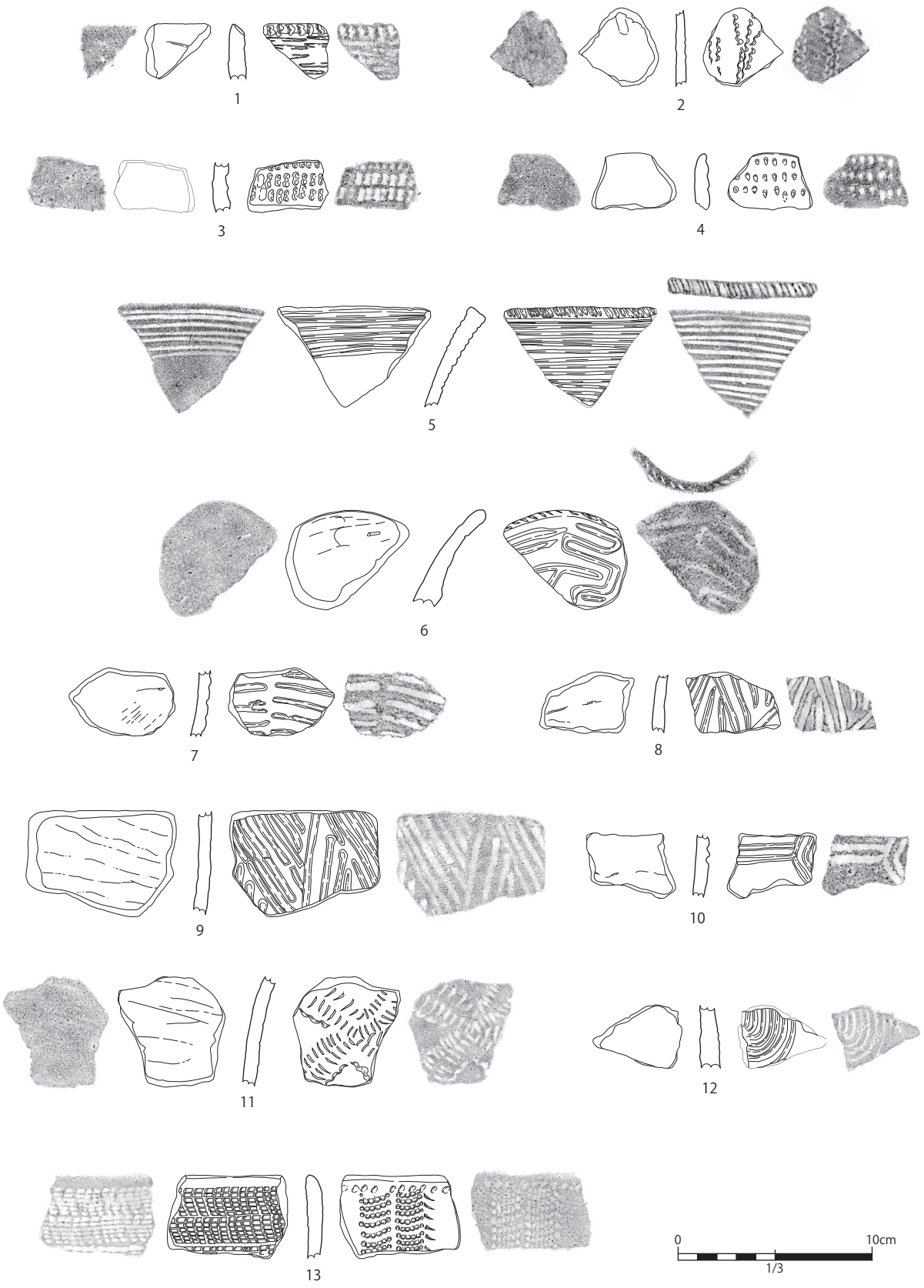
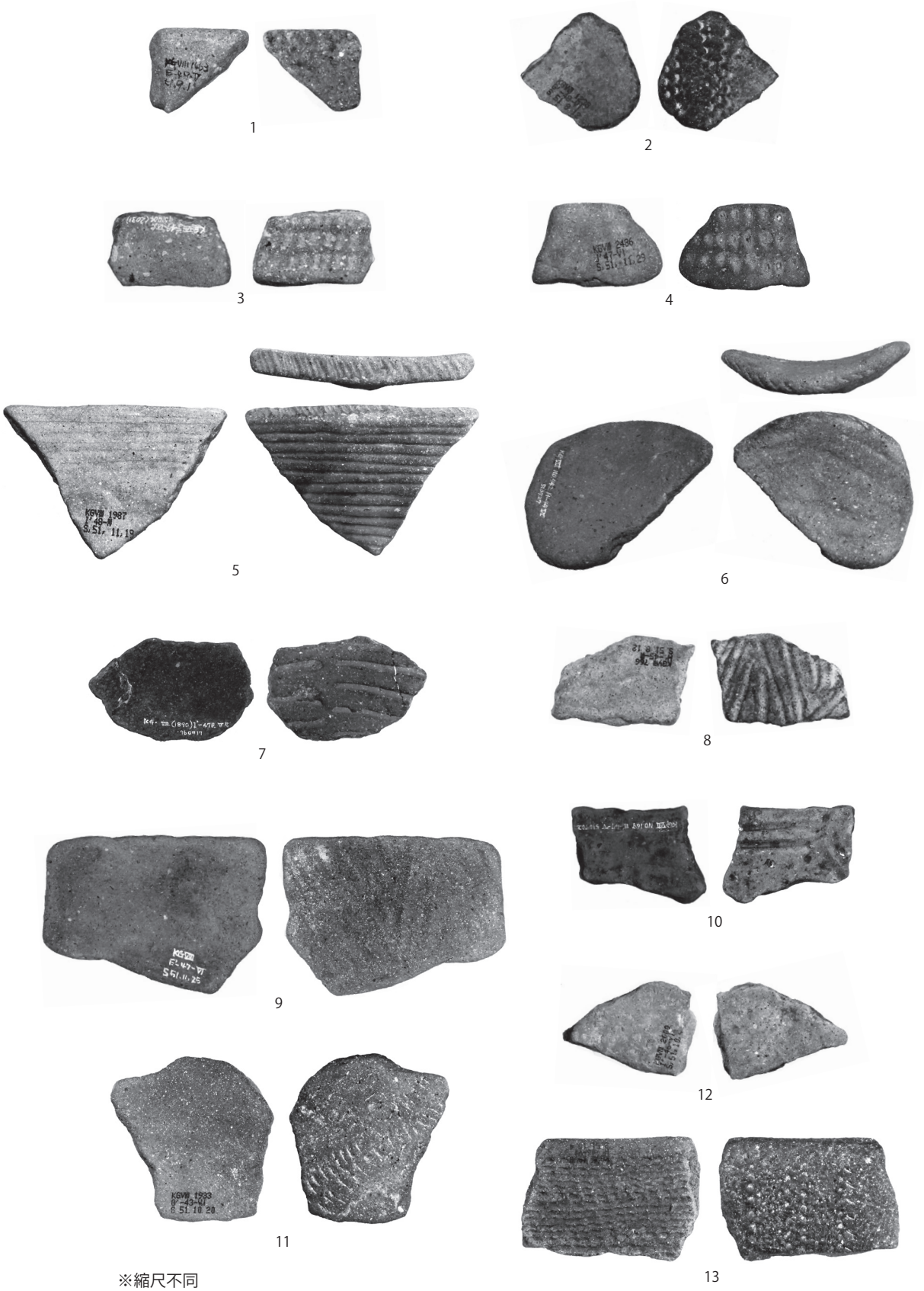


Fig.13　縄文土器（1）



※縮尺不同

PL.5　縄文土器（１）

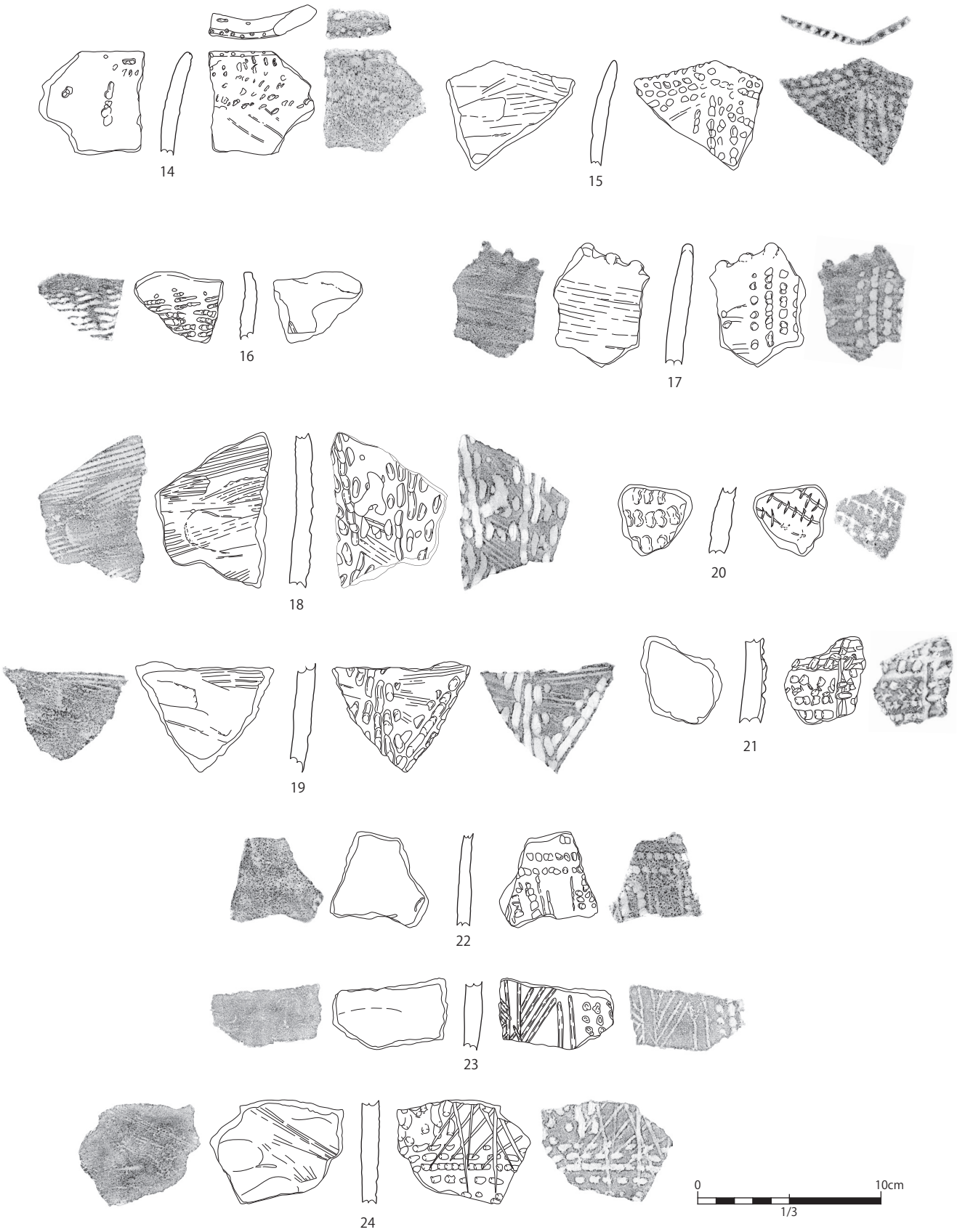
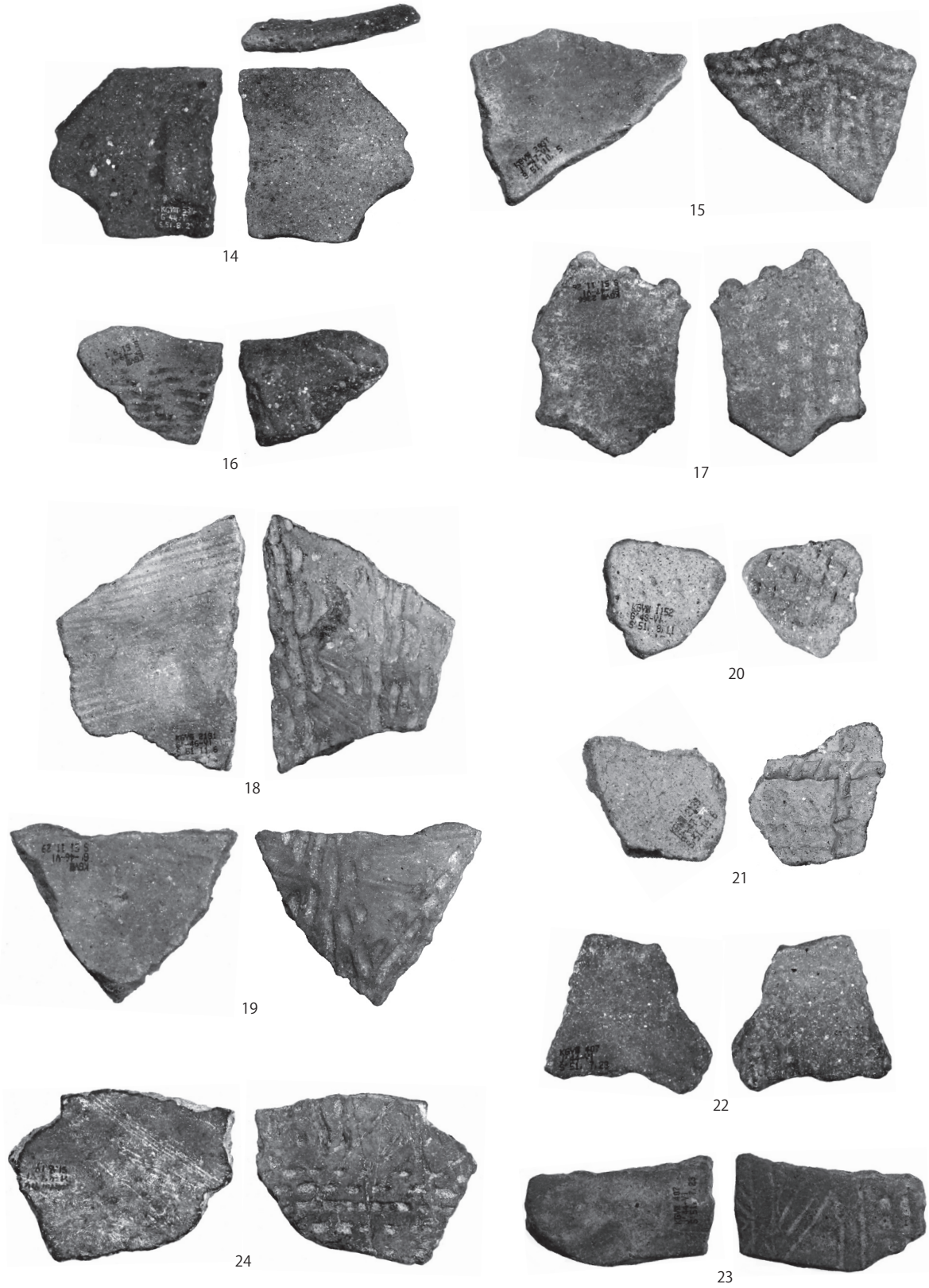


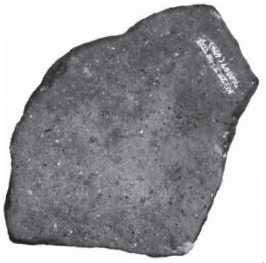
Fig.14　縄文土器（2）



※縮尺不同

PL.6　縄文土器（２）

Fig.15　縄文土器（3）



25

26

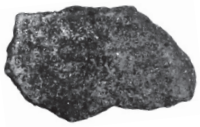
27

28

※縮尺不同

30

29



31

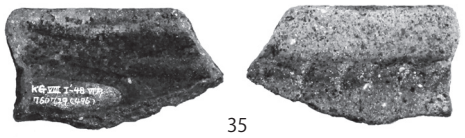
33

32

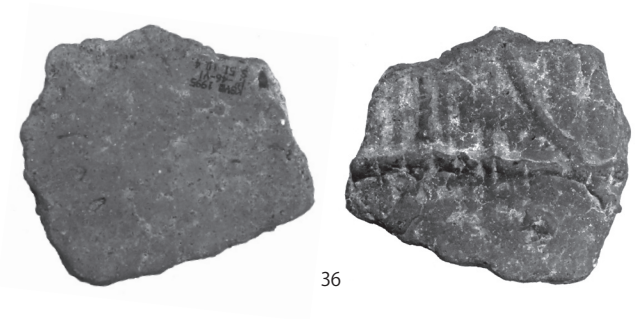
PL.7　縄文土器（３）

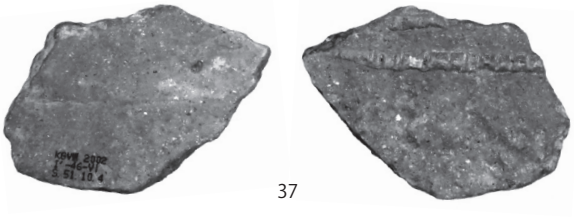
Fig.16　縄文土器（4）

34


35

※縮尺不同


36


37

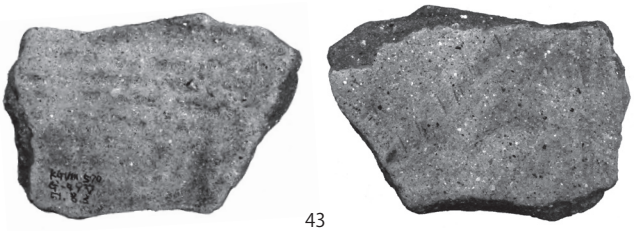
38

39

40

42

41


43

PL.8　縄文土器（４）

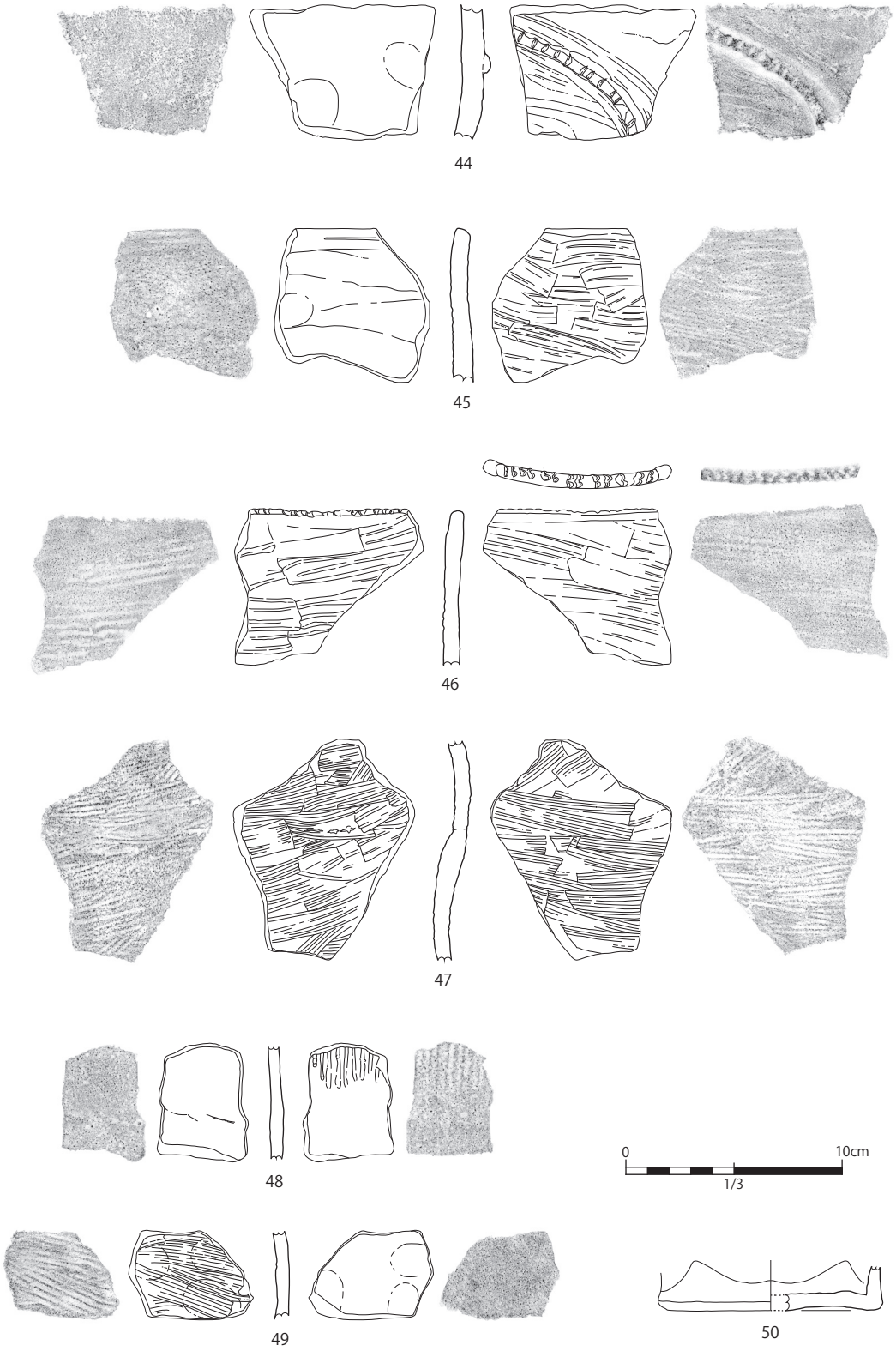
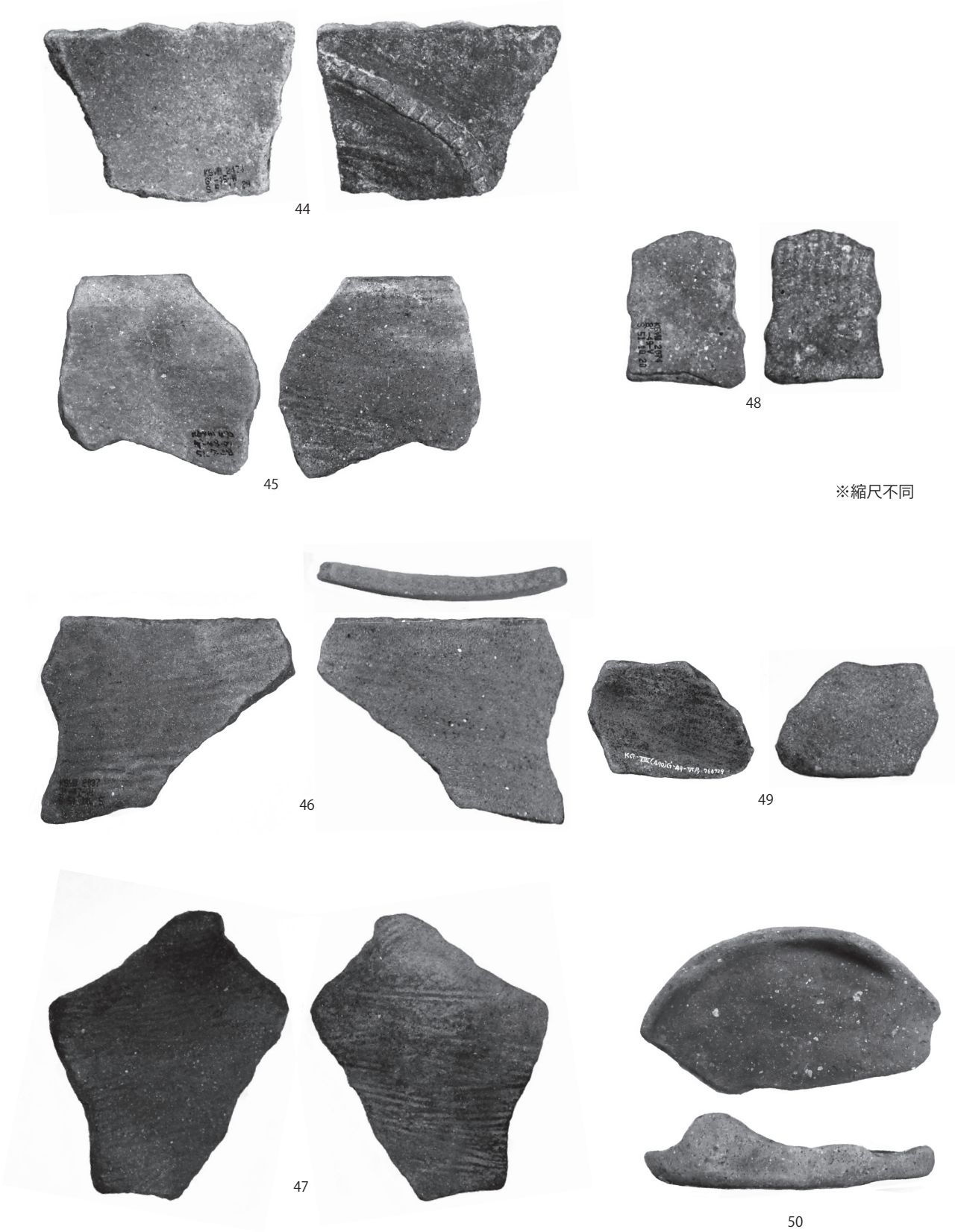


Fig.17　縄文土器（５）



PL.9　縄文土器（５）

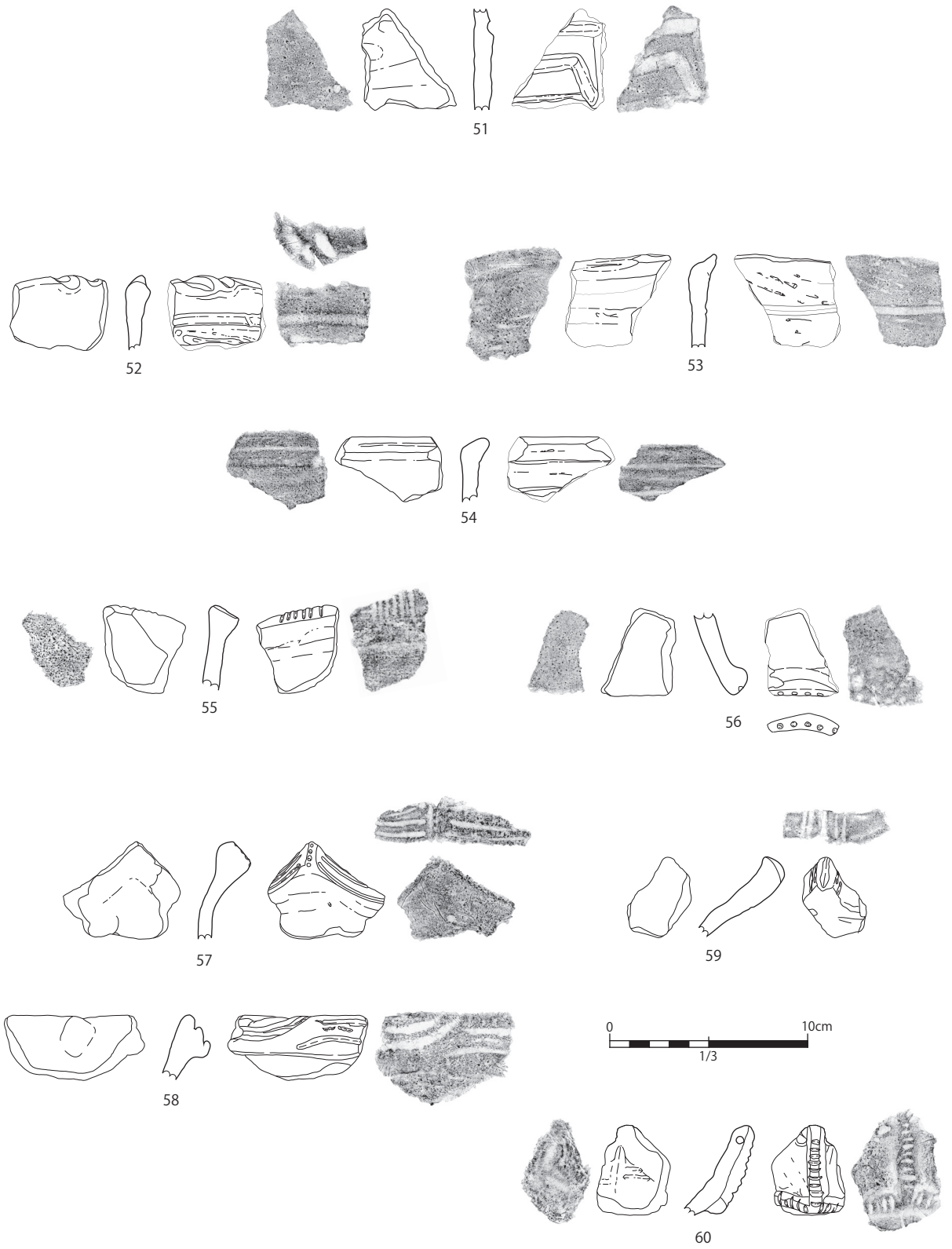
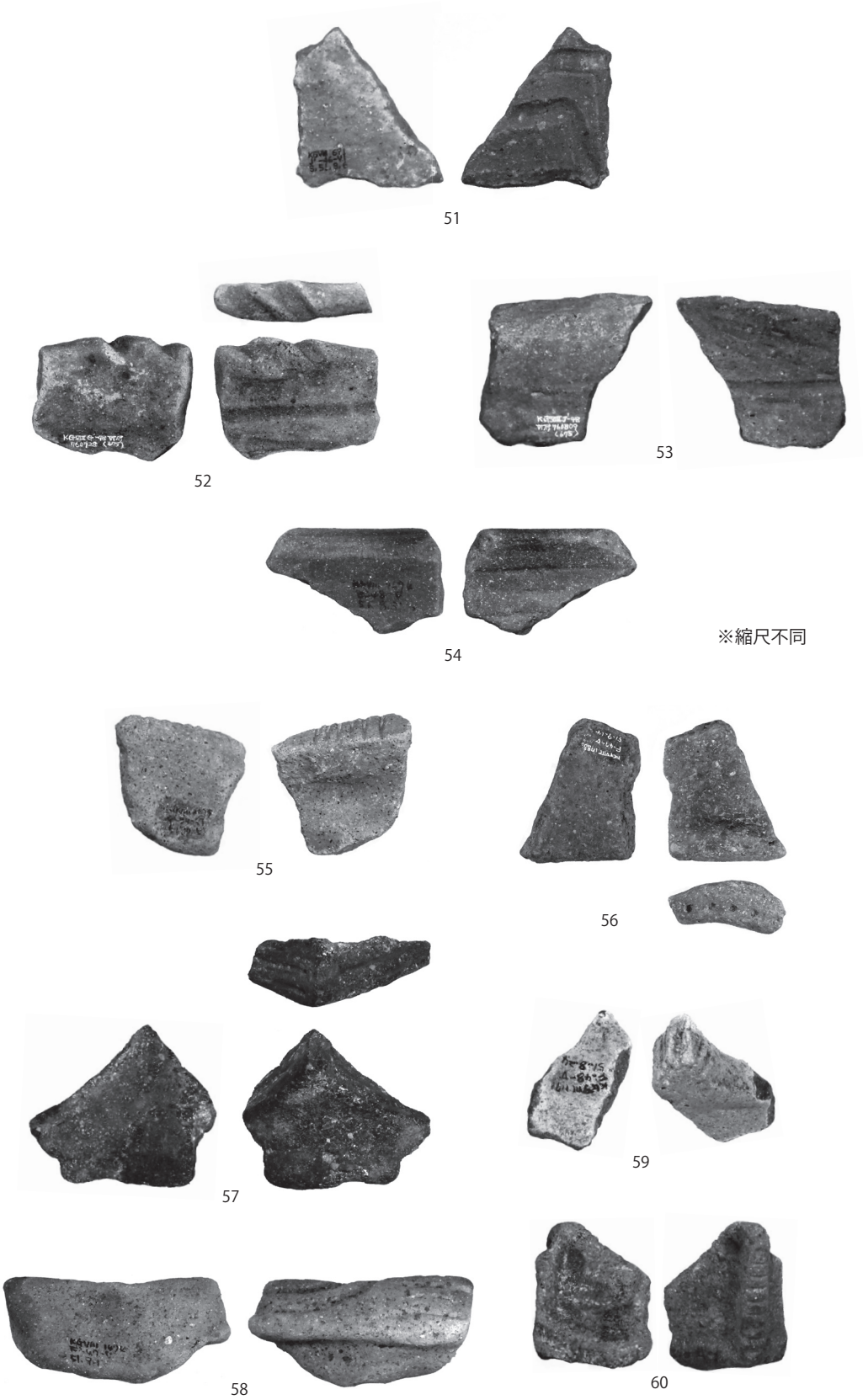


Fig.18　縄文土器（6）



PL.10　縄文土器（６）

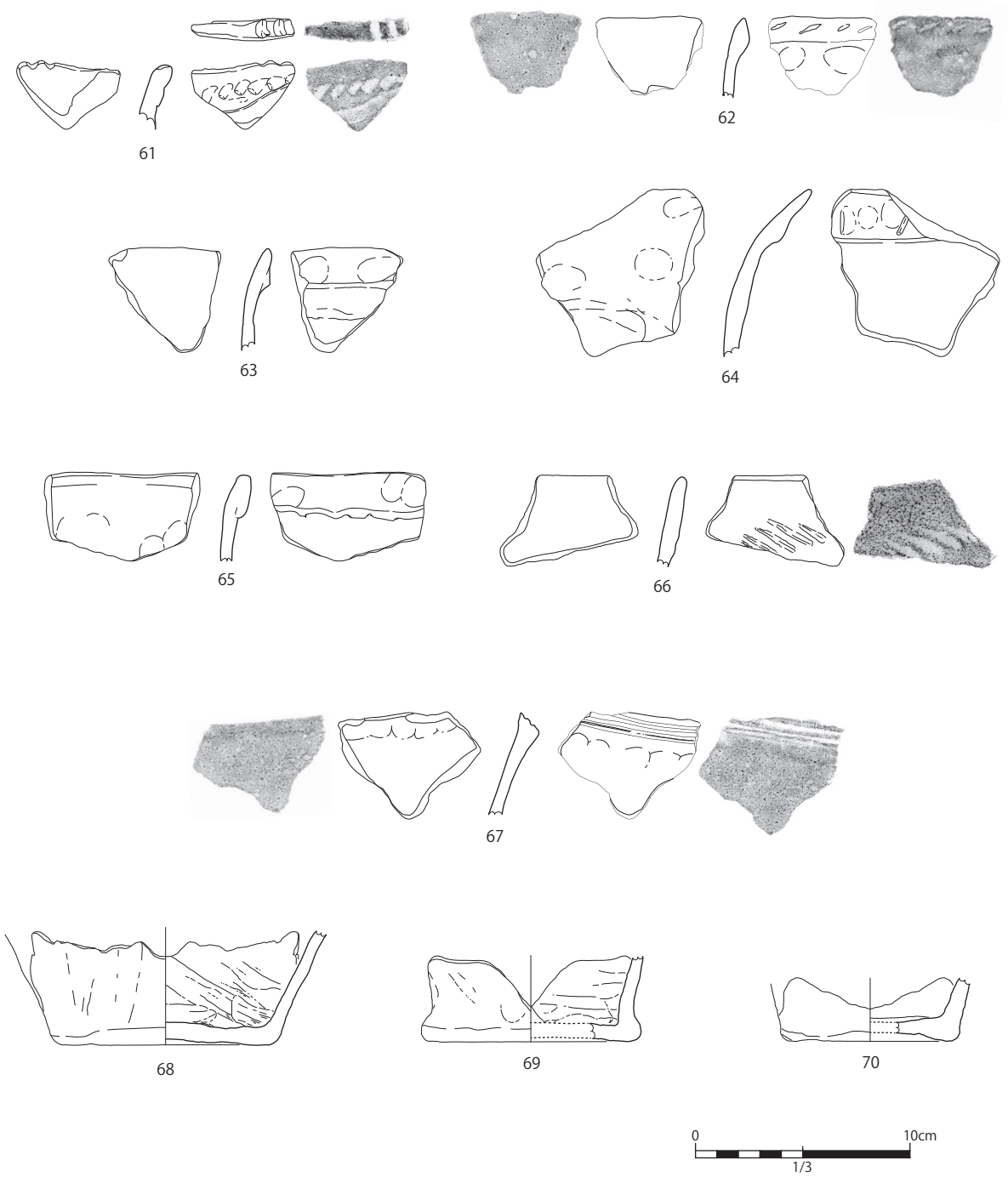
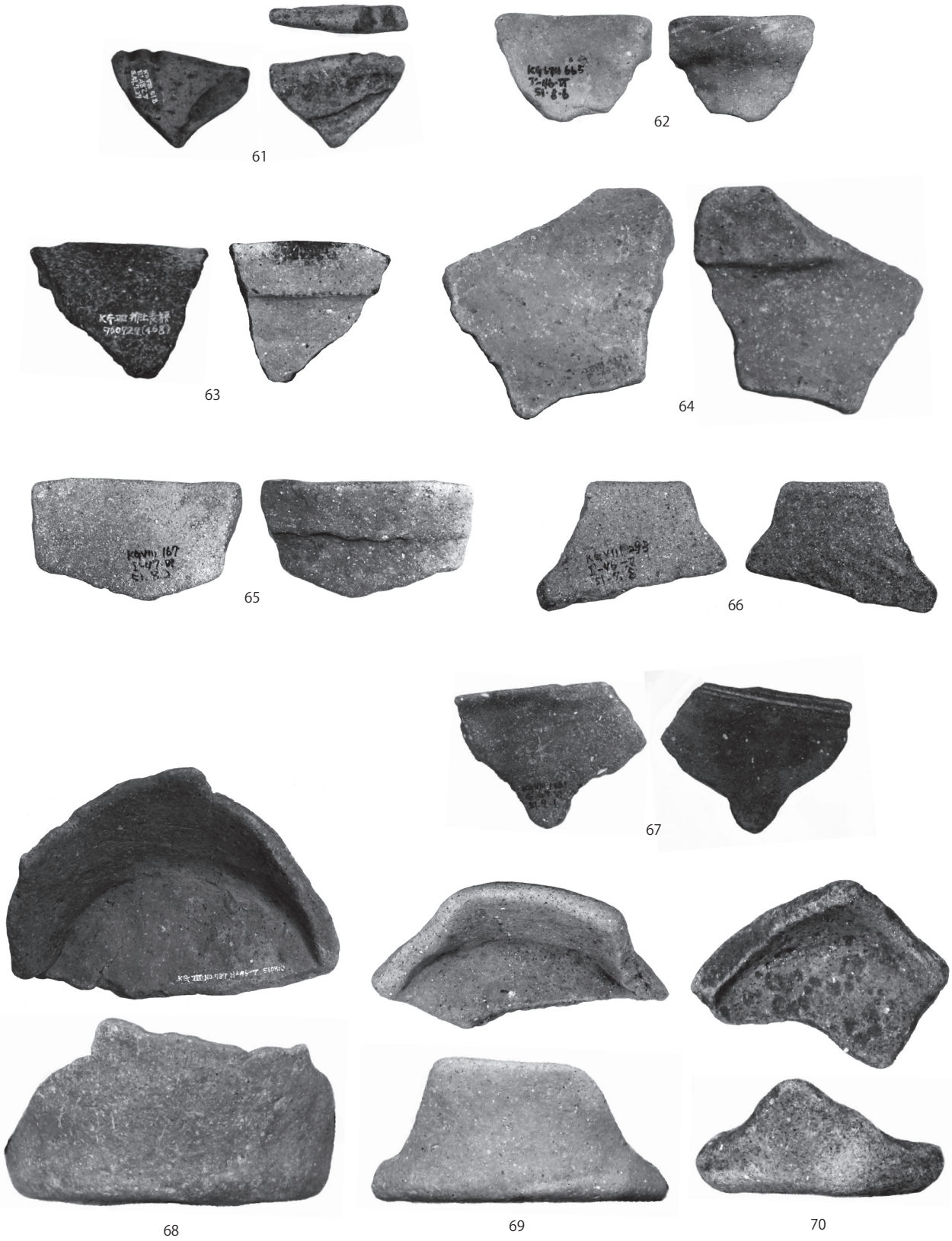


Fig.19　縄文土器（7）



PL.11　縄文土器（７）

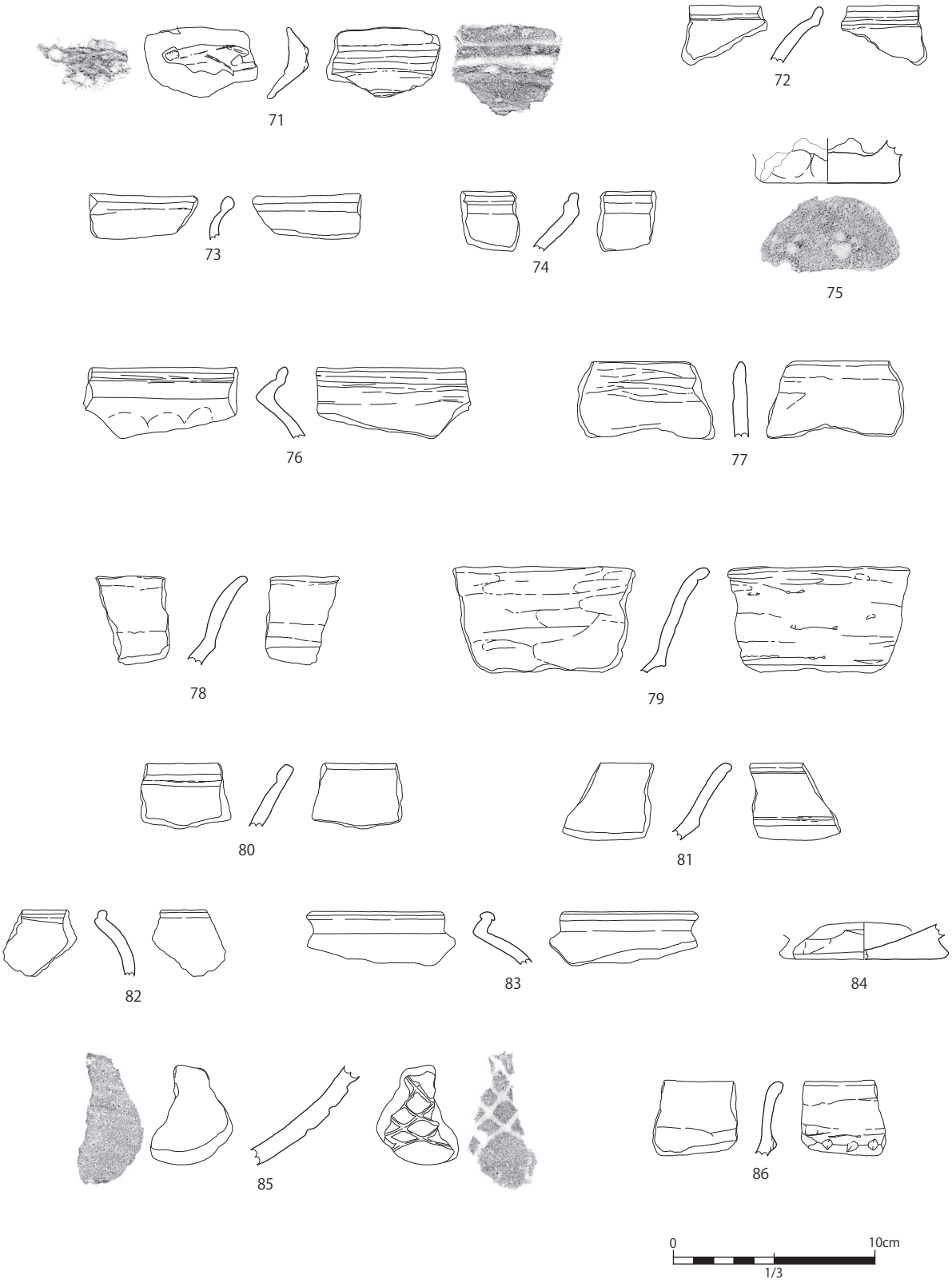
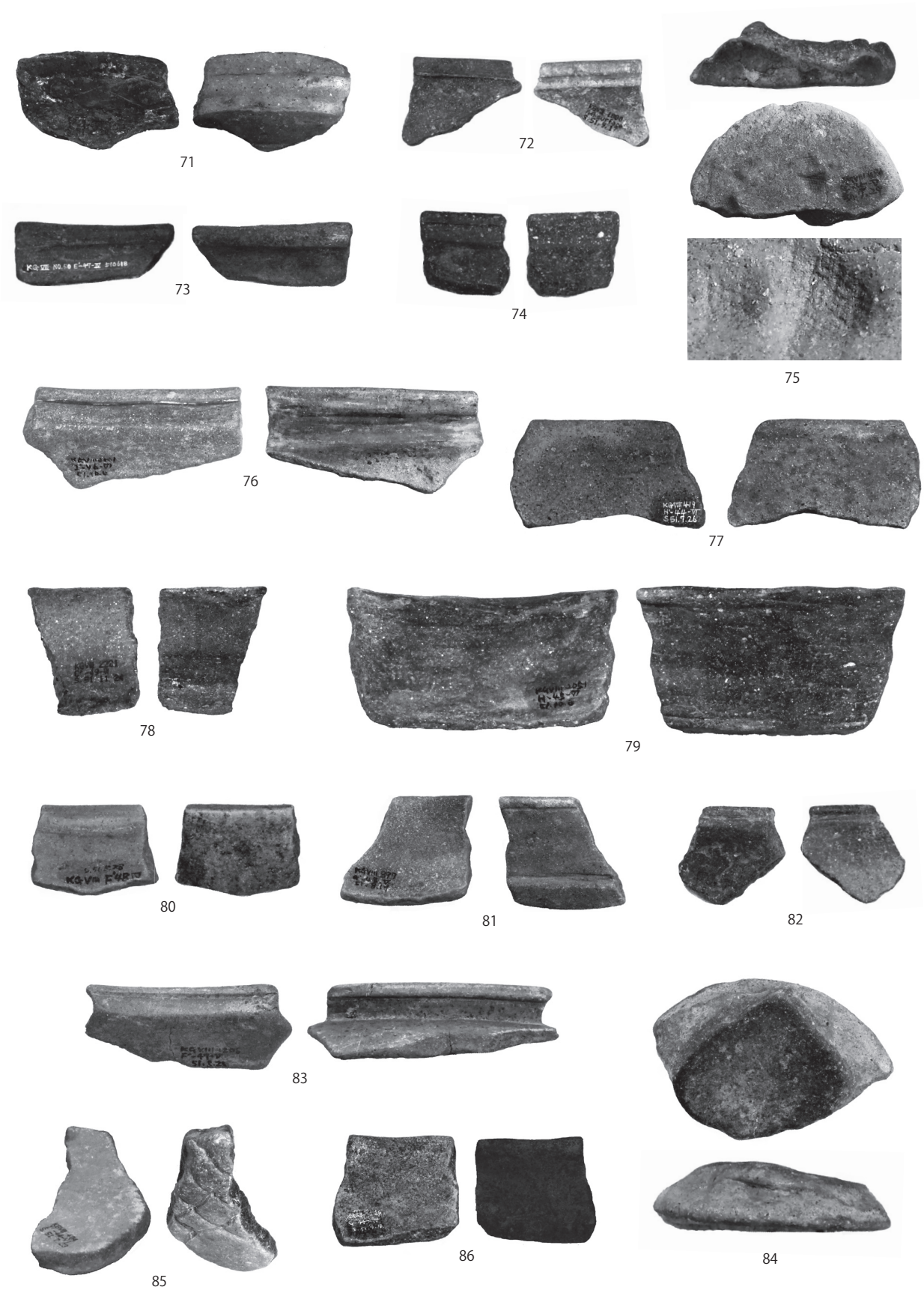


Fig.20　縄文土器（8）



※縮尺不同

PL.12　縄文土器（８）

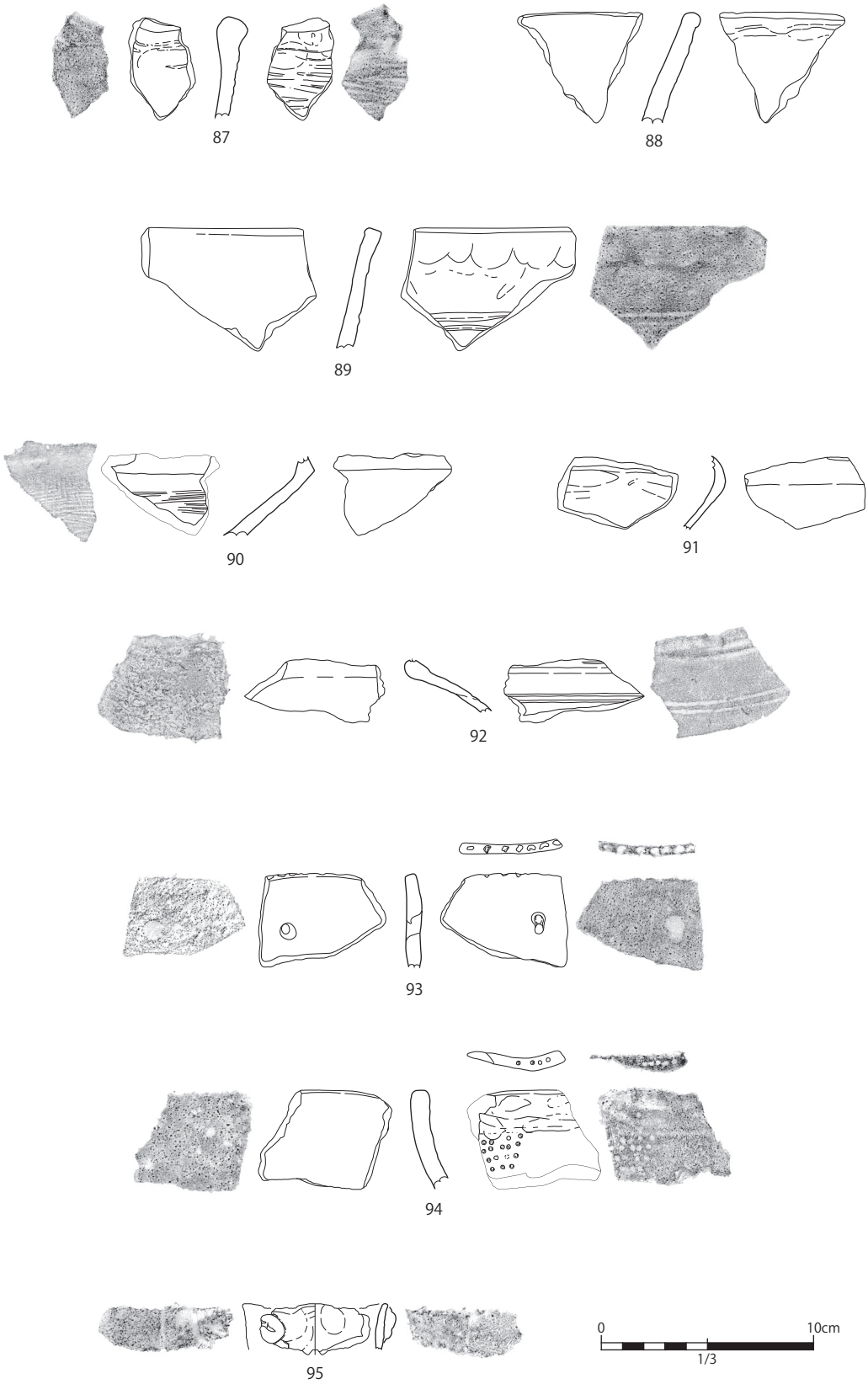
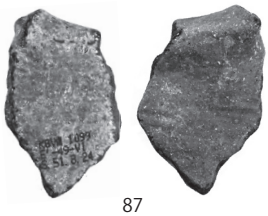
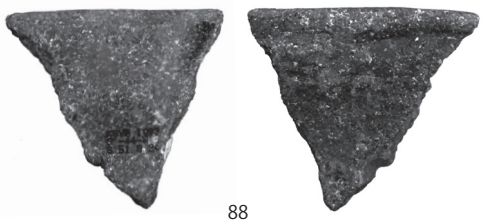
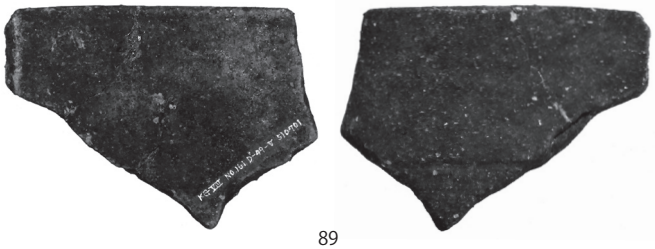
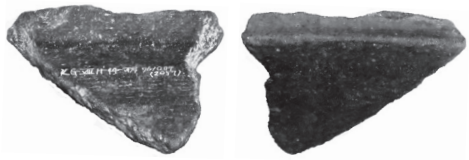


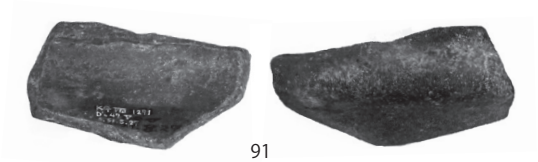
Fig.21　縄文土器（9）

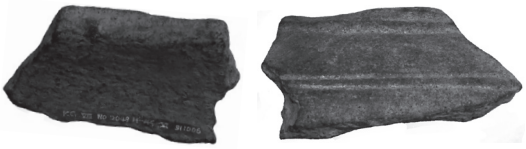

87

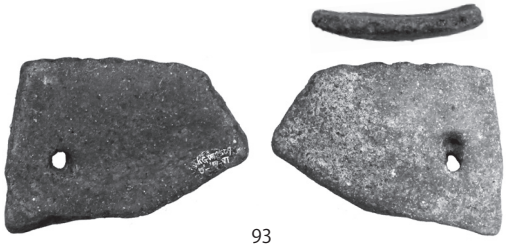

88


89


90


91


92


93

94

95

※縮尺不同

PL.13　縄文土器（９）

Tab.2　縄文土器観察

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
1	E'-49	5	縄文早期 前葉 前平式	深鉢	口	口唇部:貝殻刻目(｜).		貝殻条痕(—)	貝殻条痕(—)	赤・白色粒(少), 黒色粒(多)	表:にぶい褐7.5YR5/4 裏:にぶい橙7.5YR6/4 器肉:褐灰7.5YR5/1	1463	水磨(著).
2	G'-48	6	縄文早期 前葉 知覧式 (加栗山式)	角筒	胴	胴部:貝殻刺突線文(＼｜／)		貝殻条痕(＼)		赤・白色粒(少)	表:黒N2/ 裏・器肉:灰黄褐10YR5/2	1238	水磨(著).
3	J'-49	6	縄文早期末葉～前期初葉 西唐津式	深鉢	胴	胴部:押引文(—).				赤色粒(少), 白・黒色粒(多)	表・裏:にぶい褐7.5YR6/3 器肉:褐灰:7.5YR4/1	2031	水磨(著).
4	J'-47	6	縄文前期 曽畑式	深鉢	口	口縁部:連続刺突文(—).				白色粒(多), 黒色粒(少), 石英(少)	表・器肉:黄灰2.5Y5/1 裏:灰黄褐10YR5/2	2486	水磨(著).
5	I'-48	4	縄文前期 曽畑式	深鉢	口	口唇部:連続刻み(＼). 口縁部:沈線文(—).	口縁部:沈線文(—).			白・黒色粒(少), 石英(少)	表:褐7.5YR4/3 裏:にぶい黄橙10YR6/3 器肉:灰5Y4/1	1987	水磨.
6	H'-44	6	縄文前期 曽畑式	深鉢	口	口唇部:連続刺突文(＼). 口縁部:凹線文(／＼—).			ナデ(—)	白色粒(多), 黒色粒(少), 石英(少)	表:にぶい赤褐5YR5/4 裏:橙5YR6/6 器肉:褐灰10YR5/1	442	水磨(著).
7	I'-47	5	縄文前期 曽畑式	深鉢	胴	胴部:全面に凹線文(—).		ナデ(—)	ナデ(—)	赤色粒, 白色粒(多), 黒色粒, 角閃石(少)	表:にぶい赤褐2.5YR4/4 裏:赤黒2.5YR2/1 器肉:暗赤褐2.5YR3/4	1890	水磨.
8	H'-45	6	縄文前期 曽畑式	深鉢	胴	胴部:凹線文(／→＼)				白・黒色粒(少), 石英(少)	表:灰黄褐10YR4/2 裏:黄褐10YR5/6 器肉:黄褐10YR5/6	766	水磨(著).
9	E'-47	6	縄文前期 曽畑式	深鉢	胴	胴部:凹線文(＼→／)			ケズリ(＼)	赤・黒色粒(少), 白色粒(多), 角閃石(少), 石英(少)	表:にぶい黄褐10YR5/3 裏:にぶい黄褐10YR5/4 器肉:灰黄褐10YR5/2		水磨(著).
10	E'-47	5	縄文前期 曽畑式	深鉢	胴	胴部:同心円文・凹線文(—).				赤・白色粒(少), 角閃石(少)	表:赤褐5YR4/6 裏:暗赤褐5YR3/3 器肉:灰褐5YR4/2	169	水磨(著).
11	G'-43	6	縄文前期 曽畑式	深鉢	胴	胴部:爪形刺突文(X字方向)・貝殻刺突文(／＼).			貝殻条痕(—＼)	白・黒色粒(少), 角閃石(少), 石英(少)	表・裏・器肉:明赤褐2.5YR5/6	1933	水磨(著).
12	I'-46	6	縄文前期 曽畑式	深鉢	胴	胴部:同心円文.				赤・白色粒(少), 黒色粒(多), 軽石(少), 石英(少), 他	表:にぶい黄橙10YR6/3 裏:にぶい黄橙10YR7/4 器肉:灰5Y4/1	2000	水磨(著).
13	H'-46	6	縄文前期 末葉 尾田式	深鉢	口	口縁部:2列貝殻条線文(｜)→刺突文(—＼)	口縁部:貝殻条線文(—)			赤・白・黒色粒(少), 石英(少), 雲母(少)	表:黒N2/0 裏:黒褐10YR3/1 器肉:褐灰10YR4/1	1996	搬入品. 水磨.
14	G'-46	5	縄文前期 末葉～ 中期前葉 深浦式(日木山段階)	深鉢	口	口唇部:刺突文. 口縁部:貝殻連点文(—＼).	口縁部:貝殻条線文(—).			赤色粒(少), 白・黒色粒(多), 軽石(多), 石英(少), 礫(多)	表・器肉:褐灰10YR4/1 裏:灰褐7.5YR6/2	534	水磨(著).
15	J'-47	6	縄文前期 末葉～ 中期前葉 深浦式(日木山段階)	深鉢	口	口唇部:連続貝殻刻み(／). 口縁部:主文様;貝殻連点文(｜)・従文様;貝殻連点文(／＼).			貝殻条痕(—＼)	白色粒(少), 黒色粒(多)	表:褐灰10YR4/1 裏:褐7.5YR4/4 器肉:褐7.5YR5/1	2037	水磨(著).

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
16	F'-49	5	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	口	山形口縁.	口縁部:貝殻条線文(—).			白色粒(多),黒色粒(少),角閃石(少),石英(少),礫(少)	表:灰褐7.5YR4/2 裏:にぶい黄橙10YR6/3 器肉:灰7.5YR4/1		水磨(著).
17	F'-47	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	口	山形口縁部:豆状突起. 口縁部:主文様;貝殻連点文.		貝殻条痕(—)→ナデ(—)	貝殻条痕(—)→ナデ(—)	黒色粒(少)	表:にぶい黄褐10YR5/4 裏:灰黄褐10YR4/2 器肉:黄2.5Y7/8	2366	水磨.
18	G'-46	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	胴	胴部:貝殻連点文(｜).		貝殻条痕(＼)→ナデ(—)	貝殻条痕(—／)→ナデ(—)	白・黒色粒(少),石英(少)	表:にぶい赤褐5YR5/4 裏:にぶい橙5YR6/4 器肉:黒褐7.5YR3/1	2131	水磨なし. 18と同一個体?
19	G'-46	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	胴	胴部:貝殻連点文(＼／).		貝殻条痕(—)→ナデ(—)	貝殻条痕(—)→ナデ(—)	白・黒色粒(少),礫(少)	表:にぶい黄褐10YR5/3 裏:褐7.5YR4/6 器肉:にぶい黄2.5Y6/4		水磨なし. 18と同一個体?
20	G'-49	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	胴	胴部:沈線文(＼)→刻み(／).	口縁部:連続貝殻刺突文(—).			赤・黒色粒(少),白色粒(多),軽石(多),角閃石(少),石英(少),礫(少)	表:灰黄褐10YR6/2 裏:にぶい黄橙10YR7/3 器肉:褐灰10YR4/1	1152	水磨(著).
21	H'-47	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	胴	胴部:貝殻連点文(—)→刻み突帯(—｜)・				白色粒(多),黒色粒(少)	表:にぶい黄橙10YR7/2 裏:浅黄2.5Y7/3 器肉:黄灰2.5Y5/1	2139	水磨なし.
22	J'-44	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	胴	胴部:貝殻連点文(—＼).				白色粒(多),黒色粒(少),石英(少)	表:にぶい橙5YR6/3 裏・器肉:褐灰7.5YR6/3	407	水磨(著).
23	J'-44	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階？)	深鉢	胴	胴部:貝殻連点文・沈線文			ナデ(—)	黒色粒(少),角閃石(少),石英(少)	表:にぶい褐7.5YR5/4 裏・器肉:褐色10YR4/4	407	水磨(著).
24	H'-49	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	胴	胴部:貝殻連点文(—｜)→沈線文(／→＼→｜).			指頭圧痕・ケズリ(＼—)→ナデ(—)	白・黒色粒(少)	表:にぶい褐色7.5YR6/3 裏:褐灰:7.5YR4/1 器肉:黄灰2.5Y6/1	914	水磨.
25	J'-48	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	胴	胴部:貝殻連点文(｜)→刻み突帯(／).			ナデ	赤・黒色粒(少),白色粒(多),角閃石(少),石英(少),雲母(少),礫(少)	表:にぶい黄褐10YR5/3 裏:にぶい褐7.5YR6/3 器肉:褐灰7.5YR4/1	674	水磨(著).
26	F'-49	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	胴	胴部:同心円沈線文・沈線文(＼｜／).	口縁部:貝殻連点文(—).			白色粒(多),黒色粒(少),石英(少)	表:にぶい橙7.5YR7/4 裏:にぶい黄橙10YR7/3 器肉:黒2.5Y2/1	2386	水磨.
27	J'-47	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	口	口唇部リボン状突起→連続刻み(｜). 口縁部:ミミズ腫れ状突帯(—).				赤・白・黒色粒(少)	表:褐10YR4/6 裏・器肉:褐灰10YR5/1	467	水磨(著).
28	C'-47	3	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	胴	胴部:1条刻み突帯(—)・沈線文(＼／).	胴部:貝殻連点文.	ケズリ(—)→ナデ(—)	ケズリ(—)→ナデ(—)	白色粒(多),黒色粒	表・裏:灰褐7.5YR4/2 器肉:暗褐10YR3/3	60	水磨なし.
29			縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	胴	胴部:2条刻み突帯(—)・貝殻連点文(—).		ケズリ(—)→ナデ(—)	ケズリ(—)→ナデ(—)	赤・白・黒色粒	表:にぶい黄褐10YR6/4 裏:褐7.5YR4/4 器肉:刻褐4.5YR3/1		水磨なし.

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
30	I'-45	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	胴	胴部:主文様;2条刻み突帯(｜), 従文様;1条刻み突帯(／)・沈線文(／)→瘤状突起.				白色粒(多), 黒色粒(少), 石英(少)	表:にぶい黄褐10YR5/4 裏:にぶい褐7.5YR5/4 器肉:褐灰10YR4/1	606	水磨(著).
31	E'-49	5	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	底	胴部:連続押引文(—).				白色粒(少), 黒色粒(多), 石英(少)	表・器肉:黒7.5YR2/1 裏:灰褐10YR4/2		水磨(著).
32	C'-49 D'-48	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	底	胴部:貝殻連点文(—).		ナデ	貝殻条痕(—)	赤・白・黒色粒(少), 石英(少)	表:橙5YR6/6 裏:にぶい褐7.5YR5/3 器肉:にぶい褐7.5YR5/3	2268・2520	水磨なし.
33	H'-48	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(日木山段階)	深鉢	底	胴部:貝殻連点文(—).			ヘラナデ(—)	赤・白・黒色粒(少), 角閃石(少), 石英(少)	表:黄灰2.5Y4/1 裏:にぶい黄褐10YR5/4 器肉:黄灰2.5Y5/1	2475	水磨.
34	F'-49	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(石峰段階・古)	深鉢	口	山形口唇部:貝殻連続刺突(｜). 貝殻連点文(／｜＼)→刻みU字状突帯.	口縁部:貝殻連点文(—).			白色粒(多), 黒色粒(少), 角閃石(少), 石英(少), 礫(少)	表:黄灰2.5Y5/1 裏:黄灰2.5Y6/1 器肉:黄灰2.5Y4/1	2885	水磨(著).
35	I'-48	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(石峰段階・古)	深鉢	口	口縁部:貝殻刻み突帯(—).			ヘラナデ(＼)	赤・黒色粒(少), 白色粒(多), 石英(少)	表:にぶい褐7.5YR5/4 裏:黒褐10YR3/2 器肉:褐灰10YR4/1	496	水磨.
36	H'-46	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(石峰段階・古)	深鉢	胴	胴部:刻み突帯(／＼｜)・貝殻連点文(｜).			ヘラナデ(—)	黒色粒(多), 石英(少)	表・裏・器肉:赤褐5YR4/6	1995	水磨.
37	I'-46	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(石峰段階・古)	深鉢	胴	胴部:2条刻み突帯(—)・貝殻連点文(＼).			ヘラナデ(—)	白・黒色粒(多)	表・裏:明褐7.5YR5/6 器肉:黒褐2.5Y3/1	2002	水磨.
38	H'-48	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(石峰段階・新)	深鉢	口	口唇部:貝殻連続刺突(｜). 口縁部:主文様;2条刻み突帯(｜). 従文様;貝殻刺突文(—｜).			貝殻条痕(／)	赤・白・黒色粒(少), 石英(少)	表・器肉:灰黄褐10YR4/2 裏:黒褐10YR3/2	912	水磨(著).
39	G'-45	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(石峰段階・新)	深鉢	胴	胴部:刻み突帯(／—).				赤・黒色粒(少), 白色粒(多), 角閃石(少), 石英(少), 礫(少)	表:にぶい黄褐10YR5/3 裏・器肉:にぶい黄褐10YR5/4	2470	水磨(著).
40	I'-45	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(石峰段階・新)	深鉢	胴	胴部:沈線文(＼／)→刻み突帯(＼).			ナデ(／)	白色粒(多), 黒色粒(少), 石英(少), 雲母(少), 他	表:灰黄褐10YR4/2 裏:にぶい黄褐10YR5/4 器肉:黄灰2.5Y4/1	2155	水磨.
41	D'-49	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(石峰段階・新)	深鉢	胴	胴部:刻み突帯(／｜＼)→沈線文(＼→／).	口縁部:貝殻連点文(—).			赤・白色粒(少), 黒色粒(多), 角閃石(少), 石英(少), 礫(少)	表・器肉:にぶい褐7.5YR5/4 裏:褐7.5YR4/4	2509	水磨.
42	H'-48	5	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(石峰段階)	深鉢	口	口縁部:間隔の空いた1条の刻み突帯(—).			ケズリ(—)→ナデ(—)	赤・黒色粒(少), 白色粒(多), 石英(少)	表・裏・器肉:にぶい褐7.5YR5/4	190	水磨(著).
43	G'-49	5	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(石峰段階)	深鉢	胴	口縁部:主文様;貝殻連点文(｜)・刻み突帯(｜), 従文様:沈線文(／)・刻み突帯(／).	口縁部:貝殻条線文(—).			赤色粒(少), 白・黒色粒(多), 石英(少)	表・裏:灰黄褐10YR6/2 器肉:褐灰10YR5/1	570	水磨(著).
44	G'-45	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(鞍谷段階)	深鉢	胴	胴部:太めの刻み突帯(＼).		貝殻条痕(＼)	指頭圧痕	赤・白・黒色粒(少), 軽石(少), 石英(少)	表:褐灰7.5YR4/1 裏:にぶい黄褐10YR5/3 器肉:にぶい橙7.5YR6/4	2471	水磨.

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
45	G'-48	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(無文)	深鉢	口			貝殻条痕(＼—)	貝殻条痕(＼—)	白・黒色粒(少),軽石(少),角閃石(少),石英(少)	表:にぶい赤褐5YR4/4 裏:橙7.5YR6/6 器肉:黄灰2.5Y4/1	472	水磨(著).
46	J'-47	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式(無文)	深鉢	口	口唇部:連続貝殻刻み.		貝殻条痕(＼—)	貝殻条痕(／—)	赤・白・黒色粒(少),石英(少),雲母(少)	表・裏:にぶい褐7.5YR5/4 器肉:黒褐7.5YR3/1	2037	水磨(著).
47	F'-48	6	縄文前期末葉～中期前葉深浦式？(無文)	深鉢	口			貝殻条痕(＼—／)	貝殻条痕(／)	白色粒(多),黒色粒(少),軽石(少),石英(少)	表:にぶい黄橙10YR6/3 裏:褐10YR4/6 器肉:にぶい黄褐10YR5/3	2456	水磨.
48	B'-49	5	縄文前期末葉～中期初葉鷹島式～船元Ⅱ式	深鉢	胴			縄文(｜)		赤色粒(少),白・黒色粒(多),角閃石(少),石英(少)	表:にぶい黄褐10YR5/3 裏:にぶい黄褐10YR4/3 器肉:褐10YR4/4	2074	搬入品. 水磨(著).
49	G'-49	6	縄文中期中葉～後葉春日式？(無文)	深鉢	胴			指頭圧痕	貝殻条痕(—＼)	赤・白・黒色粒(少),軽石(少),石英(少),礫(少)	表:にぶい赤褐5YR5/4 裏:褐7.5YR4/3 器肉:灰黄褐10YR4/2	490	水磨(著).
50	D'-48	7	縄文中期中葉～後葉春日式？	深鉢	底				指頭圧痕	白・黒色粒(多)	表:灰褐7.5YR6/3・黒2.5Y2/1 裏:黒2.5Y2/1 器肉:灰5Y4/1	2557	水磨(著).
51	J'-46	6	縄文中期末葉～後期初葉阿高式	深鉢	胴	胴部:凹線文(—｜).			ケズリ(—)	白色粒(多),黒色粒(少),角閃石(少)	表・裏:褐7.5YR4/4 器肉:褐7.5YR4/3	671	水磨(著).
52	G'-48	6	縄文後期前葉指宿式系	深鉢	口	口唇突起部:2条刻み(＼). 口縁部:凹線文(—｜).				赤・白・黒色粒(少)	表・器肉:にぶい褐7.5YR5/3 裏:明褐7.5YR5/6	475	水磨(著).
53	J'-48	6	縄文後期前葉指宿式系	深鉢	口	口縁部:凹線文(—).		ケズリ(—)→ナデ(—)	ケズリ(—)→ナデ(—)	白・黒色粒(少),角閃石(少)	表:褐7.5YR4/4 裏:褐7.5YR4/6 器肉:褐7.5YR4/3	675	水磨(著).
54	E'-48	5	縄文後期前葉指宿式系	深鉢	口	口唇部:1条沈線文(—). 口縁部:2条沈線文(—).		ケズリ(—)→ナデ(—)	ケズリ(—)→ナデ(—)	白色粒(多),黒色粒(少)	表・器肉:赤褐5YR4/6 裏:黄褐10YR5/6	1594	水磨(著).
55	G'-44	6	縄文後期中葉松山式	深鉢	口	口縁拡張部:6条単位の短沈線文(｜)		ヘラナデ(—)		白・黒色粒(多),軽石(少),角閃石(少),石英(少)	表:橙7.5YR6/6 裏:にぶい黄橙10YR6/4 器肉:にぶい黄褐10YR5/4	2039	水磨(著).
56	F'-47	5	縄文後期中葉松山式	台付皿	脚	脚端部:連続刺突文.		ヘラナデ(—)		赤・白・黒色粒(少),角閃石(少),石英(少)	表:にぶい黄褐10YR4/3 裏・器肉:にぶい褐7.5YR5/4	1788	水磨.
57	F'-47	5？ 6？	縄文後期中葉市来式	深鉢	口	口縁拡張部:刺突文・3条凹線文(—).				赤色粒(少),白色粒(多)	表:黒10YR2/1 裏・器肉:黒褐10YR2/3	1815	水磨(著).
58	F'-47	5	縄文後期中葉市来式	深鉢	口	口縁拡張部:5条凹線文(／—).				赤色粒(少),白・黒色粒(多)	表:にぶい橙7.5YR7/4 裏:明褐7.5YR5/2 器肉:褐灰7.5YR5/1	1474	水磨(著).
59	F'-48	5	縄文後期中葉市来式	台付皿	口	口唇突起部:5条刻み(｜).		指頭圧痕	指頭圧痕	赤・白・黒色粒(少),角閃石(少)	表:橙5YR6/6 裏:にぶい橙5YR6/4 器肉:黒7.5YR1.7/1	1170	水磨.

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
60	表採	1	縄文後期中葉？	台付皿？	口	口縁突起部・胴部：逆T字状刻み突帯文(—｜).			指頭圧痕	赤・白・黒色粒(多)	表・裏・器肉：明赤褐5YR5/6	196	突起部：穿孔(—). 水磨(著).
61	E'-48-テ	5	縄文後期中葉市来式	深鉢	口	口縁突起部：2条刻み(｜). 口縁肥厚部：連続刺突文(／).				白色粒, 黒色粒(多)	表：褐7.5YR4/6 裏：にぶい褐7.5YR5/4 器肉：暗褐7.5YR3/3	518	水磨(著).
62	I'-46	6	縄文後期中葉市来式	深鉢	口	口縁肥厚部：短沈線文(／).				白・黒色粒, 石英(少)	表・裏：明赤褐5YR5/6 器肉：にぶい赤褐5YR5/4	665	水磨(著).
63	表採	1	縄文後期中葉市来式	深鉢	口			指頭圧痕・ナデ(—)	ナデ(—)	赤・黒色粒(多), 白色粒, 角閃石(少)	表：にぶい黄橙10YR7/2 黒10YR1.7/1 裏：黒10YR1.7/1 器肉：黒10YR1.7/1	468	水磨(著).
64	F'-48	5	縄文後期中葉市来式	深鉢	口	口縁肥厚部：間隔の空いた短沈線文(｜／).			指頭圧痕	赤色粒(少), 黒色粒(多), 石英(多)	表：明赤褐7.5YR4/6 裏：にぶい褐7.5YR5/4 器肉：暗褐7.5YR3/3	1174	水磨(著).
65	I'-47	6	縄文後期中葉市来式	深鉢	口				ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少), 石英(少), 礫(小)	表：灰黄褐10YR4/2 裏：灰褐7.5YR5/2 器肉：灰褐7.5YR5/2	167	肥厚部下位：接合部明瞭. 水磨(著).
66	I'-46	5	縄文後期中葉丸尾式	深鉢	口	口縁部：連続短沈線文(＼).				赤・白色粒(少), 黒色粒(多), 角閃石(少)	表：にぶい黄褐10YR5/3 裏：にぶい橙7.5YR6/4 器肉：灰黄褐10YR6/2	293	水磨(著).
67	G'-47	6	縄文後期後葉西平式(太郎迫式)	深鉢	口	口縁拡張部：3条凹線文.			ミガキ(—)	白・黒色粒(少), 軽石(少), 石英(少), 礫(少)	表：にぶい黄褐10YR5/3 裏：灰黄褐10YR4/2 器肉：褐灰10YR5/1	1481	水磨.
68	H'-46	5	縄文後期？	深鉢	底			ナデ(—)	ヘラナデ(＼)・指頭圧痕	白色粒(少), 黒色粒(多), 角閃石(少), 石英(少)	表・裏：明褐7.5YR5/6 器肉：明褐灰7.5YR7/1	737	底径10.8cm. 水磨(著).
69	H'-45	5	縄文後期？	深鉢	底			指頭圧痕	指頭圧痕	白色粒(多), 黒色粒(少), 角閃石(少), 礫(少)	表・裏・器肉：橙7.5YR6/6 明褐灰7.5YR7/1	549	底径10.2cm. 水磨(著).
70	E'-49-ケ	5	縄文後期？	深鉢	底				指頭圧痕	白色粒(少), 黒色粒(多), 角閃石(少), 礫(少)	表：赤褐5YR4/6 裏：明赤褐5YR5/6 器肉：暗赤褐5YR3/2	528	底径8.6cm. 内面剥落. 水磨(著).
71	I'-47	6	縄文後期末葉上加世田式	深鉢	口	胴部屈曲部：凹線.		ミガキ(—)	ヘラナデ(＼)	白色粒(多), 黒色粒(少)	表：黄灰2.5Y6/1 裏・器肉：黒褐2.5Y3/1		水磨(著).
72	表採	1	縄文晩期入佐式	浅鉢	口	口縁部：1条沈線文(—).	口縁部：1条沈線文(—).	ミガキ(—)	ミガキ(—)	赤・黒色粒(少), 白色粒(多), 角閃石(少)	表：にぶい黄褐10YR4/3 裏：黒10YR1.7/1 器肉：灰黄褐10YR4/2	1880	精製. 水磨(著).
73	E'-47	4	縄文晩期入佐式	浅鉢	口			ミガキ(—)	ミガキ(—)	赤・白色粒(少), 角閃石(少)	表：褐7.5YR4/4 裏：黒褐7.5YR3/1 器肉：褐7.5YR4/3	50	精製. 水磨(著).
74	表採	1	縄文晩期入佐式	浅鉢	口	口縁部：1条凹線文(—).	口縁部：2条沈線文(—).		ミガキ(—)	白色粒(多), 黒色粒(少)	表・裏：黒2.5Y2/1 器肉：黒2.5Y2/1	?	精製. 水磨(著).

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
75	G'-45	5	縄文晩期 入佐式	深鉢	底			指頭圧痕		白色粒, 角閃石, 3mm大礫 (少)	表:赤褐2.5YR4/6 裏:赤黒2.5YR1.7/1 器肉:黒褐5YR2/2	481	外底面:布目を持つ塊状圧痕6箇所. 底径7.2cm. 水磨(著).
76	I'-46	6	縄文晩期 入佐式	浅鉢	口	口縁部:浅い横線文(—).	口縁部:沈線文(—).	ミガキ(—)	ミガキ(—)・指頭圧痕	赤・白・黒色粒(少), 石英(少)	表:にぶい黄褐10YR5/3 裏:暗灰黄2.5Y5/2 器肉:にぶい黄褐10YR5/3	2001	精製. 水磨.
77	H'-44	6	縄文晩期 入佐式	深鉢	口			ケズリ(—)→ナデ(—)	ケズリ(—)→ナデ(—)	白・黒色粒(多), 石英(少)	表:明褐7.5YR5/6 裏:橙7.5YR6/6 器肉:褐灰7.5YR5/1	419	水磨(著).
78	C'-49	6	縄文晩期 黒川式	浅鉢	口			ケズリ(—)→ナデ(—)	ケズリ(—)→ナデ(—)	赤色粒(少), 白色粒(多), 黒色粒	表:黒褐5YR2/1 裏:灰褐7.5YR5/2 器肉:黒7.5YR1.7/1	2221	精製. 水磨.
79	H'-45	6	縄文晩期 黒川式	浅鉢	口			ケズリ(—)→ナデ(—)	ケズリ(—)・指頭圧痕→ナデ(—)	赤・白・黒色粒, 石英(少), 雲母(少)	表:黒褐2.5Y3/1 裏:黒2.5Y2/1 暗オリーブ褐2.5Y3/3 器肉:黒褐2.5Y3/1	2051	精製. 水磨.
80	F'-48	4	縄文晩期 黒川式	浅鉢	口			ミガキ(—)	ミガキ(—)	白・黒色粒(少)	表・裏:にぶい褐7.5YR5/4 器肉:褐灰7.5YR4/1		精製. 水磨(著).
81	G'-48	5	縄文晩期 黒川式	浅鉢	口	口縁部:1条沈線文(—). 胴部:1条沈線文(—).		ミガキ(—)	ミガキ(—)	白色粒(多), 黒色粒(少)	表:明褐5YR5/6 裏:黄灰2.5YR4/1 器肉:明褐7.5YR5/6	897	精製. 水磨(著).
82	I'-47	5	縄文晩期 黒川式	浅鉢	口	口縁部:1条沈線文(—).	口縁部:1条沈線文(—).	ミガキ(—)	ミガキ(—)	赤・白色粒(少)	表:にぶい黄褐10YR4/3 裏・器肉:黒褐10YR3/1	1890	精製. 水磨(著).
83	F'-47	5	縄文晩期 黒川式	浅鉢	口	口縁部:1条沈線文(—).	口縁部:1条沈線文(—).	ミガキ(—)	ミガキ(—)	黒色粒(少)	表:褐7.5YR4/4 裏:褐7.5YR4/3 器肉:明褐7.5YR5/6	1208	精製. 水磨(著).
84	G'-49	5	縄文晩期 黒川式	深鉢	底					白・黒色粒(多)	表:橙7.5YR6/6 にぶい赤褐5YR4/4 裏:黒7.5YR2/1 器肉:にぶい黄橙10YR7/4	2064	底径8.4cm. 水磨(著).
85	I'-44	6	縄文晩期 黒川式	組織痕	胴	胴部:幅12mmの網目			ミガキ(—)	赤・白・黒色粒(少), 角閃石(少)	表:橙7.5YR7/6 裏:橙7.5YR6/8 器肉:黒7.5YR1.7/1	404	水磨(著).
86	G'-44	4	縄文 晩期末	鉢	口	胴部:1条刻目突帯文(—).		ミガキ(—)	ナデ(—)	白色粒(多), 黒色粒	表:褐7.5YR4/4 裏:にぶい黄褐10YR4/3 器肉:褐7.5YR4/3	226	水磨(著).
87	E'-49	6	縄文晩期	深鉢	口	口唇部・リボン状突起.		貝殻条痕(—)→ナデ(—)	貝殻条痕(—)→ナデ(—)	白・黒色粒(少), 石英(少)	表:褐7.5YR4/4 裏:にぶい黄褐10YR4/3 器肉:黄灰2.5Y4/1	1099	水磨なし.
88	G'-44	6	縄文晩期	深鉢	口			ミガキ(—)		白色粒(少)	表:にぶい褐7.5YR5/4 裏・器肉:褐7.5YR4/6	1093	水磨(著).
89	D'-49	5	縄文晩期	深鉢	口	口縁部:2条沈線文(—).		指頭圧痕		白色粒(多), 黒色粒(少), 角閃石(少), 石英(少)	表・器肉:黒褐10YR2/2 裏:褐7.5YR4/3	151	水磨(著).

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
90	H'-44	6	縄文晩期	浅鉢	胴			擦痕(—)→ミガキ(—)	擦痕(—)→ミガキ(—)	白・黒色粒(少)	表:黒7.5YR2/1 裏:黒2.5Y2/1 器肉:黒褐2.5Y3/2	2057	精製. 水磨.
91	D'-47	5	縄文晩期	浅鉢	胴				ミガキ(—)	赤・白・黒色粒(少)	表:黒5Y2/1 裏:灰オリーブ5Y4/2 器肉:暗灰黄2.5Y4/2	1291	精製. 水磨(著).
92	H'-49	6	縄文晩期	浅鉢	肩	頸部:1条の突帯文. 胴部:2条の沈線文.				黒色粒(少)	表:灰黄褐10YR5/2 裏・器肉:黄褐10YR5/8	2049	水磨(著).
93	D'-49	6	型式不明	深鉢	口	口唇部:連続刺突文.				白・黒色粒(少), 石英(少)	表:灰黄褐10YR5/2 裏:にぶい黄褐10YR4/3 器肉:灰黄褐10YR4/2	2509	表裏より位置のズレた穿孔(補修孔). 水磨(著).
94	I'-46	6	型式不明	壷？	口	口唇部:連続刺突文. 口縁部:連続刺突文.				赤・白・黒色粒(少), 角閃石(少), 石英(少)	表・裏・器肉:にぶい黄褐10YR5/4		水磨(著).
95	D'-47	6	型式不明	壷？	口	口縁部:円形浮文.		指頭圧痕	指頭圧痕	白・黒色粒(少), 軽石(少), 礫(少)	表:にぶい黄褐10YR5/3 裏・器肉:にぶい橙7.5YR6/4	1915	薄手. 粗製. 水磨.

６－２　弥生土器（Fig.23 ～ 39，PL.14 ～ 30）

ここでは弥生時代早期～中期までの土器と，その範疇にあると考えられる土器を挙げた。今回の遺物編では最も出土量が多く，1640 点が得られた（Tab.3）。現段階通有の南九州の弥生土器編年[1]においては甕の変遷が最も細かく，壷その他については，前後の様式に共通するものがあるため，明確に時期区分することができない。また，得られた遺物は基準資料に該当しないものも少なくない。そのため今回は，口縁部資料を主体とした甕・鉢で時期区分・様式区分し，同時期と思われる壷，鉢などについて記載，続けて時期をまたぐ壷その他，底部，不明資料の順に述べることにする。

弥生時代早期

（１）刻目突帯文土器

いわゆる刻目突帯文土器で，甕や鉢があるものの壷形土器は不明である。全形の窺える資料は少ないので，基本的に突帯の刻みが深く，大きなものをここにまとめた。Ⅴ・Ⅵ層を主体に口縁部・胴部資料のみで 37 点出土しており，そのうち９点を図化した。

器形が明確に窺えるものは，図上復元できた 102 の１点のみである。胴部で逆くの字に屈曲し，口唇部直下のやや下方，そして胴屈曲部に刻目突帯文を巡らす。100 も同様であるがやや屈曲が弱い。101 はかなり口の開く鉢形のように復元されるが，口縁部や突帯のゆがみによる可能性もある。97 は薄手で口縁部の片側が上部に張り出すため，山形口縁の鉢の可能性もあるが判然としない。

口唇部は舌状のもの（98・100），丸みを帯びるもの（99），外面側に玉縁状に形成するもの（96・97・103），平坦に押さえるもの（101・102），内面側に庇状に張り出すもの（104）などがある。

刻目の付け方は，指でつまむようにして突出の低いミミズ腫れ突帯様に成形するもの（96），突帯の下方から突帯を押し上げるように刻みを施すもの（97・98），広めの刻みを施すもの（99），突帯に刺突によって刻みを施すもの（100 ～ 104）などがある。

弥生時代前期

（１）高橋式土器

いわゆる高橋式土器とされるものはⅤ・Ⅵ層で主体的に出土し，甕・鉢の口縁部・胴部資料だけで 158 点出土している。甕・鉢は突帯文土器系統のもの（149 点）と如意形口縁系統のもの（９点）がある。口縁部数からみた両者の比率は，前者のほうが圧倒的に多い。壷も口縁部・胴部資料で 23 点確認できる。そのうち甕 16 点，壷６点を図化した。

突帯文土器系統甕・鉢は，口縁部の突帯と胴部の突帯が同じくらいの長さで突出するもの，同様の突帯で口縁二条突帯であるものなどをここで挙げた。器形は口縁部がやや内傾するものが多く（105・107・112・114），直状のもの（106・108・110・113）もみられる。なお，主要突帯間を埋める口縁部文様として，二条沈線文による山形文（108），斜位の二条突帯（109），曲状突帯（110・111）などがある。

如意系口縁甕は，ゆるやかに外側に外反するもので，口唇部が舌状のものは少なく（115），丸みを帯びるものが多い（116 ～ 120）。口唇部に垂直の密な刻目を施すが，斜位の刻目もある（115・118）。

壷は幅広の肥厚口縁を形成するもの（160），その肥厚口縁下部に粗い沈線文を巡らすもの（161），頸部と胴部境界に一条～数条の沈線文を巡らせるもの（162 ～ 165），連弧文などを肩部に描くもの（164）などがある。今回図化はしていないが，貝殻刺突文を施す資料もある。ここで挙げた壷は，プロポーションや口縁部形態，文様要素，研磨の有無で前期土器として分類した。

弥生時代前期末～中期前半古段階

（１）入来Ⅰ式土器

ここでは入来Ⅰ式土器ほか，破片では判断できないものが多いため，いわゆる前期末～中期初頭（入来Ⅰ式前後）と目される資料もここに含める。Ⅴ・Ⅵ層を中心に口縁部・胴部資料で 193 点出土しており，甕・

鉢（175），壷（17 点），高坏（１点）などがある。これらのうち甕･鉢 14 点，壷６，高坏１点を図化した。

甕・鉢のプロポーションは砲弾型が認められる（121 ～ 123）。やや内傾気味のもの（124・130・133）や，大きく開くようなもの（132・134）もあるようであるが，小破片のため判然としない。入来Ⅰ式土器甕・鉢最大の特徴は，胴部突帯よりも口縁部突帯が発達し大きく張り出すものが多いことで（121・122・128），ほかにも口縁部二条突帯であるが上部の張り出しが長いもの（124 ～ 126），口縁部に刻目突帯をもつが突帯がやや発達したもの（127・129），刻目をもたず，つくりがやや粗雑なもの（131 ～ 134）などが認められる。

壷は，入来Ⅰ式段階の基準資料として明確な壷は捉えられなかったため，弥生時代前期末～中期初頭頃に位置づけられる可能性のある壷を挙げておく。内面側に肥厚させ口縁部が若干厚くなるもの（166・170），口縁部は拡張せず長さもない厚みのある弱いへの字状の口縁（167），口唇部を工具で押さえて凹部を形成し，口縁部内面に突帯を持つもの（168・169）などである。171 は口唇部が舌状で口が開き頸部に三角状突帯が二条巡るものである。文様はほかにも浅い細い沈線文を間隔を空けて二～三条巡らせ，上段にはさらに縦位の短沈線文を連続的に配し，下段には上向きの鋸歯文を描くものや（166），口縁部上面に径の異なる棒状工具により，一部に刺突文を施して三条に配し，一部に塊状に配するものがある（168）。

高坏は脚部の破片が１点しか得られていないが，縦位のミガキを施し，坏部と脚部境界に一条の突帯を巡らせるものである（193）。

（２）擬朝鮮系無文土器

235 は前期末以降に九州地域に分布するいわゆる擬朝鮮系無文土器である。１点のみ出土した。残存部から復元すると鉢形土器になると思われ，口縁部は指頭痕が著しく残存し，胴部との接合部が明瞭である。外面は横方向のヘラ削りをナデ消し，内面は縦位の指頭痕が著しい。胴部器壁は薄手である。この土器については既に報告があり，擬朝鮮系無文土器として断定はできない[2)]，とされている。入来Ⅱ式土器甕・鉢の粗造土器や，「ボテ口縁」・「山の弥生土器」などと呼称される土器で厚ぼったい口縁部をもつ資料に類似するものがしばしばみられる[3)]。今回，弥生時代中期までの土器を全て確認したが，口縁部形状や器面調整において類似資料は確認できず，当該資料はかなり異質なものとして捉えられた。

弥生時代中期前半（新）段階

この段階の資料は入来Ⅱ式土器の甕・鉢であり，それらを中心に挙げた。Ⅴ・Ⅵ層を中心に，甕・鉢口縁部資料のみで 318 点と最も出土量が多い。入来Ⅱ式壷は通常，への字屈曲口縁の壷が基準資料であるが，入来Ⅱ式土器から山ノ口式土器まで共通・類似した壷を用いるため，包含層中の出土では明確に区分できない。この壷も出土量は多いため，入来Ⅱ式段階が弥生土器の中では最も多いと考えられる（この壷については後述する）。また，この段階に並行すると考えられる瀬戸内系・近畿系の第Ⅲ様式とみられる壷が３点出土している。

入来Ⅱ式甕・鉢を 19 点，瀬戸内系・近畿系を３点図化した。

（１）入来Ⅱ式土器

プロポーションの復元可能な資料は少ないが，砲弾型や釣鐘型のプロポーションがほとんどであろう（140・141・146）。やや口縁部が内傾するもの（137・139・142・146・147・149），直状のもの（138・143・144・145・148・152・154），外傾するもの（135・136・140・141・150・151・153）などがある。

口縁部は逆Ｌ字状に厚みをもって大きく発達し，外面へ向いた口唇部は工具ナデによる凹部を形成するものが最大の特徴といえるが（135・136・138 ～ 145・147 ～ 149・151 ～ 154），若干丸みを帯びるものもある（137・146・150）。量は多くないが，口唇部の刻みを有する資料もある（135・136）。突帯は二～三条の三角突帯が主であるが（135・136・144 ～ 154），突帯をナデによって整形しない絡縄突帯も見受けられる（141 ～ 143）。入来Ⅰ式段階から出現する胴部沈線文も，この段階では二～三条の沈線文を巡らすものとして一定量ある（137 ～ 140）。153・154 などは口縁部上面が水平あるいはやや上部に上がり気味であり，次段階の山ノ口式土器に近い要素もあらわれている。

（２）瀬戸内系・近畿系第Ⅲ様式[4)]

232 は瀬戸内第Ⅲ様式の壷の可能性のある肩部で，斜位の連点文を肩部に一条巡らすものであるが，胎土からは在地のものである可能性が高い。

233・234 は畿内第Ⅲ様式の壷の可能性のある同一個体の土器で，頸に広い刻みのある突帯を巡らし，肩部に櫛描文を直線文と波状文を交互に上から順に施文するものである。文様下部は細い管状工具によって刺突文を３列巡らせている（右斜め上方から刺突）。胎土からは搬入品である可能性が高い。

弥生時代中期後半

中期後半の土器としては，山ノ口式土器甕・鉢，大甕，西北部・北部九州の須玖式土器甕，壷・無頸壷（彩文土器），中部九州系黒髪式土器甕・鉢，瀬戸内系土器の模倣甕，壷と思われるものが出土している。

（１）山ノ口式土器

量的には多くはなく，Ⅴ・Ⅵ層を主体とし，甕・鉢口縁部・胴部資料 114 点，壷口縁部・胴部資料が 71 点出土している。甕・鉢・大甕を５点，壷多条突帯胴部を３点，二叉状口縁壷２点，広口壷４点を図化した。

155・156 は典型的な山ノ口式土器甕の口縁部で，くの字状に外反，口唇部を押さえて平坦にし，三条の三角突帯を貼り付ける。157・158 はくの字屈曲する口縁部であるが，口唇部は丸みを帯びる。158 は三条の三角突帯を貼り付ける。159 は大甕であり，くの字屈曲であるが，口唇部や羽釜状の突帯端部は丸みを帯びている。

前述のように，への字口縁壷は入来Ⅱ式か山ノ口式かの判断は困難であるが，多条突帯のうち多数の突帯を有する壷は山ノ口式段階に属するため，ここで扱う。183 は壷の肩部に整調な十条の三角突帯が貼り付けてあるのが確認できる。184 は整調で低平なＭ字状突帯を四条，同じく整調で低平な三角状突帯が一条確認できる。185 は 184 に類似してＭ字状突帯二条，三角状突帯二条が確認できる。これらはさらに多くの突帯を有していた可能性が高い。

186・187 は二叉状口縁壷であるが，186 は口唇部が舌状であり，突帯もやや丸みを帯びる。口径が 13.4cm で小型の壷に属する。187 は口唇部突帯ともに工具で平坦に整形される。小破片であるが，残存部の平坦さから判断して，大型の資料になるかと思われる。

188 ～ 191 は広口壷の口縁部である。188 は口唇部が丸みを帯びており，189 ～ 191 は口唇部を工具で押さえている。189 は外面に幅広のハケメが著しくナデ消しきらない。191 は口唇部に浅い刻みを施すものである。

（２）須玖式土器

須玖式に類するものは小破片が多いが，Ⅴ・Ⅵ層を主体として，甕・鉢が５点，壷が５点出土している。ここでは甕，袋状口縁壷，無頸壷（彩文土器）の３点を図化した。

220 は須玖式甕の鋤形口縁部で，外面への突出は短く口縁部内面に張り出しを持つ。胎土からみて搬入品と思われる。

221 は袋状口縁壷であり，袋部と頸との境に一条の沈線文を巡らせる。水磨によって残りは悪いが，外面から口縁部内面まで丹塗りであった痕跡が残っている。胎土から搬入品と思われる。

222 は肩部に一条の三角突帯をもつ無頸壷であり，胎土の様子から搬入品と思われる。口縁部内側から外面に向かって縦位二条一組の彩文を描く。破片の右端にもその痕跡が残っていることから，少なくとも二組は彩文が描かれていたとみられる。胎土から搬入品と考えられる。

（３）黒髪式土器

黒髪式土器は中部九州系土器であるが，弥生時代中期に薩摩半島西岸部まで分布域を拡大する。これに呼応するように，本調査区においても外来系土器としては甕・鉢 33 点と出土量が多い（Ⅴ・Ⅵ層主体）。このうち７点を図化した。

223 ～ 229 は黒髪式土器の甕・鉢の口縁部である。口縁部上面を抑えて凹面を形成するものが主であり，口唇部は丸みを帯びる。器面調整は内外面ともに横位の細かい線のつくナデが施される。口縁部内面側への

張り出しは強いものが多く（223・225 ～ 228）と弱いものは少ない（224・229）。胎土や調整の具合からみて，全て搬入品ではないかと思われる。

（4）瀬戸内系・近畿系第Ⅳ様式・模倣土器[5)]

瀬戸内系や近畿系第Ⅳ様式の土器は，模倣甕が 1 点，壷形土器はⅤ・Ⅵ層を主体に 27 点出土している。壷の数が多くなっているのは，櫛描文という特徴が在地の土器と比べて分類が容易なため計上されたものである。このうち瀬戸内系と思われる 2 点を図化した。

230 はあまり類例のない甕であり，薄手無文直状の胴部からＬ字に緩やかに屈曲する口縁部にいたる。口唇部を拡張して一条の凹線を巡らすが，これは数条の浅い凹線文を巡らす瀬戸内系甕の模倣土器と思われるものである。231 は壷の口縁部であり，口縁上面に凹線を四条巡らす。搬入品の可能性がある。

弥生時代中期前半～後半壷・鉢口縁部

ここでは，入来Ⅱ式土器～山ノ口式土器段階に相当する壷・鉢を挙げる。両型式の壷は明確に区別することが困難であるため，ここでまとめた。への字口縁壷，広口壷口縁，突帯をもつ胴部などが相当するが，壷口縁部・胴部はⅤ・Ⅵ層を主体に 144 点出土している。ここでは 11 点のへの字口縁壷を図化した。

172 ～ 182 はへの字口縁壷である。ほぼ口縁部が水平方向のもの（172 ～ 175），への字に垂下するもの（176 ～ 182）の 2 種あり，前者は型式学的に古い可能性がある。

また，口唇端部が丸みを帯びるもの（176），平坦なもの（172・174・179），工具で口唇端部を押さえて凹線を巡らすもの（173・175・177 ～ 182）がある。量的には少ないが口唇部に刻みを施すものもある（180）。また，口縁部上面は三条の突帯を貼付するもの（178・179），三条～六条の沈線文を施すもの（177・180）などがある。

192 は口の大きく開く鉢の口縁部で，口唇部を平坦に押さえることで，外面側に粘土が突出する。胴部には一条の沈線文が巡る。

弥生時代早期～中期甕・鉢底部・脚部

甕や鉢の底部と思われるものは，Ⅴ・Ⅵ層を中心に 63 点出土しているが，ここでは 17 点を図化した。底部の厚みがなく，径の小さな平底・上げ底をはじめ，中実脚台脚台，径の大きな平底などがみられる。中実脚台は甕であることが知られるが，その他については明確な判断は困難であることから，ここでは底部・脚部としてまとめた。

194 は若干上げ底気味の平底であり，外面にハケメ調整が著しく残る。195 も若干上げ底気味の平底であるが，立ち上がり部に比して底部が薄く筒状に成形されている。外面には縦方向のミガキが残る。196 は平底土器で，外面に縦方向のミガキが施される。197・198 は底部が厚手の平底土器で，縦位のハケメ調整が施される。

199 ～ 209 はいわゆる中実脚台である。外面には縦位方向のハケメが施される資料が大半であるが，ミガキ調整されることもある（207）。底面にケズリを施すもの（201・202），底面中央部をくぼませて上げ底状にするものもある（203・206・207）。207 は底面の凹部までミガキ調整されている。

208 は小型で比較的細い脚台であることから，鉢形など小型器種の脚部である可能性が高い。

210 は高台状に上げ底にする底部である。しかしながら整形が徹底しておらず，外底面は偏った凹部を形成している。指頭圧痕が著しく重みがある。粗造の土器であると考えられる。

以上のように，中実脚台にもミガキ調整されるものが多い印象があるが，122 で図示した入来Ⅰ式土器甕のように，外面上半部はハケメ調整，下半部をミガキ調整する資料があることから，ミガキを多用した底部や脚台は入来Ⅰ式段階には存在していた可能性が高い。

弥生時代中期壷底部

ここでは弥生時代中期頃になるかと目される資料を提示する。弥生時代中期頃になると思われる平底土器

は，Ⅴ・Ⅵ層を中心に 16 点出土しており，そのうち９点を図化した。

プロポーションとしては，底部の立ち上がりから胴部に移行する際に大きくは開かないもの（211・216・217），大きく開くもの（212 ～ 215・218・219）がある。ハケメ調整（211・215・216），ミガキ調整（213・219）などが確認できる。壷の底部内面は充分に焼成されていないためか，器面が剥落している資料が多い（214・217 ～ 219）。

不明土器

ここでは，器形や文様要素，焼成などから弥生土器の範疇であると考えられるものの，系統や時期が不明なものを挙げた。Ⅴ・Ⅵ層を中心に 11 点得られている。５点を図化した。

236 は小形壷である。算盤玉状の器形の胴部屈曲部に，中央部を工具で押さえたみかけ二条の丸みを帯びた突帯を巡らし，胴上半部に有軸羽状文を縦位方向に施すものである。有軸羽状文は，斜位の羽状文を描いた後，三条の軸線を縦位に描いている。

237・238 は同一個体であるが，球胴形の頸部付近に数条の沈線文を巡らし，その下方に間隔を空けて，五～六条を単位とする直線・弧状の沈線文を垂下させる壷である。

239 は球胴形の胴部全面に櫛描文を右下がりの羽毛状に描くものである。櫛描文との関連で考えられるならば，弥生時代中期前半新段階～中期後半の資料になるのかもしれない。

240 は小破片のために判然としないが，やや内傾する器形に，上面を強く押さえて凹面を形成した口縁部を貼付した資料であり，口唇部は工具で浅い凹部を形成する。口縁部を貼付する際の粘土を内面に被せるため，内面に張り出しをもつ鋤形口縁にも見える粗造の土器である。その緒特徴からは弥生時代中期の可能性がある。

241 は壷の口縁部として図化した。外面の口唇部直下に三条の沈線文を巡らし，その下部に半弧の同心円文を施文するものである。あるいは台坏壷の脚部の可能性もあるのかもしれない。

弥生土器地点別出土状況（Fig.22）

以上で紹介した弥生土器のうち，広い時期幅をもつ資料，Ⅰ～Ⅲ層，地区層位不明遺物を除き，時期の判明する①弥生時代早期～前期，②前期末～中期前半（古），③中期前半（新），④中期後半として，調査区の河川跡内における分布状況を確認した（Fig.22）。

Fig.22 最下は①～④の合算であるが，これも縄文土器の分布と同様に，弥生時代後期以降の木杭列（護岸）南側の最も深く洗掘された溝状の場所に集中していることが分かる。①～③の弥生時代早期～中期前半（新）まで概ね同様の分布をしているが，④弥生時代中期後半は，河川深部だけでなく，調査区中央部の E'・F'-47 ～ 49 地点に集中するようになる。縄文土器の分布状況と同様に，成川式期の河川流路（PL.2 下）と概ね合致していることは，その時期の自然流路起源の可能性が高いが，土器が一定量出土していることからは，意図的な土器の廃棄などが関わっている可能性もある。

注

1）中園　聡　1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第９号
　武末純一　2003「九州地方の土器」『考古資料大観１弥生・古墳時代　土器Ⅰ』小学館
2）片岡宏二　1999「渡来人・渡来文化の南下：熊本・鹿児島出土の朝鮮系無文土器を中心として」『人類史研究』第 11 号
3）本田道輝　1996「入来遺跡（日置郡吹上町）採集の弥生土器とその位置づけ」『大河』第６号
　東　憲章　1998「山の弥生土器」宮崎考古学会第 36 回例会発表要旨
4）梅木謙一　2003「中国・四国地方の土器」『考古資料大観１弥生・古墳時代　土器Ⅰ』小学館
　若林邦彦　2003「近畿の土器」『考古資料大観１弥生・古墳時代　土器Ⅰ』小学館
5）４）に同じ

Tab. 3　弥生土器層位別出土数

時期	型式	器種	部位	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	Ⅵ層 河床・杭列	Ⅶ層	地区層位不明	計
早期	刻目突帯文土器	甕・鉢	口縁部	1				10	22				33
			胴部		1				3				4
		甕・鉢	底部						1				1
前期	高橋式(突帯)	甕・鉢	口縁部	6		1		25	96	5	1	2	136
			胴部			1		8	2	2			13
	高橋式(如意形口縁)	甕・鉢	口縁部					4	5				9
	高橋式	甕・鉢	底部						5				5
		壺	口縁部					3	2			1	6
			胴部	3				2	11			1	17
			底部						1				1
前期末～中期初頭	入来Ⅰ式前後	甕・鉢	口縁部	1				21	2				24
前期～中期初頭	入来Ⅰ式前後(刻目突帯)	甕・鉢	胴部						33				33
前期末～中期初頭	入来Ⅰ式前後(沈線)	壺	胴部	2				14		1			17
前期末～中期前半	擬朝鮮系無文土器	鉢	口縁部						1				1
中期前半(古)	入来Ⅰ式	甕・鉢	口縁部	2		1	1	24	83	1		2	114
			胴部						2				2
		高坏	脚部						1				1
	入来Ⅰ式(多条沈線)	甕・鉢	胴部	2									2
中期前半(新)	入来Ⅱ式	甕・鉢	口縁部	13		3	5	80	204	5	1	7	318
中期中葉	第Ⅲ様式	壺	胴部					1	2				3
中期後半	山ノ口式	甕・鉢	口縁部	6				37	61	1	1	7	113
		壺	口縁部	1				4				1	6
			底部					2	1				3
	山ノ口式(突帯)	甕・鉢	胴部								1		1
	山ノ口式(二叉状)	壺	口縁部					1					1
	山ノ口式(広口壺)	壺	口縁部					9				2	11
	山ノ口式(多条突帯)	壺	胴部					48	4			1	53
	黒髪式	甕・鉢	口縁部	1				17	14	1			33
	須玖式	甕・鉢	口縁部						5				5
		壺	口縁部					1	2				3
			胴部	1									1
	須玖式(無頸壺)	壺	口縁部						1				1
	第Ⅳ様式模倣	甕・鉢	口縁部					1					1
	第Ⅳ様式	壺	口縁部					3					3
			胴部	1				9	12			2	24
早期～前期	刻目突帯文～高橋式	甕・鉢	口縁部						10				10
前期～中期前半(古)	高橋式～入来Ⅰ式	甕・鉢	口縁部	1				2	2		3		8
			底部						2				2
		壺	口縁部					2	3				5
前期末～中期前半(新)	高橋式～入来Ⅱ式	甕・鉢	胴部						43				43
前期～中期	高橋式～山ノ口式	壺	口縁部						3			1	4
中期前半	入来Ⅰ式～入来Ⅱ式	甕・鉢	口縁部										1
		壺	口縁部					1					1
	入来Ⅰ式～入来Ⅱ式(多条沈線)	甕・鉢	胴部					7	20		1	1	29
中期前半(古)～後半	入来Ⅰ式～山ノ口式	甕・鉢	底部・脚部					19	23				42
		鉢？	口縁部						1				1
		鉢	脚部									1	1
		壺	脚部						1				1
中期前半(新)～後半	入来Ⅱ式～山ノ口式	甕・鉢	口縁部						43	2			45
			底部・脚部					1	6	1	1	2	11
		壺	口縁部	2				12	8			2	24
			底部					5	3	1			9
	入来Ⅱ式～山ノ口式(多条突帯)	甕・鉢	胴部	4		6		92	169			3	274
	入来Ⅱ式～山ノ口式(広口壺)	壺	口縁部						9			1	10
	入来Ⅱ式～山ノ口式(突帯)	壺	胴部	6	1		1		86	6	3	6	109
中期		壺	底部									3	3
不明	型式不明	甕・鉢	口縁部						2				2
		壺？	口縁部					1					1
		壺	胴部					1	2	2			5
			計	53	2	12	8	467	1012	28	12	46	1640

	49	48	47	46	45	44	43
J’	4	13	12	7	2	3	
I’	3	3	5	26	11	1	5
H’	6	4	4	4	5	10	
G’	6	9	2	1	8	13	
F’	7	5	6				
E’	6	4	3				
D’	3	2	1				
C’	2	1					
B’	1						
地区不明	1						

①早期～前期

合計　209

	49	48	47	46	45	44	43
J’	1	14	11	3	3		
I’	2	2	10	20	14	5	5
H’	3		1	4	1	14	
G’	5	3	2	4	7	7	4
F’	5	6	5				
E’	5	3	2				
D’	3	1	2				
C’	4						
B’	1						
地区不明	1						

②前期末～中期前半（古）

合計　183

	49	48	47	46	45	44	43
J’	2	12	14	6	6	4	1
I’	2	6	18	31	15	2	2
H’	9	6	5	7	8	12	3
G’	8	9	2	3	3	20	4
F’	5	11	11				
E’	11	12	6				
D’	3	3	5				
C’	7	0	0				
B’	2	0	1				
地区不明	2						

③中期前半（新）

合計　299

	49	48	47	46	45	44	43
J’	1	7	5	4	6	1	2
I’	1	5	2	14	5	4	
H’	7	9	4	6	11	7	
G’	7	6	7	5	6	8	2
F’	13	11	16				
E’	10	14	12				
D’	3	3	3				
C’	5		1				
B’	2						
地区不明	1						

④中期後半

合計　236

	49	48	47	46	45	44	43
J’	13	75	75	38	24	13	5
I’	19	22	58	140	76	36	18
H’	33	32	23	32	51	61	5
G’	40	48	26	27	38	84	17
F’	42	46	62				
E’	44	49	35				
D’	25	15	26				
C’	27	3	2				
B’	10	1	2				
地区不明	9						

弥生土器①～④　※時期幅を持つもの，1～3層，地区層位不明を除く.

合計　1,527

Fig.22　弥生土器地点別出土数（Ⅳ～Ⅶ層）

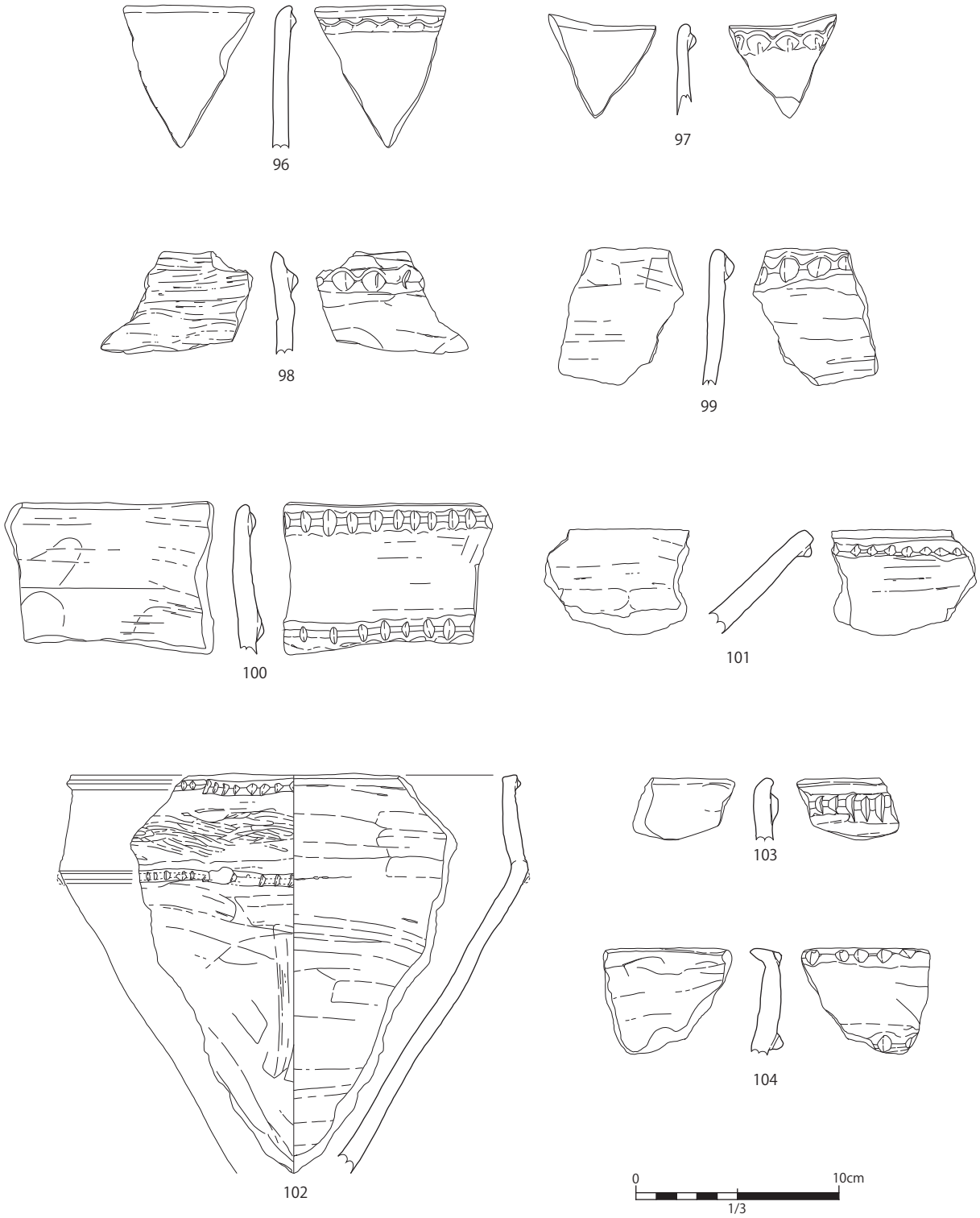
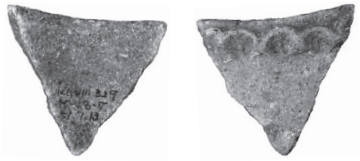
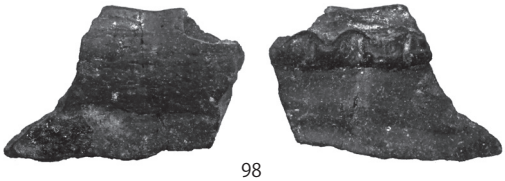


Fig.23　弥生土器（1）

96


97

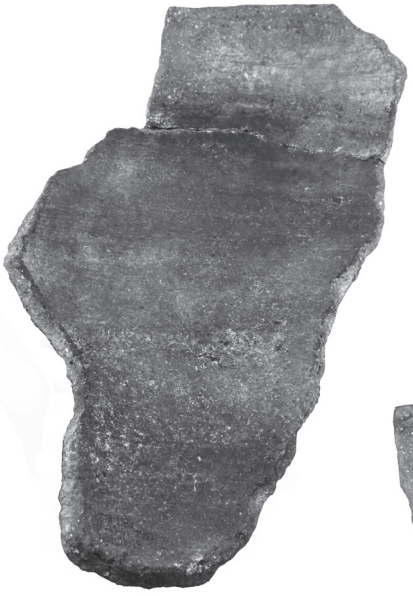

98

99

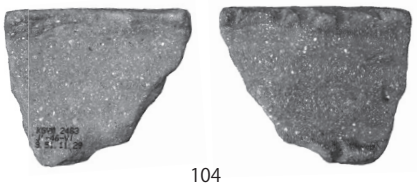
100

101

※縮尺不同


102

103


104

PL.14　弥生土器（１）

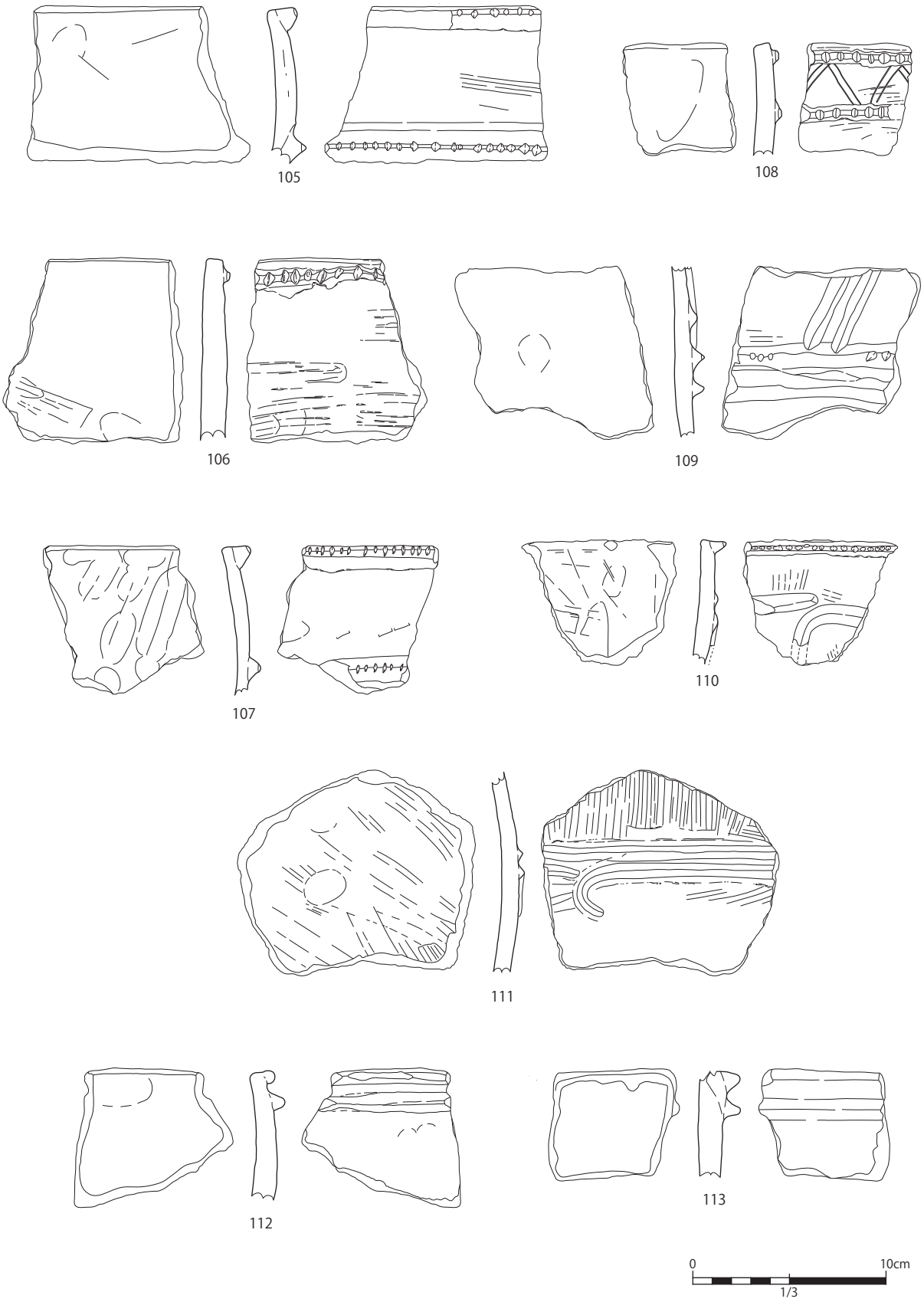
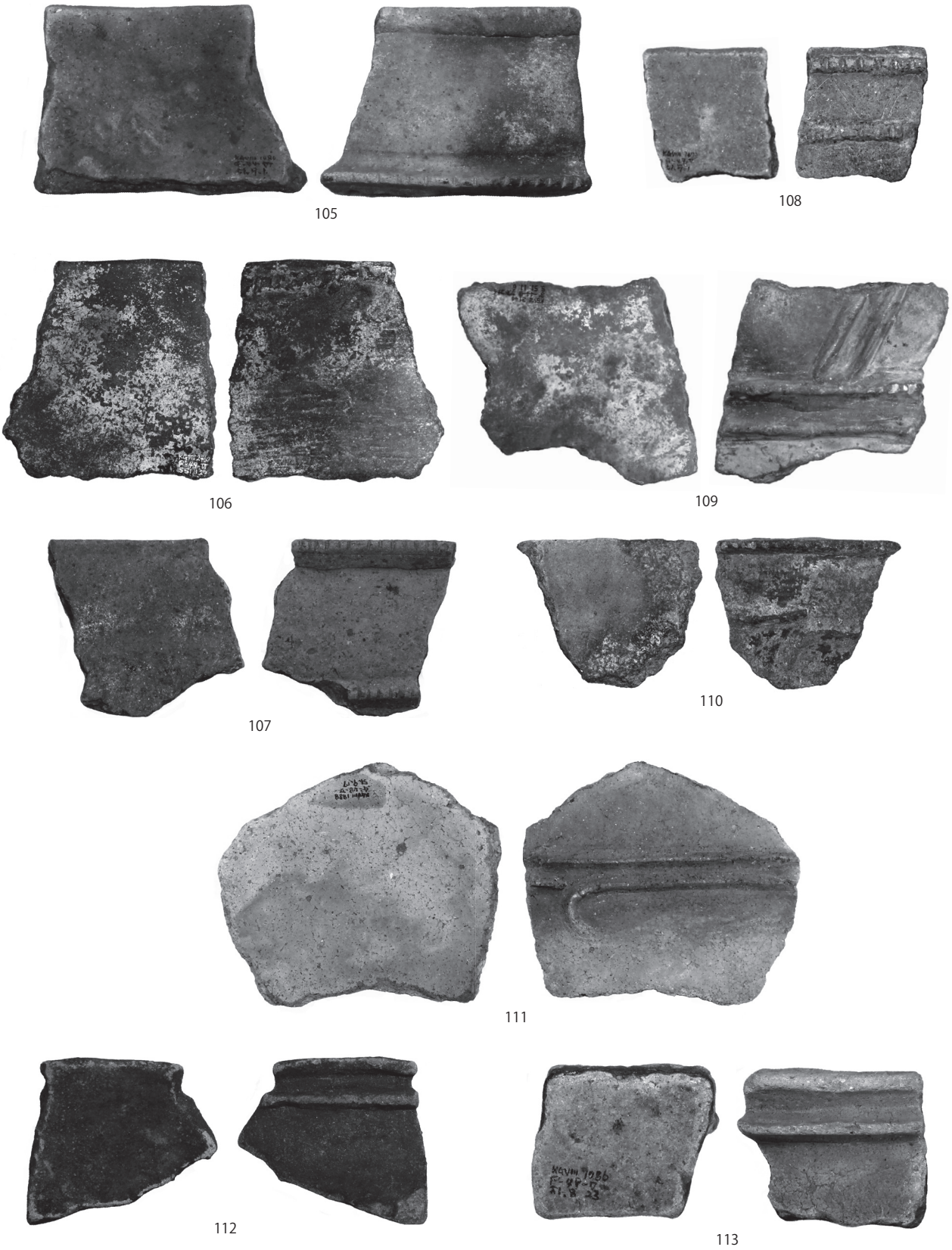
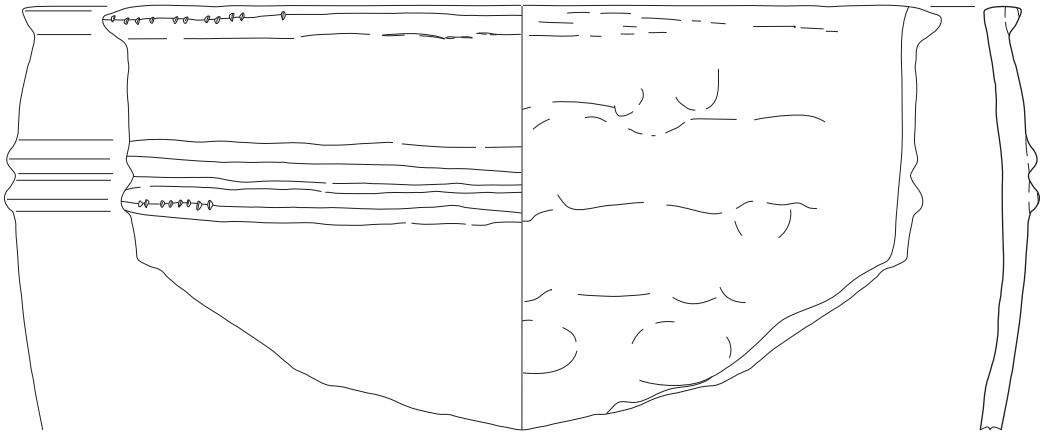


Fig.24　弥生土器（2）



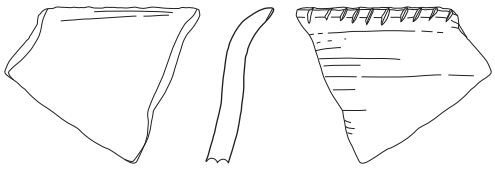
※縮尺不同

PL.15　弥生土器（２）



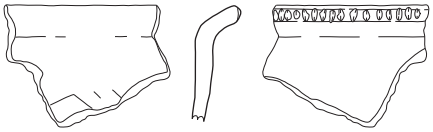
114

0　10cm
1/3

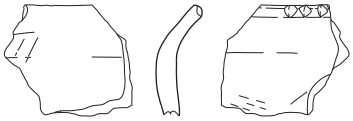


115

118



116



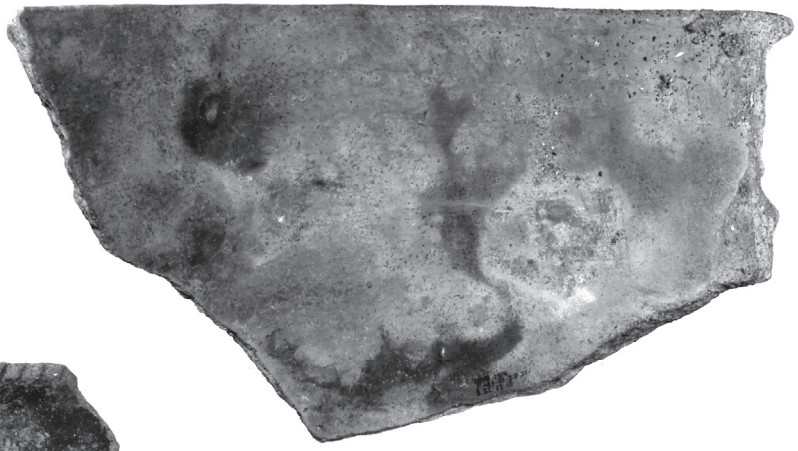
119

117

120

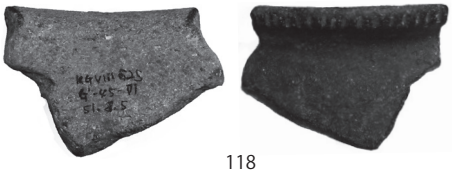
Fig.25　弥生土器（3）

※縮尺不同



114

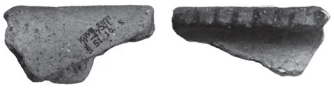
115



118

116

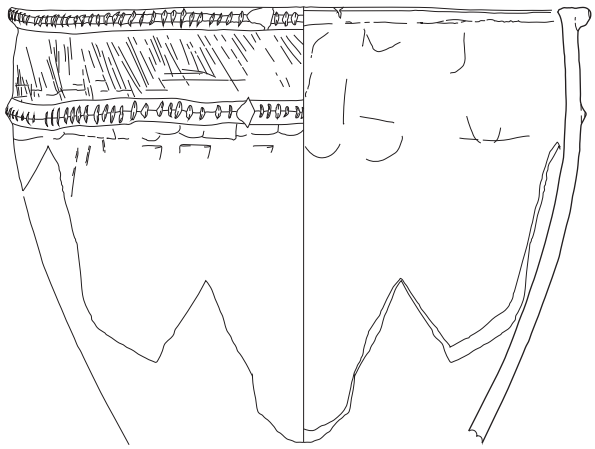
119



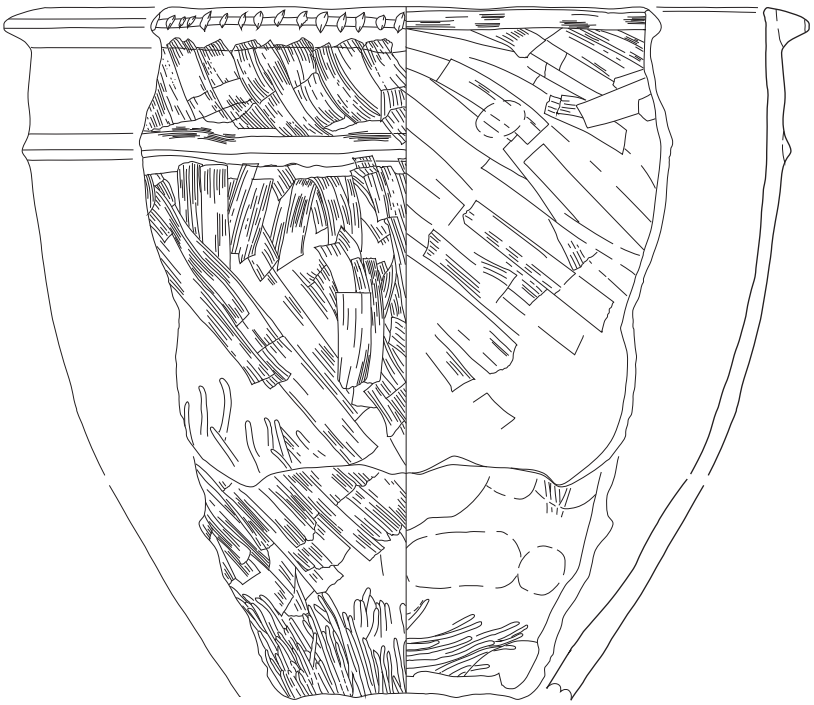
117

120

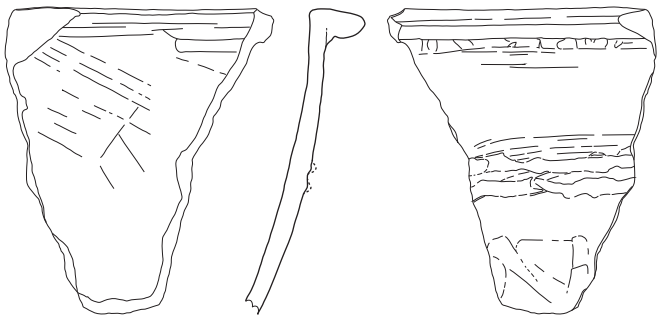
PL.16　弥生土器（３）



121



122



123

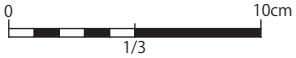


Fig.26　弥生土器（4）

※縮尺不同

121

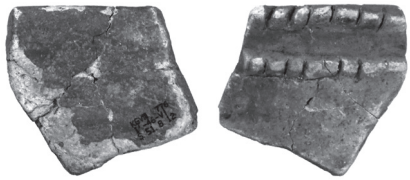
122

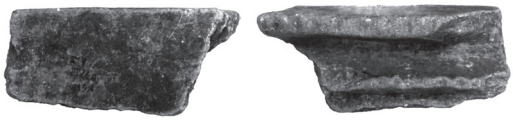
123

PL.17　弥生土器（４）

Fig.27　弥生土器（5）

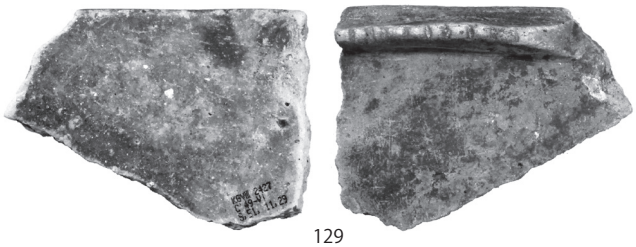
124


126


125

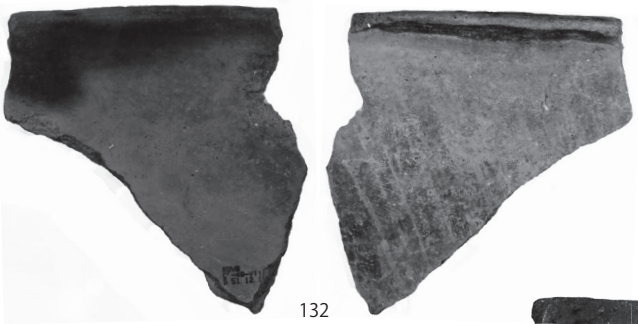
127

128


129

130

131


132

133

134

※縮尺不同

PL.18　弥生土器（５）

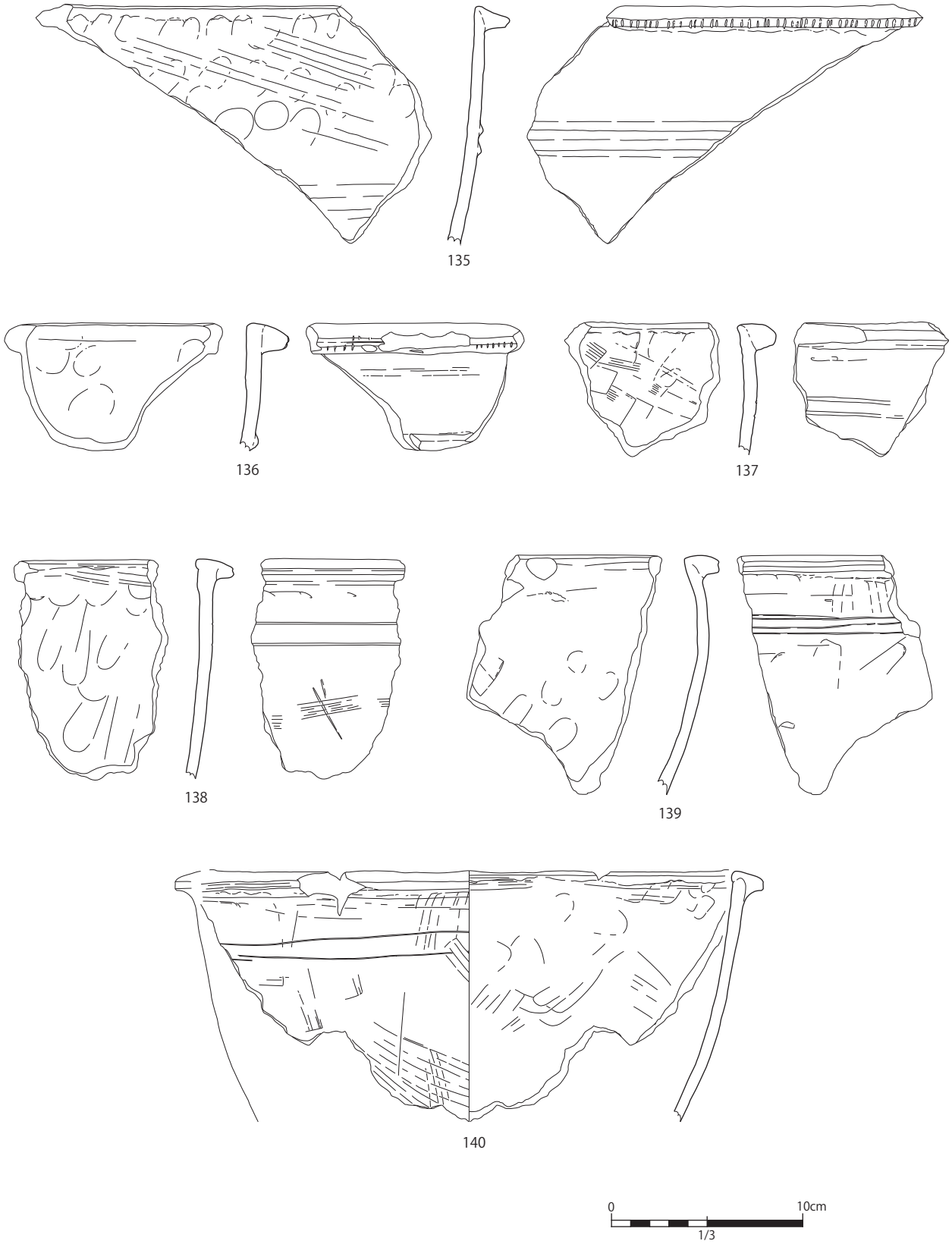
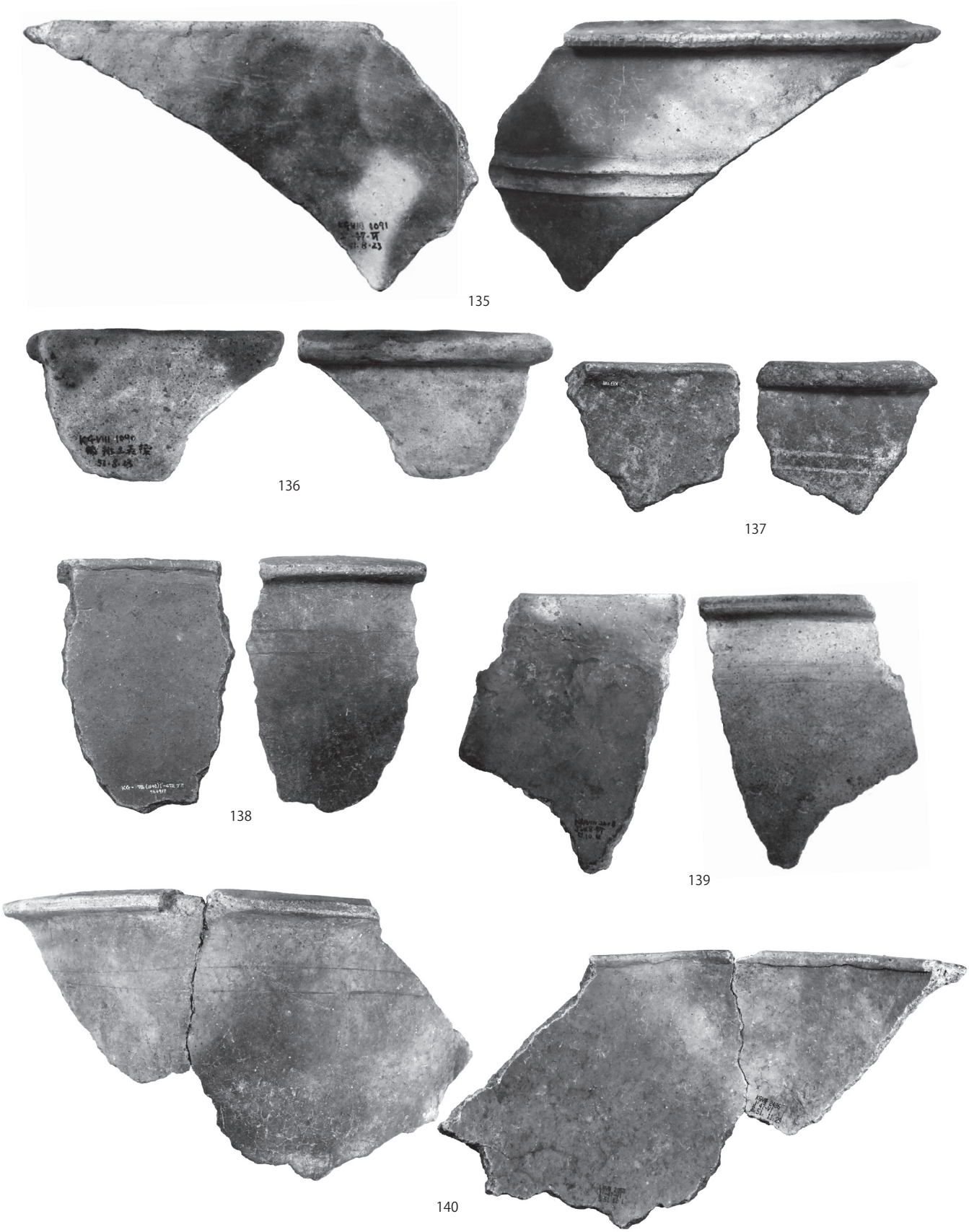


Fig.28　弥生土器（6）



※縮尺不同

PL.19　弥生土器（６）

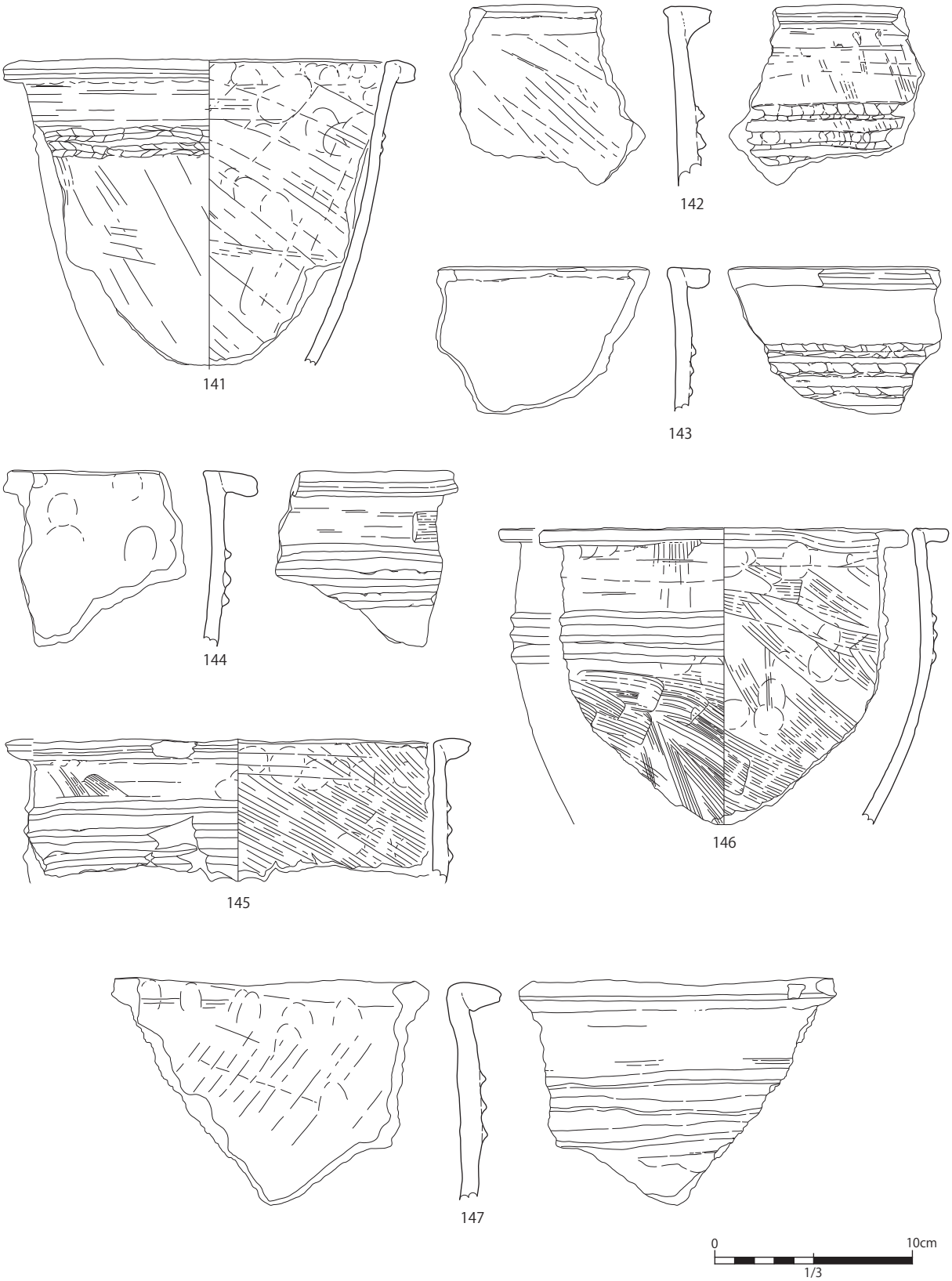


Fig.29　弥生土器（7）

※縮尺不同

PL.20　弥生土器（７）

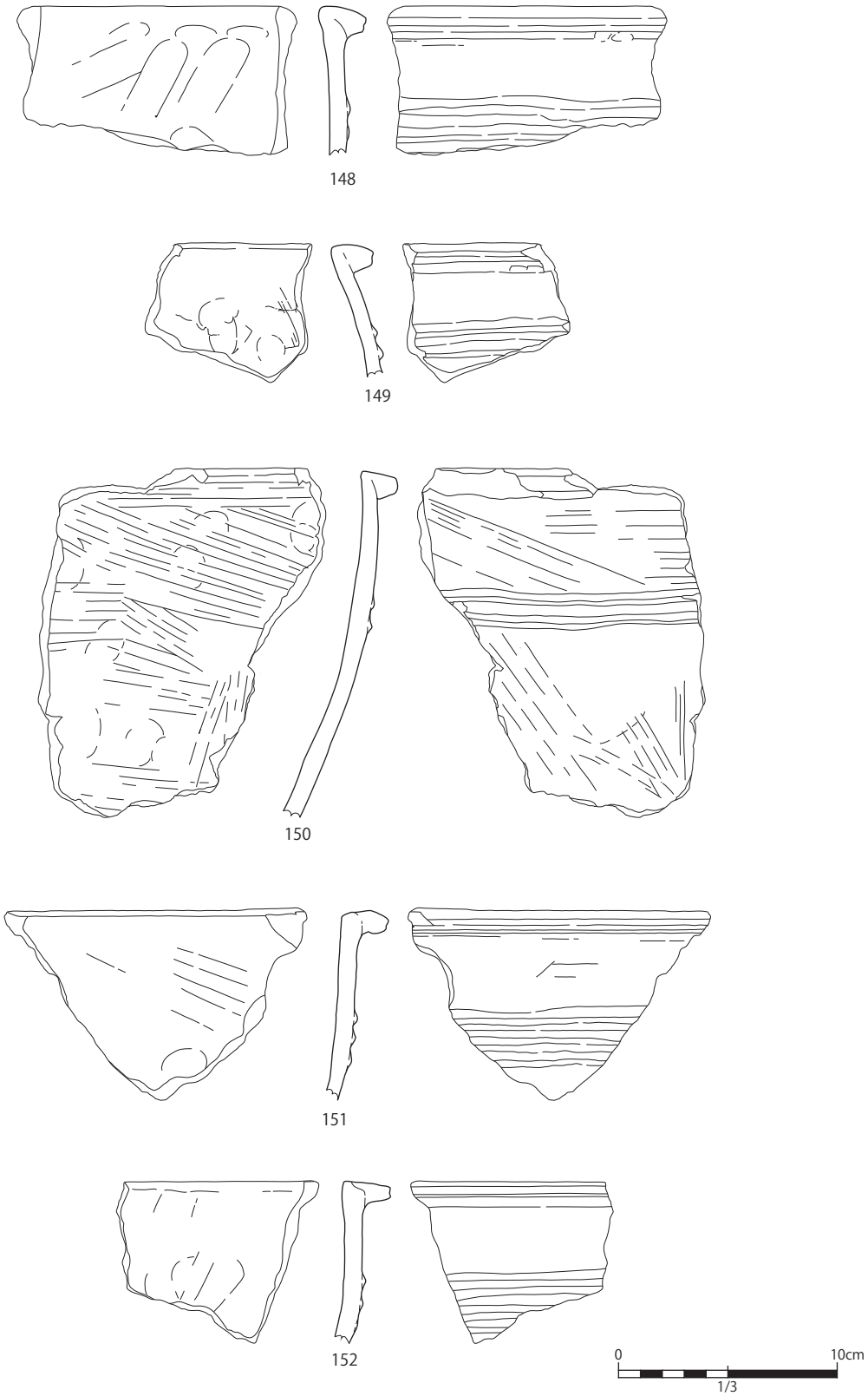
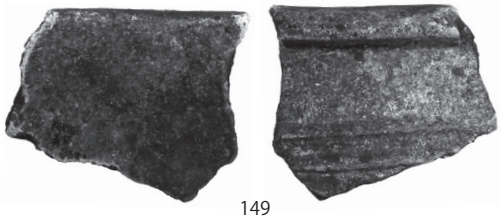


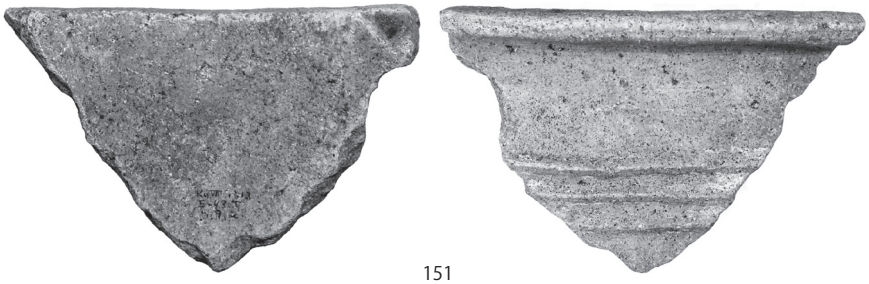
Fig.30　弥生土器（8）

148



149

150



151

※縮尺不同

152

PL.21　弥生土器（８）

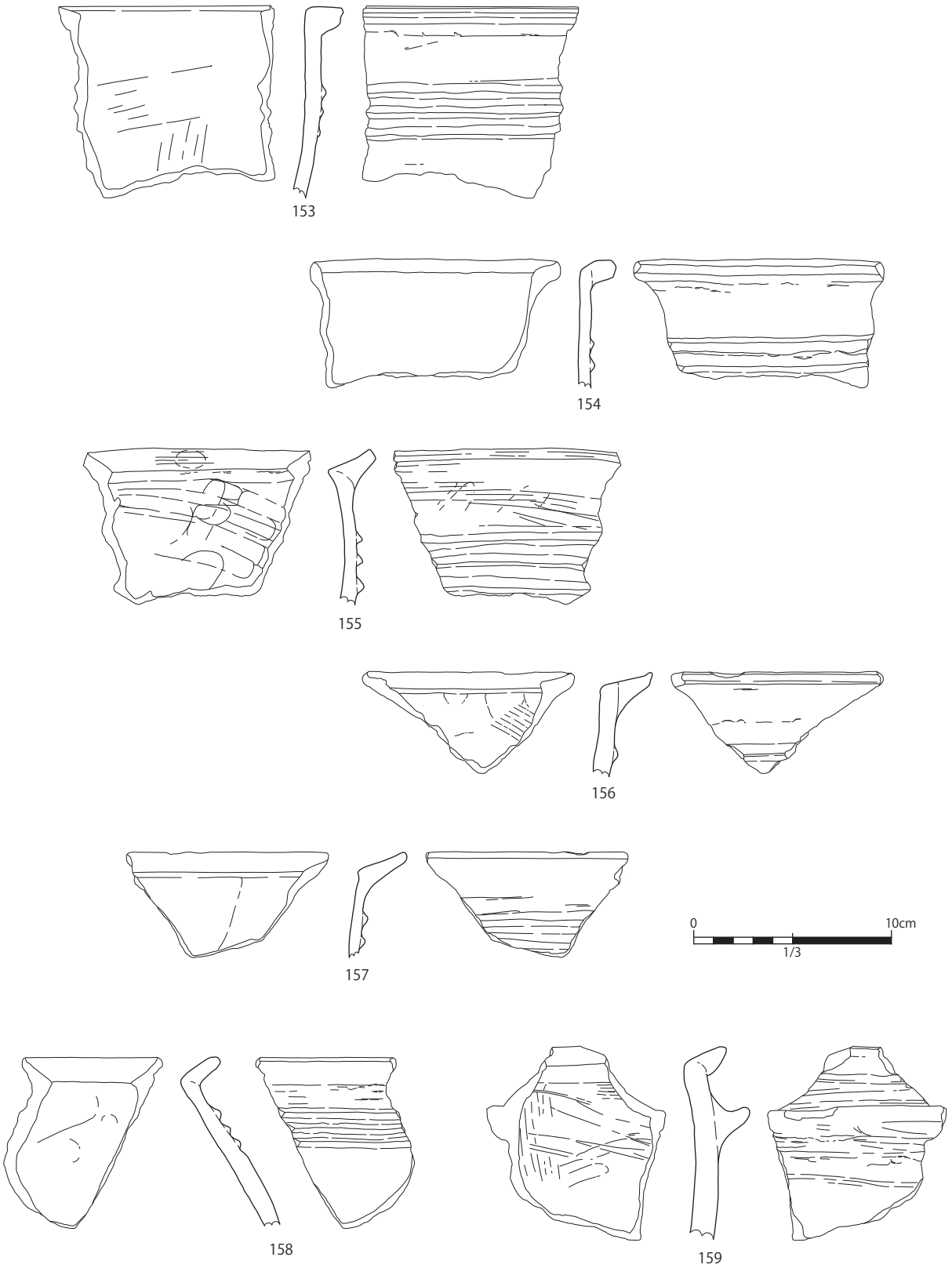
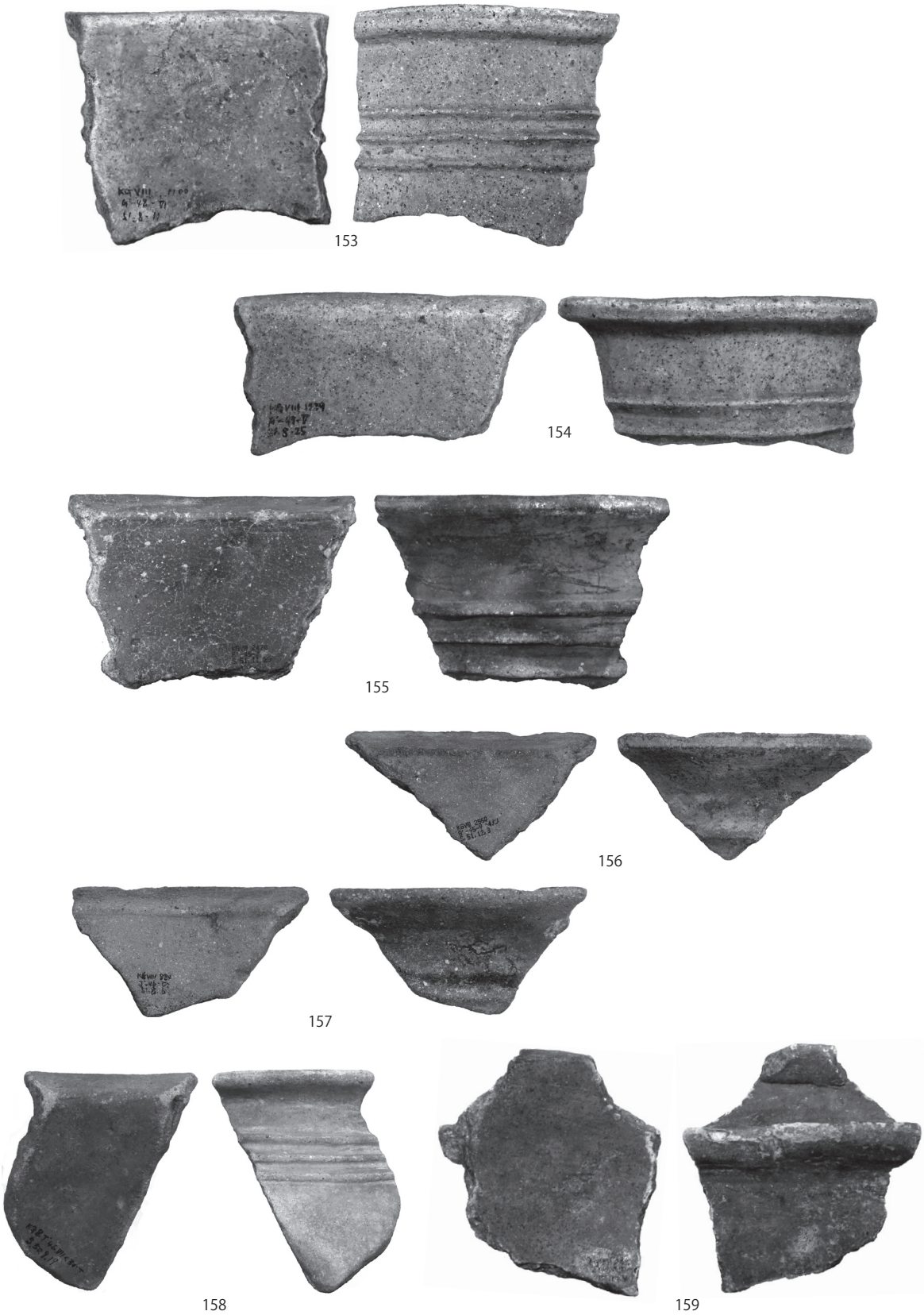


Fig.31　弥生土器（9）



※縮尺不同

PL.22　弥生土器（９）

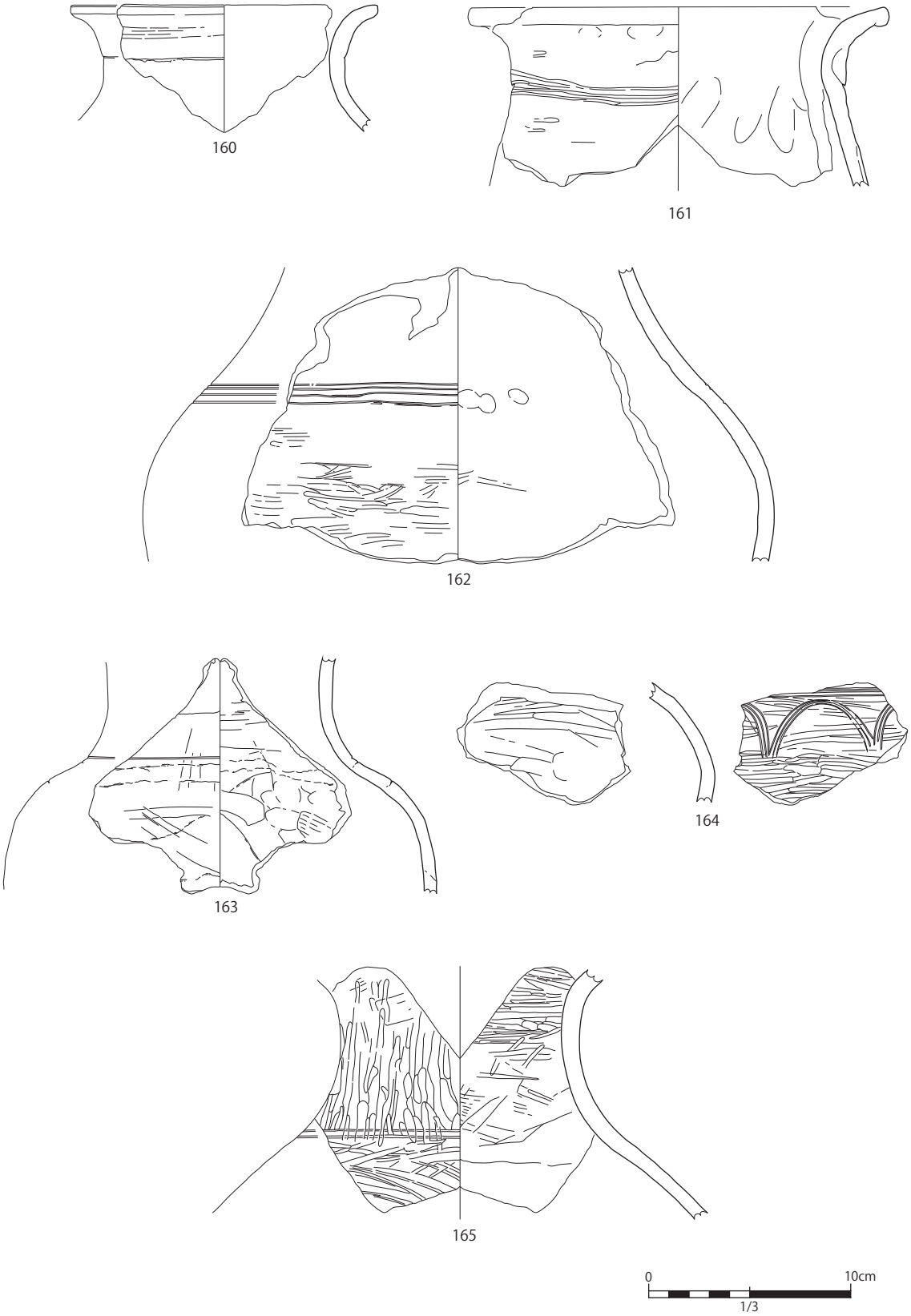
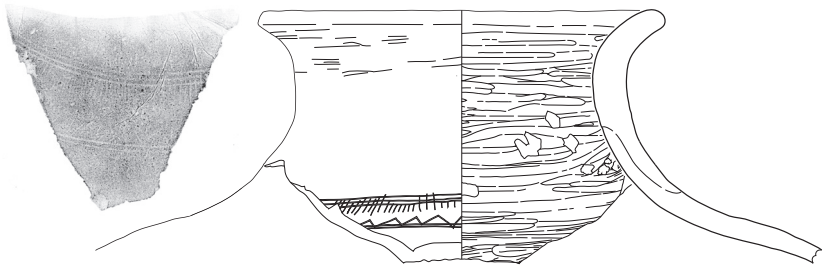
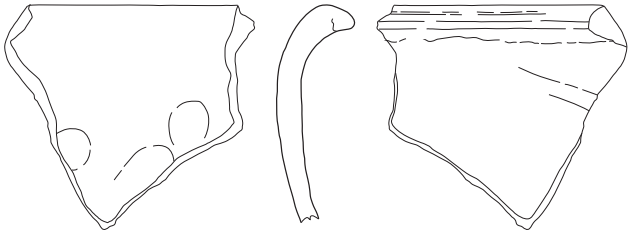


Fig.32　弥生土器（10）

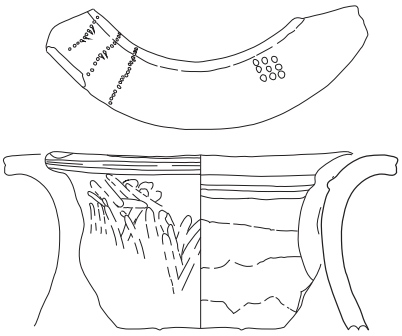
PL.23　弥生土器（10）



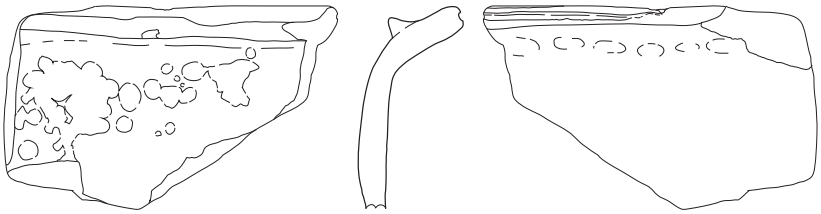
166



167

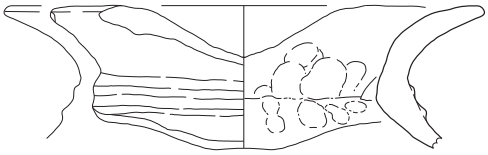


168



169

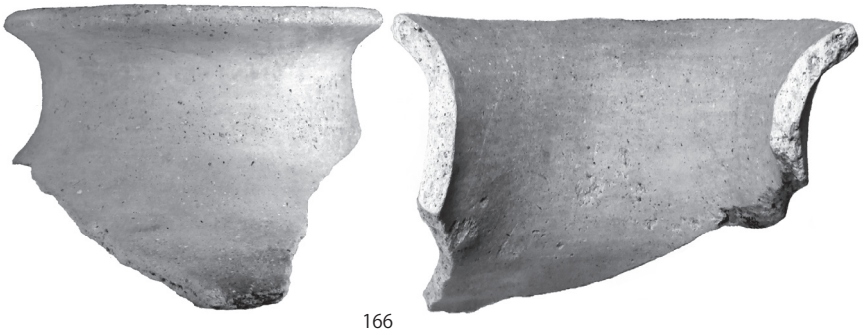
170



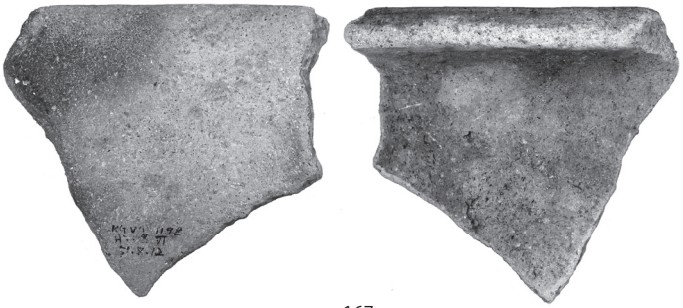
171

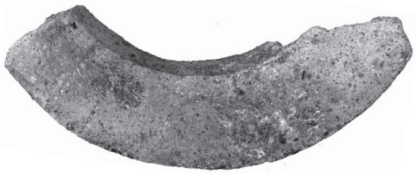
0　10cm
1/3

Fig.33　弥生土器（11）



166



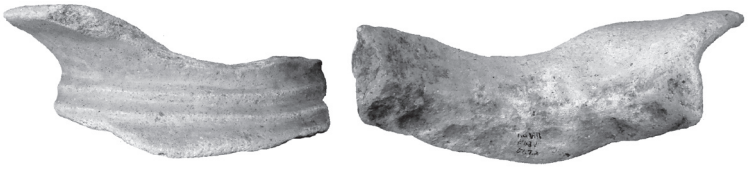


167

168

169

170



※縮尺不同

171

PL.24　弥生土器（11）

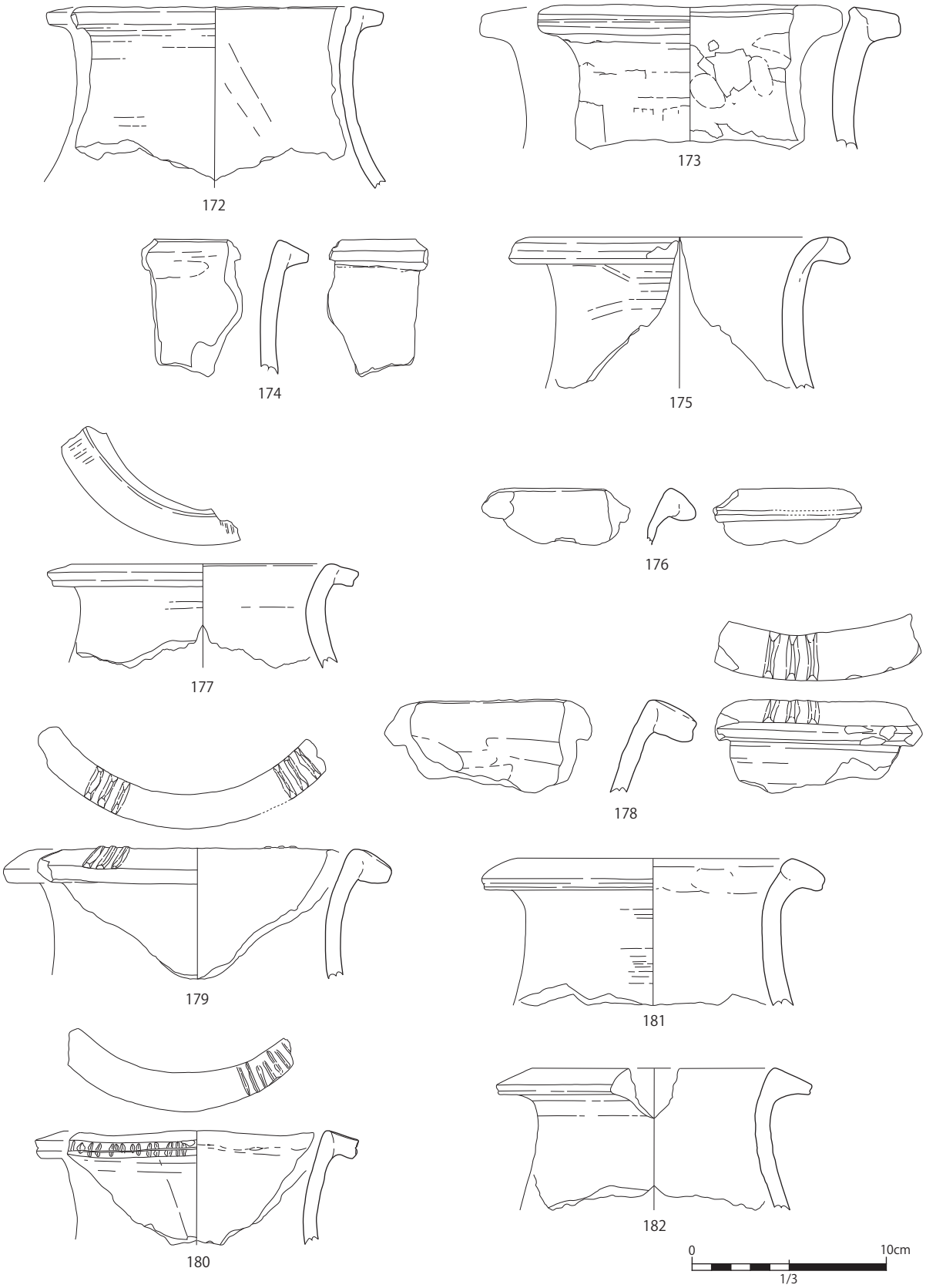
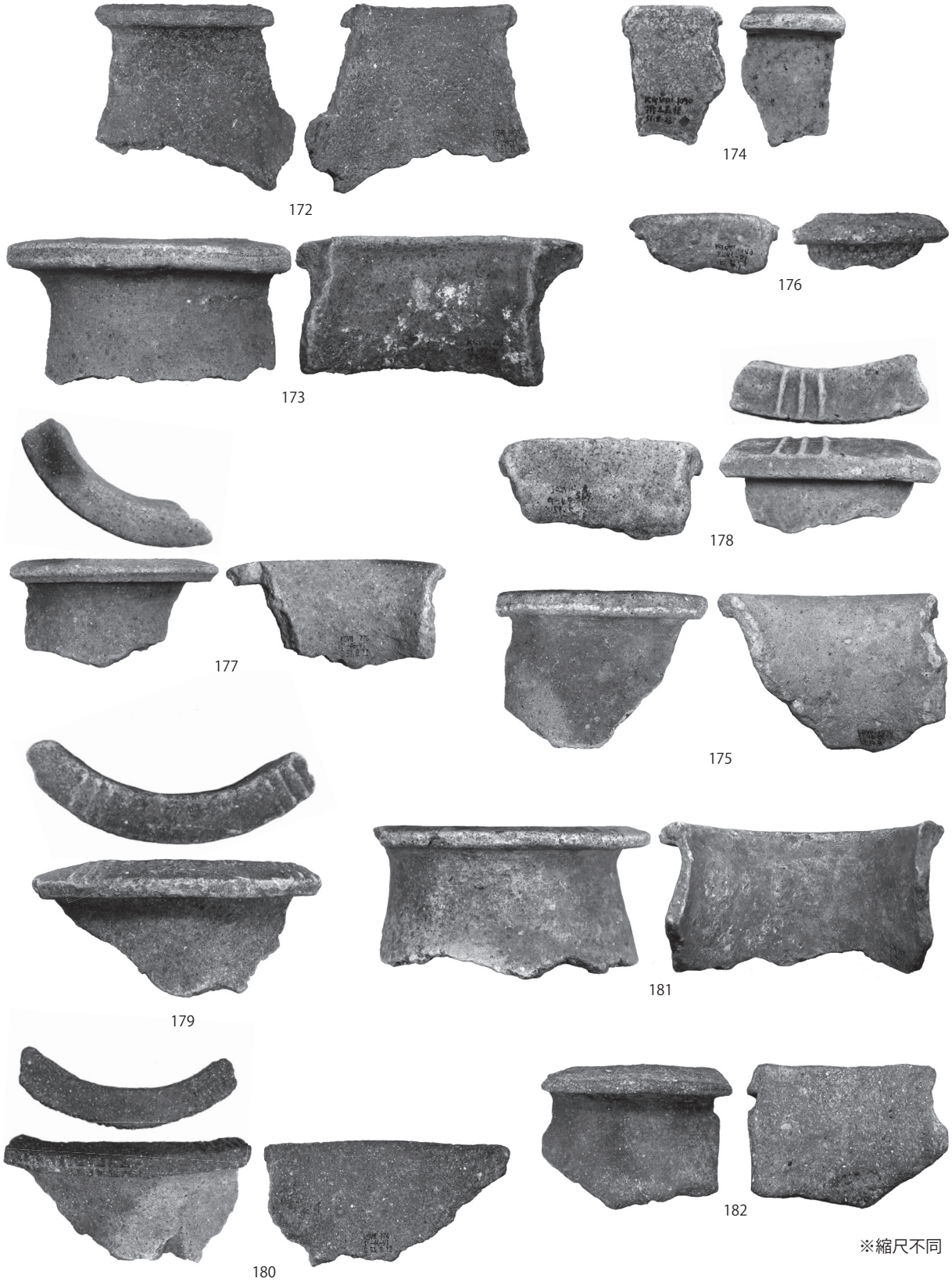


Fig.34　弥生土器（12）



PL.25　弥生土器（12）

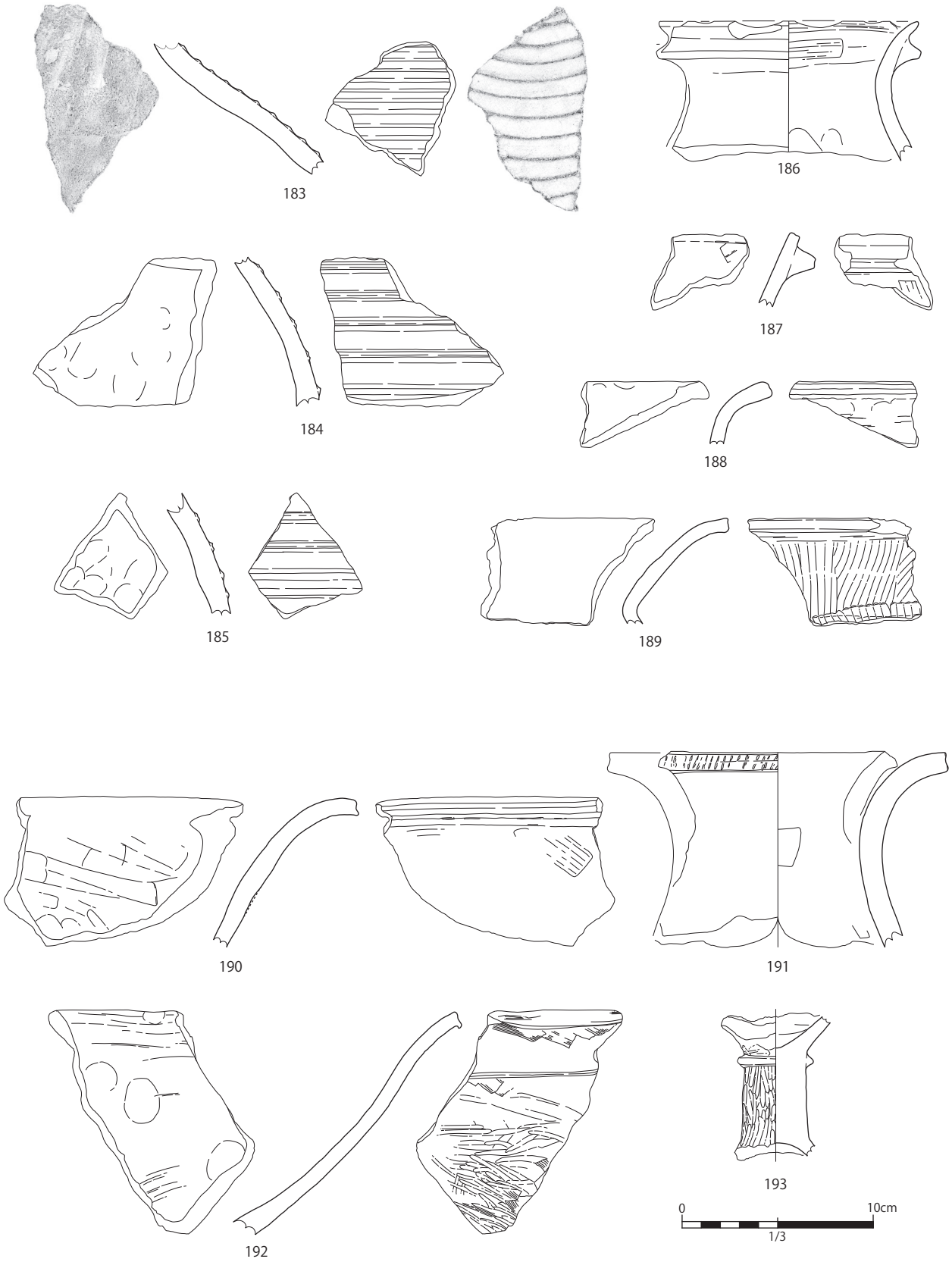
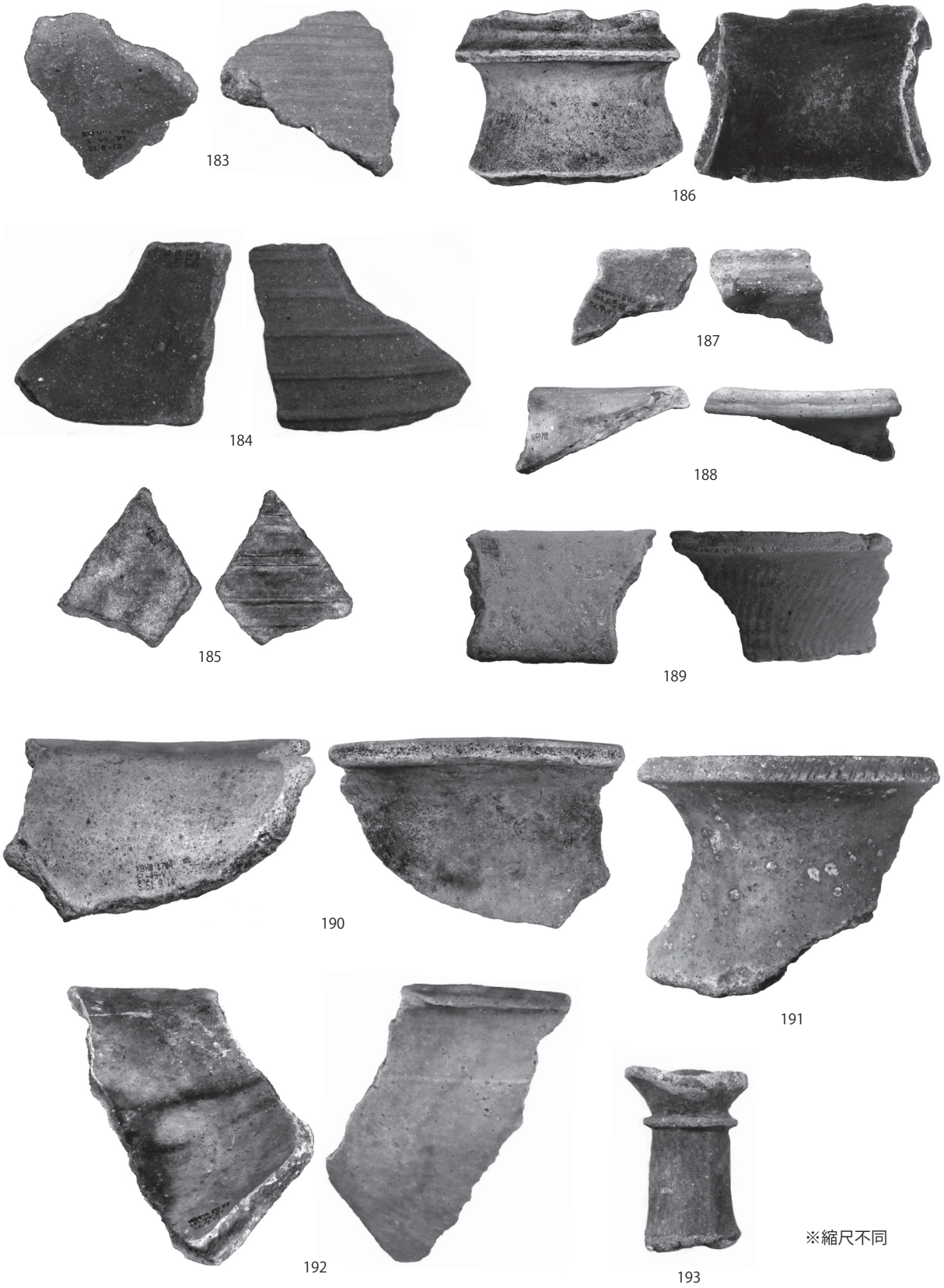


Fig.35　弥生土器（13）



PL.26　弥生土器（13）

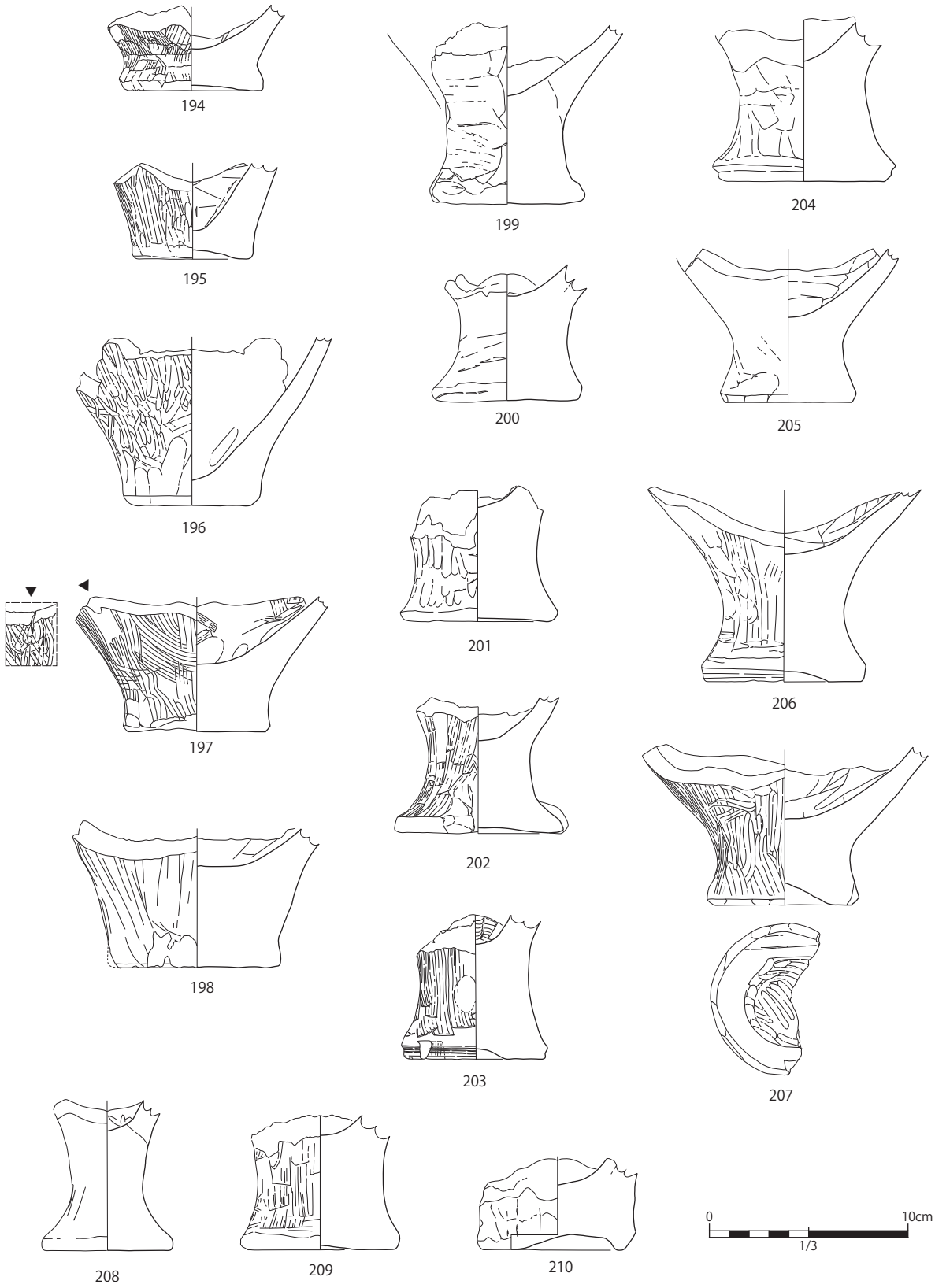
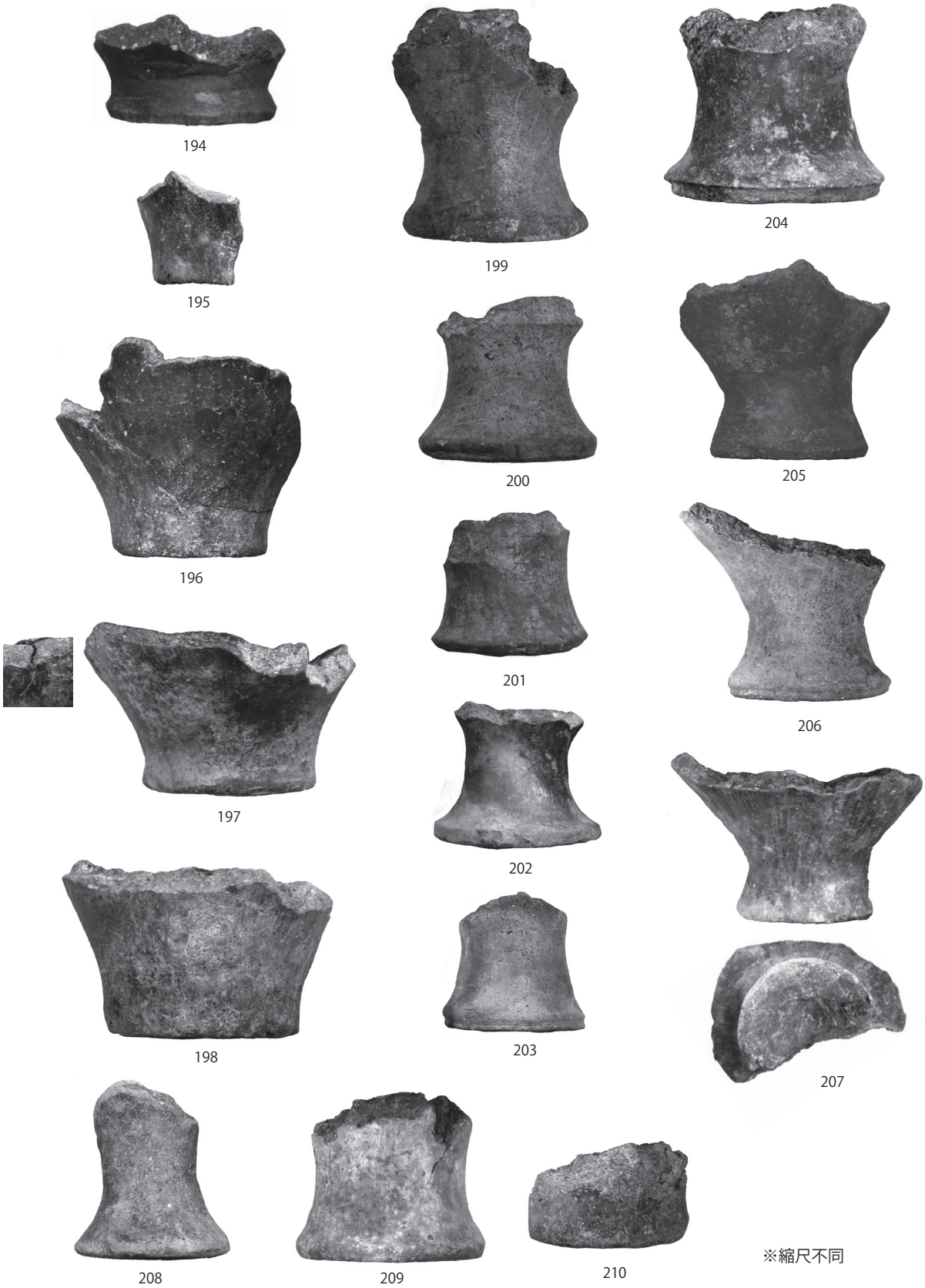


Fig.36　弥生土器（14）


194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
※縮尺不同

PL.27　弥生土器（14）

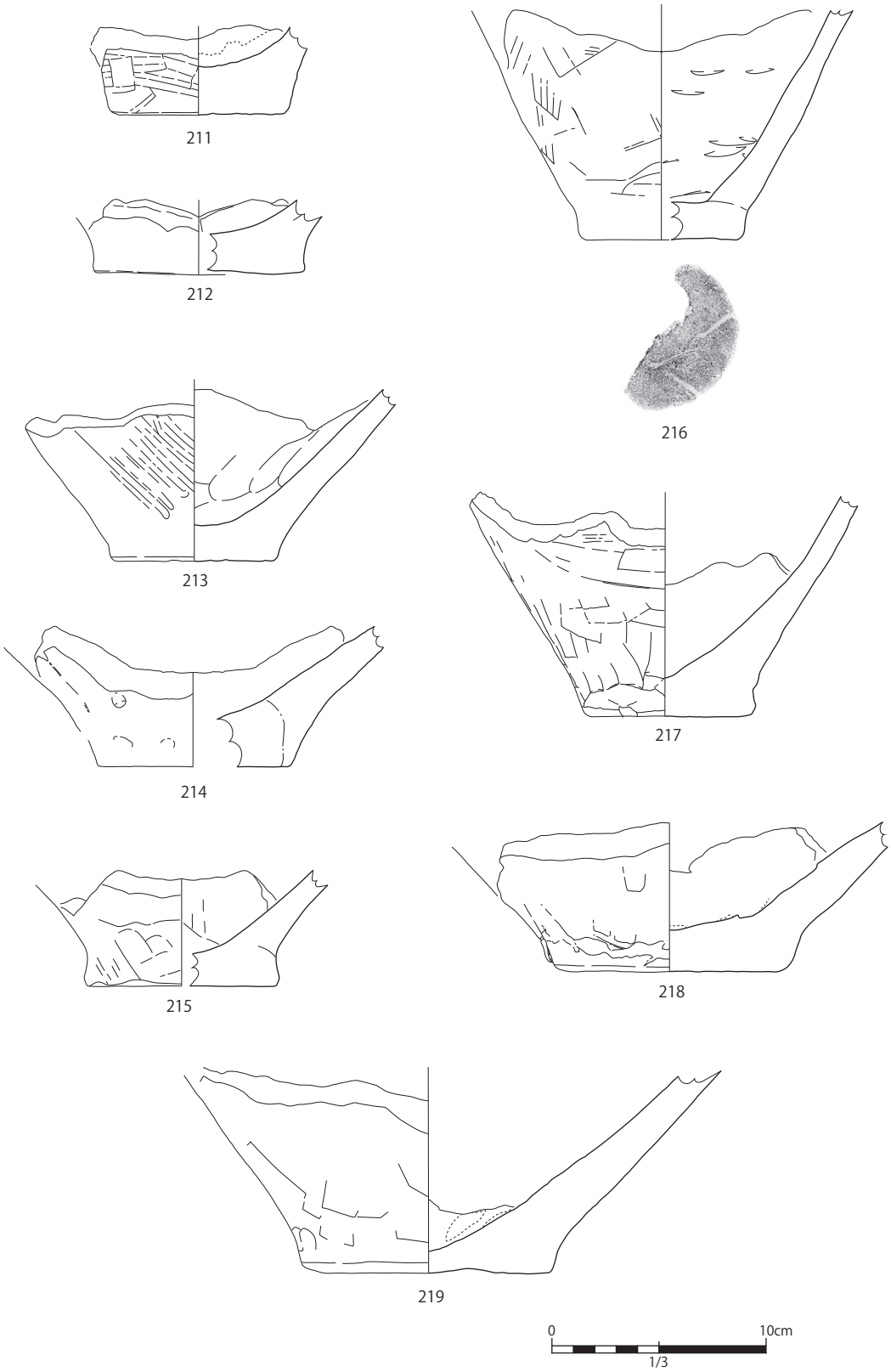


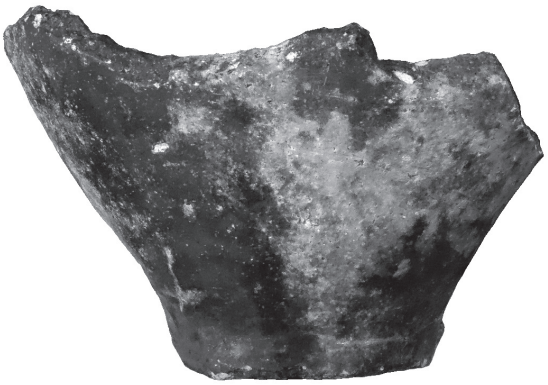
Fig.37　弥生土器（15）

211

212

216

213



217

214

218

215

※縮尺不同

219

PL.28　弥生土器（15）

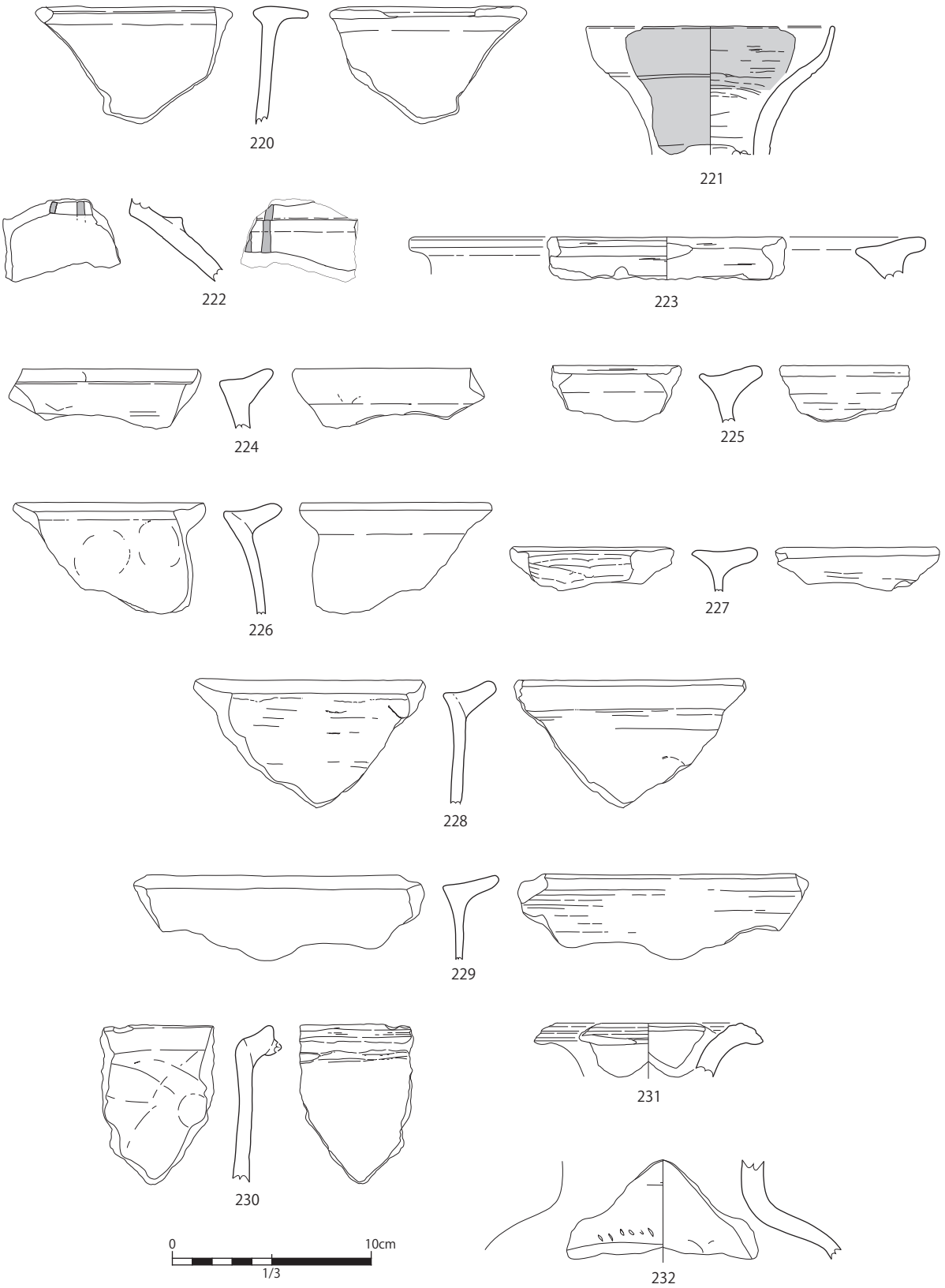
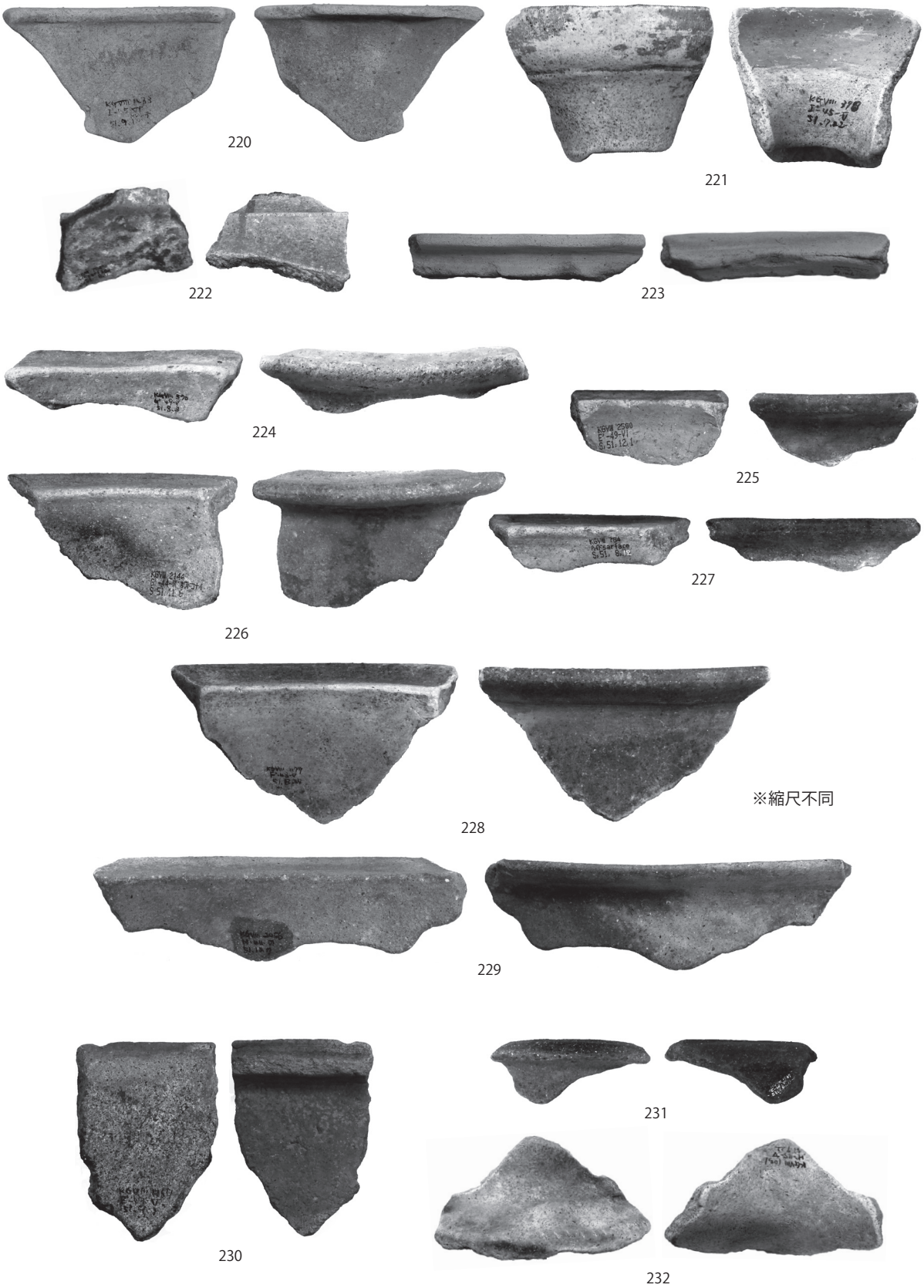


Fig.38　弥生土器（16）



PL.29　弥生土器（16）

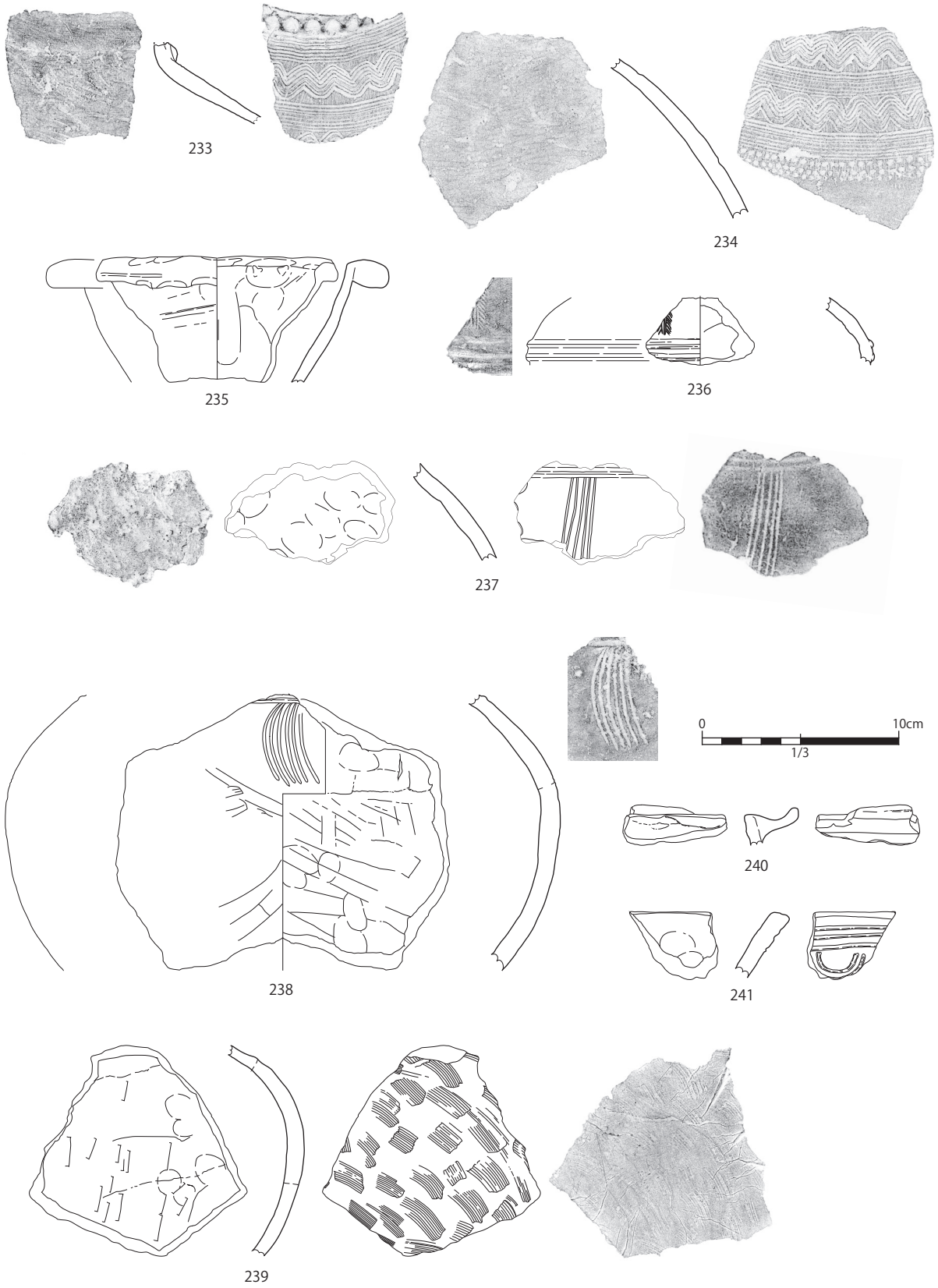
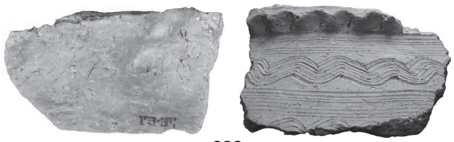


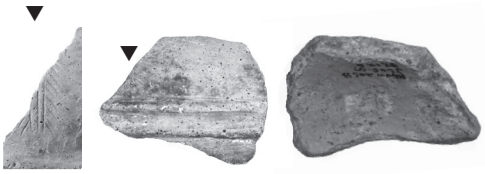
Fig.39　弥生土器（17）



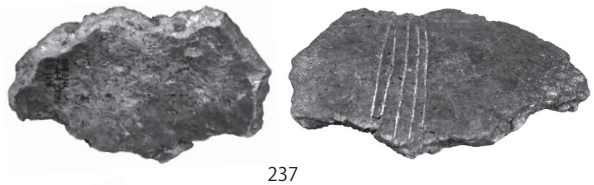
233

234

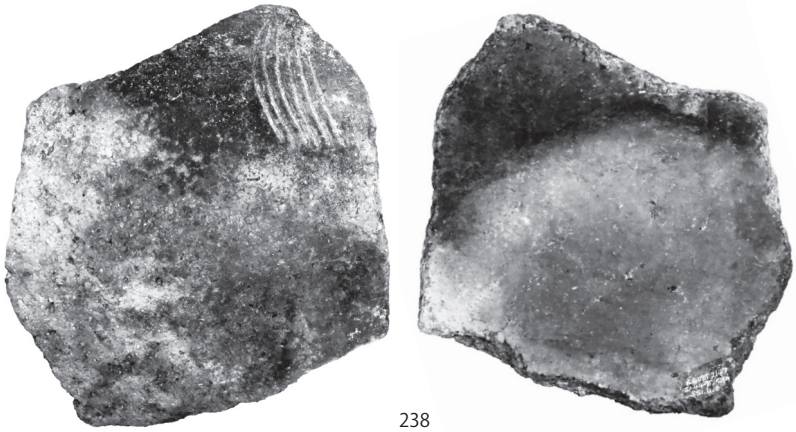
235



236



237



238

240

241

239

※縮尺不同

PL.30　弥生土器（17）

Tab.4　弥生土器観察

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
96	F'-47	5	弥生早期刻目突帯文土器	甕	口	口縁部:波状の突帯文.			ハケメ(—)→ナデ(—)	白色粒(多),赤・黒色粒(少)	表:褐灰7.5YR4/1 裏:黒褐7.5YR3/1 器肉:にぶい褐7.5YR5/4	184	水磨(著).
97	H'-48	5	弥生早期刻目突帯文土器	甕？	口	口縁部:山形突起？1条刻目突帯文(下部から施文した刻目).		ケズリ(—)→ナデ(—)	ケズリ(—)→ナデ(—)	赤色粒(少),白色粒,黒色粒(多),角閃石(少),石英(少),礫(少)	表:にぶい橙5YR6/4 裏・器肉:褐7.5YR4/3	329	水磨.
98	F'-48	5	弥生早期刻目突帯文土器	甕	口	口縁部:刻み.		ケズリ(—)→ミガキ(—)	ケズリ(—)→ミガキ(—)	白・黒色粒(少)	表:明褐7.5YR3/4 裏:にぶい赤褐5YR4/4 器肉:褐灰7.5YR4/1	1687	水磨なし.
99	F'-47	6	弥生早期刻目突帯文土器	甕？	口	口縁部:刻目突帯文.		ケズリ(—)→ナデ(—)	ケズリ(—)→ナデ(—)	赤・黒色粒(少),白色粒(多),角閃石(少)	表:黒褐10YR2/2 裏:褐灰10YR4/1 器肉:黒10YR2/1 褐灰10YR4/1	643	水磨.
100	I'-46	6	弥生早期刻目突帯文土器	甕	口	口縁・胴部:刻目突帯文2条		ヘラナデ(—)→ナデ(—)	指頭圧痕・ヘラナデ(—)→ナデ(—)	白色粒(多),黒色粒(少),角閃石(少),礫(少)	表:にぶい黄褐10YR5/4 裏:黄褐10YR5/8 器肉:橙7.5YR6/6	770	水磨.
101	F'-47	6	弥生早期刻目突帯文土器	鉢？	口	口縁部:1条刻目突帯文.		ケズリ(—)→ナデ(—)	ケズリ(—)→ナデ(—)	白・黒色粒(少),石英(少)	表:黒10YR2/1 裏:にぶい黄褐10YR5/4 器肉:暗褐10YR3/4	2448	水磨.
102	I'-49	6	弥生早期刻目突帯文土器	甕	口	口縁部:1条刻目突帯文. 胴部屈曲部:1条刻目突帯文.		ハケメ(＼｜／)→ミガキ(—＼)	ハケメ(—)→ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少),石英(少),礫(少)	表:明赤褐2.5YR5/6 裏:灰褐7.5YR5/2 器肉:にぶい褐7.5YR5/3	1988	口径22.0cm. 水磨.
103	H'-47	5	弥生早期刻目突帯文土器	甕	口	口縁部:刻み.		ミガキ	ナデ(—)	白・黒色粒(少)	表・裏:褐5YR4/1 器肉:にぶい褐7.5YR6/4	327	水磨.
104	I'-46	6	弥生早期刻目突帯文土器	甕？	口	口縁部:1条刻目突帯文. 胴部:1条刻目突帯文.	口縁部:内面張り出し	ケズリ(—)→ナデ(—)	ケズリ(—)→ナデ(—)	赤・黒色粒,白色粒(多),角閃石(少),石英(少)	表:赤褐5YR4/6 裏:にぶい赤褐5YR6/4 器肉:褐灰5YR4/1	2483	水磨.
105	G'-44	6	弥生前期高橋式	甕	口	口縁・胴部:刻目突帯文2条		ハケメ(—)→ナデ(—)	指頭圧痕・ナデ(—)	白・黒色粒(少)	表:橙7.5YR6/6 裏:明褐7.5YR5/8 器肉:明褐7.5YR5/6	1484	口縁下付根:接合痕. 水磨.
106	F'-49	6	弥生前期高橋式	甕	口	口縁部:刻目突帯文		ケズリ(—)→ナデ(—)	ハケメ(＼)→ナデ(—)	白色粒(少)	表:褐灰7.5YR4/1 裏:7.5YR2/1 器肉:褐灰7.5YR6/1	2462	
107	E'-49	5	弥生前期高橋式	甕	口	口縁部・胴部:2条の刻目突帯文.		ナデ(—)	指頭圧痕(／)	白色粒(少),黒色粒(多),角閃石(少)	表:明赤褐5YR5/6 裏:にぶい褐7.5YR5/3 器肉:灰褐7.5YR4/2	1445	水磨なし.
108	F'-49	5	弥生前期高橋式	甕	口	口縁・胴部:刻目突帯文2条. 突帯間:浅い2条沈線による鋸歯文.		ハケメ(—)→ナデ(—)	ハケメ(—)→ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少)	表:にぶい黄褐10YR5/4 裏:褐7.5YR4/6 器肉:灰褐7.5YR5/2	1473	水磨.
109	G'-44-河床内	6	弥生前期高橋式	甕	胴	胴部:1条刻目突帯文＋1条三角突帯文, 2条三角突帯文(／).		ミガキ	ミガキ	白・黒色粒(少),2mm大礫(少)	表・裏・器肉:にぶい黄褐10YR4/3	2144	水磨.
110	D'-49	6	弥生前期高橋式	甕	口	口縁部:刻み. 胴部:1条の垂下三角突帯文.		ハケメ(｜)→ナデ(—)	ハケメ(—)→ナデ(—)	白・黒色粒(少),石英(少)	表:褐灰7.YR5/1 裏:橙7.5YR6/6 器肉:褐灰7.5YR6/1	2317	水磨.

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
111	G'-48	5	弥生前期 高橋式	甕	胴	胴部:1条三角突帯文・1条鉤状三角突帯文.		ハケメ(｜)→ナデ(—)	ハケメ(＼)→ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少), 軽石(少), 石英(多), 礫(少)	表・裏:にぶい褐7.5YR5/4 器肉:にぶい褐7.5YR6/4	1888	水磨なし.
112	F'-49	5	弥生前期 高橋式	甕	口	口縁部直下:2条三角突帯文.		ナデ(—)	ナデ(—)	黒色粒(少), 石英(少)	表:黒褐10YR3/2 裏・器肉:黒褐10YR2/2	1084	水磨.
113	F'-48	5	弥生前期 高橋式	甕	口	胴部:2条三角突帯文.		ナデ(—)	ナデ	赤・白・黒色粒(少), 石英(少), 礫(少)	表:褐7.5YR4/6 裏:にぶい褐7.5YR5/4 器肉:黒褐色7.5YR3/1 褐7.5YR4/6	1086	水磨.
114	J'-49-河床内	6	弥生前期 高橋式	甕	口	口唇部:刻み. 胴部:2条刻目突帯文.		ハケメ(—)→ナデ(—)	ハケメ(—)→ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少), 角閃石(少)	表:にぶい黄褐10YR6/4 褐10YR4/6 裏:黄褐10YR5/6 器肉にぶい黄橙10YR6/4 褐10YR4/6	1976	口径39.6cm. 水磨.
115	F'-49	5	弥生前期 高橋式 (如意形口縁)	甕	口	口縁部:刻み.		ヘラナデ(—)→ナデ(—)	ヘラナデ(—)→ナデ(—)	白・黒色粒(少)	表:にぶい橙7.5YR7/4 裏・器肉:にぶい黄橙10YR7/2	305	水磨.
116	G'-45	6	弥生前期 高橋式 (如意形口縁)	甕	口	口縁部:刻み.		ナデ(—)	ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少)	表:灰黄褐10YR4/2 裏・器肉:にぶい褐色7.5YR6/3	625	水磨.
117	J'-47	6	弥生前期 高橋式 (如意形口縁)	甕	口	口縁部:刻み.		ナデ(—)	ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少)	表:褐灰7.5YR4/1 裏・器肉:にぶい橙7.5YR6/4	2037	水磨.
118	H'-48	5	弥生前期 高橋式 (如意形口縁)	甕	口	口縁部:刻み.		ハケメ(—)→ミガキ	ナデ・指頭圧痕	白色粒(多), 黒色粒(少), 石英(少)	表:黒10YR2/1 裏・器肉:灰黄褐10YR5/2	328	水磨なし.
119	J'-47	6	弥生前期 高橋式 (如意形口縁)	甕	口	口縁部:刻み.		ナデ(—)	ナデ(—)	白色粒(多), 黒色粒(少)	表・器肉:褐7.5YR4/6 裏:明赤褐5YR5/6	467	水磨.
120	I'-46	6	弥生前期 高橋式 (如意形口縁)	甕	口	口縁部:刻み.		ナデ(—)	ナデ	赤・白色粒(少), 黒色粒(多), 石英(少)	表・器肉:明赤褐5YR5/6 裏:にぶい橙5YR6/4 器肉:にぶい黄褐10YR4/3	730	水磨.
121	F'-48・49 G'-48	5/6	弥生中期 前半(古) 入来Ⅰ式	甕	口	口縁部:刻み. 胴部:1条の刻目突帯文.		ハケメ(｜)→ナデ(—)	ハケメ(—)→ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少), 礫(少)	表:灰褐5YR6/2 裏:にぶい赤褐5YR5/4 器肉:灰白5YR8/2	1678・2075・?	口径23.2cm. 水磨.
122	I'-43 溝	肩	弥生中期 前半(古) 入来Ⅰ式	甕	口	口縁部:刻み. 胴部:1条三角突帯文.		ハケメ(＼・｜)→ナデ(—)	ハケメ(＼)→ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少), 礫(少)	表:にぶい赤褐5YR4/4 裏・器肉:にぶい褐7.5YR6/2 ・明黄褐10YR7/6	1974	口径32.0cm. 水磨.
123	J'-48	6	弥生中期 前半(古) 入来Ⅰ式	甕	口	胴部:2条三角突帯文(破損).		ハケメ(｜)→ナデ(—)	ハケメ(＼・—)→ナデ(—)	黒色粒(少), 石英(少)	表:にぶい黄橙10YR7/3 裏・器肉:明褐7.5YR5/6	2008	水磨.
124	E'-49	5	弥生中期 前半(古) 入来Ⅰ式	甕	口	口縁部:刻み. 口縁部直下:刻目突帯文.		ミガキ(—)	ミガキ(—)	白・黒色粒(少), 石英(少)	表:赤褐5YR4/8 裏:明赤褐色5YR5/6 器肉:褐7.5YR4/4	1460	水磨.
125	D'-47	3	弥生中期 前半(古) 入来Ⅰ式	甕	口	口唇部:刻み. 口縁部直下:刻目突帯文.		ハケメ(｜)→ナデ(—)	ハケメ(—)→ナデ(—)	赤・白・黒色粒	表・裏:明赤褐5YR5/6 器肉:黒褐10YR3/1		水磨.

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
126	l'-46	6	弥生前期～中期前半(古) 高橋式～入来Ⅰ式	甕	口	口縁部:刻み. 口縁部直下:2条刻目突帯文.		ナデ(—)	ハケメ(＼)→ナデ(—)	白・黒色粒(少)	表:明褐7.5YR5/6 裏・器肉:褐7.5YR4/6	776	
127	C'-49	7	弥生前期～中期前半(古) 高橋式～入来Ⅰ式	甕	口	口縁部:刻み.		ハケメ(｜)→ナデ	ナデ(—)	赤・白色粒(少), 黒色粒(多), 角閃石(少)	表・裏:にぶい黄橙10YR7/3 器肉:褐灰10YR4/1		水磨.
128	E'-49	5	弥生中期前半(古) 入来Ⅰ式	甕	口	口縁部:刻み. 胴部:1条の三角突帯文.		ミガキ(—)	指頭圧痕(＼)	赤・白・黒色粒(少)	表:黒10YR2/1 裏:にぶい黄褐10YR5/4 器肉:黒褐色10YR3/2	1446	水磨.
129	C'-49	6	弥生中期前半(古) 入来Ⅰ式	甕	口	口縁部:刻目突帯文.		ハケメ(—)→ナデ(—)	ハケメ(—)(＼)・指頭圧痕→ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少), 礫(少)	表・器肉:灰黄2.5Y7/2 裏:暗灰黄2.5Y5/2	2427	水磨.
130	F'-49	5	弥生前期～中期前半(古) 高橋式～入来Ⅰ式	甕	口	胴部:1条三角突帯文.		ハケメ(—)→ナデ(—)	ハケメ(—)→ナデ(—)	白色粒(多), 黒色粒(少), 礫(少)	表:橙7.5YR6/6 裏・器肉:明褐7.5YR5/8	1454	水磨.
131	C'-49	7	弥生前期～中期前半(古) 高橋式～入来Ⅰ式	甕	口			ナデ(—)	ナデ(—)・指頭圧痕	白・黒色粒(多), 角閃石(少)	表:黒褐10YR2/2 裏:にぶい褐7.5YR5/3 器肉:にぶい褐7.5YR6/3	2538	口縁下付根:接合痕. 水磨.
132	C'-48	7？	弥生前期～中期前半(古) 高橋式～入来Ⅰ式	甕	口			ハケメ(＼)→ナデ(—)	ナデ(—)	白・黒色粒(少), 角閃石(少)	表:にぶい橙7.5YR7/4 裏:にぶい橙7.5YR6/4 器肉:にぶい黄2.5Y6/3		水磨.
133	表採	1	弥生前期～中期前半(古) 高橋式～入来Ⅰ式	甕	口			ナデ(—)	指頭圧痕・ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少), 角閃石(少)	表・裏:灰黄褐10YR5/6 器肉:褐灰10YR5/1	2556	水磨なし.
134	F'-47	5	弥生中期前半(古) 入来Ⅰ式	甕	口			ナデ(—)	ナデ	赤色粒(少), 白・黒色粒(多), 角閃石(少)	表:にぶい黄橙10YR5/4 裏:明褐7.5YR5/6	858	水磨(著).
135	l'-47	6	弥生中期前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	口唇部:刻み. 胴部:2条三角突帯文.		ハケメ(｜・＼)→ナデ(—)	ハケメ(＼)→ナデ(—)	白・黒色粒(少), 角閃石(少), 石英(少)	表:にぶい黄橙10YR7/4 裏:にぶい黄褐10YR5/3 器肉:にぶい黄橙7.5YR6/6	1091	口縁下付根:接合痕. 水磨なし.
136	表採	1	弥生中期前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	口唇部:刻み. 胴部:1条三角突帯文.		ナデ(—)	指頭圧痕(／)・ナデ(—)	赤色粒(多), 黒色粒(少), 雲母(少)	表:褐灰7.5YR6/1 裏:にぶい黄橙10YR6/4 器肉;灰黄褐10YR6/2	1090	口縁下付根:接合痕. 水磨(著).
137			弥生中期前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:2条沈線文.		ナデ(—)	ハケメ(＼)→ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少), 石英(少), 礫(少)	表:にぶい褐7.5YR5/3 裏・器肉:にぶい褐7.5YR5/4		水磨.
138	l'-47	5	弥生中期前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:2条沈線文.		ヘラナデ(—)・ハケメ(｜)→ミガキ(｜)	ハケメ(—)→ナデ(—)・指頭痕	赤・黒色粒(少), 角閃石(少)	表:にぶい褐7.5YR5/4 裏:黄褐10YR5/6 器肉:明褐7.5YR5/6	1890	水磨なし.
139	J'-48	6	弥生中期前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:3条沈線文.		ヘラナデ(—)(／)→ナデ	ハケメ(＼・｜)→ナデ(—)	赤色粒(少), 白色粒(多), 角閃石(少), 石英(少), 礫(少)	表:にぶい橙75YR7/4 裏:橙7.5YR7/6 器肉:浅黄橙7.5YR8/3	2008	水磨.
140	l'-47 J'-47	6	弥生中期前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:2条沈線文.		ハケメ(—)(＼)→ナデ(—)	ハケメ(／)(＼)・指頭圧痕→ナデ(—)	赤・白色粒(少), 黒色粒(多), 石英(少)	表・器肉:橙7.5YR6/6 裏:黄褐10YR5/6	2058・2486	口径30.7cm. 水磨なし.

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
141	J'-48	6	弥生中期 前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:2条絡縄突帯文.		ナデ(—)	指頭圧痕・ヘラナデ(＼)→ナデ(—)	白色粒(多), 黒色粒(少), 角閃石(少), 石英(少)	表:にぶい橙7.5YR6/4 裏:灰褐7.5YR5/2 器肉:にぶい橙 7.5YR6/4	1978	口径20.9cm.
142	E'-49	5	弥生中期 前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:3条絡縄突帯文.		ハケメ(＼・｜)→ナデ(—)	ハケメ(＼)→ナデ(—)	白・黒色粒(少), 礫(少)	表:にぶい褐7.5YR5/3 裏・器肉:にぶい褐 7.5YR6/3	1822	水磨なし.
143	G'-48	4	弥生中期 前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:3条絡縄突帯文.		ナデ(—)	ナデ(—)	赤色粒(少), 白・黒色粒(多)	表:にぶい褐7.5YR5/4 裏:灰黄褐10YR4/2 器肉:にぶい褐 7.5YR5/4	5	水磨(著).
144	H'-44	5	弥生中期 前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:3条三角突帯文.		ハケメ(—)→ナデ(—)	ナデ(—)	白色粒(少), 黒色粒(多), 角閃石(少)	表:橙5YR7/6 裏・器肉:にぶい橙 5YR7/4	419	水磨.
145	I'-47	6	弥生中期 前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:3条三角突帯文.		ナデ(—)	ハケメ(＼)→ナデ(—)	白・黒色粒(少), 石英(少)	表:褐7.5YR4/4 裏:明褐7.5YR5/6 器肉:橙7.5YR6/6	2057	口径13.6cm. 口縁下付根:接合痕. 水磨なし.
146	I'-47	6	弥生中期 前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:3条三角突帯文.		胴上部:ハケメ(—), 胴下部:ハケメ(｜・＼)→ナデ(—)	指頭圧痕・ハケメ(｜・＼)→ナデ(—)	白・黒色粒(少), 石英(少)	表:褐7.5YR4/4 裏:明赤褐2.5YR5/6 器肉:明褐7.5YR5/6	2057	口径22.8cm. 口縁下付根:接合痕. 水磨なし.
147	G'-49	6	弥生中期 前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:3条三角突帯文.		ヘラナデ(—)→ナデ(—)	ハケメ(／・—)・指頭圧痕(／)→ナデ(—)	白・黒色粒(少), 石英(少), 礫(多)	表:にぶい褐7.5YR5/4 裏:明赤褐5YR5/6 器肉:橙5YR6/6	2023	口縁下付根:接合痕. 水磨なし. 外面砂粒付着.
148	H'-48	6	弥生中期 前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:2条三角突帯文.		ヘラナデ(—)→ナデ(—)	ナデ・指頭痕(／)	白色粒(多), 黒色粒(少), 雲母(少)	表:にぶい褐7.5YR6/4 裏:橙5YR6/6 器肉:にぶい黄橙 10YR7/2	575	水磨.
149	表採	1	弥生中期 前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:2条三角突帯文.		ナデ(—)	ナデ(—)	白色粒, 黒色粒, 石英(少)	表:にぶい黄褐 10YR6/4 裏:褐7.5YR4/4 器肉:黒褐7.5YR3/2		水磨.
150	F'-47	6	弥生中期 前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:2条三角突帯文.		ハケメ(＼)→ナデ(—)	ハケメ(＼)(—)・指頭圧痕→ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少), 礫(少)	表:橙5YR7/6 裏:にぶい黄橙 10YR7/2 器肉:灰黄褐10YR6/2	1875	口縁下付根:接合痕. 水磨.
151	E'-48	5	弥生中期 前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:3条三角突帯文.		ナデ(—)	ハケメ(＼)→ナデ(—)	白・黒色粒(少), 角閃石(少), 石英(少)	表:橙5YR6/6 裏:橙7.5YR6/6 器肉:黄灰2.5Y5/1	1512	水磨.
152	I'-45-河床内	6	弥生中期 前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:3条三角突帯文.		ナデ(—)	ハケメ(＼)・指頭圧痕→ナデ(—)	赤色粒(少), 黒色粒(多), 角閃石(少)	表:にぶい橙7.5YR6/4 裏:明褐7.5YR5/6 器肉:明黄褐10YR6/6	2136	水磨.
153	G'-48	6	弥生中期 前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:3条三角突帯文.		ナデ	ナデ(—)	赤・白色粒(少), 黒色粒(多), 石英(少), 礫(少)	表:橙7.5YR6/6 裏・器肉:明黄褐 10YR6/6	1100	水磨.
154	F'-47	5	弥生中期 前半(新) 入来Ⅱ式	甕	口	胴部:2条三角突帯文.		ハケメ(—)→ナデ(—)	ナデ(—)	白色粒(少), 黒色粒(多), 石英(少), 礫(少)	表:黄褐10YR5/8 裏:にぶい黄褐 10YR6/4 器肉:にぶい橙5YR7/6	1229	水磨.
155	G'-45	6	弥生中期 後半 山ノ口式	甕	口	胴部:3条三角突帯文.		ヘラナデ(—)→ナデ(—)	ハケメ(＼)・指頭圧痕→ナデ(—)	赤・白色粒(少), 雲母(少), 礫(多)	表:明黄褐10YR6/6 裏:褐灰10YR4/1 器肉:灰黄2.5Y7/2	2470	水磨なし.

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
156	G'-45	5	弥生中期後半山ノ口式	甕	口	口縁部:三角突帯文.		ナデ(—)	ナデ(—)	白色粒(多),黒色粒(少),雲母(少)	表:褐7.5YR4/4 裏:黒褐10YR3/1, にぶい赤褐5YR5/4 器:にぶい黄褐10YR5/4	2560	水磨なし.
157	I'-46	6	弥生中期後半山ノ口式	甕	口	口縁部:三角突帯文.				赤色粒(少),白色粒(多),黒色粒,角閃石(少),礫(少)	表:にぶい赤褐5YR4/4, 褐7.5YR4/3 裏:にぶい黄橙10YR6/3, 黒褐10YR3/1 器肉:褐7.5YR4/4	884	水磨(著).
158	J'-46	7	弥生中期後半山ノ口式	鉢	口	胴部:3条三角突帯文.		ナデ(—)	指頭圧痕・ナデ(—)	白・黒色粒(少),石英(少)	表:橙7.5YR6/6 裏・器肉:明褐7.5YR5/6		試掘時の遺物. 水磨.
159	J'-47	6	弥生中期後半山ノ口式	甕	口	胴部:羽釜状突帯.		ハケメ・ヘラナデ(—)→ナデ(—)	ハケメ(＼・—)→ナデ(—)	白・黒色粒(少)	表:明赤褐5YR5/6 裏:にぶい褐7.5YR5/4 器肉:褐7.5YR4/6	2012	大甕. 水磨なし.
160	D'-49	5	弥生前期高橋式	壺	口			ハケメ(—)→ナデ(—)		赤・黒色粒(少),白色粒(多),礫(少)	表:にぶい橙7.5YR7/4 裏:灰白2.5Y7/1 器肉:灰白5YR8/2	1441	外面有段口縁. 口径15.2cm. 水磨(著).
161	J'-47	6	弥生前期高橋式	壺	口	肥厚部下位:2～3条沈線文.		ヘラナデ(—)→ナデ(—)	ヘラナデ(—)・指頭圧痕(｜)→ナデ(—)	赤・白色粒(少),角閃石(少),礫(少),石英(多)	表:黄橙10YR5/6 裏・器肉:にぶい黄橙10YR6/3	1482	口径20.8cm. 水磨.
162	表採	1	弥生前期高橋式	壺	胴	肩部:4条沈線文(—).		ミガキ(—)	ミガキ(—)	赤・白・黒色粒(少),石英(少),2mm大礫(少)	表:にぶい黄褐10YR5/3 裏:灰白10YR7/1 器肉:にぶい黄橙10YR7/2 黒7.5YR2/1	2555	胴最大径31.1cm. 内面剥絡. 搬入品. 水磨.
163	G'-48	6	弥生前期高橋式	壺	胴	頸部:1条沈線文.		ハケメ(｜)(＼)→ナデ(—)	指頭圧痕・ハケメ(—)(＼)→ナデ(—)	白・黒色粒(少)	表:にぶい褐7.5YR5/4 裏:黄褐10YR5/6 器肉:黄褐10YR5/8	477	胴最大径21.4cm. 肩部外面に接合痕. 水磨.
164	表採	1	弥生前期高橋式	壺	胴	胴部:3条の沈線文＋3条沈線による連弧文.		ミガキ(—)	ミガキ(—)	白・黒色粒(少),角閃石(少)	表:にぶい黄褐色10YR5/4 裏:明褐7.5YR5/6 器肉:にぶい黄橙10YR5/4		水磨.
165	J'-48	6	弥生前期高橋式	壺	胴	肩部:2条沈線文. 沈線文→ミガキ(｜)の順.		頸部:ミガキ(｜), 胴部:ミガキ(—)	胴部:ヘラナデ(｜), 頸部:ミガキ(—)	赤・白・黒色粒(少),角閃石(少),石英(少),礫(少)	表:にぶい褐7.5YR5/3 裏:明褐7.5YR5/6 器肉:にぶい黄褐10YR5/4	1689	頸部内面:接合痕. 水磨なし.
166	I'-45	5	弥生前期～中期前半(古)高橋式～入来Ⅰ式	壺	口	肩部:3条沈線文＋短沈線文(｜), 鋸歯文.		ミガキ(—)	ミガキ(—)	赤・黒色粒(少),角閃石(少),礫(少)	表:浅黄橙7.5YR8/4 裏:橙7.5YR7/6 器肉:浅黄橙7.5YR8/3	188	口径17.4cm. 搬入品？ 水磨.
167	H'-48	6	弥生前期～中期前半(古)高橋式～入来Ⅰ式	壷	口			ヘラナデ(—)→ナデ	ナデ・指頭圧痕	白・黒色粒(少)	表:黄褐10YR5/8 裏・器肉:にぶい黄橙10YR5/6	1198	口上面ヘラナデ. 水磨.
168	G'-44	6	弥生前期～中期前半(古)高橋式～入来Ⅰ式	壺	口	口縁部上面:長さの異なる3条単位の刺突文2箇所	口縁部:1条突帯	ミガキ(｜)	ハケメ(—)	赤・黒色粒(少),礫(少)	表:にぶい褐7.5YR5/4 裏・器肉:灰黄2.5Y7/2	2015	口径16.8cm. 刺突文(径1mm・2mm二種類の工具による). 水磨.

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
169	G'-47	5	弥生前期～中期前半(古)高橋式～入来Ⅰ式	壷	口		口縁部:2条突帯	ミガキ	ハケメ(—)	白・黒色粒(少)	表:明黄褐10YR6/6 裏:黄褐10YR5/8 器肉:にぶい黄褐10YR6/4	318	口縁部内面:器面剥落(著). 水磨. 搬入品？
170	G'-47	6	弥生前期～中期前半(古)高橋式～入来Ⅰ式	壷	口			指頭圧痕(｜)	ナデ(—)	赤・黒色粒(少), 白色粒(多), 角閃石(少)	表・器肉:灰黄褐10YR5/2 裏:黄褐10YR5/6	629	水磨.
171	F'-48	5	弥生中期前半入来Ⅰ式～入来Ⅱ式	壷	口	頸部:2条三角突帯文(—).		ナデ(—)		赤・白・黒色粒(多), 石英(少)	表:橙5YR7/6 裏・器肉:淡橙5YR8/4, 褐灰10YR6/1		口径20.6cm. 内面剥落. 水磨(著).
172	J'-46	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	口					赤・白・黒色粒(少)	表・裏:黄灰2.5YR4/1 器肉:黄褐2.5Y5/3	2483	口径17.3cm. 水磨(著).
173	H'-47	5	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	口			ハケメ(｜・—)→ナデ(—)	ハケメ(—)→ナデ(—)	赤・白色粒(少), 黒色粒(多), 角閃石(少)	表:橙7.5YR6/6 裏:明褐7.5YR5/6 器肉:灰褐7.5YR6/2	327?	口径21.6cm. 水磨.
174	表採	1	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	底			ナデ(—)	ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少), 角閃石(少)	表:にぶい橙7.5YR6/4 裏:褐灰7.5YR5/1 器肉:褐灰7.5YR4/1	1090	水磨.
175	I'-46	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	口			ヘラナデ(—)→ナデ(—)	ナデ(—)	赤・白色粒(少), 黒色粒(多), 石英(少), 礫(多)	表:明褐5YR4/6 裏・器肉:橙7.5YR6/6	1999	口径17.5cm. 水磨.
176	I'-45	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	口					黒色粒(多), 石英(少)	表:明褐7.5YR5/6 裏:橙7.5YR6/6 器肉にぶい黄橙10YR7/4	1483	水磨(著).
177	I'-46	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	口	口縁上面2箇所:3～4条単位の短沈線文.		ヘラナデ(—)→ナデ	ヘラナデ(—)(＼)→ナデ	赤・白・黒色粒(少), 軽石(少), 角閃石(少), 石英(多), 礫(少)	表:橙7.5YR6/6 裏・器肉:にぶい橙7.5YR6/4	776	口径16cm. 水磨.
178	G'-49	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	口	口縁上面1箇所:3条単位の短突帯.		ナデ(—)	ナデ(—)	白色粒(少), 黒色粒(多), 角閃石(少), 礫(多)	表:橙7.5YR6/6 裏:にぶい黄橙10YR7/4 器肉:灰白10YR7/1	569	水磨.
179	I'-49	5	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	口	口縁上面2箇所:3条単位の短突帯文.			ナデ(—)	白・黒色粒(多)	表:橙7.5YR7/6 裏・器肉:橙7.5YR6/6	324	口径20.0cm. 水磨(著).
180	I'-46	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	口	口唇部:刻み. 口縁上面1箇所:7条単位の短沈線文.		ハケメ(｜)→ナデ(—)	ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少), 角閃石(少), 石英(少), 礫(少)	表:浅黄2.5Y7/3 裏・器肉:暗灰黄2.5Y5/2	774	口径16.6cm. 水磨.
181	I'-46	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	口			ハケメ(—)→ナデ(—)	ヘラナデ(—)→ナデ(—)	白・黒色粒(少), 角閃石(少), 礫(少)	表:明褐7.5YR5/6 裏・器肉:褐7.5YR4/6	2478	口径17.6cm. 水磨.
182	？	？	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	口			ナデ(—)	ナデ(—)	赤色粒(少), 白・黒色粒(多), 角閃石(少), 雲母(少), 礫(少)	表:赤褐5YR4/8 裏・器肉:明褐7.5YR5/6		口径16.2cm. 水磨.

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
183	J'-48	6	弥生中期 後半 山ノ口式	壺	胴	胴部:多条三角突帯文.		ナデ	ヘラナデ(／)→ナデ(—)	白色粒(多), 黒色粒(少), 軽石(少), 雲母(少), 礫(少)	表:にぶい橙7.5YR6/4 裏:灰黄褐10YR4/2 器肉:にぶい黄褐10YR5/3	1301	水磨なし.
184	H'-49	6	弥生中期 後半 山ノ口式	壺	胴	胴部:多条M字状突帯文＋三角突帯文.		ナデ(—)	指頭圧痕(／)	白色粒(多), 黒色粒(少), 雲母(多)	表:褐7.5YR4/6 裏:黒褐10YR3/1 器肉:にぶい褐7.5YR5/4	2125	水磨.
185	E'-47		弥生中期 後半 山ノ口式	甕	胴	胴部:M字状突帯文＋三角突帯文.		ナデ(—)	指頭圧痕(／)	赤・白・黒色粒(少)	表:明褐7.5YR5/6 裏:にぶい黄褐10YR5/4 器肉:にぶい黄橙10YR6/4		水磨なし.
186	H'-48	5	弥生中期 後半 山ノ口式	壺	口	口縁部:台形突帯.		ハケメ(｜)→ナデ(—)	ハケメ(—)→ナデ(—)	赤・白色粒(少)	表:浅黄2.5Y7/3 裏:黒2.5Y2/1 器肉:暗オリーブ褐2.5Y3/3	?	口径13.4cm. 二叉状口縁. 水磨.
187	表採	1	弥生中期 後半 山ノ口式	壺	口	口縁部:台形突帯.		ナデ(—)	ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少)	表:明黄褐10YR6/6 裏:赤褐5YR4/6 器肉:灰黄2.5Y7/2	1882	二叉状口縁. 水磨.
188			弥生中期 後半 山ノ口式	壷	口			ハケメ(—)→指頭圧痕	指頭圧痕	赤・黒色粒(少), 石英(少), 礫(少)	表・裏・器肉:浅黄橙7.5YR8/3		広口壷. 搬入品？ 水磨.
189	E'-48	5	弥生中期 後半 山ノ口式	壷	口			ハケメ(｜／)→ナデ(—)	ナデ(—)	白色粒(少), 黒色粒(多), 角閃石(少)	表:赤褐2.5YR4/6 裏:赤褐5YR4/6 器肉:赤褐5YR4/6, 黒褐5YR2/1	176	広口壷. 内面剥落. 水磨.
190	E'-49	5	弥生中期 後半 山ノ口式	壺	口			ハケメ(＼)→ナデ(—)	ハケメ(＼・—)→ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少)	表:橙5YR6/8 裏:橙5YR7/6 器肉:にぶい黄橙10YR7/3	1744	水磨.
191	F'-47	5	弥生中期 後半 山ノ口式？	壺	口	口唇部:刻み.		ナデ	ナデ・指頭圧痕(／)	白色粒(少), 黒色粒(多)	表:明赤褐5YR5/6 裏:明褐7.5YR5/6 器肉:褐灰5YR6/1	1786	口径17.8cm. 厚手. 水磨.
192	H'-44	6	弥生中期 前半(古) ～後半 入来Ⅰ～ 山ノ口式	鉢？	口	胴部:1条沈線文.		ミガキ(—)	ミガキ	赤・白色粒(少), 黒色粒(多), 角閃石(少)	表:にぶい橙7.5YR7/4 裏:明褐7.5YR5/6 器肉:褐灰7.5YR4/1 にぶい橙7.5YR6/4	1891	水磨なし.
193	F'-49	6	弥生中期 前半(古) 入来Ⅰ式	高坏	脚	坏・脚付根部:1条三角突帯.		ミガキ(｜)	ハケメ(—)→ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少), 軽石(少), 石英(少), 礫(少)	表・裏:にぶい赤褐5YR4/4 器肉:にぶい赤褐5YR5/4	2462	水磨.
194	C'-48	6	弥生早期 刻目突帯 文土器？	甕	底			ハケメ(｜)→ナデ	ナデ	白色粒(多), 黒色粒(少)	表:灰褐7.5YR4/2 裏:にぶい褐7.5YR5/4 器肉:褐灰7.5YR4/1		底径7.3cm. 底面:ハケメ. 水磨なし.
195	I'-45	溝	弥生前期 ～中期前 半(古) 高橋式～ 入来Ⅰ式	甕	底			ミガキ(｜)	ハケメ(＼)→ナデ(—)	白色粒(少), 黒色粒(多)	表:褐7.5YR4/3 裏:にぶい橙5YR7/3 器肉:明赤褐5YR5/8	1976	底径6.2cm. 上げ底. 水磨.
196	E'-48	6	弥生前期 ～中期前 半(古) 高橋式～ 入来Ⅰ式	甕	底			ハケメ(｜)→ミガキ(｜)	ナデ	白色粒(多), 黒色粒(少), 石英(少)	表:赤褐2.5YR4/6 裏:灰赤2.5YR5/2 器肉:灰赤2.5YR6/2		底径6.8cm. 水磨なし.

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
197	G'-46	6	弥生中期前半(古)～後半入来Ⅰ式～山ノ口式	甕	底			ミガキ(｜)	ハケメ(｜・＼)→ナデ	赤・黒色粒(少),角閃石(少)	表:にぶい赤褐5YR4/4 裏:にぶい黄褐10YR7/3 器肉:灰黄2.5Y7/2	2466	底径7.4cm. 底部厚手. 胴部割れの補修痕. 底面:ケズリ. 水磨なし.
198	F'-48	6	弥生中期前半(古)～後半入来Ⅰ式～山ノ口式	甕	底			ミガキ(｜)→ヘラナデ(—)	ヘラナデ(／)→ナデ	白・黒色粒(少),角閃石(少)	表:明赤褐5YR5/6 裏:橙7.5YR6/6 器肉:にぶい黄橙10YR7/2	1864	底径8.7cm. 底部厚手. 水磨なし.
199	I'-47	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	甕	脚			ヘラナデ(｜)	ヘラナデ(—)	赤・白・黒色粒(少),礫(多)	表:褐7.5YR4/3 裏:黒7.5YR2/1 器肉:赤褐5YR4/6	2057	底径7.8cm. 外底面:ミガキ. 水磨なし.
200			弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	甕	脚			ハケメ(｜)→ナデ(—)	ハケメ(＼)	赤・白・黒色粒(少),礫(少)	表:褐10YR4/4 黄褐10YR5/6 裏:黒褐10YR3/1 器肉:褐色10YR4/4		底径7.6cm. 水磨.
201	G'-44	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	甕	脚			ハケメ(｜)	ナデ	赤・白・黒色粒(少),角閃石(少),礫(少)	表・器肉:明褐7.5YR5/6 裏:にぶい黄橙10YR6/4	2471	底径7.9cm. 外底面:ミガキ.
202	I'-44	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	甕	脚			ハケメ(｜)	ミガキ(＼)	赤・白・黒色粒(少)	表:にぶい橙7.5YR6/4 裏:黒5YR1.7/1 器肉:にぶい黄橙10YR6/3	2151	底径8.5cm. 接地部に補修痕. 外底面:ミガキ. 中央ケズリによる上げ底. 水磨なし.
203	D'-49	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	甕	脚			ハケメ(｜)→ナデ	ハケメ(—)→ナデ	白色粒(少),黒色粒(多),角閃石(少)	表:橙5YR6/6 裏:褐灰5YR4/1 器肉:赤褐5YR4/6		底径7.4cm. 上げ底. 外底面:剥落.
204	B'-49	7	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	甕	脚			ハケメ(｜)→ナデ(—)	ハケメ(｜)→ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少)	表:黄褐YR5/6 裏:黒10YR1.7/1 器肉:にぶい黄褐10YR5/4	2438	底径9.2cm. 外底面:ケズリ. 水磨なし.
205	G'-45	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	甕	脚			ヘラナデ(—)→ナデ(—)	ハケメ(／・｜)→ナデ(—)	白・黒色粒(少),雲母(少)	表:明赤褐5YR5/6 裏:褐灰7.5YR5/1 器肉:にぶい褐色7.5YR5/4	2468	底径6.9cm. 水磨なし.
206	E'-49	5	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	甕	脚			ハケメ(｜・＼)→ナデ(—)	ハケメ(＼)→ナデ	白色粒(少),黒色粒(多),輕石(少),礫(少)	表:橙5YR6/6 裏:黒5YR1.7/1 器肉:灰黄2.5Y7/2	1731	底径8.3cm. 上げ底. 外底面:工具痕. 水磨.
207	I'-44	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	甕	脚			ミガキ(｜)	ハケメ(｜)→ナデ	赤・白・黒色粒(少),礫(少)	表:明褐7.5YR5/6 裏・器肉:褐灰7.5YR6/1	2046	底径7.6cm. 上げ底. 底面:ミガキ. 水磨.
208			弥生中期前半(古)～後半入来Ⅰ式～山ノ口式	鉢	脚			ハケメ?	ヘラナデ(／)	赤色粒(少),白・黒色粒(多)	表:明赤褐2.5YR5/8 裏:黒褐10YR3/2 器肉:黒10YR1.7/1		底径6.6cm. 水磨.
209	G'-44-河床内	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	甕	脚			ハケメ(｜)→ナデ(—)	ナデ	赤・白・黒色粒(少),礫(少)	表:明黄褐10YR7/6 裏:褐灰10YR5/1 器肉:にぶい黄橙10YR7/6	2144	底径8.0cm. 外底面:中央凹部・ミガキ. 内面:有機物付着.
210	F'-48	6	弥生中期前半(古)～後半入来Ⅰ式～山ノ口式	壺	脚			ミガキ(｜)	ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少),角閃石(少),礫(少)	表:暗褐10YR5/4 裏:黒10YR2/1 器肉:にぶい褐7.5YR5/3	2103	底径7.9cm. 水磨.

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
211	I'-43	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	底			ハケメ(—)→ナデ(—)		赤・黒色粒(少),白色粒(多),石英(少),礫(少)	表:にぶい橙7.5YR6/4, 褐灰7.5YR4/1 裏:橙7.5YR7/6 器肉:明褐灰7.5YR7/2	2005	底径8.4cm. 内外面剥落. 水磨(著).
212	F'-48	5	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	底			ナデ(—)		赤・黒色粒(少),白色粒(多),角閃石(少),石英(少),礫(少)	表:にぶい黄橙10YR6/3 裏:灰黄褐10YR4/2 器肉:黒褐10YR3/2	1087	底径9.9cm. 水磨.
213	F'-47	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	底			ミガキ(＼)(｜)	ミガキ(＼)(｜)	白・黒色粒(少),礫(少)	表:明褐5YR6/6 裏:橙7.5YR6/6 器肉:明褐灰7.5YR7/2	1879	底径7.7cm. 水磨.
214	D'-48-ス	5	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	底			ナデ(—)		白・黒色粒(少),石英(少),礫(少)	表:にぶい赤褐5YR4/4 裏・器肉:黒褐5YR2/1	858	底径9.0cm. 内面剥落(著). 水磨なし.
215	G'-44-河床内	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	底			ハケメ(｜)→指頭圧痕・ナデ(＼)	ハケメ(／)→ナデ(—)	黒色粒(多),2mm大礫(少)	表:にぶい赤褐2.5YR4/4 裏:にぶい褐7.5YR5/4 器肉:にぶい黄褐10YR5/3	2144	底径9.1cm. 水磨.
216	G'-48	6	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壺	底			ハケメ(｜・／)→ナデ(—)	ヘラナデ(｜)→ナデ	白・黒色粒(少),石英(少)	表:明黄褐10YR6/6 裏:にぶい黄橙10YR7/3 器肉:にぶい黄橙10YR7/2	476	底径7.7cm. 外底面:工具痕. 水磨.
217	E'-47	5	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	底			ヘラナデ(｜—)→ナデ(—)		赤・黒色粒(少),白色粒(多),石英(少),礫(少)	表:橙7.5YR6/6 裏:暗褐7.5YR3/4, 黒7.5YR4/1 器肉:にぶい橙7.5YR6/4, 黒褐7.5YR3/1	950	底径7.9cm. 内面剥落. 水磨.
218	E'-48	5	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	底				ヘラナデ(／—)→ナデ(—)	赤色粒(少),白・黒色粒(多),石英(少),礫(多)	表:赤褐5YR4/6, 4/8 裏:にぶい褐7.5YR5/4 器肉:褐7.5YR4/4, 黒7.5YR2/1	1367	大型. 底径10.8cm. 内面剥落(著). 水磨.
219	E'-48	5	弥生中期前半(新)～後半入来Ⅱ式～山ノ口式	壷	底			ミガキ(｜／)		赤色粒(少),白・黒色粒(多),礫(多)	表:にぶい褐7.5YR5/3 裏:明褐7.5YR5/6 器肉:灰黄褐10YR6/2	1807・1808	大型. 外底面中央部:凹部形成. 内面剥落. 底径11.8cm. 水磨.
220	I'-45	6	弥生中期後半須玖式	甕	口			ナデ(—)		赤・黒色粒(少),石英(少)	表・裏・器肉:にぶい褐7.5YR4/4	1483	水磨(著).
221	I'-45	5	弥生中期後半須玖式	壺	口	袋部直下:1条沈線文.			ミガキ(—)	白色粒(少),黒色粒(多)	表:橙7.5YR7/6 裏・器肉:浅黄橙10YR8/3	370	袋状口縁壷. 搬入品. 丹塗り. 口径13.0cm. 水磨.
222	表採	1	弥生中期後半須玖式	壷	胴	肩部:1条三角突帯. 胴部:2条彩文(｜).		ナデ(—)		白色粒,黒色粒(多),角閃石	表:にぶい黄橙10YR6/4 裏:褐灰10YR6/1 器肉:褐灰10YR4/1	784	無頸壷. 内面剥絡. 搬入品. 水磨.
223	I'-44	6	弥生中期後半黒髪式	甕	口			ナデ(—)	ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少),角閃石(少),石英(少)	表:浅黄橙7.5YR8/3 裏:明褐灰7.5YR7/1 器肉:褐灰7.5YR4/1	2047	口径26.0cm. 搬入品.
224	G'-49	5	弥生中期後半黒髪式	甕	口			ナデ(—)	ナデ(—)	赤・黒色粒(多),白色粒(少),礫(少)	表:明褐7.5YR5/6 裏:にぶい橙7.5YR6/4 器肉:にぶい黄褐10YR5/4	570	搬入品. 水磨(著).
225	E'-49	6	弥生中期後半黒髪式	甕	口			ナデ(—)	ナデ(—)	白色粒(少),黒色粒(多),石英(少)	表:褐7.5YR4/6 裏・器肉:灰黄2.5Y7/2	2500	搬入品. 水磨.

No.	地区	層	型式等	器種	部位	文様(表)	文様(裏)	調整(表)	調整(裏)	混和材	色調	注記No.	備考
226	G'-44-河床内	6	弥生中期後半黒髪式	甕	口			ナデ(—)	ナデ(—)	赤色粒(少),白・黒色粒(多),石英(少)	表:橙7.5YR6/6 裏:灰黄2.5Y7/2 器肉:明黄褐10YR7/6	2144	搬入品. 水磨.
227	表採	1	弥生中期後半黒髪式	甕	口			ナデ(—)	ナデ(—)	白色粒(少),黒色粒(多),石英(少)	表:褐10YR4/4 裏:にぶい黄橙10YR7/3 器肉:にぶい黄橙10YR6/4	784	搬入品. 水磨.
228	F'-48	5	弥生中期後半黒髪式	甕	口			ナデ(—)	ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少)	表:褐7.5YR4/3 裏:灰黄褐10YR6/2 器肉:褐7.5YR4/4	1177	水磨.
229	H'-44	6	弥生中期後半黒髪式	甕	口			ナデ(—)	ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少),角閃石(少)	表・器肉:にぶい黄橙10YR6/4 裏:明褐7.5YR5/6	2056	水磨.
230	E'-49	5	弥生中期後半第Ⅳ様式模倣	甕	口			ナデ(—)	ナデ(—)	赤・白色粒(少),黒色粒(多),角閃石(少)	表:にぶい褐7.5YR5/4 裏:明褐7.5YR5/6, 褐灰7.5YR6/1 器肉:にぶい褐7.5YR5/3	1467	水磨.
231	E'-47	5	弥生中期後半第Ⅳ様式	壷	口	口縁部上面:4条凹線文.				白・黒色粒(多),石英(少),雲母(少)	表:にぶい褐7.5YR5/6 裏:黒褐7.5YR3/1 器肉:灰褐7.5YR4/2	1567	口径11.4cm. 水磨(著).
232	H'-45	5	弥生中期中葉第Ⅲ様式	壺	肩	胴部:連点文		ナデ(—)	ナデ(—)	白色粒(少),黒色粒(多),角閃石(少)	表:灰黄褐10YR6/2 裏:にぶい黄橙10YR7/3 器肉:褐灰10YR6/1	1031	文様部に赤色顔料付着. 水磨.
233	I'-47	6	弥生中期中葉第Ⅲ様式	壺	肩	頸部:1条刻み突帯. 肩部:櫛描沈線文→櫛描波状文→櫛描沈線文→櫛描波状		ハケメ(｜)→ナデ(—)	ミガキ(—)	赤・白・黒色粒(少),石英(多),礫(多)	表:橙5YR6/6 裏・器肉:橙7.5YR6/6	2057	搬入品. №234と同一個体. 水磨なし.
234	I'-47	6	弥生中期中葉第Ⅲ様式	壺	胴	肩～胴上半部:櫛描沈線文＋櫛描波状文＋櫛描刺突文		ミガキ(—)	ミガキ(—)	赤・白色粒(少),黒色粒(多),礫(少)	表:橙7.5YR7/6 裏・器肉:浅黄橙7.5YR8/3	2057	搬入品. №233と同一個体. 水磨なし.
235	G'-48	6	弥生前期末～中期前半擬朝鮮系無文土器	鉢	口			ハケメ(—)→指頭圧痕・ナデ(—)	指頭圧痕(｜)	赤色粒(少),白・黒色粒(多)	表:黒10YR1.7/1 褐7.5YR4/6 裏・器肉:明褐10YR3/4	1146	口径17.4cm. 水磨.
236	J'-45	6	型式不明	壷	胴	肩部:有軸羽状文. 胴部屈曲部:みかけ多条突帯.		ミガキ(—)	ナデ(—)	赤・白・黒色粒(少),角閃石(少),石英(少)	表・裏:にぶい黄橙10YR7/2 器肉:灰白10YR8/1	2068	胴最大径17.7cm. 搬入品. 水磨.
237	G'-44-河床内	6	型式不明	壷	肩	頸:2条沈線文. 胴部5条単位の垂下沈線文.		ナデ(—)	指頭圧痕	赤色粒(多),黒色粒(少)	表:にぶい褐7.5YR5/4 裏:橙7.5YR6/6 器肉:にぶい橙7.5YR6/4	2144	水磨.
238	I'-44-河床内	6	型式不明	壺	胴	頸部:2条沈線文. 6条単位の垂下短沈線文.		ナデ(—)	ハケメ(＼)・指頭圧痕(＼)→ナデ	赤・黒色粒(少)	表:にぶい褐7.5YR5/3 裏:灰黄褐10YR4/2 器肉:灰黄褐10YR5/2	2147	胴最大径28.2cm. 水磨.
239	E'-47	5	型式不明	壷	胴	胴部:浅い櫛描波状沈線文(＼)で埋める.		ミガキ	ヘラナデ(—)	黒色粒(少),石英(少),雲母(少)	表・器肉:赤褐5YR4/6 裏:にぶい赤褐5YR4/4	894	水磨なし.
240	I'-47	6	型式不明	甕	口			ナデ(—)	ナデ(—)	白色粒(多),黒色粒(少),雲母(多),礫(少)	表・裏・器肉:にぶい褐7.52YR5/4		受け口状の口縁. 薄手. 粗製. 水磨.
241	J'-47	5	型式不明	壺？	口	口縁部:3条沈線文(—)・2条沈線による下向き連弧文.			指頭圧痕	白色粒(少),黒色粒(多),石英(少)	表:にぶい赤褐5YR5/4 裏:にぶい橙7.5YR7/4 器肉:にぶい黄橙10YR6/4	2036	水磨.

6－3　陶磁器（Fig.40・41，PL.31・32）

本調査区から得られた中世・近世・近代・現代遺物は，中世遺物として青磁・白磁，備前焼があり，近世遺物として薩摩焼，肥前磁器など，近現代遺物として，系統不明の陶磁器や土管，瓦，レンガ，セメント，タイル，ガラス瓶，二枚貝，鉄，鉄滓，トタンなどがある。ほかにも時期の分からない陶磁器，瓦器，動物骨などがある。ほとんどが１～３層および陶磁器３層で検出された溝内を中心とした出土である。４～６層の出土数は比較的少ないため，撹乱部からの落ち込みや壁面からこぼれ落ちたものを採集したものと考えられる（Tab.5）。

Tab.5　中世・近世・近代・現代遺物層位別出土数

種別	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層上面溝(SD1)	Ⅲ層中溝(SD2)	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	地区層位不明	計
青磁		2		4	2		1			9
白磁		1								1
備前焼		1		2	1					4
薩摩焼	2	1	7	1		1	2			14
肥前陶器				1	1					2
天目模倣碗	1									1
不明陶器	1	2	4	3	1		2	3		16
不明磁器			1							1
ガラス瓶				1						1
レンガ	1		2			1				4
土管	6		1							7
瓦	5		5					2		12
瓦器？	1									1
鉄・鉄滓	2							3	3	8
植木鉢			1							1
タイル							1			1
トタン	1						1			2
セメント	2						1			3
貝	21					1	1			23
動物骨					1					1
たかしこぞう					5				2	7
計	43	7	21	12	11	3	9	8	5	119

ここでは時期などが判明する比較的残りの良い陶磁器について述べる。

中世

（１）中国陶磁器

中世に相当する中国陶磁器は，10 点得られており，そのうち６点を図化した。詳細不明の白磁片１点以外は，明代のいわゆる竜泉窯系青磁のみである。ここでは青磁について述べる。

242 は厚手の無文直口碗である。

243 は無文玉縁状肥厚のわずかに外反する碗である。

244 は腰折れの稜花皿であり，口縁部内面に稜花部に合わせて二条のラマ式蓮弁文を描く。その下部のモチーフは不明である。同じものがさらに１点ある。

245 は見込みから高台畳付まで施釉する無文碗である。高台内面は釉を掻き取り，中央の突出部をヘラで削っている。焼成が悪く灰色に発色し，素地も赤褐色である。

246 は腰部を形成する無文碗で，見込みから高台畳付まで施釉し，高台内面は釉を掻き取っている。見込みには圏線と花文を描いている。

247 は内面から高台まで全施釉する無文碗であるが，高台内面は半分まで施釉されている。高台内面の突出部はヘラ削りされない。焼成が悪く釉は黄色っぽく発色し，素地は肌色である。

これらの青磁は 14 世紀半ば～ 15 世紀半ばの資料であろう[1)]。

（２）備前擂鉢

備前擂鉢は４点得られており，全て図化した。

248 は口縁部拡張部がやや小さいもので，口縁部内面端部から胴部に向かって六条単位の擂目を施すが，部分的に途切れている。摩滅によるものであろう。

249 は口縁部が幅広に拡張するもので，胴部内面より七条単位の擂目を施すものである。

250・251 は胴部であり，前者は２組の擂目が，後者は九条の擂目が認められる。どちらもかなり内面が

摩滅し，擂目も消えかかっていることから使用頻度が高かったものと思われる。備前Ⅳ期（14 世紀末～ 16 世紀初頭）の資料であると考えられる[2)]。

近世[3)]

（１）薩摩焼

いわゆる苗代川系の陶器が主である。甕・壷，鉢，土瓶，擂鉢など胴部片を含めて 14 点得られているが，いずれも小破片である。今回，口縁部，底部を中心に９点図化した。

252・253 は甕・壷の口縁部で，口縁部上面の釉を掻き取る。253 はやや小型である。

254・255・256 は甕・壷の底部である。内外面ともに施釉される。254 は比較的薄手で，外面胴下半の釉を右上方向に粗く掻き取る。内面は当具痕が残る 17 世紀前半代の古手の資料である。

257 は鉢あるいは片口になると思われるもので小型で，17 世紀後半代の資料である。内外面ともに施釉され，口縁部上面の釉を掻き取る。

258 は擂鉢の胴部であり，薄手である。内面に細い擂目がみられる。内外面ともに施釉される。

259･260 は土瓶であり，259 は注口部分である。内外面ともに施釉され，注出口には２孔穿たれている。260 は底部であり円錐形の脚が１本残る。外底面は無釉であり，煤が付着している。土瓶は 18 世紀後半以降のものであると考えられる。

（２）肥前陶器

肥前陶器・磁器は少なく，２点得られているうちの２点を図化した。

260 は体部が丸みを帯びた銅緑釉碗の底部立ち上がり部の破片であり，内外面ともに施釉される。

261 はいわゆる唐津と呼ばれるもので，白化粧土の刷毛目文様が見込みに，外面胴部上半部にも白化粧土が見受けられる。内外面ともに鉄釉で施釉される。

これらの陶器は 17 世紀後半～ 18 世紀前半の資料である。

近代

（１）天目模倣碗

近代と確実に認定できる資料は少なく，ほとんどが不明品に分類されているものと思われる。ここでは，天目模倣碗を図化した。見込みは渦巻き状の幅広の浅い溝が形成され施釉される。高台は上げ底で高台外面に二枚貝の形のネガスタンプの銘が入る。内部の・ポジの文字は不明だが，「作」と読める。漢字の可能性もある。

現代

現代遺物は植木鉢，土管，セメント，トタン，鉄，動物骨，二枚貝類などかなりの数に上るが，ここでは軒平瓦の可能性のある資料１点を図化した。

（１）瓦

鹿大構内遺跡出土品のなかではあまり類例のないもので，瓦としては薄手であり，内面は丁寧にナデ調整され，外面は布目が全面に施される。かなりもろい（264）。

不明陶器

時期の判断のつかない不明陶器は多数あるが，ここでは２点図化した。いずれも素焼きの焼き締められた陶器であり，265 は逆Ｌ字条の口縁部である。口唇を工具で押さえることで叉状を呈する。266 は擂鉢の底部であり，立ち上がり外面は横方向に削り調整する。内面は九条以上を単位とする擂目が切り合っている。

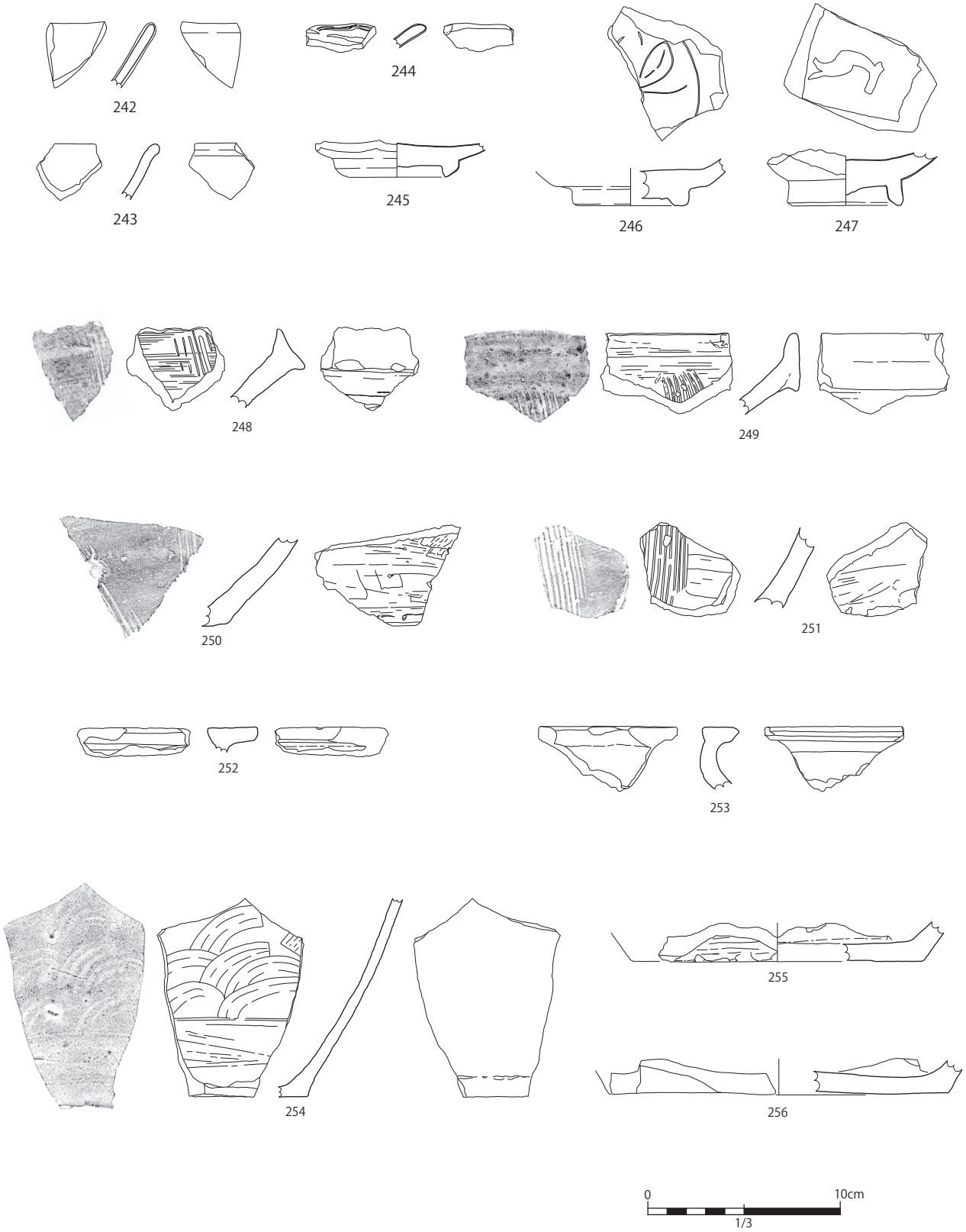
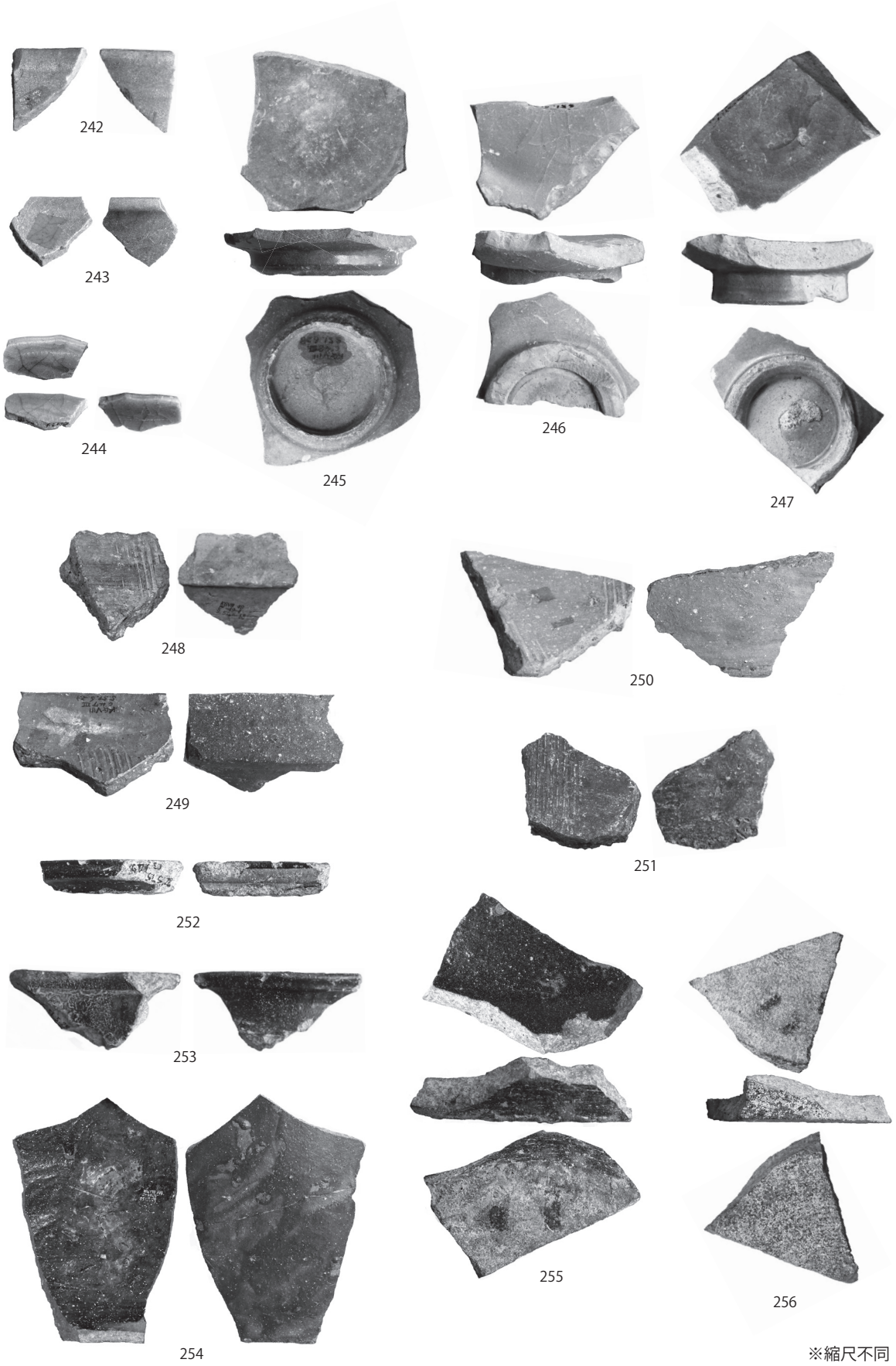

242
244
243
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
0
10cm
1/3

Fig.40　陶磁器（1）



PL.31　陶磁器（1）

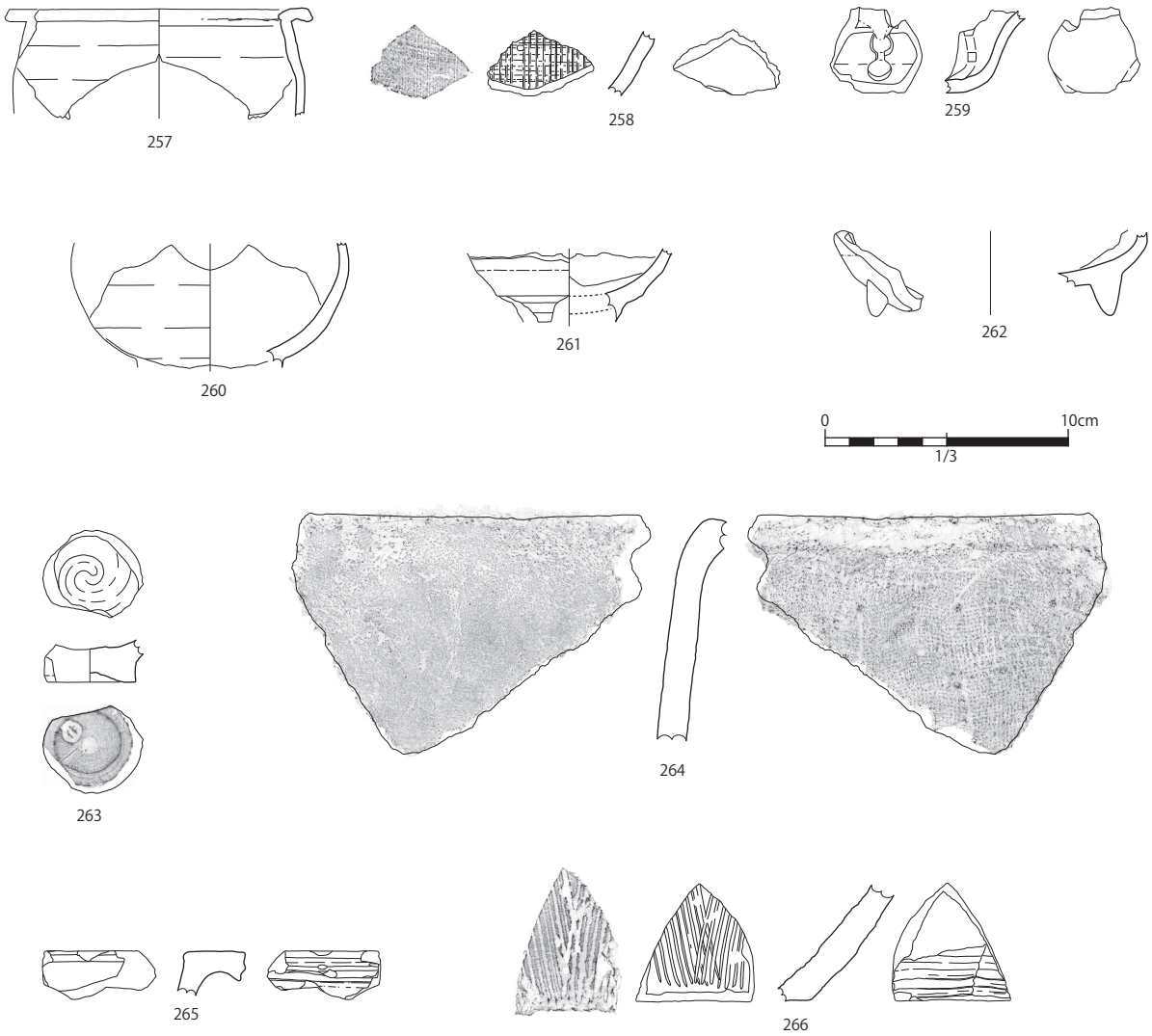


Fig.41　陶磁器（2）

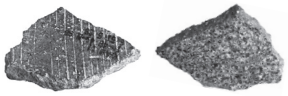
注

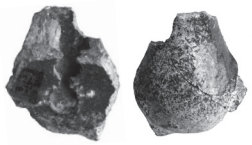
1）瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志　2007「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄埋文研究』5

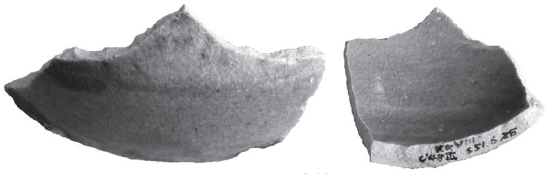
2）間壁忠彦　1977「備前」『世界陶磁全集　3　日本中世』小学館

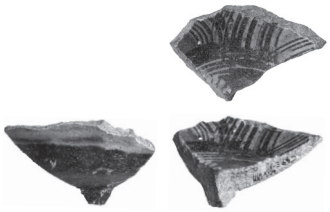
3）九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』

257


258

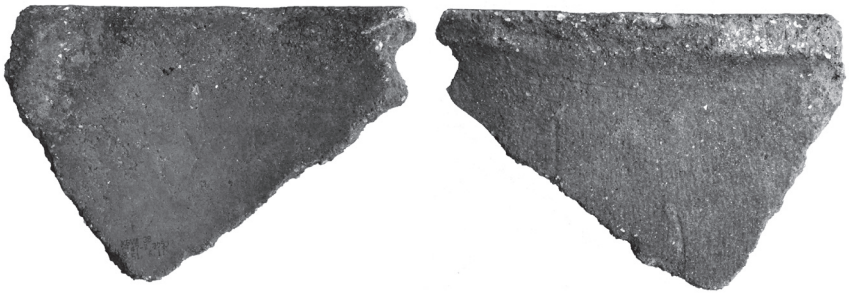

259

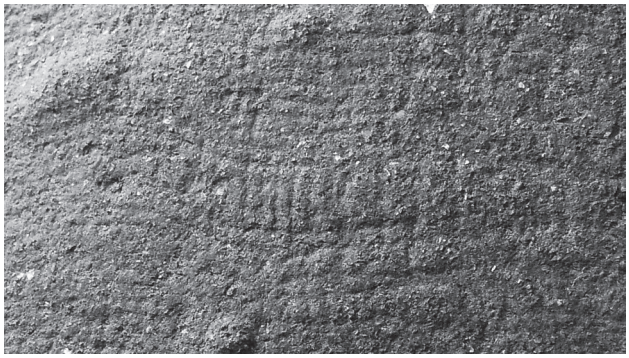

260

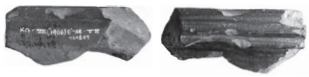

261

262

263




264


265

266

※縮尺不同

PL.32　陶磁器（2）

Tab.6　陶磁器観察

No.	地区	層	種別	器種	部位	色調(釉)	色調(素地)	注記No.	備考
242	C'-49-シ	5	青磁	碗	口	灰オリーブ7.5Y6/2	灰白7.5Y7/1	444	竜泉窯系. 無文直口碗.
243	C'-47	溝(SD2)	青磁	碗	口	オリーブ灰10Y6/2	灰白10Y8/1		竜泉窯系. 玉縁口縁碗. 15C前半～半ば.
244	C'-47	溝(SD2)	青磁	稜花皿	口	オリーブ灰2.5GY6/1	灰白2.5GY8/1		竜泉窯系. 口縁上面:ラマ式連弁文・草花文. 15C前半～半ば.
245	C'-48	3	青磁	碗	高台	外:灰褐7.5YR5/2 内:灰褐7.5YR6/2	にぶい褐色7.5YR5/3		竜泉窯系. 底径6.4cm. 見込み:草花文. 焼成不良. 14C半ば～15C初頭.
246	C'-43	3	青磁	碗	高台	灰10Y6/1	灰白5Y7/1		竜泉窯系. 底径6.0cm. 見込み:圏線・草花文. 14C半ば～15C初頭.
247	C'-47	溝(SD2)	青磁	碗	高台	灰オリーブ7.5Y5/2	浅黄橙10YR8/3		竜泉窯系. 底径6.1cm. 見込み:草花文. 焼成不良. 15C前半～半ば.
248	C'-49	2	備前焼	擂鉢	口		外:明褐7.5YR5/6 肉:にぶい黄橙10YR6/3 内:にぶい褐7.5YR5/3	48	擂目:6条. 14C末～16C初頭. 古段階.
249	C'-47	3	備前焼	擂鉢	口		外:にぶい赤褐2.5YR5/3 肉:灰褐7.5YR5/2 内:灰赤2.5YR4/2		擂目:7条. 14C末～16C初頭. 新段階.
250	C'-48	溝(SD2)	備前焼	擂鉢	底		内外:明赤褐2.5YR5/6 肉:にぶい橙7.5YR6/4		擂目. 14C末～16C初頭.
251	C'-48	溝(SD2)	備前焼	擂鉢	胴		内外:黒褐2.5Y3/1 肉:黄灰2.5Y4/1		擂目:9条. 14C末～16C初頭.
252		溝(SD1)	薩摩焼	甕・壷	口	にぶい赤褐5YR4/3	明褐灰2.5Y4/1		苗代川.
253		溝(SD1)	薩摩焼	甕・壷	口	外:黒褐2.5Y3/2 内:褐灰10YR4/1	灰N6/		苗代川.
254	C'-49	5	薩摩焼	甕・壷	底	外:褐灰7.5YR4/1 内:オリーブ黒7.5Y3/1	黄灰2.5Y4/1	347	苗代川. 17C前半.
255		溝(SD1)	薩摩焼	甕・壷	底	オリーブ黒5Y3/1	明赤褐2.5YR5/6		苗代川. 底径15.0cm.
256		溝(SD1)	薩摩焼	甕・壷	底	褐灰7.5YR6/1	にぶい橙5YR6/4		苗代川. 底径17.6cm.
257	C'-49	2	薩摩焼	鉢or片口	口	オリーブ黒5Y2/2	黒褐10YR3/2	48	苗代川？. 口径12.7cm. 17C後半.
258	I'-48	3/溝(SD1)	薩摩焼	擂鉢	胴	外:灰褐7.5YR4/2 内:灰オリーブ7.5Y4/2	褐灰7.5YR4/1	11	擂目. 苗代川.
259	B'-47	1	薩摩焼	土瓶	注口	外:暗褐10YR3/4, 浅黄2.5Y7/4 内:暗褐10YR3/4	明赤褐5YR5/6	682	苗代川. 18C後半～.
262	E'-49	5	薩摩焼	土瓶	脚	外:暗オリーブ5Y4/3 内:黒褐10YR3/2	外:褐灰10YR4/1 肉:灰黄褐10YR5/2	1065	苗代川. 18C後半～.
260	C'-48	3	肥前	碗	胴	外:灰N6/ 内:黄褐2.5Y5/3	灰オリーブ5Y6/2		銅緑釉碗？　17C後半～18C前半.
261	C'-49	溝(SD2)	肥前	碗	底	内外鉄釉:黒褐2.5Y3/2 内外白化粧土:暗灰黄2.5Y5/2	黄灰2.5Y5/1		唐津. 鉄釉. 見込み:白化粧土刷毛目文様. 外面上半部:白化粧土. 17C後半～18C前半.
263	B'-49	1		天目模倣碗	高台	内:灰10Y4/1	にぶい黄褐10YR5/4	688	底径3.8cm. 高台内面スタンプ印. 近代？
264	C'-47	撹乱		瓦？			灰N5/		外面:布目痕. 現代？
265	E'-48	5	焼締陶器	鉢？	口		内外:にぶい赤褐5YR4/4 肉:橙5YR6/6	1408	時期系統不明.
266	D'-47	溝(SD2?)	焼締陶器	擂鉢	底		外:にぶい橙7.5YR6/4 肉:にぶい橙7.5YR7/4 内:橙5YR6/6		時期系統不明.

６－４　石器（Fig.42 ～ 51，PL.33 ～ 41）

理学部２号館増築工事に伴う発掘調査（釘田第８地点 ; 郡元団地Ｈ・I-8 区）に伴い出土した石器類について，一括して述べる。本調査において，石器類ほか自然礫かと思われるものも一部含め，石製遺物の出土は 647 点確認されているが，そのうち 178 点について種別ごとに分類して示している（Tab.7）。層別出土数は，河川埋砂土であるⅤ・Ⅵ層が多数を占める。Ⅴ・Ⅵ層出土遺物は弥生～古墳時代の遺物が主体であるが，縄文時代の遺物も含まれている。石器類についても大半は弥生～古墳時代のものと考えられるが，明瞭な帰属時期が不明瞭であるため，本節では石製遺物として器種毎にまとめて報告する。

（１）剥片

267 は上牛鼻産黒曜石に類似する剥片である。左側縁と右側縁一部に微小剥離痕と微弱な摩滅が認められる。268 は三船産黒曜石に類似する剥片である。河川内より出土する黒曜石の大半は三船に類似する黒曜石であり，Ⅴ・Ⅵ層より出土しているが縄文時代に帰属する可能性がある。269 は鉄石英の剥片であり，左側縁部に連続する微小剥離痕が認められる。270 は黒色安山岩剥片である。下縁部に横方向の擦痕と摩滅が認められる。

（２）石庖丁

271・272 は石包丁である。271 は完形で部分的に剥離面が認められるが，ほぼ全面が加工されている。研ぎのためか刃部から 5mm ほどは光沢が弱いが，使用に伴う可能性のある光沢が広い範囲にわたってに認められる。272 は全形は不明であるが，刃部形状や光沢の痕跡などから石包丁片であると思われる。

（３）紡錘車

273 は紡錘車である。加工による擦痕を消すようにさらに研磨された稜が認められ，片面は平坦に，もう片面は中央部にやや膨らみをもって加工されている。

（４）石斧

274･275 は石斧である。274 は打製石斧であるが，両側縁部には直交する形で筋状の敲打痕が認められ，二次的に敲打具として転用された可能性がある。

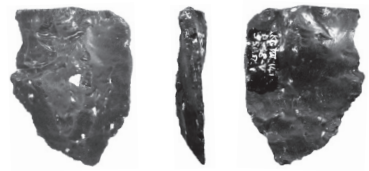
（５）横刃形石器

276･277 は横刃形石器である。276 は刃部が鋭く，刃部付近に微小剥離痕と光沢（網掛部）が認められる。また，277 は刃部付近を中心に特に光沢が強く発達しており，高倍率の観察によると (277a･b）高所部を中心にいわゆるロー状光沢が発達していることが分かる。また，部分的に光沢面を切る形で刃部二次加工が施され，刃部再生を行っていることがうかがえる。これと類似する使用痕が認められる石器は，鹿児島大学構内遺跡郡元キャンパス内においてこれまでも出土しており[1)]，使用痕分析の結果，表裏面とも刃縁部中心の光沢が最も強く，刃部から外側に向かって弱い光沢が広がっていることが認められる点や，主に横方向の線状痕が観察されるという特徴から，用途としてはイネ科植物草本類の株刈り具で，弥生～古墳時代該当遺物と考えられる。その他にも，刃部付近に類似する微弱な光沢が認められるもの（281・283 など，後に敲打具に転用か）が

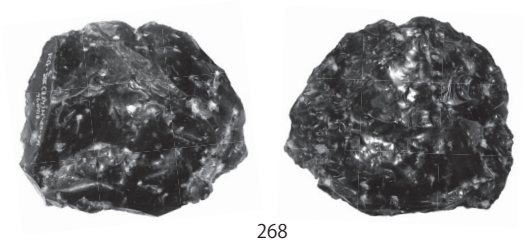
Tab.7　石器層位別出土数

器種	計	石　材	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	Ⅶ層	不明	計
石包丁	2	粘板岩						1			1
		砂岩						1			1
紡錘車	1	粘板岩					1				1
石斧	3	安山岩						1			1
		粘板岩						1			1
		砂岩					1				1
横刃形石器	2	安山岩						2			2
二次加工剥片，スクレイパー	11	安山岩					6		2	1	9
		粘板岩					1			1	2
敲打具	34	安山岩剥片					8	14		2	24
		安山岩礫					5				5
		砂岩･頁岩			1		2	1			4
		粘板岩						1			1
砥石	39	砂岩･頁岩			1		13	7	2	2	25
		安山岩	1				8	3			12
		凝灰岩					1	1			2
磨石敲石,敲石	8	砂岩					4	2		1	7
		安山岩					1				1
剥片	48	黒曜石　三船					6	3	1		10
		黒曜石　腰岳								1	1
		チャート					1	1			2
		ｷﾞｮｸｽｲ･鉄石英					1	1			2
		黒色安山岩					2	2			4
		粘板岩						2			2
		安山岩					7	17	3	1	28
台石	3	砂岩					1				1
		安山岩					1			1	2
軽石加工品	26	摩面あり			4	1	4	2			11
		凹み･孔あり						1		2	3
		棒状			1						1
		加工なし				1	7	2		1	11
層別合計			1	0	7	2	81	66	8	13	178

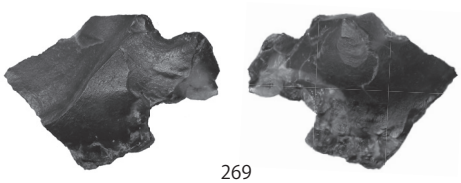
Fig.42　石器（1）



267



268

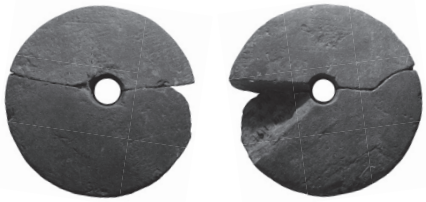


269

270

271

272

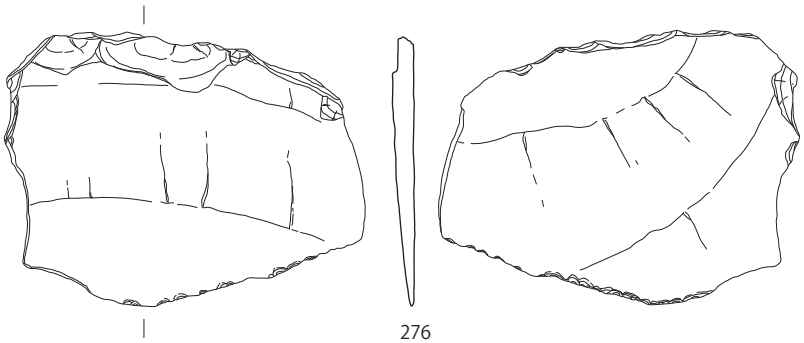


273

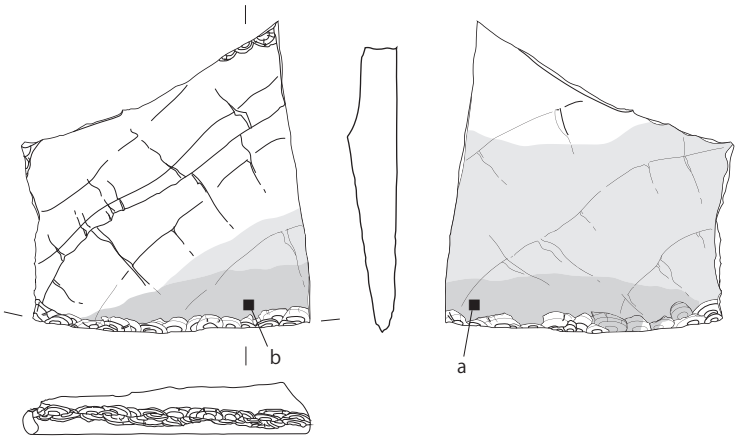
275

274

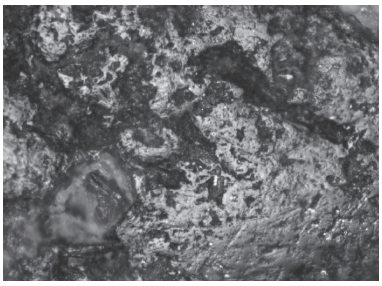
PL.33　石器（１）



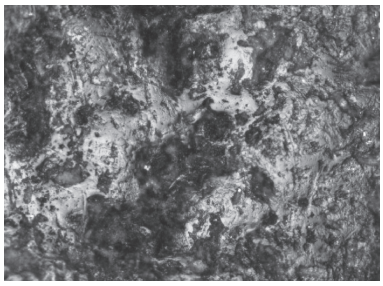
276



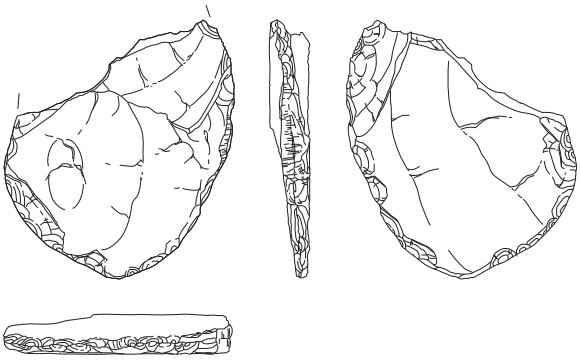
277



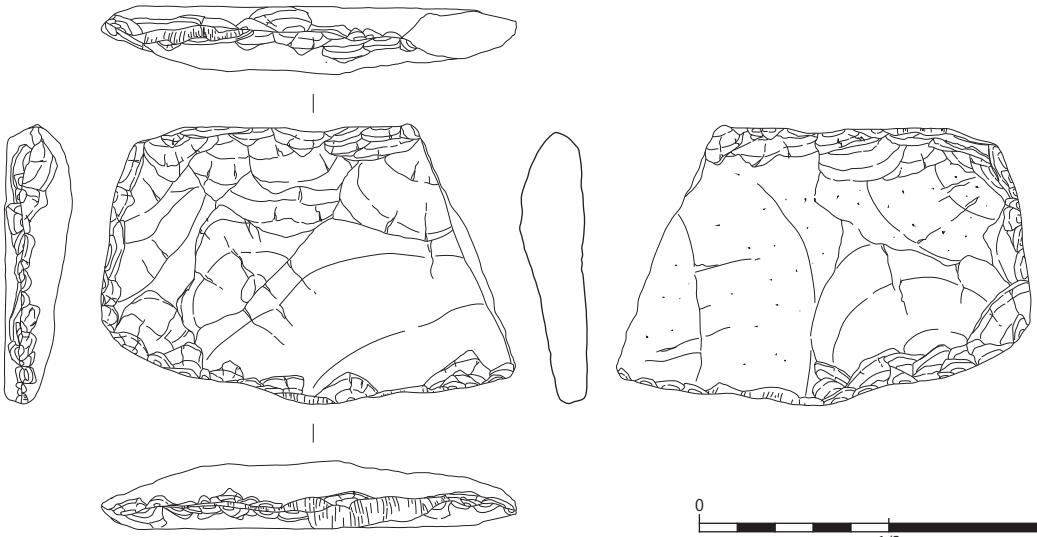
277a 光沢



277b 光沢



278



279

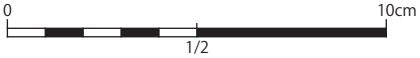
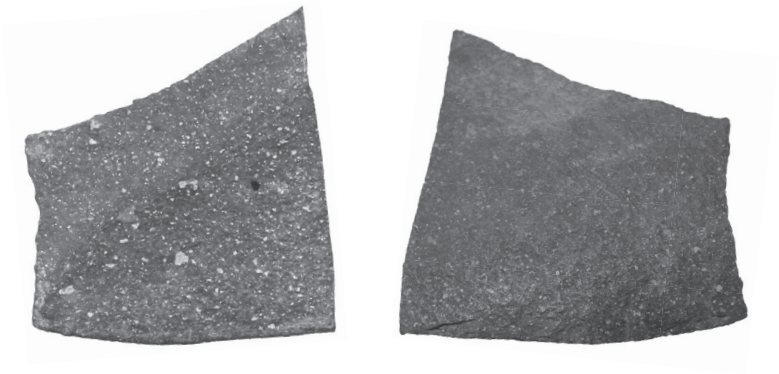


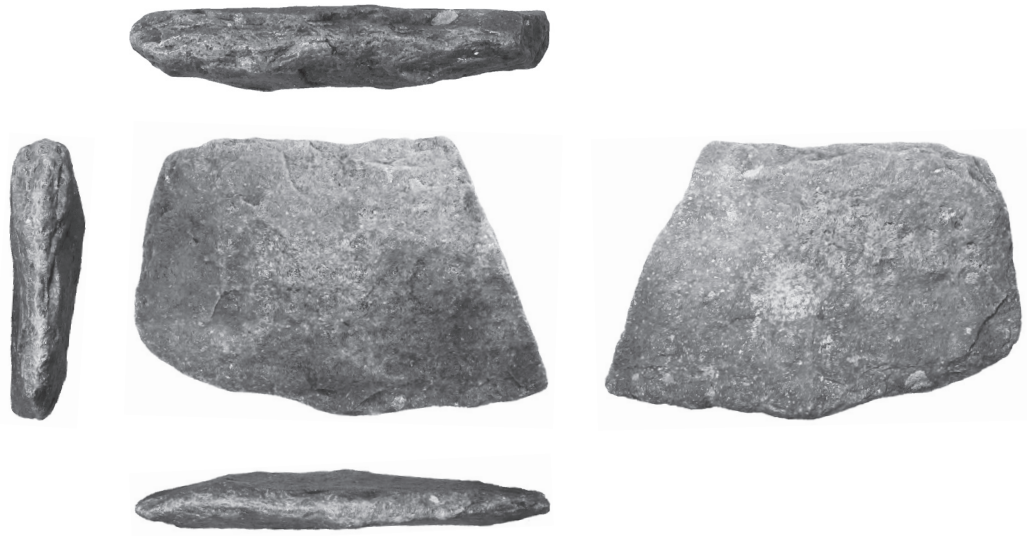
Fig.43　石器（2）

276



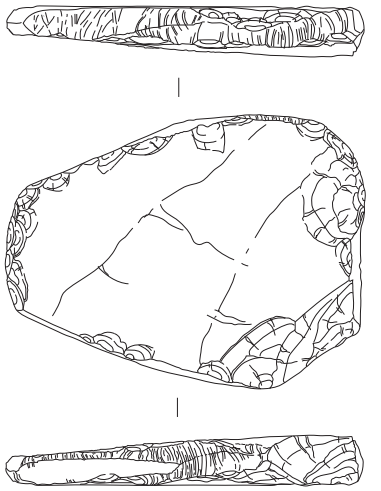
277

278

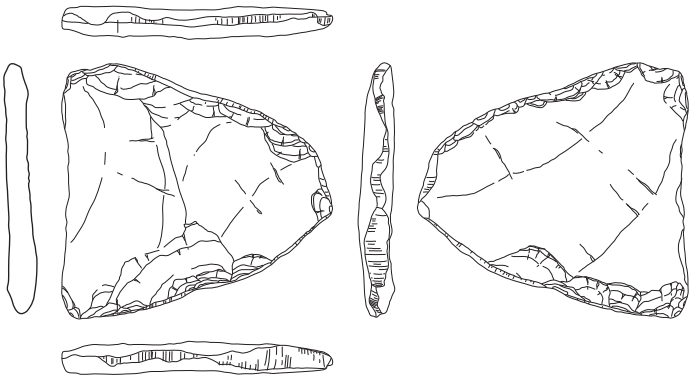


279

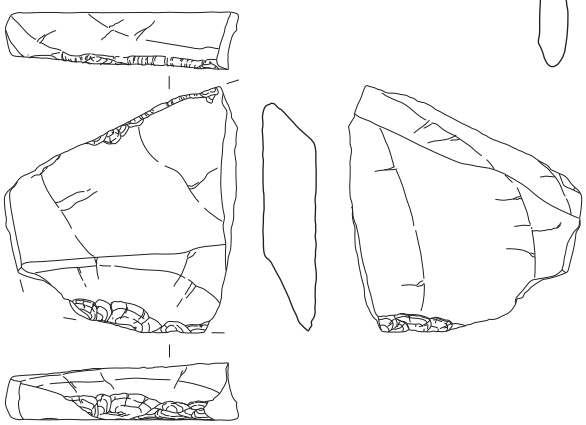
PL.34　石器（２）



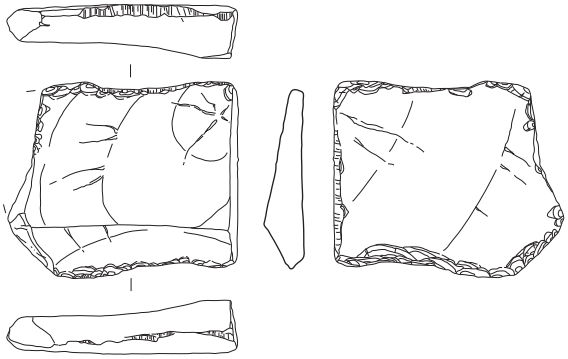
280



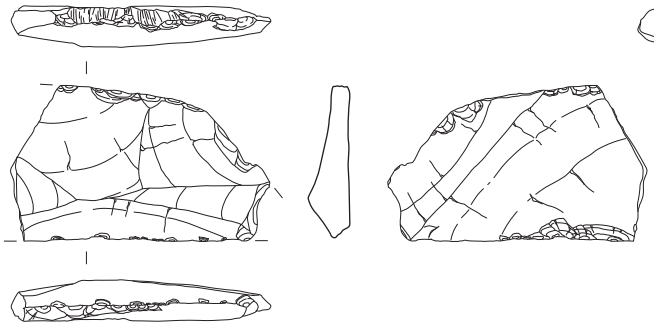
281



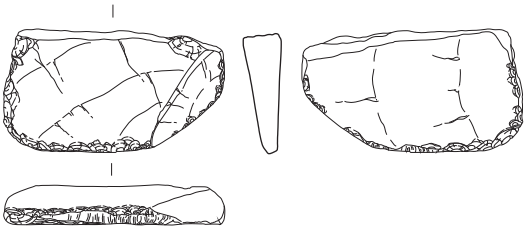
282



283

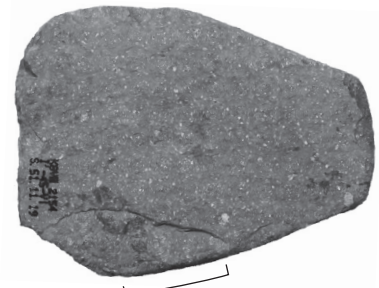


284



285

Fig.44　石器（3）



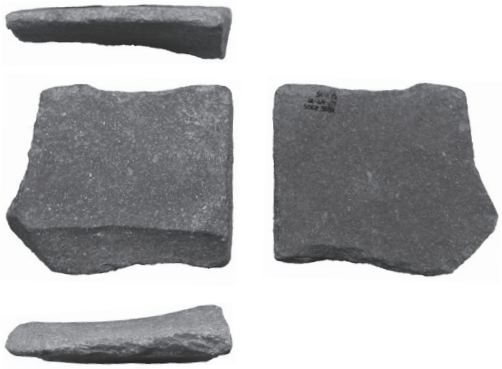
a

a 敲打痕

280

281

282



283

284

285

PL.35　石器（３）

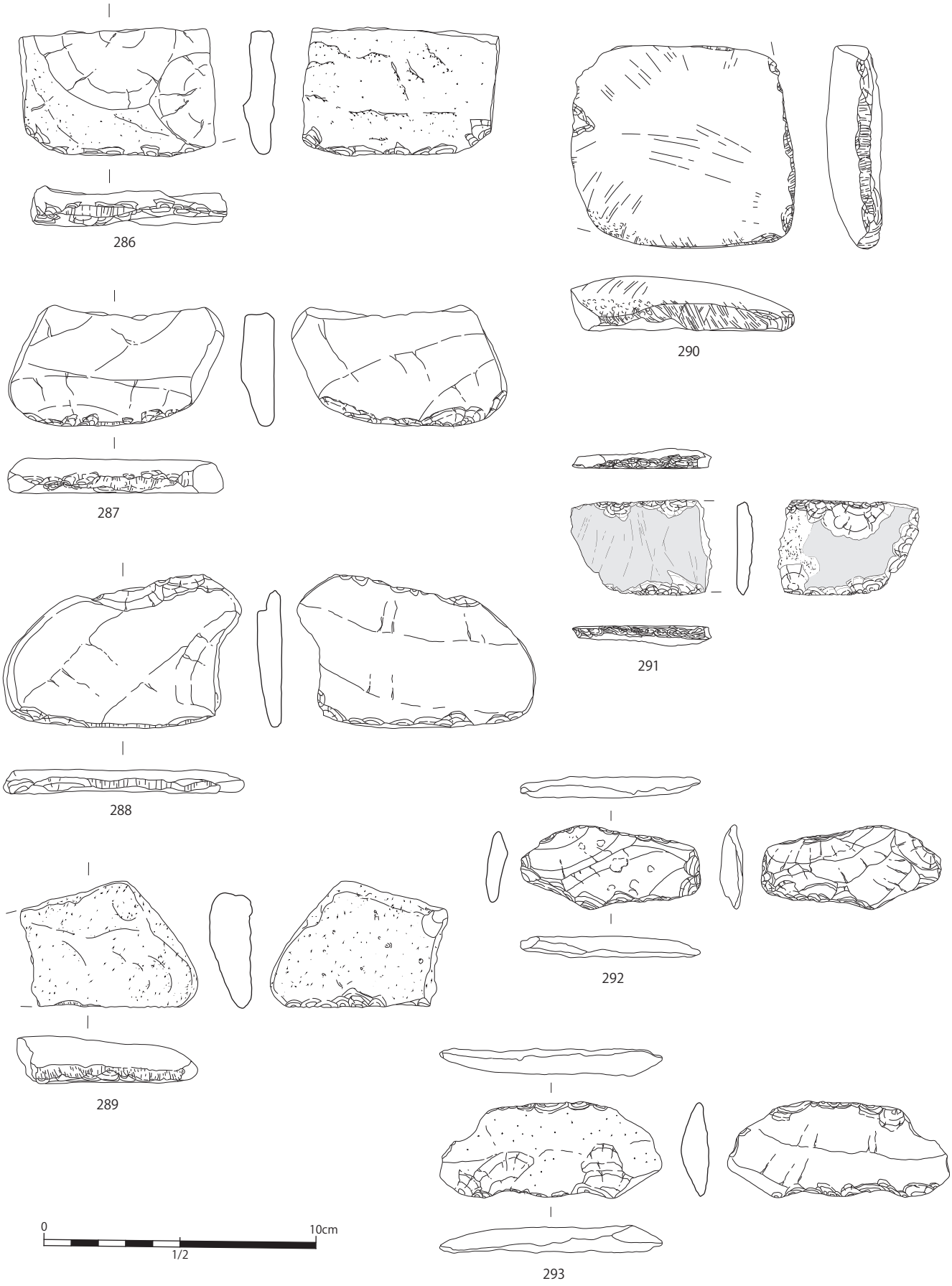
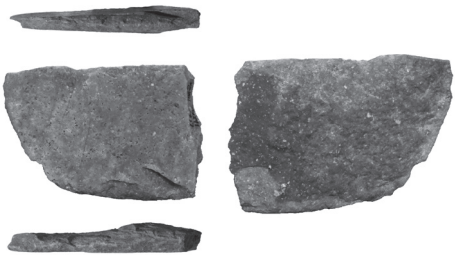


Fig.45　石器（4）

286

290

287


291

288

292

289

293

PL.36　石器（４）

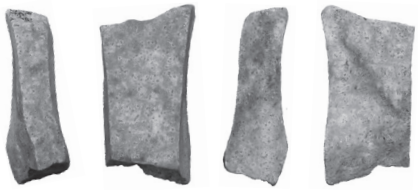
Fig.46　石器（5）

294

295

296

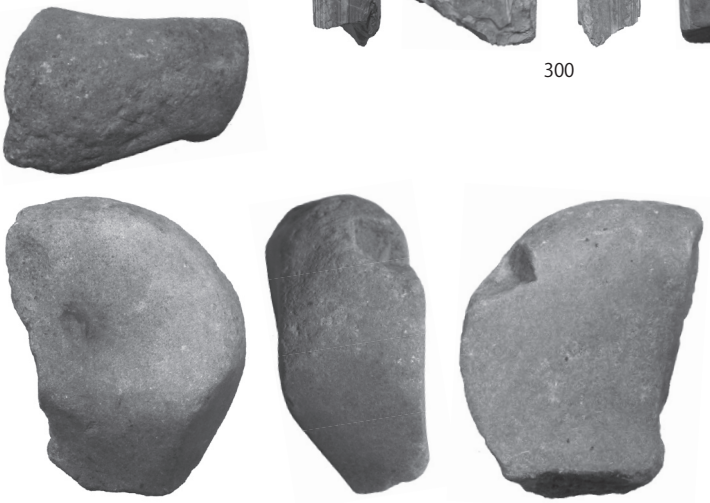
297



298

300

299



301

PL.37　石器（５）

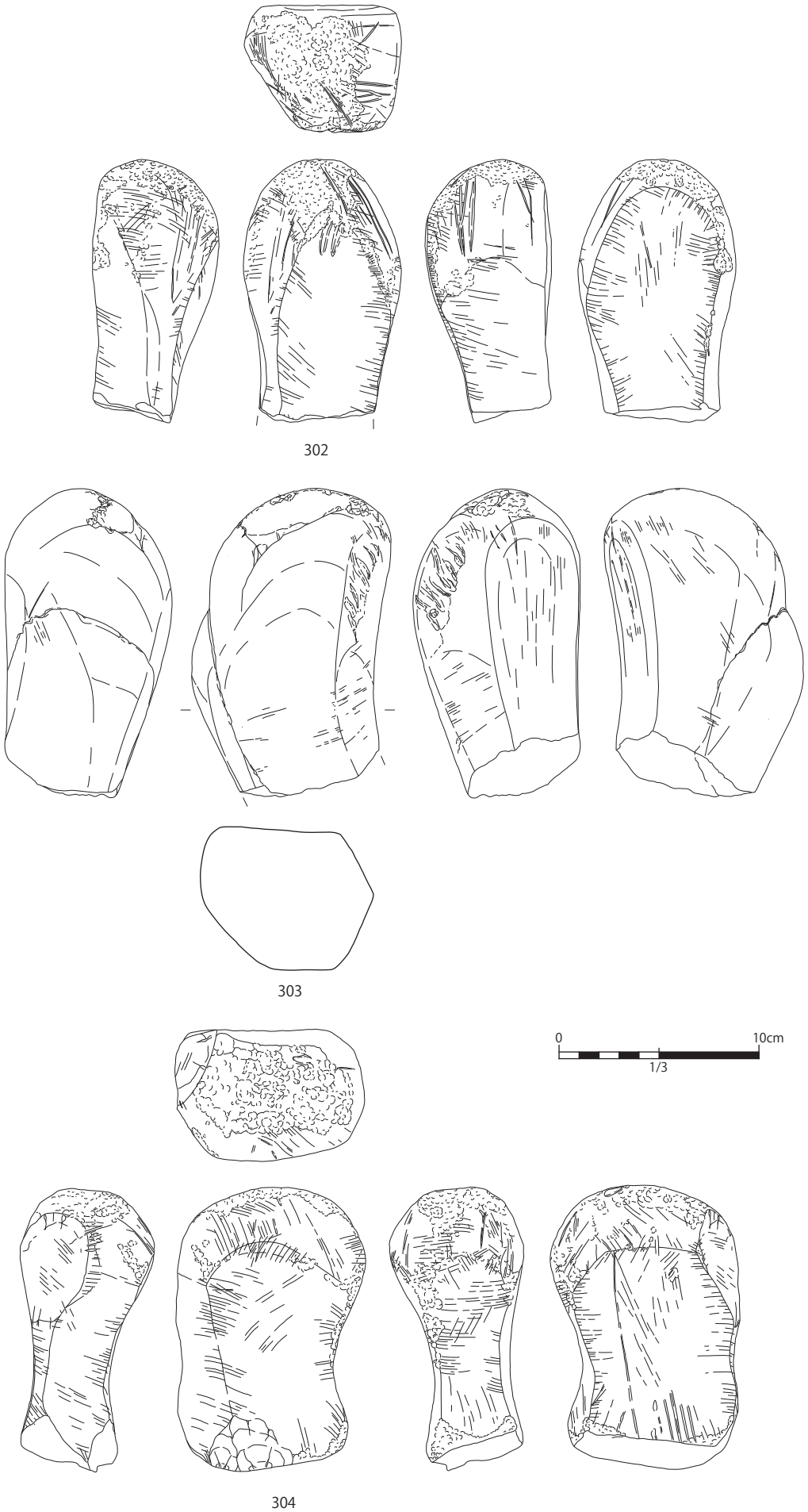
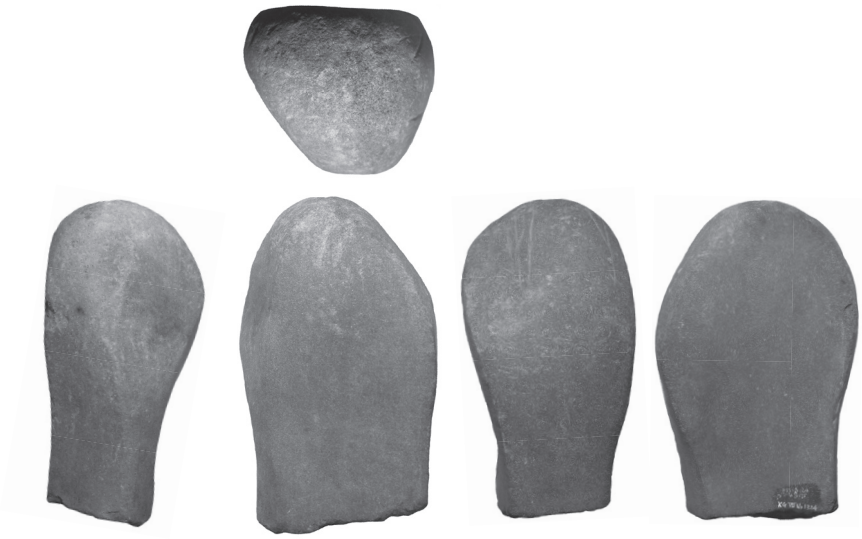


Fig.47　石器（6）

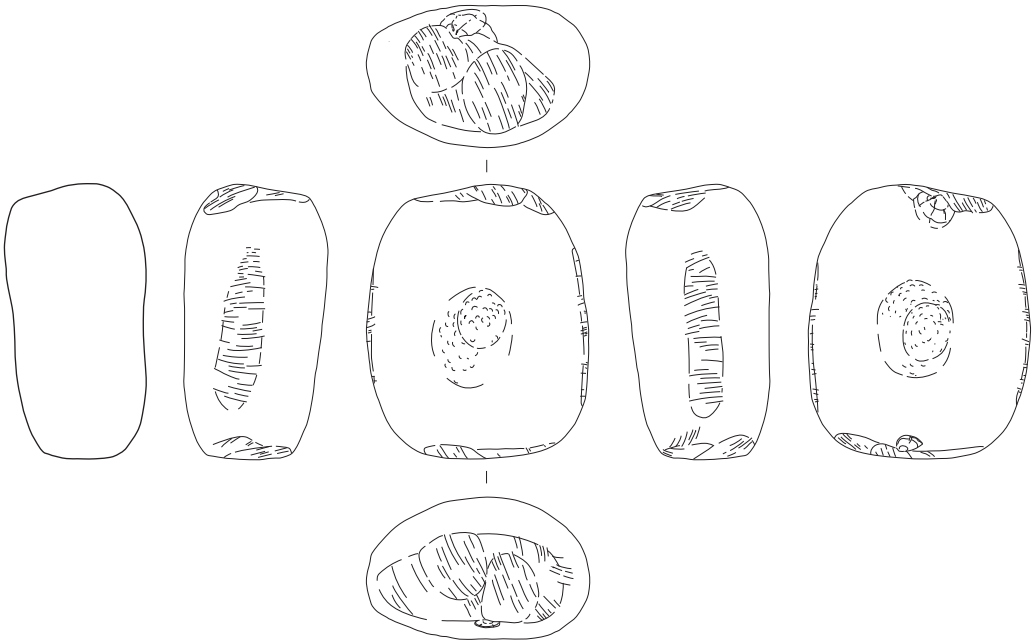


302

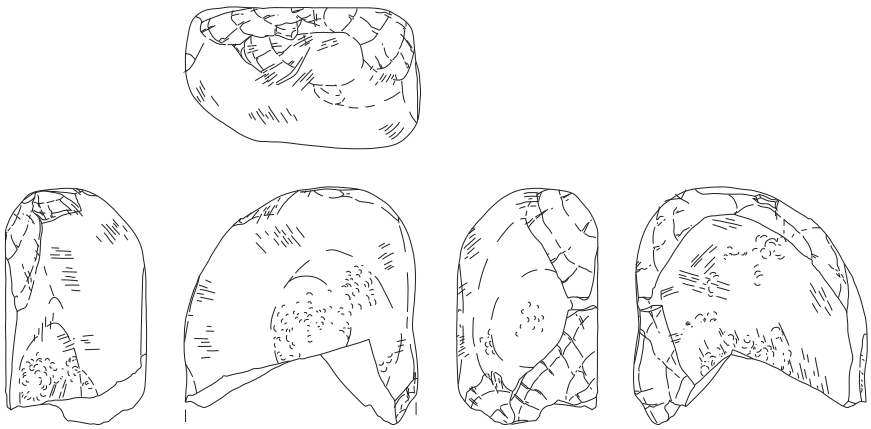
303

304

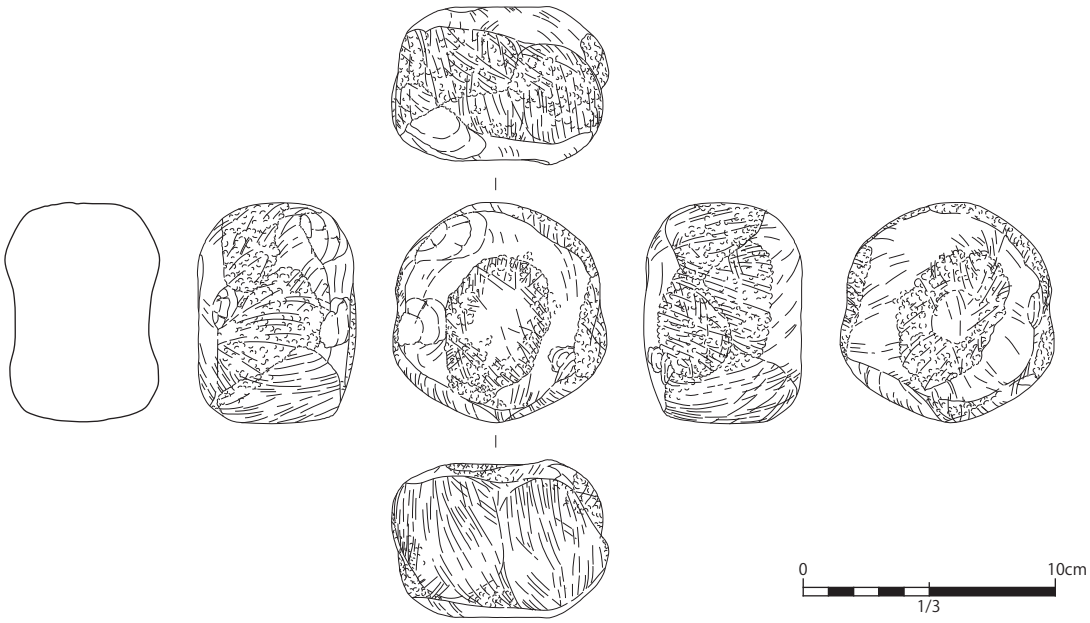
PL.38　石器（６）



305

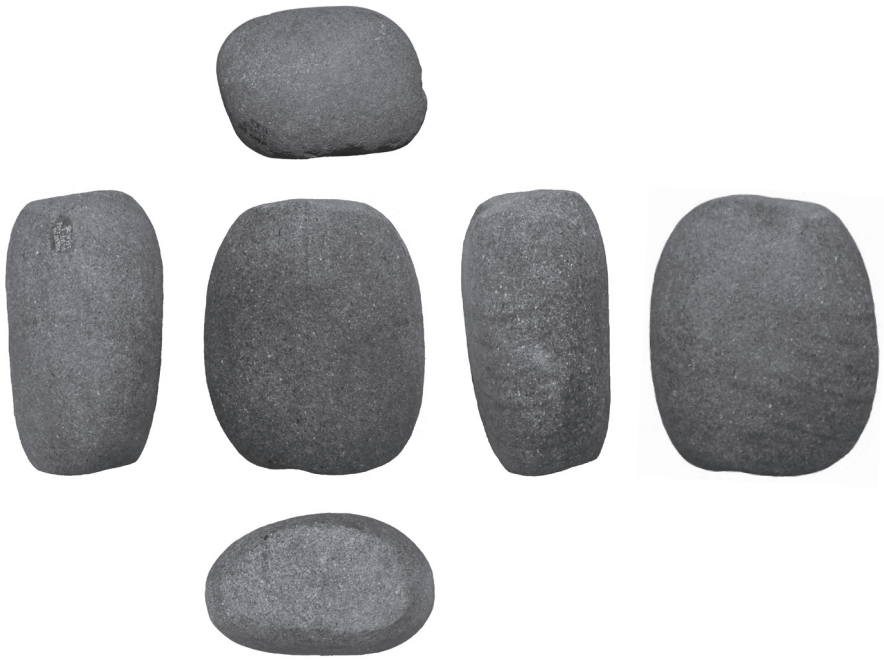


306



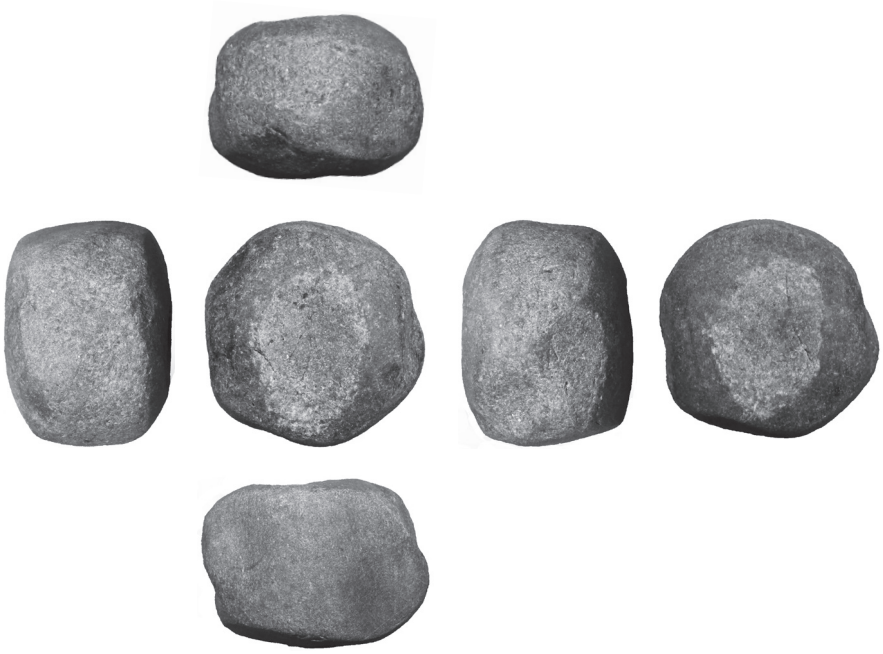
307

Fig.48　石器（7）



305

306



307

PL.39　石器（７）

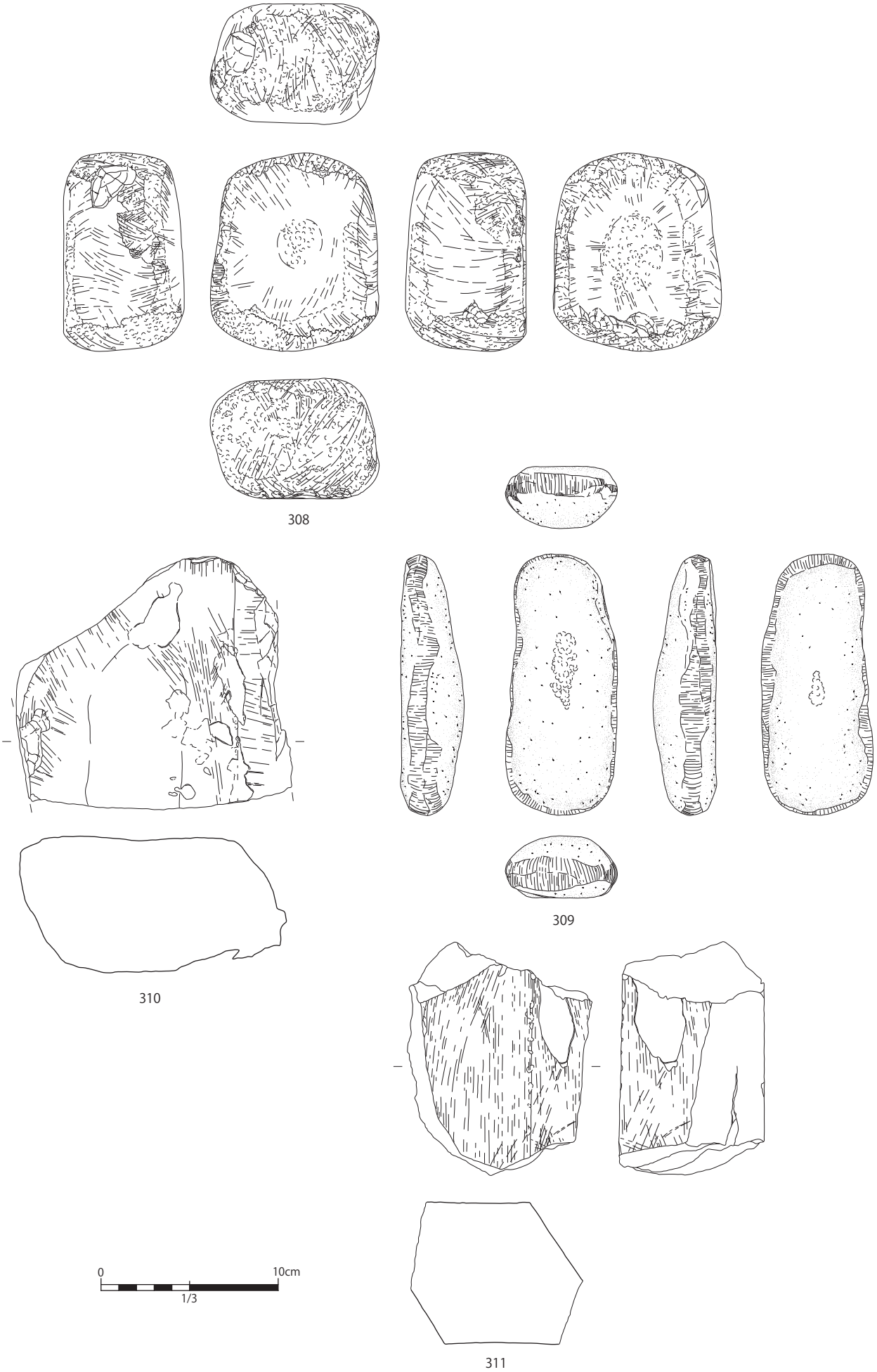
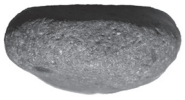


Fig.49　石器（8）

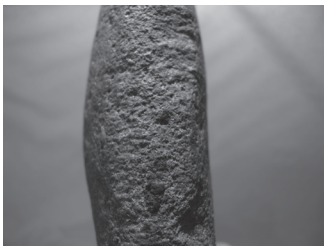
308



310

309

309 表面中央部敲打痕



309 右側面敲打痕

309 左側面敲打痕

311

PL.40　石器（８）

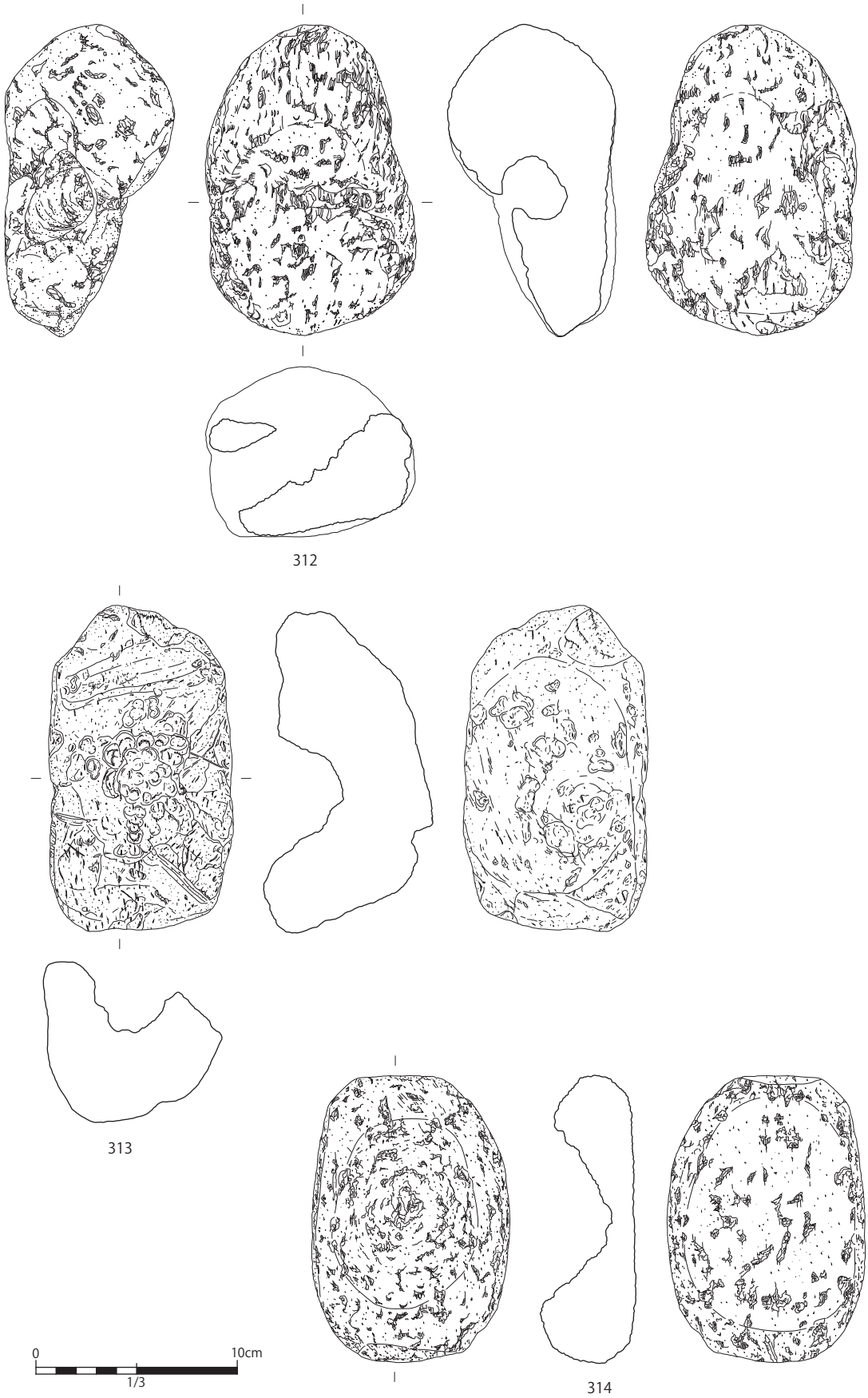


Fig.50　石器（9）

312

313

314

315

317

316

PL.41　石器（９）

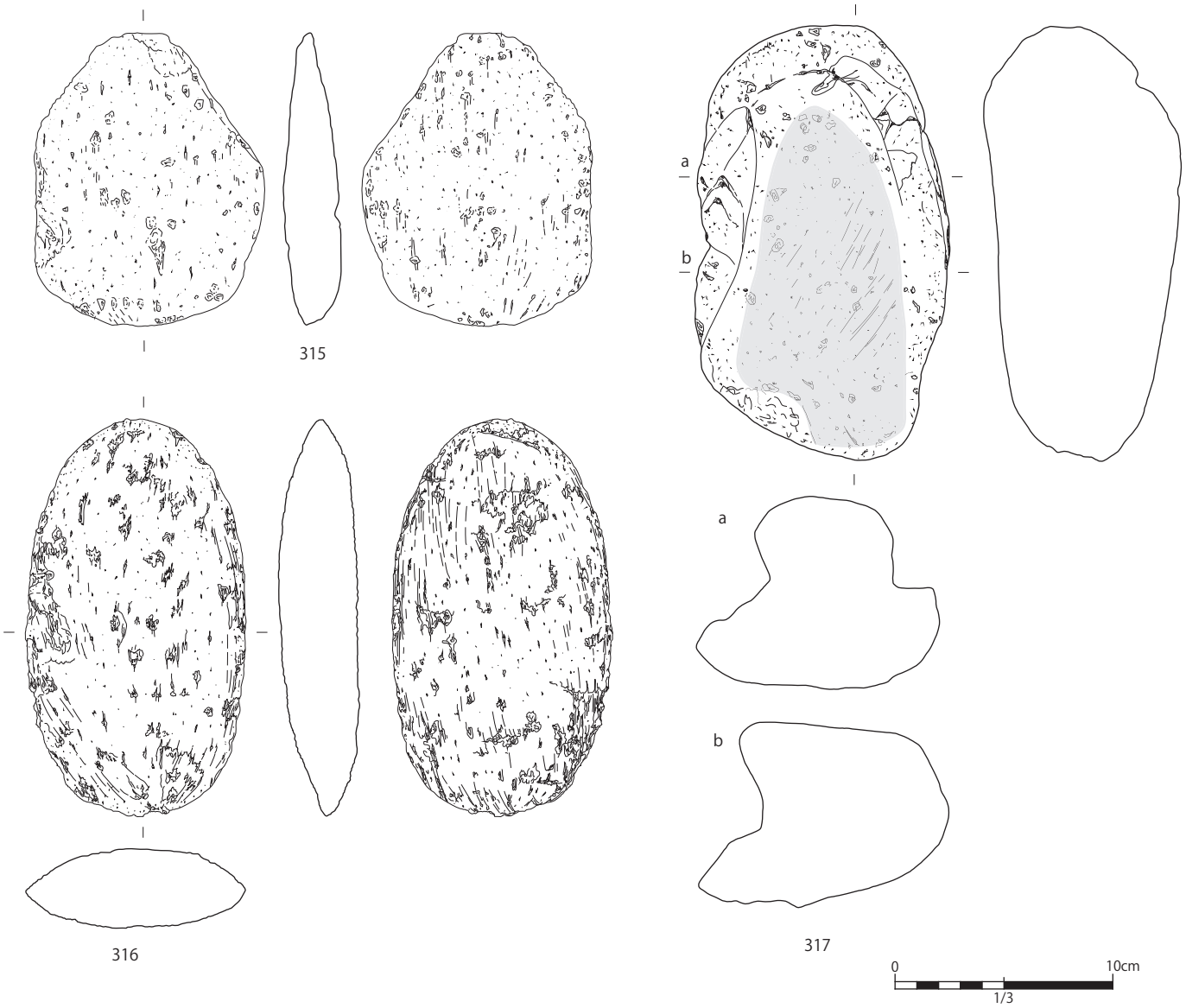


Fig.51　石器（10）

散見されるが，河川内の出土ということもあり，埋没後の光沢かと思われる微弱な光沢が全面に認められたり鉄分の付着が顕著であったり，使用による摩滅痕や光沢と判断しづらいものが多い。

278 ～ 290 は敲打具である。これらの主な形態としては，石斧や横刃形石器を転用した可能性のあるもの，剥片素材を利用するもの，礫素材を利用するもの（289・309 ほか）などが挙げられる。このように素材選択や形状などの点ではいくつかの形態に分類されるが，使用部位としては断面が鋭角気味の端部を利用し，使用痕としては端部に直交方向の筋状の敲打痕が認められるという共通点がみられる。類似する敲打痕が認められる剥片石器は，鹿児島大学構内遺跡の他地点からも出土している[2)]。作業対象物は不明であるが，これらの使用痕は素材として選択されている素材より硬質の作業対象物と接触した際に生じた可能性が高く，鍛冶関連の道具である可能性もある。また，特に多く選択されている素材は硬質な安山岩剥片であり，剥片の側縁を利用した敲打作業を行っているが，これらの素材剥片には明瞭な打点が認められるものが少なく，283・286 のように同心円状の剥離痕が認められるものもみられ，被熱による弾けが生じている可能性がある。ただし，その被熱痕跡が剥片獲得段階のものか使用段階のものかという点については，今後類例の観察と検討が必要である。また，使用痕の認められない硬質安山岩の薄い剥片も 27 点出土しており，これらの一部にも同じような剥離痕跡が観察される。

（６）敲打具

278 ～ 290 は安山岩剥片を素材とする敲打具である。278・279 は周縁を敲打に使用しているが，石斧を転用している可能性がある。280・281 は一側縁側に窄まる形状で，窄まっている側縁と上下縁の三側縁で敲打を行っている。280 の下縁部は角度の異なる二面の敲打面が認められる。282 は下縁部は二次加工が施され，敲打は上縁部で行われ摩滅しているが，風化の影響も考えられる。283 は上下縁部に敲打痕が認められ，それにより刃部が緩くカーブしている。284 は主に上縁部を敲打に用いており，断面形状も平坦になっている。285 は下縁・両側縁部に，286 は下縁部に敲打痕が認められる。287 はほぼ全面に及ぶ摩滅・光沢がみられ，河川内出土による影響と思われるが，下縁部は敲打により丸くなっていることがうかがえる。288 は下縁部が敲打により丸みを帯びている。289 は安山岩礫を素材とし，側縁の鋭角部分を利用し敲打作業を行っている。290 は硬質砂岩の破片の側縁部を用いて敲打具として使用しており，筋状の敲打痕が認められる。

（７）二次加工剥片

291 ～ 293 は二次加工剥片である。291 は砥石片を素材とする。表面は全面が砥面であるが，裏面は自然面が部分的に残り，凸部には部分的に砥面が認められる。砥石の一部が破損し，その破片の裏面を一時継続して砥石として使用し，さらに再利用して周縁部に二次加工を施している。292 は粘板岩の二次加工剥片である。裏面中央部稜付近・側縁高所部に部分的に摩滅・光沢が認められ使用による可能性もあるが，明瞭ではない。293 は片面に自然面の残る安山岩の剥片を素材とする二次加工剥片である。上下縁部に二次加工が施されている。

（８）砥石

294 ～ 304 は砥石である。板状に近く側面がカーブするものや，礫状でカーブする砥面と敲打痕が認められるものなどがある。294 ～ 298 は板状のものであり，側面にも砥面が認められる。299 は片面が欠損している。300 ～ 304 には敲打痕が周縁部に認められる。これらの砥石はある程度重みもあり，石鎚としての機能も兼ねていた可能性がある。301 の左側面側は破損しているが，破損面にもまばらに砥面・擦痕が認められる。類似する形態のものでも砥石目のバリエーションが見られ，作業工程により使い分けられていたことがうかがえる。

（９）磨石・敲石

305 ～ 308 は磨石・敲石である。平坦面は磨られ，周縁もしくは上下端部と平坦部中央に敲打痕が認められる。時期は不明で作業対象物も不明であるが，306 は砥面が認められ，307 は敲打痕が深く明瞭であるため，こうしたものは石鎚として鍛冶に関連して使用されていた可能性がある。309 は自然礫を用いた敲石で，周縁部と平坦面中央部に敲打痕が認められる。310・311 は台石片である。310 は中央部がややくぼんでいるが高所部に砥面が認められる。310・311 ともに部分的に剥落が認められ，熱を受けていた可能性がある。

（10）軽石製品

312 ～ 317 は軽石加工品である。穿孔のあるもの（312），凹みのあるもの（313・314），磨面が認められるもの（315 ～ 317）などがある。313 に認められる凹みは径 7 ～ 8mm の棒状工具を複数回差し込むことによって穿たれている。314 は凹みが穿たれ，底面は安定するよう平坦に磨られている。315・316 は両面が丁寧に磨られ，断面形状は凸レンズ状に中央部がやや厚くなっている。317 は片面が平坦に磨られている。

注

1）寒川朋枝　2010「鹿児島大学構内遺跡郡元団地出土の横刃形石器の使用痕分析」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室調査報告書』第５集

2）寒川朋枝ほか（編）　2011『鹿児島大学埋蔵文化財調査室調査報告書』第６集

	49	48	47	46	45	44	43
J’	2	2	1	3	1		1
I’	1		3	7	4	3	
H’	2		2	2	1	3	
G’	1	4	4	6	3	3	
F’	3	4	5				
E’	7	9	6			合計	157
D’	11	22	16				
C’	2	3	1				
B’	5						

Fig.52　石器地点別出土数（Ⅳ～Ⅶ層）

Tab.8　石器観察

Fig	No.	地区	層	種別	器種	サイズ			重量(g)	石材	注記No.	備考
						最大長	最大幅	最大厚				
42	267	D’-48	5	石器	剥片	3.4	2.5	0.6	5.93	黒曜石	141	微小剥離痕あり.
	268	H’-47	5	石器	剥片	4.2	5	0.9	24.5	黒曜石	327	
	269	J’-46	5	石器	剥片	3.4	4.6	0.9	13	鉄石英	782	微小剥離痕あり.
	270	C’-49	5	石器	剥片	3.7	4.4	0.6	9.87	黒色安山岩	445	
	271	I’-46	6	石器	石包丁	5	10.2	0.8	60	粘板岩		
	272	G’-47	6	石器	石包丁	4.9	4	0.6	14	砂岩	597	
	273	E’-48	5	石器	紡錘車	5.7	5.6	0.9	43	粘板岩	1194	
	274	H’-？	6	石器	打製石斧	10.4	4.6	1.4	115	粘板岩		
	275	D’-48	5	石器	磨製石斧	3.7	2.8	1.4	22	砂岩	678	敲打具へ転用か.
43	276	I’-45	6(面床内)	石器	横刃形石器	10.7	14.2	0.8	170	安山岩	2136	
	277	J’-43	6	石器	横刃形石器	8	7.6	1.4	87	安山岩	405	光沢あり.
	278	G’-47	6	石器	敲打具	6.8	6.1	1.1	42	安山岩	948	剥片素材, 転用か.
	279	不明	不明	石器	敲打具	7.4	11	1.8	180	安山岩		剥片素材, 石斧転用か.
44	280	I’-45	6	石器	敲打具	7.2	9.4	0.8	126	安山岩	2154	剥片素材, 転用か.
	281	F’-47	5	石器	敲打具	10	10.6	1.2	166	安山岩	1579	剥片素材, 転用か.
	282	D’-47	5	石器	敲打具	9.4	9	2.2	245	安山岩	839	
	283	E’-47	6	石器	敲打具	7.7	9	2.1	153	安山岩	2305	剥片素材, 転用か.
	284	D’-47	5	石器	敲打具	6.1	10.2	10.6	10.5	安山岩	1308	剥離素材, 転用か.
	285	D’-48	6	石器	敲打具	4.7	8.7	1.6	87	安山岩	2238	剥片素材, 転用か.
45	286	G’-46	5	石器	敲打具	4.6	7.2	1.1	6.53	安山岩	1087	剥離素材, 転用か.
	287	D’-47	5	石器	敲打具	4.4	7.9	1.3	74	安山岩	1298	剥片素材, 転用か.
	288	D’-48	5	石器	敲打具	5.6	8.8	0.9	66	安山岩	452	剥片素材, 転用か.
	289	D’-48	5	石器	敲打具	4.6	6.6	1.8	68	安山岩		
	290	E’-49	5	石器	敲打具	7.5	8.2	2	194	砂岩	2070	
	291	G’-46	5	石器	二次加工剥片	4.6	6.8	1	39	安山岩	1291	砥石片転用.
	292	E’-48	5	石器	二次加工剥片	4.1	8.8	1	40	粘板岩	846	
	293	D’-48	5	石器	二次加工剥片	4.6	10.9	1.4	74	安山岩	1253	
46	294	D’-49	5	石器	砥石	8.1	8.6	2	231	砂岩		
	295	D’-48	5	石器	砥石	12.8	9.5	3.6	434	砂岩	360	
	296	E’-47	6	石器	砥石	17.8	5.2	2.7	294	砂岩	1730	
	297	B’-49	7	石器	砥石	15.8	7	1.9	263	砂岩	2064	
	298	C’-48	6	石器	砥石	5.7	3.1	1.9	38	凝灰岩	2238	
	299	H’-44	5	石器	砥石	4.8	6.4	1.4	74	砂岩	219	
	300	F’-47	6	石器	砥石	8.7	4.6	2.3	179	頁岩	1877	敲打痕あり. 石斧片か.
	301	D’-49	5	石器	砥石	11.7	9	6.2	872	砂岩	312	敲打痕あり.
47	302	D-48	5	石器	砥石	13	7.9	6.3	882	砂岩	1324	敲打痕あり.
	303	D’-48	5	石器	砥石	15.4	9	8.3	1635	砂岩	645	敲打痕あり.
	304	D’-48	5	石器	砥石	13.9	9.3	6.6	1097	砂岩	1465	敲打痕あり.
48	305	D’-47	5	石器	磨石敲石	11	8.9	5.7	901	砂岩	200	
	306	D’-47	5	石器	磨石敲石	9.5	9.3	5.5	749	砂岩	2004	砥面あり.
	307	不明	不明	石器	磨石敲石	8.9	8.5	6.4	766	砂岩		
49	308	D’-47	5	石器	磨石敲石	11.2	9.6	6.8	1295	砂岩	684	
	309	J’-49	6	石器	敲打具	14.9	6.2	3.6	487	砂岩		礫素材.
	310	D’-48	5	石器	台石	14.4	15.2	8.1	2570	砂岩	961	砥面あり.
	311	J’-46	5	石器	台石	13.3	10.2	8.1	1571	安山岩	1023	砥面あり.
50	312	D’-49	6	石器	軽石加工品	15.3	10.1	8.4	284	軽石	2507	孔あり.
	313	不明	不明	石器	軽石加工品	16	9	6.8	260	軽石		凹みあり.
	314	不明	不明	石器	軽石加工品	142	9.7	4.6	224	軽石		凹みあり.
51	315	D’-48	3	石器	軽石加工品	13.6	10.6	2.5	80	軽石	86	摩面あり.
	316	D’-49	6	石器	軽石加工品	18.4	10.2	3.7	171	軽石		摩面あり.
	317	D’-48	3	石器	軽石加工品	20.1	11.6	8.8	577	軽石	80	摩面あり.

７　総括

今回報告した郡元団地Ｈ・I- ８区理学部２号館増築工事（釘田遺跡第８地点；以下，釘田第８地点）は，昭和 51（1976）年に鹿児島県教育委員会によって発掘調査された遺跡である。大規模な河川跡内に弥生時代後期～古墳時代の木杭列（護岸）が検出され，当該期の膨大な量の遺物が出土した。

本調査区の土層は，Ⅳ～Ⅶ層の河川埋没砂層，Ⅲ～Ⅱ層の水田耕作土，Ⅰ層の撹乱層である。縄文時代・弥生時代，石器類などの遺物は，Ⅴ・Ⅵ層を主体に含まれており，河川の埋没過程で包含されたものと考えることができる。調査当時においては，Ⅴ・Ⅵ層中に５段階の流路が把握されており，古墳時代後半期までに全て埋没し（Ⅳ層），そのⅣ層は古墳時代後半期の方形の竪穴住居跡によって切られる関係にある。Ⅲ層は包含された陶磁器の年代観から，概ね中世以降に位置づけられると考えられる。

今回報告の遺物は，大量に出土した弥生時代後期～古墳時代の土器を除く，縄文時代，弥生時代，中世，近世，近代遺物，石器類であるが，その数は決して少なくない。縄文時代およびそれに属すると思われる土器の総数は 359 点，弥生時代早期～中期およびそれに属すると思われる土器の総数は 1640 点，陶磁器を含む中世～現代の遺物は 119 点，剥片や礫類を含めた石器類は 647 点である。これらの遺物について鹿大構内遺跡（郡元団地）釘田第８地点関連図（Fig.53）をもとに説明したい。

（１）縄文土器

縄文土器で最も多いのは，縄文時代前期末～中期前葉の深浦式土器であり，続いて縄文時代後期中葉の市来式土器，そして縄文時代晩期の黒川式土器の順であった。縄文土器はこれまでに鹿大構内遺跡（郡元団地）では確認されたことのない縄文時代早期前半の前平式土器などが出土しているが，そのほとんどが小さな破片であり，水磨を受けている。その他の土器もほとんどが水磨による摩滅が著しい。縄文時代前期土器である曽畑式土器もまた一定量得られているが，鹿大構内遺跡には釘田第８地点から 400m ほど南の教育学部敷地内（93-6 運動場[1]・2011-1 附中グランド改修[2]）において曽畑式が出土する地点があるものの，かなり離れているため，同地点の土器がもたらされたとは考えにくい。また，縄文土器の中には，曽畑式土器の一部（７）や深浦式日木山段階（18・19・21・24・28・29）のように，他と比べて水磨をあまり受けていない資料も見受けられる。釘田第８地点から南西方向に 100m 余離れた箇所に，同時期の土器が一定量出土した 97-1 工学部校舎地点がある。ここでは 14 層で深浦式土器（日木山段階）を主体として，春日式土器，野久尾式土器，石鏃，石匙，珪線石製の玦状耳飾転用品，砥石などが出土している。15 層では摩滅はしているが，曽畑式土器とともに軽石製品なども出土している[3]。このことは，釘田第８地点近隣にもその時期の活動領域があり，そこからもたらされた可能性を示唆する。

（２）弥生土器

弥生土器で最も多数出土したのは，時期区分可能な甕・鉢からみると，弥生時代中期前半（新）の入来Ⅱ式土器である。続いて，弥生時代前期の高橋式土器，中期前半（古）の入来Ⅰ式前後の土器群となる。弥生土器もまた水性作用によって摩滅したものがほとんどであるが，弥生時代早期の 102，同前期の 107・109・110・111・117・162・165，中期前半（古）の 121 ～ 123・128・132・133，中期前半（新）の 135・138・140・142・145 ～ 147，中期後半の 155・233・234，中実脚台の大半はあまり摩滅せず，口縁部から胴部にかけての資料のなかには，図上復元可能な残りの良い資料も含まれていることから，はるか上流から流されてきた遺物とは考えにくいものがある。釘田第８地点に南接した場所に 2001-2 理学部校舎地点がある。古墳時代後半期の集落跡であるが，その下位に弥生時代中期前半（古）の大溝や弥生時代後期の住居跡が検出されたほか，弥生時代前期末～中期前半（新）の遺物が多量に出土している[4]。それに伴うとみられる打製石鏃など石器類も多数出土しているため，当該期の集落があった可能性が高く，河川跡内の弥生土器の一部はこの集落に属していた可能性もあるのかもしれない。ほかにも鹿大構内遺跡において弥生時代の遺構や遺物が集中する地点として弥生時代中期後半の遺構・遺物が検出される 2006-2 農学部１号館改修地点[5] や 2001-1 サークル棟地点[6] などがあるものの，両地点ともに釘田第８地点から約 300m 離れており，有機的な関係は考えにくい。なお注目される遺物として，彩文土器（222）や擬朝鮮系無文土器

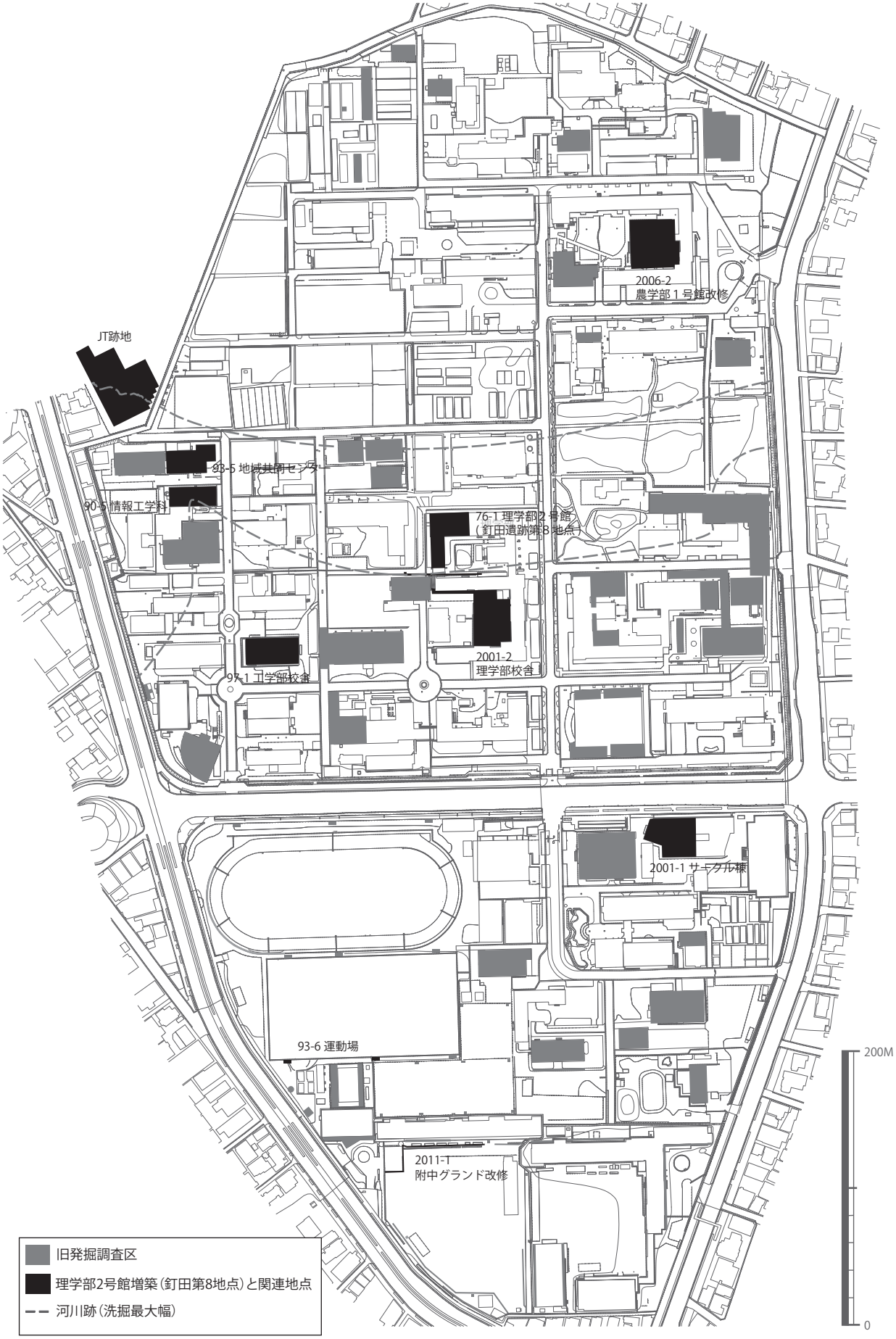


Fig.53　鹿大構内遺跡縄文・弥生時代主要分布遺跡と関連地点

（235）があるが，県内の同種の出土例としては，前者が南九州市堂園遺跡Ａ地点[7]に，後者は南さつま市下原遺跡[8]にある。今後，類例の調査が望まれる。

（３）陶磁器

中世～現代の遺物は，陶磁器，ガラス，レンガ，瓦，土管，鉄，タイル，トタン，セメントなどのほか，貝類や動物骨なども得られたが，陶磁器類は，中国青磁，白磁，中世の備前焼，近世の薩摩焼，肥前陶器，近代の天目模倣碗，近世～現代と目される不明陶器・磁器類で，全て小破片である。中世遺物は 14 ～ 15 世紀代を中心とし，近世遺物は 17 ～ 18 世紀を主体とする。

（４）石器類

石器類は器種として，石庖丁，紡錘車，石斧，横刃形石器，スクレイパー，敲打具，砥石，磨石･敲石，剥片，台石，軽石加工品など 178 点が得られている。最も出土数が多いのが安山岩素材剥片であり，続いて砥石，断面形状が鋭角な部分を用いた敲打具，軽石加工品の順である。明確な帰属時期が不明であるものの，268 の黒曜石などは縄文時代に，他の大半は弥生時代～古墳時代のものと捉えられている。なお，今回砥石のなかに含めた 300 などは，石材も他とは異なっており，弥生時代の抉入石斧の可能性もある。また，石器の地点別出土状況をみると（Fig.52），その密度は D'-47 ～ 49，E'-48 区に集中する。これは土器のどの分布状況とも異なり，調査区の南よりに偏っている。これは前述のように，南接した 2001-2 理学部校舎地点の弥生時代～古墳時代の集落跡から廃棄・遺棄された可能性が高いことを示している。

釘田第８地点の上流に当たる地点の遺物についても確認する。キャンパスを東西に流れ，最大洗掘幅で二叉に分かれる河川跡の付根箇所に位置する 90-5 情報工学科では，縄文土器として市来式土器，黒川式土器，弥生土器として，刻目突帯文土器，高橋式土器，山ノ口式土器，黒髪式土器，石器類としてスクレイパー，敲打具，砥石，石斧などが得られている[9]。93-5 地域共同センターでは，縄文土器として曽畑式土器，深浦式土器，市来式土器，入佐式土器，黒川式土器，弥生土器として刻目突帯文土器，高橋式土器，入来Ⅰ式土器，入来Ⅱ式土器，山ノ口式土器，須玖式土器，黒髪式土器，櫛描文土器などが得られ，石器類として黒曜石，スクレイパー，石庖丁，砥石，軽石加工品などが出土している[10]。最も上流に位置する JT 跡地においては，縄文土器として前平式土器，深浦式土器，丸尾式土器，黒川式土器が得られており，弥生土器として，高橋式土器，入来Ⅰ式土器，入来Ⅱ式土器，石器として石製紡錘車も出土している[11]。

報告された遺物組成からみると，93-5 地点の遺物組成が最も釘田第８地点に近いが，３箇所の地点だけをみても，河川跡内より出土する遺物組成はかなり共通性が高いことが分かる。釘田第８地点遺物もまたこれらの地点と一連の遺物の流れと埋没過程によるものと考えられるが，前述したように，摩滅していないものや残りの良い遺物も存在することからは，河川近隣の集落遺跡や活動域より意図的に廃棄された遺物も含まれると考えるほうが妥当であろう。

注

1）中村直子（編）　2001『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』15

2）新里貴之ほか（編）　2014『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター調査報告書』第９集

3）中村直子ほか（編）　2015『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター調査報告書』第 11 集

4）新里貴之　2003「鹿児島大学構内遺跡Ⅰ・J-7・8 区（理学部改修地）の調査」第 49 回鹿大史学会大会資料

5）新里貴之ほか（編）　2010『鹿児島大学埋蔵宇文化財調査室調査報告書』第５集

6）中村直子（編）　2003『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』17

7）前迫亮一ほか（編）　2007『堂園遺跡Ａ地点・古殿諏訪陣跡・折戸平遺跡・山神迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター

8）片岡宏二　1999「渡来人・渡来文化の南下：熊本・鹿児島出土の朝鮮系無文土器を中心として」『人類史研究』第 11 号

9）松永幸男ほか（編）　1992『鹿児島大学埋蔵宇文化財調査室年報』Ⅶ

10）中村直子・鮎川章子（編）　1998『鹿児島大学埋蔵宇文化財調査室年報』12

11）赤井文人（編）　2014『鹿大構内遺跡郡元団地（JT 跡地）』鹿児島市教育委員会

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター調査報告書　第 15 集

鹿児島大学構内遺跡
（郡元団地Ｈ・I-８区）

理学部２号館増築工事（釘田遺跡第８地点）
【縄文時代・弥生時代・中世・近世・近代遺物，石器編】

2019 年 3 月 31 日発行

編集・発行　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
鹿児島市郡元一丁目 21-24
TEL 099-285-7270

印刷　株式会社　朝日印刷
鹿児島市上荒田町 55-1
TEL 099-251-2191